橿原市埋蔵文化財調査報告　第２冊

五　井　遺　跡

2012 年 3 月

奈良県橿原市教育委員会

序

五井遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第２冊』として刊行します。

五井遺跡は奈良県橿原市五井町に所在する遺跡です。本書は2010年に橿原市教育委員会が病院建設に伴って実施した発掘調査の成果をまとめたものです。五井遺跡での本格的な発掘調査はこれが初めてとなります。

橿原市の東部には日本初の本格的都城である藤原京が広がっており、これまでに数々の発見がなされています。また、近年、橿原市の西部では京奈和自動車道の建設が進められており、その事前発掘調査によって新たな遺跡が次々と発見され、こちらでも貴重な成果があがっています。五井遺跡はこれらの中間にあたる遺跡の密度が比較的薄いとされる地域に位置しています。今回の調査はその空白を埋める絶好の機会となりました。

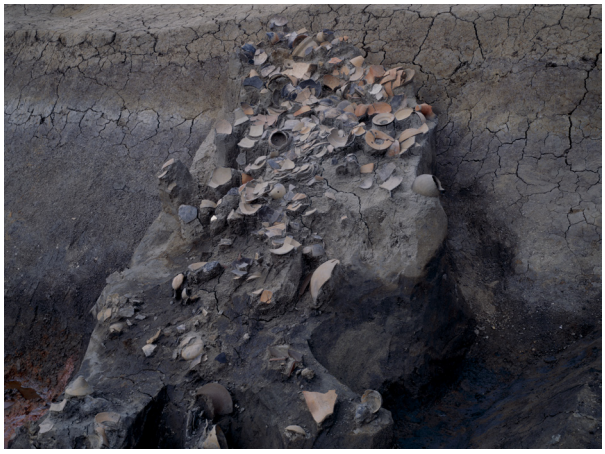
今回の調査では、古墳時代前期の集落跡を発見することができました。竪穴建物８棟をはじめとして畠や井戸など集落に関係する遺構が複数見つかり、調査区中央を南北に縦断する自然河道からは、この集落で使用していたと考えられる土器が大量に出土しました。集落に関わる様々な要素を一度の調査で確認できたことは非常に幸運だったと言えます。

最後になりましたが、現地の発掘調査の実施や本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げると共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

平成24年3月21日

橿原市教育委員会
教育長　吉本重男

1031-NR 出土土器



1031-NR 土器出土状況

巻頭図版 2

調査地遠景（北西から。畝傍山方面を望む。）

調査区全景（上が北）

竪穴建物群（南南東から）

畠溝群（北東から）

例　　言

1　本書は、奈良県橿原市五井町に所在する五井（ごい）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、医療法人社団 南風会 理事長 南尚希 氏より病院建設に伴って提出された埋蔵文化財発掘届出にもとづき、奈良県教育委員会の指導のもと奈良県橿原市教育委員会が実施した。

3　現地調査期間は、試掘調査が平成 21（2009）年 5 月 27・29 日、本調査が平成 22（2010）年 4 月 26 日～平成 22（2010）年 9 月 15 日である。調査面積は試掘調査 227 ㎡、本調査 2,700 ㎡である。また、遺物整理期間は平成 23（2011）年 4 月 1 日～平成 24（2012）年 3 月 31 日である。

4　現地調査時の体制は、橿原市教育委員会　文化財局長　峙 親彦、文化財課長　齊藤明彦、課長補佐　豊島和代・濱口和弘、事業調整係長　髙瀬友己、保存係長　平岩欣太、主任　米田 一、技師　松井一晃 、技術員　石坂泰士である。試掘調査は米田・松井が、本調査は平岩・石坂がそれぞれ担当した。また、遺物整理時の体制は、橿原市教育委員会　文化財局長　峙 親彦、文化財課長　竹田正則、 課長補佐　濱口和弘・髙瀬友己、保存係長　平岩欣太、事業調整係長　米田 一、技術員　石坂泰士である。

5　現地調査および整理・報告書作成にかかる費用は医療法人社団 南風会が負担された。

6　現地調査および遺物整理を実施するにあたって、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、桜井市教育委員会、地元各位の多大な御協力を賜った。記して感謝申し上げたい。紙幅の都合もあり、個人名は省略させていただきます。

7　出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。なお、発掘調査の成果と出土遺物の一部を調査地に建設する病院ロビーにて展示予定である。

8　本書所収の写真のうち、現場調査写真は現地調査担当者が撮影を行った。遺物写真は木製品を濱口が、他の全てをアートフォト右文 佐藤右文氏が撮影を行った。

9　出土花粉分析・種実同定などの自然科学分析は、㈱パリノ・サーヴェイに委託して行った。その報告は第Ⅳ章に掲載した。

10　本書の編集および上記第Ⅳ章以外の執筆は石坂が担当した。

凡　　例

1　本書で示す方位は座標北を使用した。図 7・8・10 には磁北・真北を併記している。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。

2　図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。

3　土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄　編著、日本色研事業株式会社　発行）を使用した。

4　遺構・遺物の図面縮尺は各挿図に示した。遺構断面図の標高値はいずれもメートル表記である。遺構断面図の斜線トーンは遺構基盤層（基本層序Ⅲ・Ⅳ層）を示している。

5　遺物実測図の番号はすべて通し番号で示した。図版の遺物番号もこれに合わせている。

6　本報告書中で述べる遺物の年代観・用語などについては、基本的に以下の文献を参照した。

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

寺沢薫 編 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第 49 冊

目　次

序
例言
凡例
目次

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯と調査・整理体制・・・

挿　図　目　次

図 1　五井遺跡位置図・・・

図 42　1031 - NR 上層出土　土師器 ①（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
図 43　1031 - NR 上層出土　土師器 ②（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
図 44　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ①（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
図 45　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ②（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
図 46　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ③（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
図 47　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ④（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
図 48　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑤（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
図 49　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑥（S = 1/4、1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
図 50　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑦（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
図 51　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑧（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図 52　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑨（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
図 53　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑩（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
図 54　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑪（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
図 55　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑫（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
図 56　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑬（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
図 57　1005 - SH 出土　土師器（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図 58　1006 - SH・1155 - SK 出土　土師器（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図 59　1150 - SH・1036 - SH 出土　土師器（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
図 60　1042 - SK・1122 - SE・1164 - SE 出土　土師器（S = 1/3、1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
図 61　1133 - SE 出土　土師器（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
図 62　1070 - SK 出土　土師器（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
図 63　1002 - SD 出土　土師器（S = 1/3、1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
図 64　1093 - SD 出土　土師器（S = 1/3、1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
図 65　1152 - SD 出土　土師器（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
図 66　ミニチュア土器（S = 1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
図 67　中世耕作溝出土　土器（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
図 68　1031 - NR 出土　土製品（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
図 69　1141 - SK 出土　凹石（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
図 70　石鏃・石錐（S = 1/1）・・87
図 71　1031 - NR 出土　木器①（S = 1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
図 72　1031 - NR 出土　木器②（S = 1/4、1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図 73　1031 - NR 出土　木器③（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図 74　1031 - NR 出土　木器④（S = 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
図 75　花粉分析試料採取層準の模式柱状図と試料採取位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

表　目　次

表 1　石器一覧表・・86
表 2　花粉分析結果・・95
表 3　種実同定結果・・95

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と調査・整理体制

五井遺跡は、今回の調査地に北接する敷地において橿原市教育委員会が 1998 年に実施した踏査および試掘調査によって新たに発見された遺跡である。この調査は葬祭場の建設計画に伴って提出された遺跡有無確認踏査願にもとづいて実施されたものである。試掘調査では耕作溝や土坑、柱穴などの遺構が検出され、敷地の南側を中心に遺跡が存在することが明らかになった。葬祭場の建設工事については設計の変更により遺跡の保護がなされたため、本調査は実施されなかった。

葬祭場の南に位置する住宅展示場跡地において、鉄筋コンクリート造５階建病院の建設計画に伴い、医療法人社団 南風会 理事長 南尚希 氏から平成 21（2009）年 5 月 11 日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出された。予定地は五井遺跡の中心部と目される地点である。

この届出をうけて、平成 21（2009）年 5 月 27 日および 29 日に橿原市教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査では建物の予定地点にあたる敷地の北辺および西辺部分に調査区を設定し、それぞれの調査区で耕作溝や土坑などの遺構や古墳時代の土器の存在を確認した。この結果を受けて橿原市教育委員会と事業者が協議を重ね、若干の設計変更を経たのちに、発掘調査および整理作業に関する契約を締結することとなった。

現地での本発掘調査は橿原市教育委員会が担当した。調査面積は 2,700 ㎡である。

橿原市教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた調査名称を年度－調査次数の形で示している。今回の本調査に対しては橿教委 2010 － 1 次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物にはこの番号を記して整理・保管している。

調査成果を踏まえて平成 22（2010）年 8 月 25 日付けで遺跡の異動届を提出している。内容は遺跡範囲の拡大と項目の修正（集落：古墳時代）である。

整理・報告書作成については平成 23 年度を充て、橿原市教育委員会が橿原市千塚資料館にて作業を行った。

第２節　調査の経過

本調査は平成 22（2010）年 4 月 26 日から同年 9 月 15 日までの期間で実施し、実動日数 100 日を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

４．26（月）重機掘削開始。調査区北西隅から北辺の掘削。造成土除去面にて段を設けて掘削。
４．27（火）重機掘削。調査区北辺・西辺の造成土除去。
４．28（水）西北隅から遺構面検出作業。耕作土上面 - 0.3 ～ 0.5 mにて遺構検出面。
４．30（金）重機掘削。耕作溝多数
５．6　（木）重機掘削。遺構面検出、約 50％終了。
５．7　（金）雨天のため、掘削作業なし。排水タンク設置。
５．10（月）重機掘削。調査区南西部分の遺構面検出。
５．11（火）重機掘削。調査区南辺中央に浄化漕埋設跡、壁面をコンパネで養生。
５．12（水）重機掘削継続。
５．13（木）重機掘削終了。人力による遺構面すき取り。遺物は中世・古墳時代が中心。

5．14（金）遺構面精査、排水溝掘削終了。
5．17（月）排土置場シート養生。検出写真準備。基準点測量。
5．18（火）午後、上層遺構（中世）の検出写真撮影。
5．19（水）ベルコン設置。耕作溝掘削開始。メッシュ杭打設。
5．20（木）耕作溝掘削。メッシュ杭打設。約７割終了。
5．21（金）耕作溝掘削作業。063-SK 掘削。
5．24（月）５月には珍しい大雨。作業なし。
5．25（火）耕作溝掘削作業。約 45％終了。
5．26（水）耕作溝掘削作業。メッシュ杭打設終了。
5．27（木）耕作溝掘削作業。0100-SK 掘削。
5．28（金）耕作溝掘削継続。
5．31（月）耕作溝掘削作業。調査区東端にて併行する溝群を検出。水田畦か？
6．1　（火）耕作溝掘削作業。昼過ぎ、大雨に降られる。
6．2　（水）耕作溝掘削作業。95％終了。
6．3　（木）耕作溝掘削作業、ほぼ終了。調査区東半中央付近で柱穴多数検出。
6．4　（金）1002・1003-SD 検出写真撮影。
6．7　（月）上層遺構（中世以降）完掘。下層遺構（古墳時代か）検出写真撮影に向けての清掃。
6．8　（火）写真撮影にむけての清掃。調査区南側中央で土坑（1004・1005・1006）検出。竪穴建物か。
6．9　（水）上層遺構完掘・下層遺構検出写真撮影。
6．10（木）クレーン車を用いての検出写真撮影。
6．11（金）調査区東側の大溝（1002-SD）を掘削開始。
6．14（月）1002-SD の掘削作業。95％終了。大畦より南側からほぼ完形の二重口縁壺などが出土。
6．15（火）1002-SD 完掘。調査区壁面検討、併行溝群は水田畦ではなく畠溝ではないか？
6．16（水）昨夕から今早朝にかけて大雨。事業者と調査区の拡張について協議。
6．17（木）1031-NR 掘削。大畦の北に先行トレンチを設定。
6．18（金）雨天のため現場作業なし。
6．21（月）1031-NR 大畦以北掘削。
6．22（火）1031-NR 上層掘削。大畦より北側は掘削終了。
6．23（水）雨天のため、現場作業なし。
6．24（木）1031-NR 上層、大畦より南側掘削。調査区中央北で竪穴建物検出。
6．25（金）1036-SH 検出写真撮影。1031-NR 上層南の掘削。
6．28（月）1037-SH 北側を拡張して掘り下げ。
6．29（火）1036-SH 掘削、中心に炭多し。壁溝も一部で検出。
6．30（水）1036・1037-SH 掘削。南辺は要再検討。
7．1　（木）1036・1037-SH 床面検出写真撮影。
7．2　（金）調査区南東部、再精査。畠溝は 1003-SD より新しい。調査区拡張について事業者と現地打ち合わせ。
7．5　（月）調査区中央の各土坑の検出写真撮影。
7．6　（火）1041-SH、床面検出。畠耕土すき取り。
7．7　（水）1041-SH 床面検出写真。昼、降雨により作業終了。
7．8　（木）1007・1045 ～ 47-SK の掘削。
7．9　（金）畠溝の掘り下げ。
7．12（月）強い雨。作業なし。
7．13（火）雨天のため、作業なし。
7．14（水）雨天のため、作業なし。
7．15（木）調査区南側、東西 15 ×南北５ｍの範囲を拡張。
7．16（金）畠溝の掘削。拡張区、遺構検出。
7．20（火）猛暑日が続く。畠溝群およびピットの記録・掘削。
7．21（水）1093-1095-SD、土器出土状況写真撮影。拡張区の耕作溝、掘削。
7．22（木）今夏一番の暑さ。現場の温度計は 38℃を指す。拡張区の耕作溝掘削終了。1133-SE から完形の土師器甕出土。
7．23（金）拡張区、検出写真撮影。
7．26（月）1006-SH、掘削。1002-SD、断割。
7．27（火）畠溝、1002-SD より東側を完掘。
7．28（水）1004・1006-SH の壁溝・柱穴掘削後、土層断面写真撮影。1133・1122-SE の完掘。
7．29（木）雨天のため、現場作業なし。
7．30（金）1005-SH 検出作業。拡張区隅で新たに建物検出。
8．2　（月）1031-NR 掘削。東岸土師器多し。南半で槽が出土。
8．3　（火）1004・1006-SH 床面検出写真。1031-NR 掘り下げ、 深さ３ｍ以上。
8．4　（水）1150-SH 掘削、床面検出。1031-NR 掘削継続。土器多数。一部、弥生土器が混じる。
8．5　（木）1005-SH 掘削開始。1031-NR 掘り下げ継続。
8．6　（金）1005-SH 掘削。南にもう一棟建物の存在を確認。
8．9　（月）３時前後に強い雨。1031-NR 掘削。
8．10（火）1151-SH 検出写真後、床面まで掘削。事業者に現地にて調査成果の説明。今後の整理や病院での展示についての協議。
8．11（水）昨夜の大雨で 1031-NR 壁面が一部崩壊。土のうで補修。
8．12（木）台風が日本海を通過中のため、現場作業なし。
8．16（月）空撮にむけての清掃作業。
8．17（火）空撮にむけての清掃作業。奈文研･深澤氏、次山氏、高田氏他来訪。
8．18（水）空撮にむけての清掃作業。地元五井町区長、来訪。
8．19（木）クレーン車を用いての写真撮影。桜井市教委・橋本氏他来訪。
8．20（金）12 ～ 13 時、空中写真撮影。
8．23（月）南壁西半土層断面記録。橿考研・関川氏、卜部氏、広岡氏他来訪。
8．24（火）1031-NR 南半、掘削再開。
8．25（水）1036-SH 下層床面検出。1031-NR から円柱形土製品が出土。橿考研・川崎氏来訪。
8．26（木）1005・1006・1151-SH 床面下掘削。
8．27（金）1005・1006-SH 床面下掘削。1152-SD 掘削。橿考研・米川氏来訪。
8．30（月）1031-NR 掘削。橿考研・井上氏、中野氏他来訪。
8．31（火）1031-NR 掘削。
9．1　（火）1031-NR 掘削。南東岸土器集中部写真。
9．2　（木）1031-NR 完掘。下層土器集中部遺物取上げ。
9．3　（金）1031-NR 完掘写真撮影にむけて清掃。
9．6　（月）1031-NR 写真撮影。西から重機埋め戻し開始。
9．7　（火）重機埋め戻し継続。台風養生。
9．8　（水）台風接近のため、重機埋め戻しのみ行う。
9．9　（木）土層断面記録作業。撤収準備開始。
9．10（金）重機埋め戻し継続、約半分終了。断面記録作成。記録作業全終了。土壌サンプル採取。
9．11（土）重機埋め戻し。
9．13（月）重機埋め戻し。撤収作業。
9．14（火）重機埋め戻し９割終了。撤収作業もほぼ終了。
9．15（水）重機埋め戻し・撤収作業終了。全作業終了。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

五井遺跡は奈良県橿原市五井町に所在する。橿原市は奈良盆地の南東部に位置している。市の南部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、市の中央部より北には肥沃な沖積地が広がる。橿原市の西半部中央に位置する五井町も、その沖積平地に立地している。

市内には曽我川・高取川・飛鳥川・米川・寺川などの主要河川が盆地中央部に向かって、おおむね南東から北西方向に流れている。調査地点は、このうちの曽我川と高取川に挟まれた微高地上に位置している。調査地の西約 250 mには曽我川が、東約 250 mの地点には高取川が流れており、それぞれ北流している。曽我川と高取川は調査地点から北北西に約 700 mの地点で合流している。調査地よりも西側の一帯には曽我川の氾濫によると考えられる条里地割の乱れが見られる。

調査地周辺の現況の標高は 61.5 m前後である。周辺には耕作地が残るものの、近年、宅地化が次第に進行しつつある地域である。

調査地の南南東約 1 km の地点には畝傍山が所在する。畝傍山は香具山・耳成山とともに名勝・大和三山として国の名勝に指定されている。標高は 199.8 mと三山の中でもっとも高い。

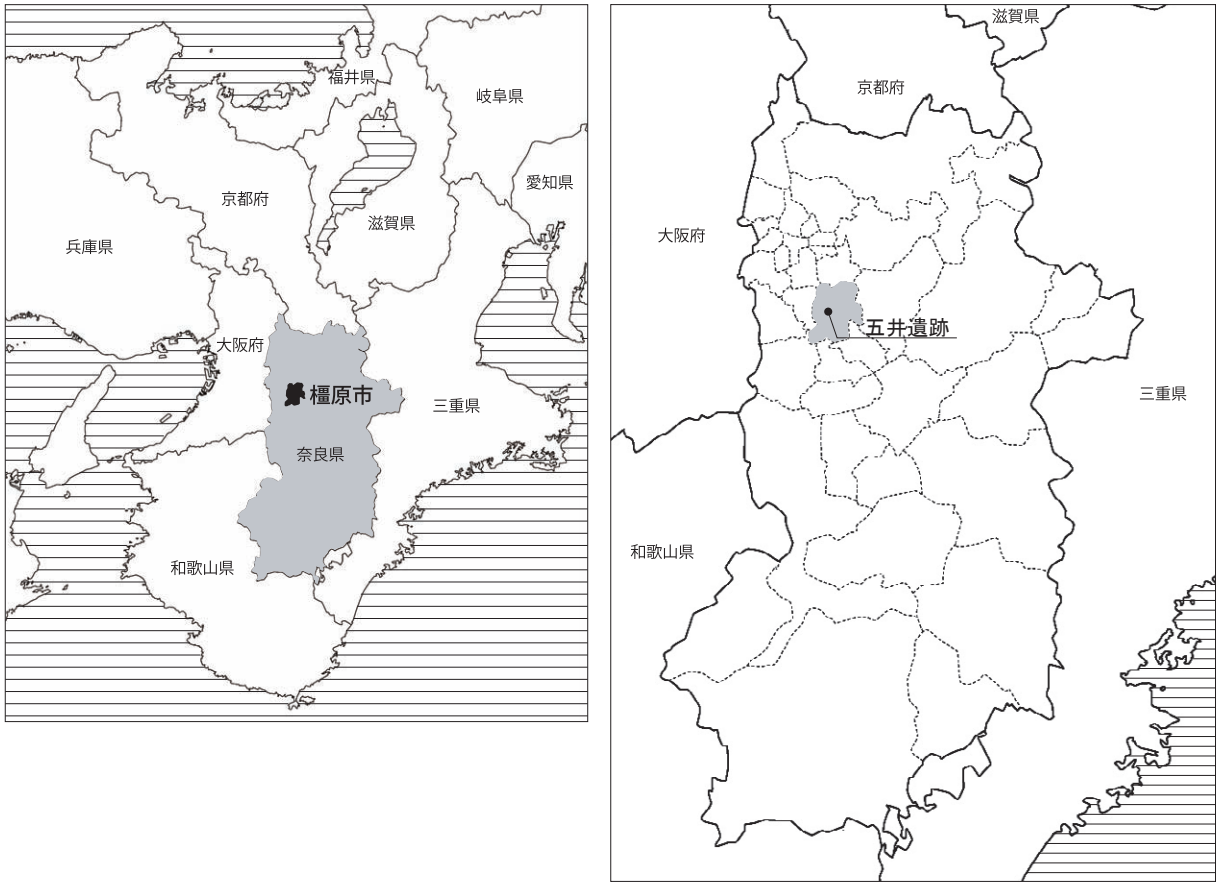


図１　五井遺跡位置図

第２節　歴史的環境

五井遺跡の周辺では縄文時代から近世にいたる様々な遺跡が確認されている。以下に近隣の遺跡を中心に各時代の状況を概観する。

縄文時代では、橿原遺跡を中心とする畝傍山周辺の遺跡や調査地から西に約１㎞の地点に位置する曲川遺跡など、主として後～晩期の遺跡が確認されている。橿原遺跡は橿原神宮外苑整備事業にともない約 10 万㎡という膨大な範囲の調査が行われ、晩期の遺物が大量に発見されている。西日本の縄文時代晩期を代表とする遺跡として非常に著名な遺跡である。その他にも、畝傍山の北麓に位置する四条シナノ遺跡や慈明寺遺跡においても河道から後～晩期の遺物が出土している。曲川遺跡では晩期の土器棺墓が多数見つかっており、当時の墓制の一端が明らかになっている。

弥生時代では、四条シナノ遺跡において前期の環濠集落が確認されている。四条シナノ遺跡は調査地から南に約 400 m、高取川を上流に遡った地点に位置する。四条シナノ遺跡の環濠集落は中期初頭には廃絶しているようである。調査地から数㎞圏内にはこの他に、弥生時代を通じての大型集落として四分遺跡や中曽司遺跡などの存在が知られている。また、曽我川の上流域には、同じく前～後期の集落遺跡である一町遺跡や、後期の高地性集落である忌部山遺跡が存在している。

古墳時代に入ると畝傍山の周辺に古墳が築かれるようになる。畝傍山北西の尾根上に築かれたスイセン塚古墳は墳丘長約 71 mの前方後円墳である。長さ約 25 mのと短く低い前方部をもち、前期の古墳であると考えられている。中期後半から後期前半にかけての時期には、畝傍山の北東一帯に四条古墳群が形成される。現在までに 12 基の埋没古墳が確認されており、中には墳丘長 40 m前後の帆立貝式古墳や造り出し付方墳も含まれている。古墳の周濠からは多量の埴輪や木製樹物が出土している。また、四条古墳群から桜川によって隔てられた西側には同じく中期後半から後期前半に形成された四条シナノ古墳群が存在している。四条古墳群と比較すると、四条シナノ古墳群の古墳間には明確な格差が見出し難い。このような状況は奈良盆地低地部における古墳群形成の様相を検討する上での良好な資料とされている。調査地から北西約 600 m、曽我川の西岸に位置する南曽我遺跡でも前期および中期後半～後期前半の埋没古墳が検出されている。また、調査地の北西約 150 mの地点には門村古墳と呼ばれる直径約 15 m、高さ約２m強の不整形な高まりが存在する。出土遺物は知られておらず、詳細な時期等は不明である。

集落遺跡では、四条遺跡において古墳の墳丘下から前期前半の竪穴建物９棟が見つかっている。前期では調査地よりも北方の院上遺跡や下明寺遺跡で遺物の出土が知られている。近年、曽我川よりも西では京奈和自動車道建設に伴う発掘調査によって古墳時代の集落遺跡の検出例が増加している。そのうちの一つである新堂遺跡では前期（庄内式期）の竪穴建物をはじめとする遺構・遺物が見つかっている。新堂遺跡およびその南に隣接する東坊城遺跡では中期の遺構・遺物も見つかっており、これらの中には陶質土器・韓式系土器といった渡来系遺物も含まれている。東坊城遺跡では鍛冶関連遺物も見つかっている。曽我川流域では他に、橿原市の北西部に位置する曽我遺跡において、中期の玉生産関連の遺構・遺物が確認されている。前述の四条古墳群との深い繋がりが想定される四条大田中遺跡（現在は四条遺跡に内包されている）においても、中期の陶質土器や韓式系土器が出土している。奈良文化財研究所による藤原宮およびその周辺の調査では、後期の可能性がある掘立柱建物がしばし

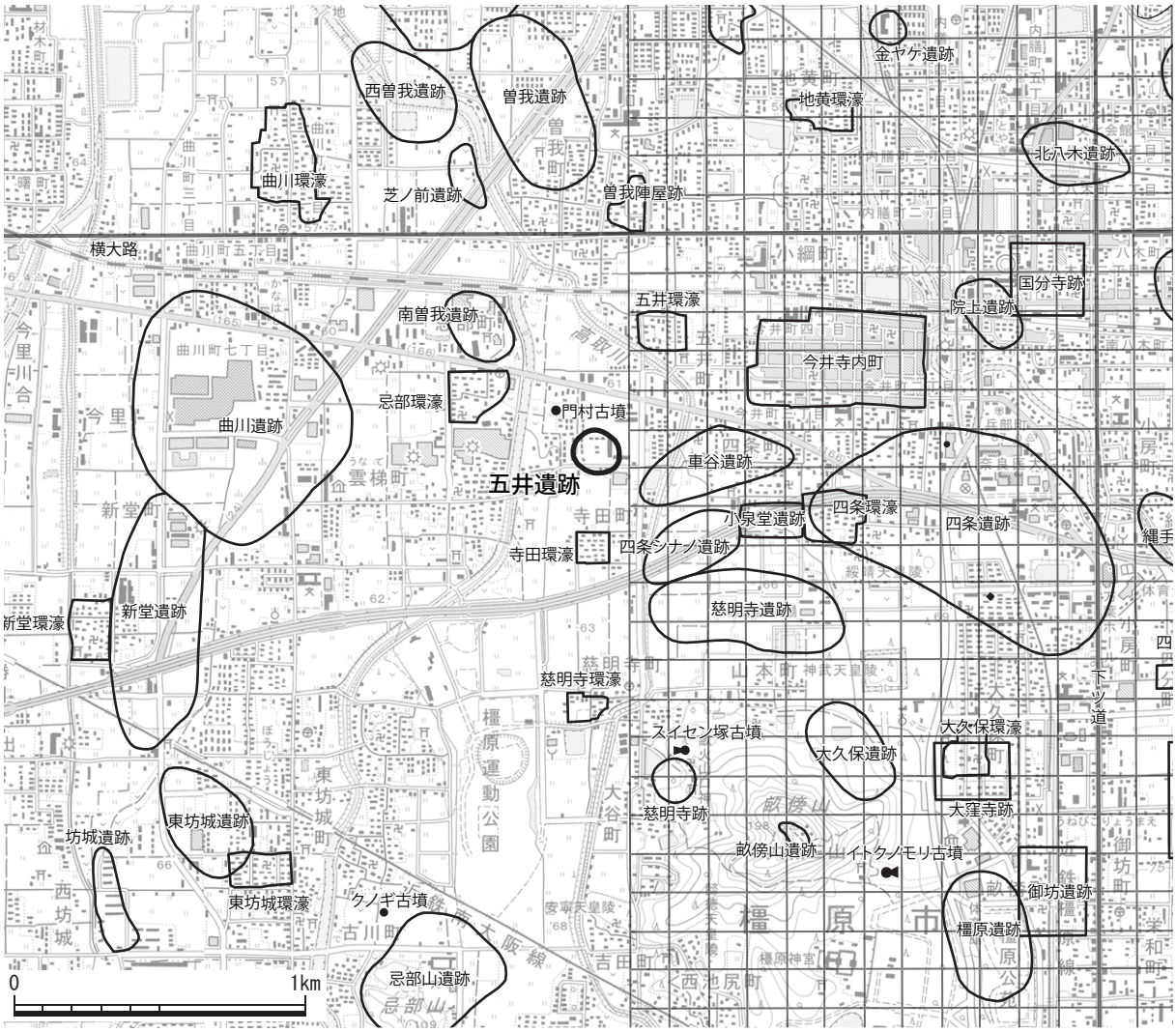


図２　調査地周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000。格子目は藤原京復元条坊）

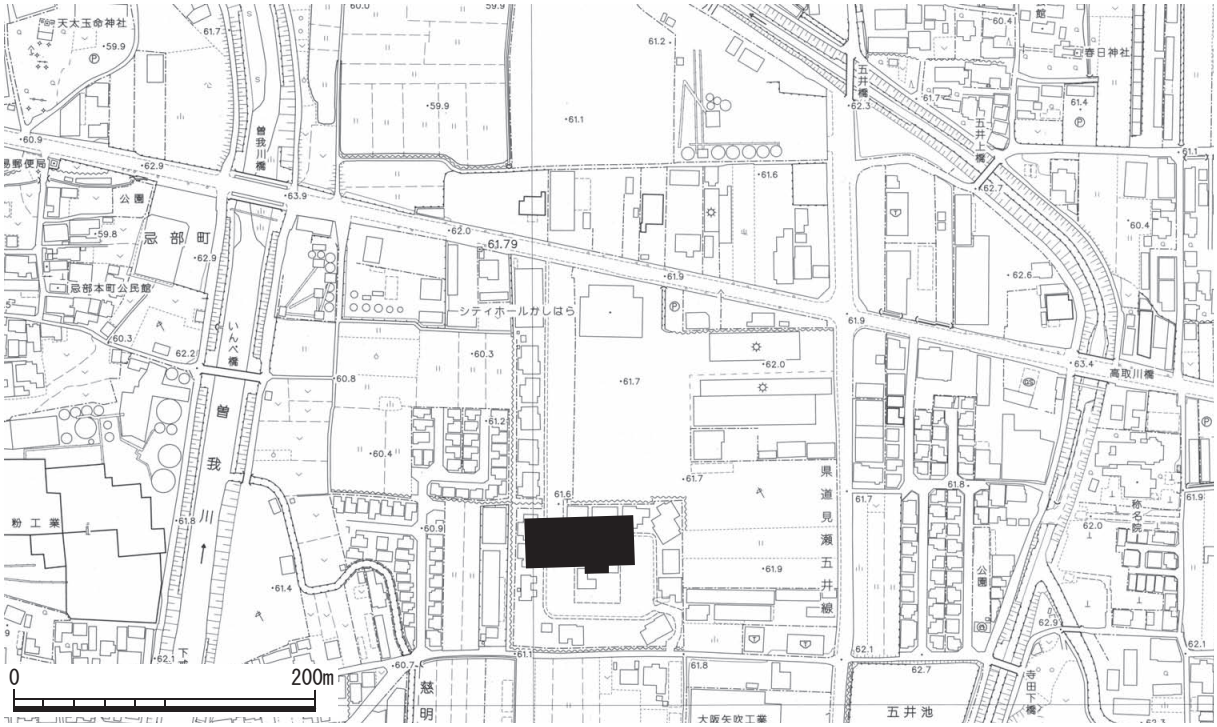


図３　発掘調査区位置図（Ｓ＝1/5,000。図２中央部の拡大）

ば発見されている。その他、市南部の軽寺跡では後期後半の竪穴建物 1 棟が見つかっている。中期までと比較して後期の明確な居住跡の検出例は少ないが、当該時期の遺物は広く市内各地で出土が見られるようになる。このような状況の背景には掘立柱建物への転換を含めた生活様式の変化や、生活域の広がりがあると考えられる。また、橿原市南部の丘陵地には後期～終末期の古墳が多数存在しており、古代に入り飛鳥・藤原の地が日本の中心地となっていく過程の一端を表している。

橿原市内、とくに南東部には飛鳥時代の寺院や集落、墓などが多数存在している。694 年には橿原市・桜井市・明日香村にまたがる地域に日本初の本格的都城である藤原京が形成される。先述の四条古墳群と四条シナノ古墳群はいずれも藤原京の造営の際に墳丘が削平され濠も埋められており、その上に条坊道路が施工されている。現在確認されている藤原京の西京極大路（西十坊大路）は調査地のすぐ東を通っている。

710 年の平城遷都以降、新たに形成される遺跡の数は少なくなり、調査地一帯には条里制が施工される。『大和国条里復元図』によると調査地は高市郡路西二十六条三里、小字名「サイゴ」にあたる。調査地から東南東に約 500 mの小泉堂遺跡では 13 ～ 14 世紀の屋敷地が検出されている。同様に、新堂遺跡でも 12 世紀の屋敷地が見つかっている。中世における調査地周辺は、耕作地が広がる中にそうした屋敷地や農村が点在する景観が広がっていたと考えられる。調査地から南に約 1 ㎞ 、畝傍山の北西麓に所在する慈明寺は創建年代や伽藍配置は不明なものの、中世にはかなり大規模な寺院であったと想定されている。

16 世紀中頃には、後に大和随一の商業都市として発展する今井寺内町が成立する。調査地の周辺にはその他、五井環濠、忌部環濠、寺田環濠という三つの環濠集落が存在している。いずれも正確な成立年代は不明であるが、中世にはその名が現れている。調査地はちょうどこれらの環濠集落の中間地点に位置しており、住宅展示場建設以前は主に水田として用いられていたようである。中世以降の調査地はおそらくこれらの集落に属する農地として用いられ続けてきたと考えられる。

第Ⅲ章　発掘調査の成果

第１節　調査区の設定

調査区は建物を建設する敷地の北半西寄りの位置に設定した。調査区の範囲は東西 75 m、南北 35 mの東西に長い方形である。調査区南辺中央部で竪穴建物群が検出されたため、事業者との協議の上、調査途中で東西 15 m、南北５mの範囲で南に調査区の拡張を行った。最終的な調査面積は 2700 ㎡である。先に実施した試掘調査区のうち、西辺部分は本調査区の西辺寄りの位置に含まれている。敷地北辺の試掘調査区は本調査区のさらに北に位置しているが、これは試掘調査時から建物の設計変更が行われたためである。

調査は住宅展示場のアスファルト舗装を切除した後、重機によって掘削を進めた。排土置場には敷地の南半を利用した。アスファルト下には厚さ 0.8 ～ 1.3 mに及ぶ現代の造成土があり、遺構面はそのさらに約 0.5 m下にある。調査区南辺中央には東西５m、南北８m、現地表面からの深さ３mの範囲にわたる撹乱が存在する。これは住宅展示場で用いられていた大型浄化槽の埋設時の掘方跡である。その他は幅 0.5 mの南北暗渠一条や一辺 0.6 mの方形撹乱坑があった程度で、遺構面の遺存状況はおおむね良好であった。

図４のとおり、４m間隔のメッシュで小区画を設定して調査を行った。自然河道など広範囲に広がる遺構は、この小区画ごとに遺物の取り上げを行っている。また、報告書本文中においても便宜上、この区画名を用いた表現で説明を行うことがある。

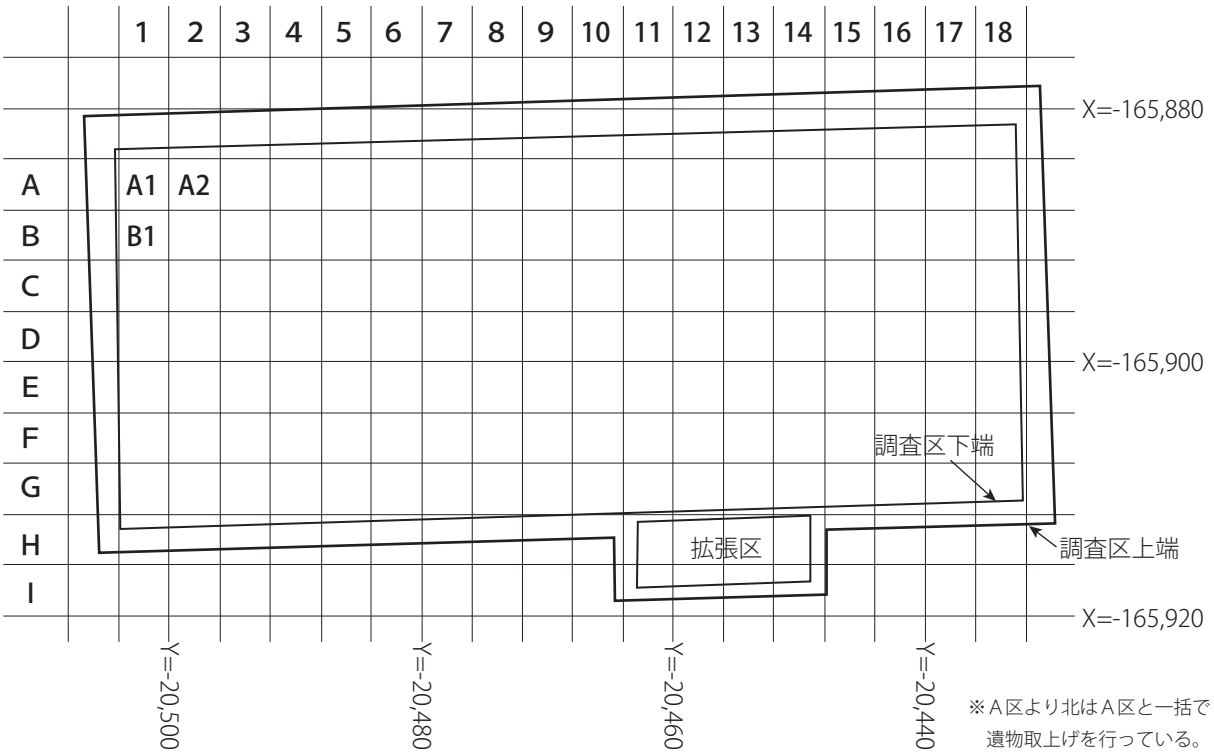


図４　調査区内地区割図（Ｓ＝1/600）

第２節　基本層序

調査区内の基本層序は大きく４層に分けられ、その内容を以下に述べる。なお、Ⅲ層の位置付けについての具体的な検討については次節にゆずることとし、ここではその内容を前提として各層序の説明を進める。なお、Ⅰ層の上には住宅展示場造成時の盛土が厚さ 0.8 ～ 1.3 mほど堆積しているが、図５・６では割愛している。

Ⅰ層．近世～現代の耕作土（１～４層）
Ⅱ層．中世の耕作土（５～ 16 層）
Ⅲ層．古墳時代の畠土（17 ～ 23 層）
Ⅳ層．古墳時代以前の基盤層（地山）（24 ～ 45 層）

Ⅰ層は調査区全体を覆う堆積層である。造成工事時に上面が部分的に掘削されているものの、上面の標高は 60.5 ～ 60.6 mとおおむね平坦である。周辺地形と同様、全体に南東が高く、北西が低くなっている。厚さは 0.3 m程度である。

Ⅱ層は中世の耕作層であり、調査区全体に広がっている。いわゆる素掘り耕作溝もここに含まれる。上面の標高は 60.3 m前後である。小礫を若干含む、灰～にぶい黄色を呈する粘質土を主とする。土師器や少量の瓦器などが出土する。細片が多く、時期が明確な土師器は少ない。

Ⅲ層は古墳時代前期の畠の耕作土である。にぶい黄橙色の粘土ブロックをまばらに含む、黒褐色粘質土層を主としている。ごくわずかながら土師器の細片が出土する。調査区の東側約 25 m（おおよそ 14 区以東）の範囲に広がっている。それより西にはⅢ層が存在せず、Ⅱ層直下でⅣ層が検出される。

遺構の検出作業はこのⅢ層（調査区東部）およびⅣ層（調査区中央以西）の上面で行っている。調査区東部ではⅢ層上面まで、中央～西部ではⅣ層上面まで重機で掘削を行い、後の作業は人力で行っている。遺構検出面の標高は調査区南東で 60.2 m、北東および南西で 60.0 ～ 60.1 m、北西で 60.0 mと南東から北西方向に向かって緩やかに低くなるが、おおむね平坦である。Ⅲ層の厚さは 0.05 ～ 0.1 m。調査区東壁・南壁の土層断面観察では部分的に厚さ 0.2 mを残す場所も存在する。竪穴建物をはじめとする遺構の残存状況も踏まえると、当初の面はⅡ層によってかなり削平を受けていると推測される。この点はⅣ層も同様である。なお、Ⅲ層が広がる調査区東部の中世耕作溝は深いものが多く、耕作溝の埋土除去後はその底面にⅣ層が顔を見せるような状況であった。Ⅲ層が広がる範囲では人力でこれを除去し、Ⅳ層上面での遺構検出作業を行っている。

Ⅳ層は調査区全体に広がる古墳時代以前に堆積した基盤層である。上面の標高は 60.0 ～ 60.1 m。遺物は含まない。調査区は中央を南北に縦断する自然河道によって東・西に分断されている。基盤層の様相は全体でおおむね一致するが、河道の東・西で土質が若干異なる。遺構検出作業を行ったⅣ層の最上層は、東が褐灰色粘質土、西がにぶい黄褐色土である。厚さは 0.05 ～ 0.3 mで、西ほど厚い傾向にある。その下層は東が浅黄色シルト、西がにぶい黄褐色粘質土がそれぞれ堆積する。厚さは 0.1 ～ 0.3 mである。そのさらに下層には安定した暗灰色系の粘土層が厚く堆積している。

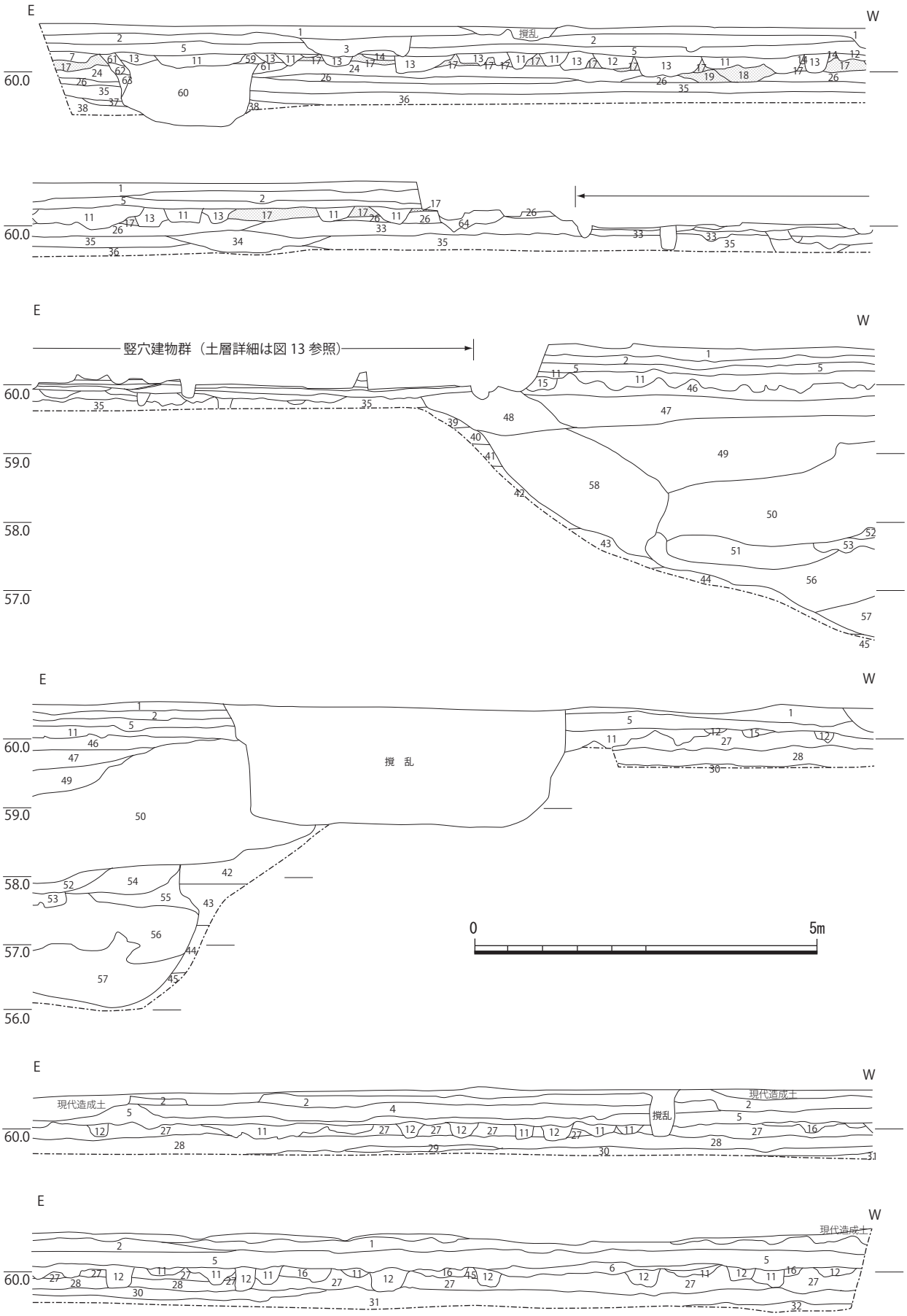
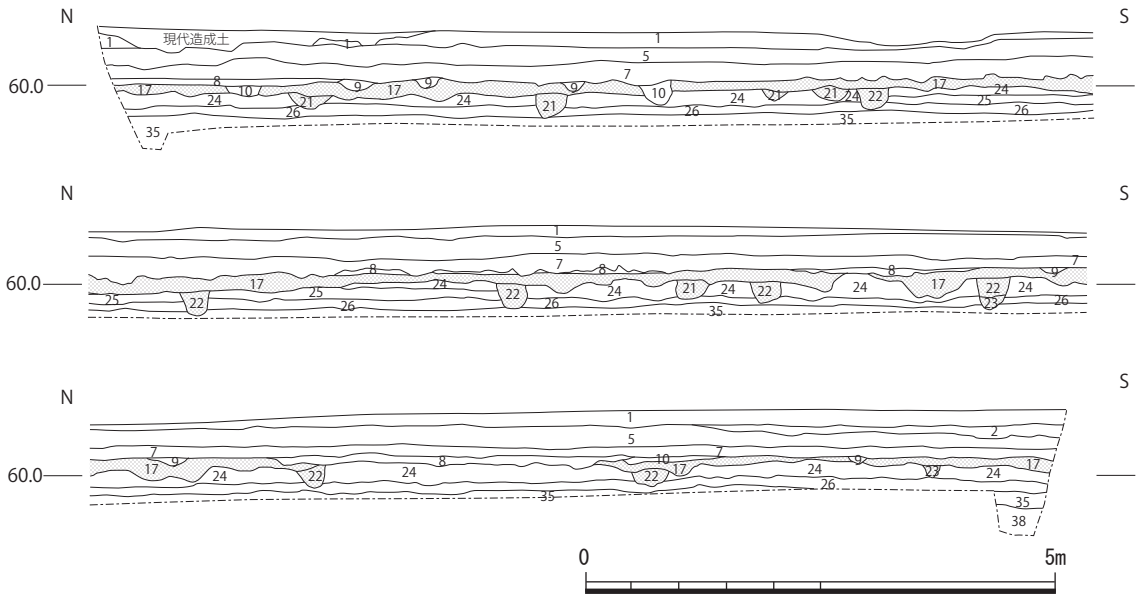


図 5　調査区南壁 土層断面図（S ＝ 1/80）



調査区南壁（図５）・東壁（図６）土層注記　（番号は共通。図の網掛け部分がⅢ層）

Ⅰ層
近世～現代の耕作土

1．7.5Y4/2　灰オリーブ色粘質土　現耕土
2．10Y6/2　オリーブ灰色微砂質土
3．7.5Y6/2　灰オリーブ色粘質土
4．5GY6/1　オリーブ灰色砂質土

Ⅱ層
中世の耕作土
素掘り耕作溝を含む

5．7.5Y6/3　オリーブ黄色粘質土
6．10Y5/1　灰色粘質土
7．7.5Y6/1　灰色粘質土
8．10Y6/1　灰色粘質土
9．5Y6/1　灰色粘質土
10．2.5Y4/2　暗灰黄色土
11．7.5Y6/1　灰色粘質土
12．5Y6/1　灰色粘質土
13．2.5Y6/3　にぶい黄色粘質土
14．5Y6/2　灰オリーブ色粘質土
15．5Y6/1　灰色粘質土
16．2.5Y6/1　黄灰色粘質土

Ⅲ層
古墳時代前期畠耕土

17．10YR3/2　黒褐色粘質土
（～１㎜大の礫をまばらに含む。下部に細かな粘土ブロックを少量含む）

Ⅲ層
古墳時代前期
畠耕土下の耕作溝

18．2.5Y4/2　暗灰黄色粘土（シルト混じり）
19．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土
20．10YR5/2　灰黄褐色砂質土
21．7.5YR4/2　灰褐色粘質土
22．10YR5/1・2.5Y7/4　褐灰色土
（浅黄色粘土ブロック、0.5㎜大の礫をわずかに含む）
23．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土

Ⅳ層
古墳前期以前の基盤層
（地山）

24．10YR4/1　褐灰色粘質土
25．10YR5/2　灰黄褐色粘質土
26．2.5Y7/3　浅黄色シルト－微砂土
27．10YR5/3　にぶい黄褐色土　（1㎜大の礫をわずかに含む）
28．10YR6/4　にぶい黄橙色粘質土
29．2.5Y5/2　暗灰黄色粘土
30．7.5YR3/1・5/4　褐色混じり黒褐色粘質土
31．10YR3/1　黒褐色砂質粘土
32．10YR4/1　褐灰色砂質土
33．5Y7/3　浅黄色微砂質土
34．2.5Y4/2　黒灰黄色細砂（粘性あり）
35．2.5Y3/2　黒褐色粘土
36．2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト質粘土
37．2.5Y5/2　暗灰黄色粘土
38．5GY5/1　オリーブ灰色粘土
39．2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質粘土
40．5Y5/2　灰オリーブ色粘土
41．2.5Y3/1　黒褐色砂質土
42．10YR2/1　黒色粘土
43．5Y4/2　灰オリーブ色砂
44．N2/0　黒色粘土　（～３㎜大の礫を含む）
45．5Y5/1　灰色砂

自然河道
1031-NR

46．2.5Y7/2　灰黄色粘砂土
47．2.5Y8/3　淡黄色微砂
48．7.5YR5/1　褐灰色砂質土　（褐色粘土ブロックをまばらに含む）
49．5GY6/1　オリーブ灰色シルト
50．7.5Y8/1　灰白色砂から粗砂　ラミナあり
51．5GY4/1　暗オリーブ灰色のシルト
52．7.5Y3/1　オリーブ黒色粘土　シルト混じり
53．7.5GY5/1　緑灰色シルト
54．5G4/1　暗緑灰色シルト
55．5Y8/2　灰白色粗砂
56．7.5Y8/2　灰白色砂
57．2.5Y8/1　灰白色砂
58．10BG3/1　黒青灰色粘土　（シルト混じり）

1002-SD

59．2.5Y6/2　灰黄色粘質土
60．2.5Y6/3　にぶい黄色砂　（上部は鉄分沈着により赤褐色化）
61．10YR4/2　灰黄褐色砂混じり粘質土
62．10YR5/2　灰黄褐色砂質土
63．10YR4/1　褐灰色粘土
64．2.5Y7/1　灰白色粗砂

図６　調査区東壁 土層断面図（Ｓ＝1/80）

第３節　遺構

遺構は中世と古墳時代の二時期に分かれる。古代の遺物も中世の遺構からごく少量出土しているが、時期的に古代に属す遺構はない。縄文時代・弥生時代についても遺物は古墳時代に埋没した自然河道1031‐NRから出土しているが、その時期の遺構はない。

遺構にはそれぞれ通し番号を付けている。上層の中世遺構には001～200番を、下層の古墳時代遺構には1001～1166番を割り振っている。このうち、時期判断に難のある遺構についてはそれぞれの遺構説明において特記することとする。以下に時期ごとに詳細を述べる。

中世の遺構

耕作溝（001～192‐SD　※063・100を除く）

いわゆる中世素掘り溝と呼ばれる、耕作活動によると考えられる溝である。調査区の全域に存在する。ごく新しい撹乱を除くと、耕作溝群がもっとも新しい時期の遺構である。

溝の方向は南北と東西とがあり、時期は基本的に南北の溝が新しい。溝の幅は最大で約0.4 mである。深さは最大で約0.3 m、全体に南北方向の溝の方が深い。東西の溝は深さ0.1 m未満のものが大半である。東西の溝は、南北よりも数量が少ないが、調査区中央北側などかなり密に存在する部分もあり、当初はもっと多く存在していたと考えられる。

調査区東部は南北の耕作溝がとくに密集しており、個々の溝の認識が非常に困難であった。遺構面を認識するために調査区北東隅一帯は他よりやや深い位置で遺構の検出作業を行っており、結果としてその付近は溝状を呈する部分はほぼなくなってしまっている。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器がある。数量としては下層の古墳時代前期の土師器が主であり、須恵器と瓦器はわずかである。

土坑（063・100‐SK）

063‐SK

一辺約2.2 m、深さ0.6 mの平面隅丸方形を呈する土坑である。時期は耕作溝よりも古い。北・東・南辺は直線的であるのに対し、西辺は丸みを帯びており、断面も中央に小さな段をもっている。遺構基盤層が下層の自然河道1031‐NRの埋土であり、遺構の壁・底面の強度はやや軟弱である。

出土遺物には少量の土師器・須恵器の破片がある。

100‐SK

直径約1.0 m、深さ0.2 mの円形土坑である。時期は耕作溝よりも古い。壁面はほぼ垂直に立ちあがる。

出土遺物には土師器の破片がある。

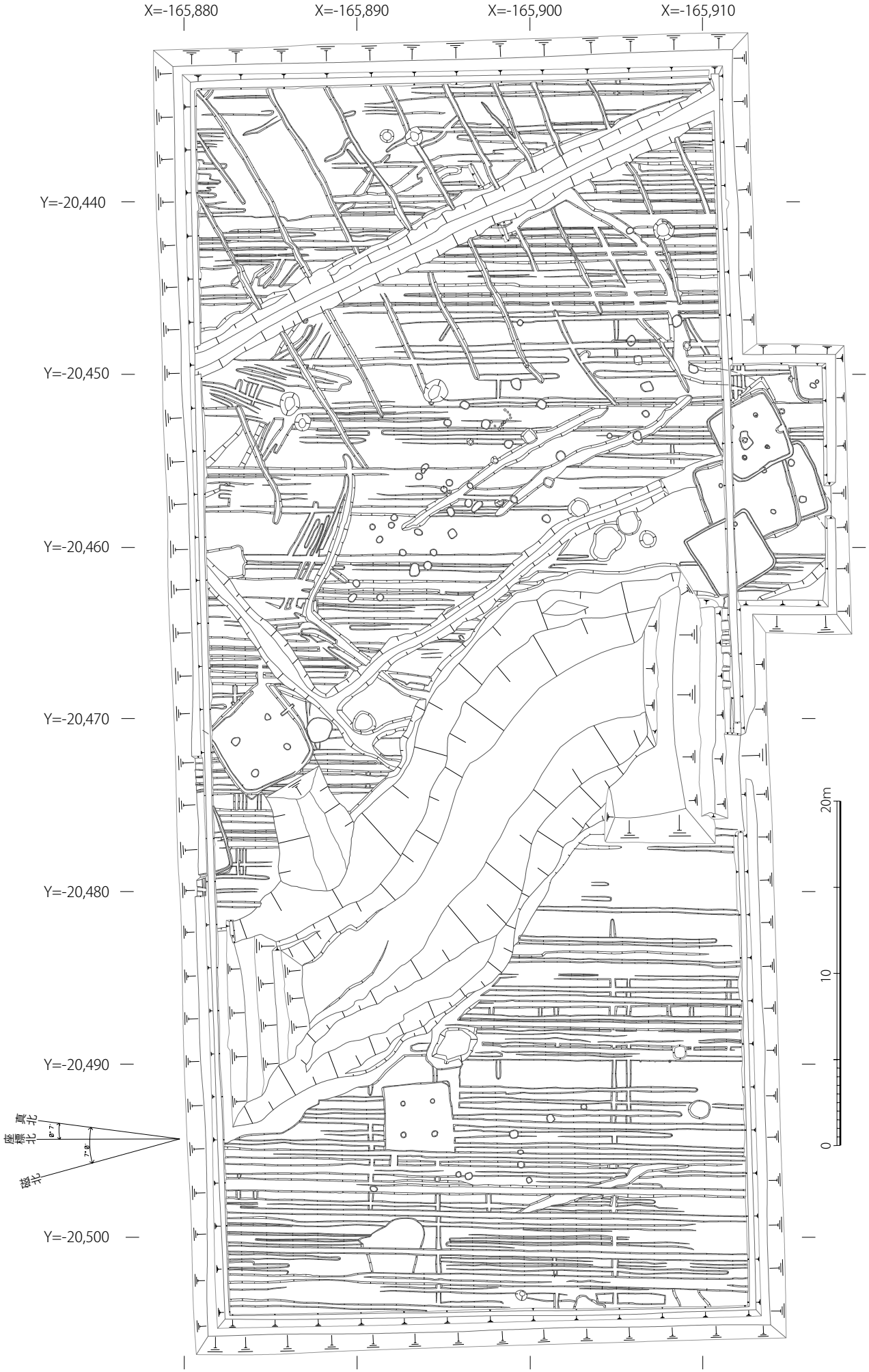


図７　完掘状況平面図（Ｓ＝1/300）

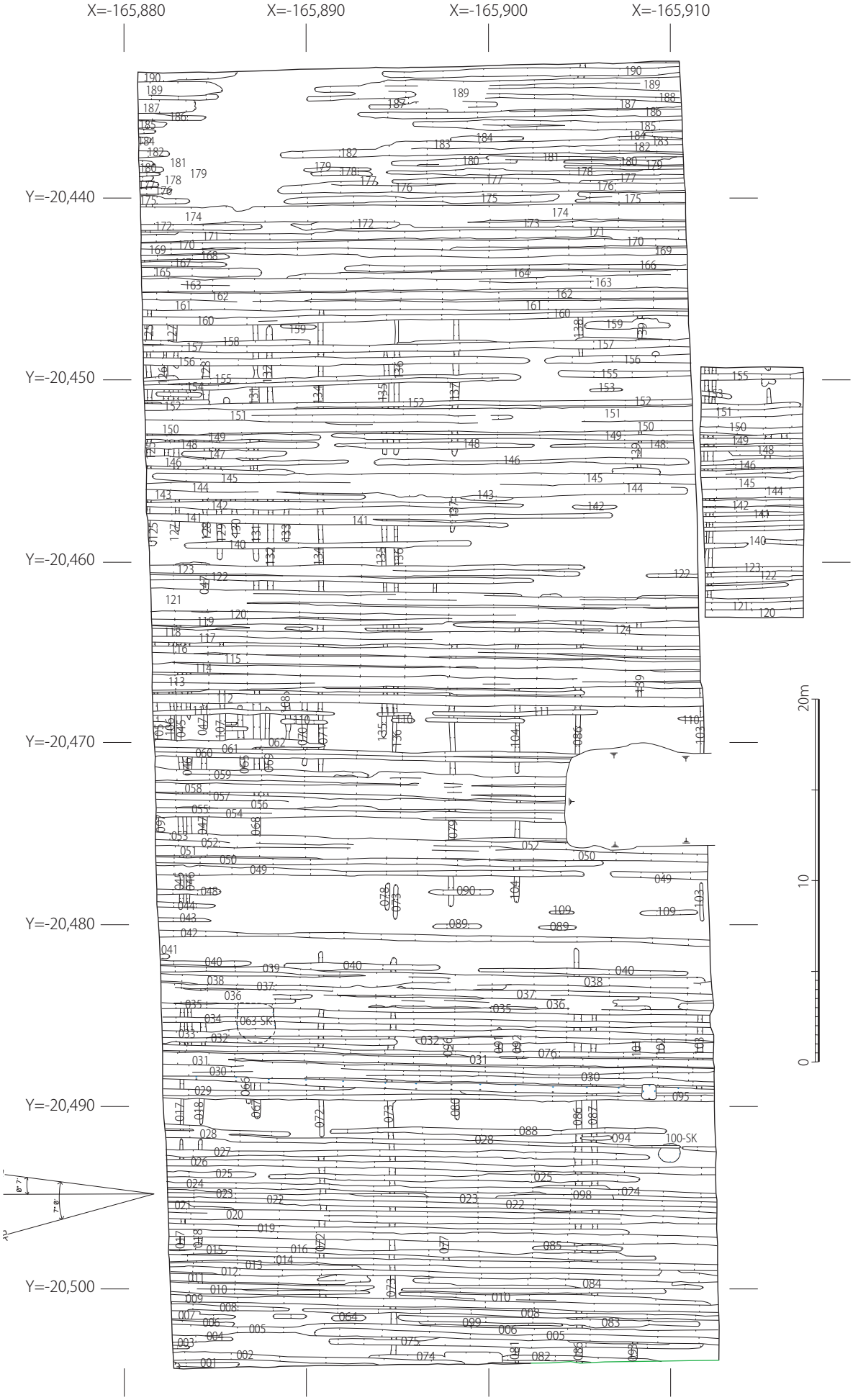


図８　中世遺構配置図（S＝1/300）

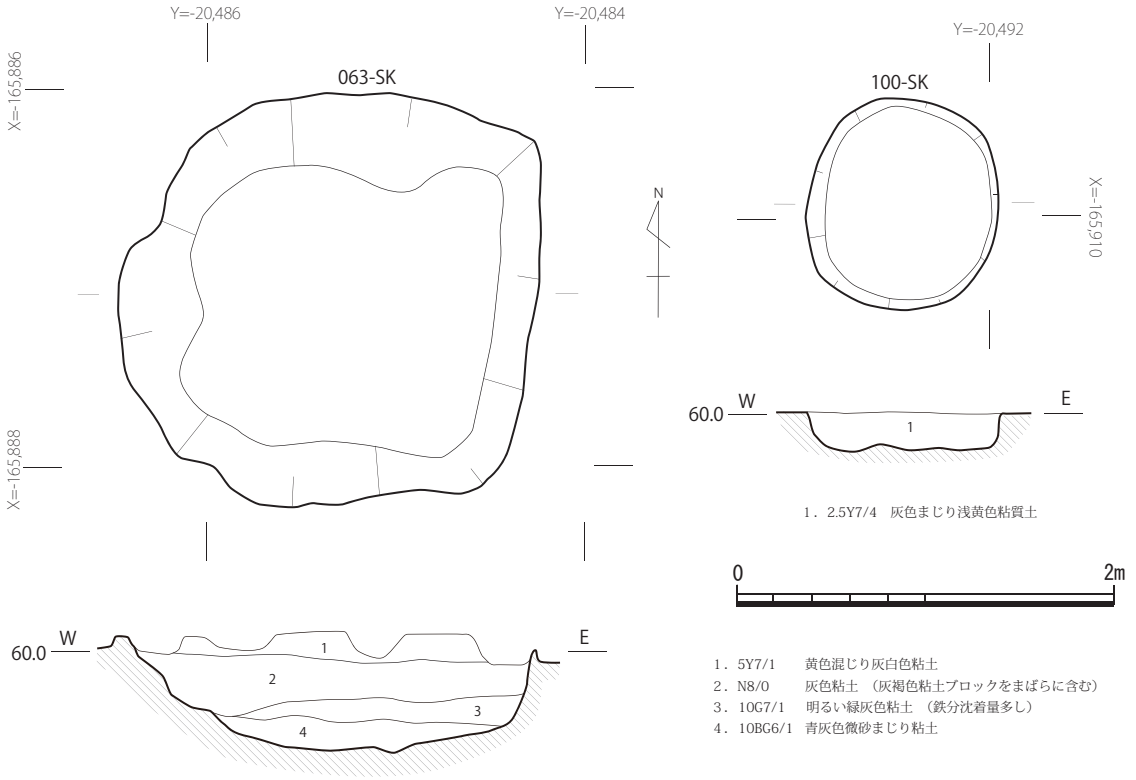


図９　063・100‐SK 平面・断面図（S＝1/40）

古墳時代の遺構

今回の調査では、古墳時代前期に属す遺構を多く確認している。遺構は調査区全体に存在するが、東半部は特に密である。西半部にも土師器細片が混じる薄い層が広がる地点が数ヶ所存在するが、まとまった遺構としての認識は困難であった。遺構検出面は大半の遺構が中世の遺構と同一面であるが、畠溝など調査区東部の遺構の一部はⅢ層を除去したⅣ層上面での検出である。Ⅲ層下の遺構についてはその都度述べることとする。

自然河道（1031‐NR）

1031‐NR は調査区中央部を南東から北西に流れる自然河道である。1031‐NR によって調査区は東西に大きく分割されている。河の流れは調査区中央で緩やかに蛇行している。河幅は約 12 mである。深さは最大で約 3.5 mを測る。断面の形状はややゆるやかなU字状で、中央部がもっとも深くなっている。河の西岸と東岸南半は、岸からすぐに切立って深くなる。それに対し東岸北半には岸から幅１～２m程度の浅瀬が存在する。これは河幅が最大であった時期の状況で、河の形状は埋没の過程において逐次変化したと考えられる。

埋土は大きく上・中・下層に分かれる（図 11）。最終堆積である上層の埋土は黄・灰色系の微砂～シルト層で占められる。上層堆積時での河幅は約９m、深さは約 0.6 mを測り、この時点では河の流れはかなり緩やかになっていたと推測される。

中層は 1031‐NR の大部分を占める堆積層で、灰色・オリーブ色系のシルト～砂層からなる。河幅が最大時の堆積層である。河の中央部に粗い砂が堆積し、東・西の岸寄りにはやや粘性を有するシ

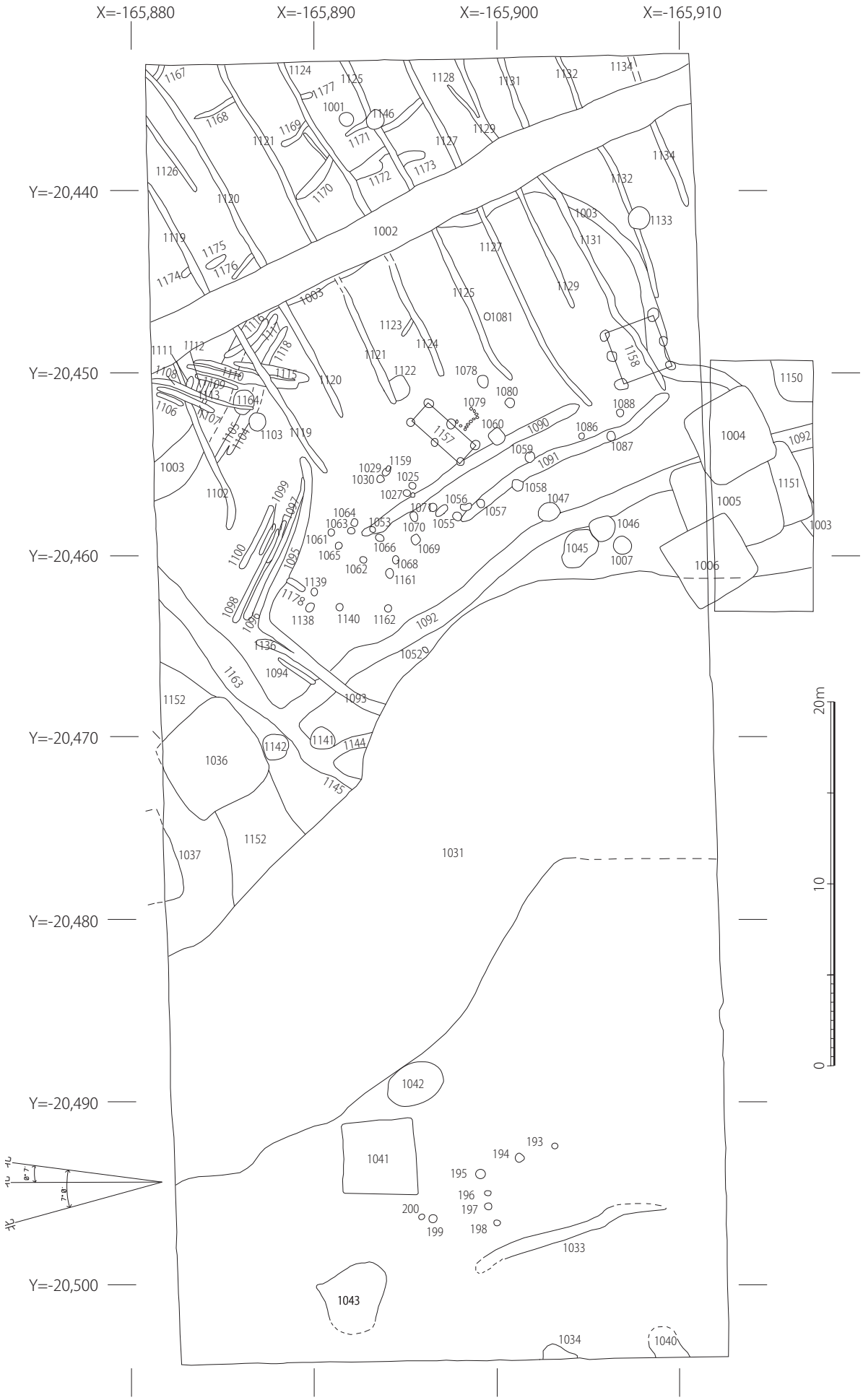


図 10　古墳時代遺構配置図（S ＝ 1/300）

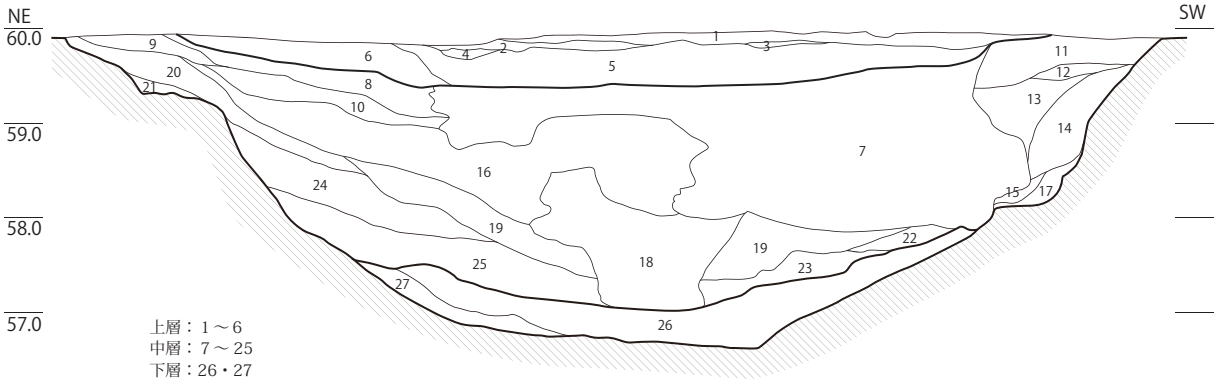
ルトが堆積する傾向がある。中央部では下層を侵食する形で灰色砂層が堆積している。1031‐NRの中でも、もっとも遺物の出土量が多く、布留1式を中心とする土師器が多量に出土している。その他、土製品（土錘）や木製品が出土している。後述するもっとも新しい竪穴建物（1006‐SH）は、中層の埋没後に建てられている。1031‐NRの南東部（F11区）では、小型器台・小型丸底壺を中心とする大量の土師器がまとまって出土している（巻頭図版1、図版8）。出土地点は竪穴建物群と近接した位置にあり、河岸から一括投棄されたものと考えられる。

下層は河底から0.8 mほど堆積している黄灰色シルト層および黒褐色粘土層である。土師器のほか、弥生土器を比較的多く含んでいる。遺構掘削段階での中層と下層の判別は難しく、河底付近を除くと、取り上げ段階で両者の遺物が混ざっている可能性がある。

1031‐NRは河幅に比してかなり深い河道である。一見するとかなりの水量があったように感じられるが、周囲に河の氾濫による堆積層は存在せず、調査地一帯での流水がこの幅を越えることはほぼ無かったようである。この河の深い形状は安定した継続的な流水による浸食によって形成されたと考えられる。

1031‐NRの出土遺物はコンテナ約150箱分に及び、今回の調査で得られた遺物の大半を占めている。そのうちの9割以上が土師器である。土師器の多くは河からの出土ながら表面の磨滅が少なく、出土地点のすぐ周辺で、使用され廃棄されたものと想定される。中層～下層からは弥生土器も一定量出土しているが、こちらは全体に表面の磨滅の度合いが激しく、時間的・距離的な経過が感じられる。

1031‐NRは上層の出土遺物から、古墳時代中期までには埋没したと推測される。上限については弥生時代前期～後期の土器が出土しており、弥生時代に遡ると考えられるが正確な年代は不明である。



1．2.5Y4/1　黄灰色粘質土
2．10YR4/1　褐色粘土・細砂
3．10YR6/3　にぶい黄橙色シルト
4．5Y3/2　オリーブ黒色粘土
5．2.5Y6/3　にぶい黄色細砂～砂
6．7.5Y5/1　灰色シルト
7．2.5Y7/2　灰黄色砂
8．10Y4/1　灰色シルト
9．10YR5/2　灰黄褐色シルト
10．10Y7/1　灰白色細砂～シルト
11．5Y4/2　灰オリーブ色シルト
12．2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト
13．2.5Y4/2　暗灰黄色シルト
14．2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト
15．2.5GY3/1　暗オリーブ灰色粘土
16．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色シルト
17．5BG3/1　暗青灰色粘土
18．7.5Y8/1　灰白色砂
19．7.5GY4/1　暗緑灰色微砂
20．10Y3/1　オリーブ黒色シルト質粘土
21．2.5Y4/2　暗灰黄色粘土
22．5GY2/1　オリーブ黒色粘土（微砂混じり）
23．7.5Y3/1　オリーブ黒色粘土（微砂混じり）
24．5GY3/1　オリーブ灰色シルト質粘土
25．10Y4/1　灰色シルト（有機物を多く含む）
26．2.5Y4/1　黄灰色シルト
27．7.5Y3/1　オリーブ黒色シルト質粘土

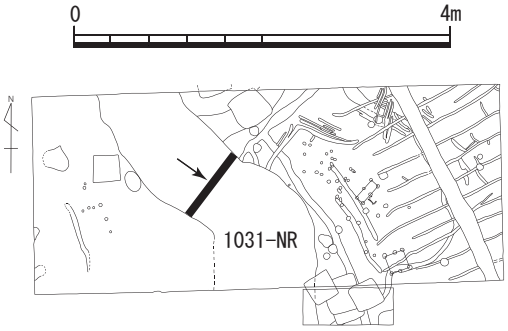


図11　自然河道1031‐NR土層断面（S＝1/80）

竪穴建物（1004・1005・1006・1036・1037・1041・1150・1151‐SH）

８棟の竪穴建物が存在する。1041‐SH のみが河の西側に位置しており、他の建物は全て東側に位置する。いずれも河岸に近接した位置に建てられている。東岸の竪穴建物は調査区北側の２棟（1036・1037‐SH）と南側の５棟（1004・1005・1006・1150・1151‐SH）に分かれる。この両者の間には溝や土坑、ピットなどの遺構が分布している。1037・1150‐SH はそれぞれ調査区の北端・南端で遺構の一部を確認したのみであり、調査区外にさらに別の建物が広がっている可能性もある。

建物の方位は西岸の 1041‐SH と東岸の 1150‐SH がほぼ正方位に近く、他が北で約 30°西に振れる。東岸南側の一群のうち、1004・1005・1006・1151‐SH は重複関係を有する。構築の順序は古いほうから 1151 → 1005 → 1004・1006 となる。これらの建物の向きは似通っており、ほぼ同一地点での建て替えである可能性がある。1004・1006‐SH は直接の重複はなく、出土遺物からも前後関係を明確にしがたい。なお、1004‐SH の掘方下には 1005‐SH よりも新しい遺構である 1154‐SK が存在する。構築順序は 1005‐SH → 1154‐SK → 1004‐SH となる。

1004‐SH

東岸南側の一群のうち、東に位置する竪穴建物である。遺構の重複関係から、建物群のなかで 1006‐SH と並んでもっとも新しいと判断できる。出土遺物から、時期は古墳時代前期（布留１式）である。壁溝内からはシイ属の炭化した子葉の破片が出土している。

平面形は一辺 4.3 × 4.3 mの方形である。床面までの深さは最大で約 0.2 mであるが、全体の半分以上の範囲で中世耕作溝の掘削が床面まで及んでいる。四周の壁際には幅約 0.2 ～ 0.3 mの壁溝が巡っている。壁溝の深さは床面から約 0.15 mである。

柱穴は主柱と考えられる 4 本が存在する。柱穴はいずれも直径約 0.3 mの円形である。柱間の距離は南北方向が 1.5 m、東西方向が 1.9 mと東西にやや長い。柱掘方の深さはもっとも浅い北西の柱で床面から約 0.4 m、もっとも深い北東の柱で床面から約 0.7 mを測る。

建物の中心からやや北西に寄った位置には直径約 0.3 m、深さ約 0.3 mのピットが存在する。炭を多く含み、周囲が焼土化していることから炉跡であると考えられる。

床面は黄色系粘土混じりの暗褐色～オリーブ黄色砂質土で整地されている。建物の中央、ちょうど柱の内側にあたる範囲には灰白色砂礫が薄く敷かれている。ここには少量の炭粒が混じる。建物中央部に薄く砂礫を敷く状況は 1036‐SH でも確認している。建物構築時の掘方は床面より 0.10 ～ 0.15 m深い。まず建物の範囲を方形に大きく掘りくぼめた後に、いわゆる貼床を施して仕上げを行っているようである。床面下の掘削度合いに若干の差はあるものの、この点は今回確認した竪穴建物全体に共通している。

1005‐SH

東岸南側の一群のうち、中央に位置する竪穴建物である。遺構の重複関係から、1004・1006‐SH よりも古く、1151‐SH よりも新しい建物であると判断できる。床面よりも上の埋土からは小型丸底鉢が複数出土しており、とくに壁際に多く見られた。これらは建物の建て替え時の埋め戻し時に混入した可能性が考えられる。床面下からはミニチュア土器が出土している。出土遺物から、時期は

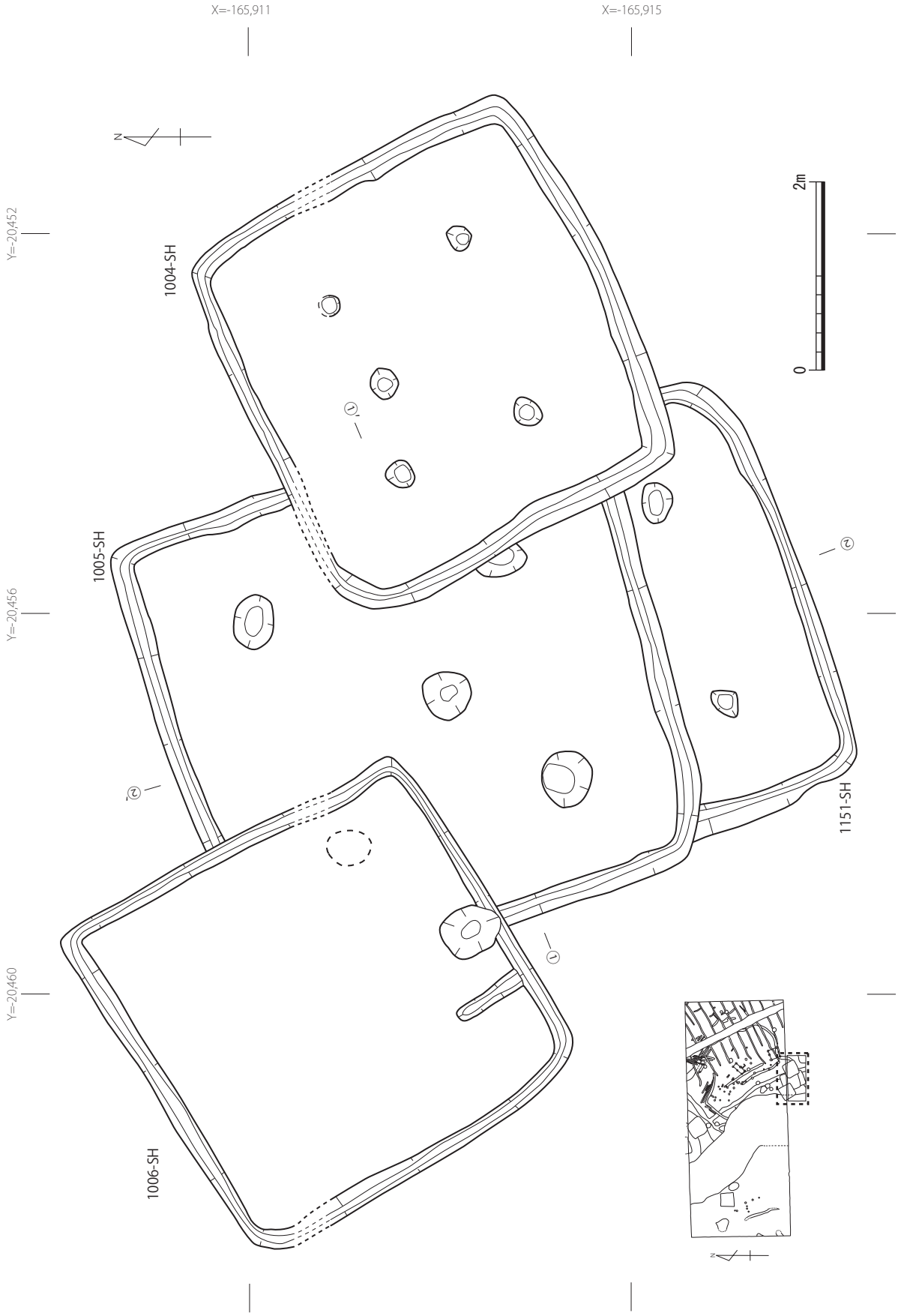


図 12　1004・1005・1006・1151 - SH 平面図（S = 1/60。土層断面は図 13）

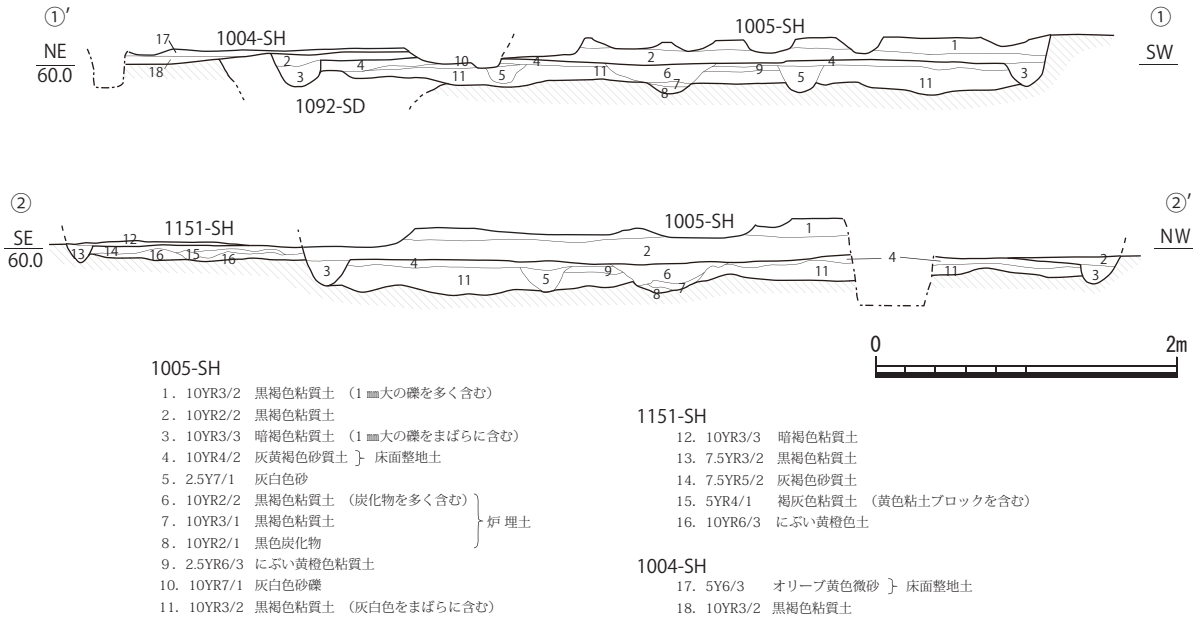


図 13　1004・1005・1151 - SH 断面図（S ＝ 1/50。断面位置は図 12）

古墳時代前期（布留 1 式）であると考えられる。

平面形は一辺 5.1 × 5.1 mの方形である。東岸南側の一群ではもっとも大きい。床面までの深さは最大で約 0.3 mを測る。北西隅を 1006 - SH に、南東隅を 1004 - SH および 1154 - SK によって削られているが、他の竪穴建物よりも深いため床面や壁溝の状況を確認することができた。

四周の壁際には幅約 0.2 ～ 0.3 mの壁溝が巡っている。壁溝の深さは床面から約 0.15 ～ 0.2 mで、南側がやや深い。北半部には壁溝の内側に沿ってコの字状に、壁溝よりもやや浅い溝が巡っている。これは北半の壁溝の拡張を意図した溝である可能性が考えられる。

柱穴は 4 本あり、平面形は直径約 0.4 ～ 0.5 mの不整円形である。柱間距離はいずれも約 2.4 mを測る。柱掘方の深さは約 0.6 ～ 0.7 mである。

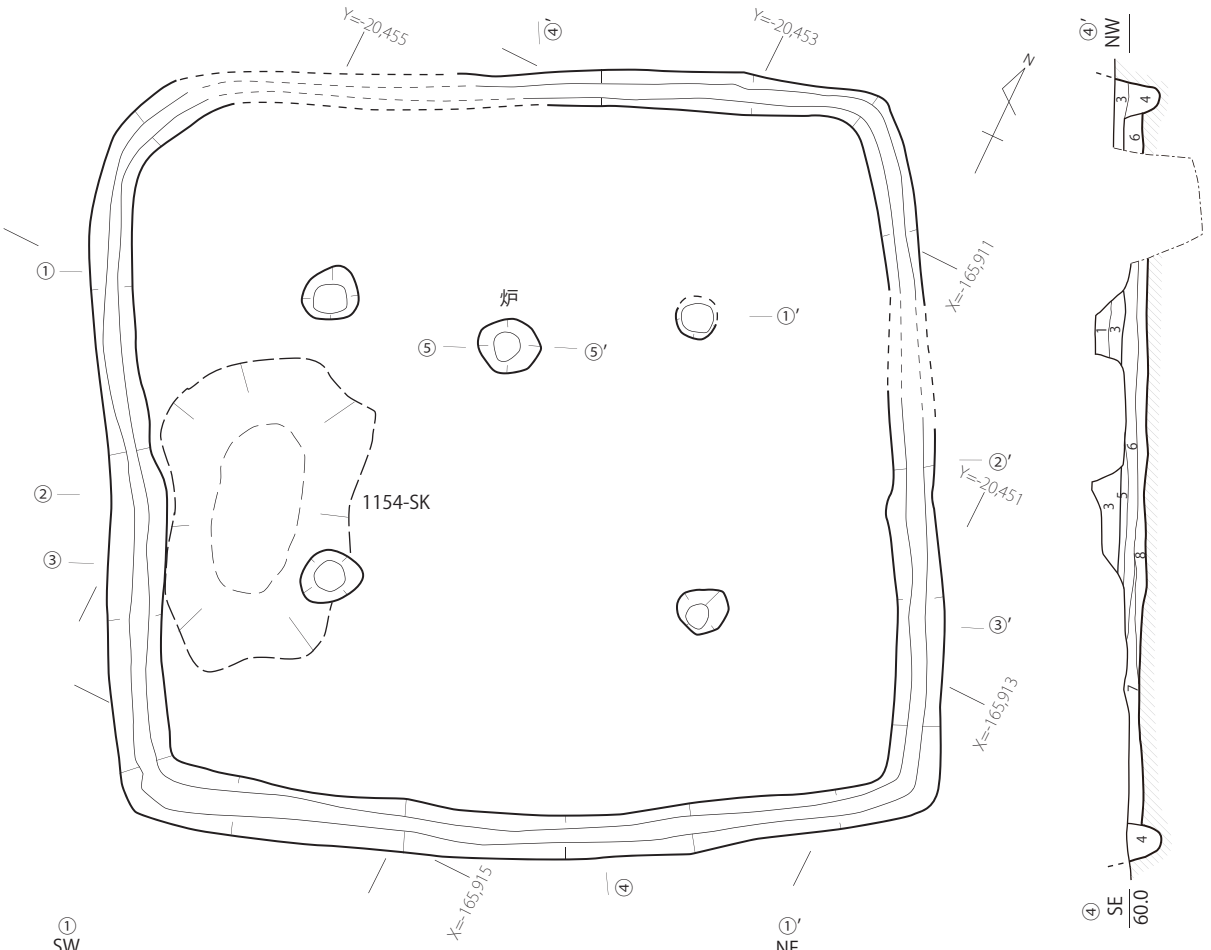
建物の中心からわずかに南東に寄った位置には直径約 0.3 m、深さ約 0.3 mのピットが存在する。炭を多く含み、周囲が焼土化しており、炉跡であると考えられる。

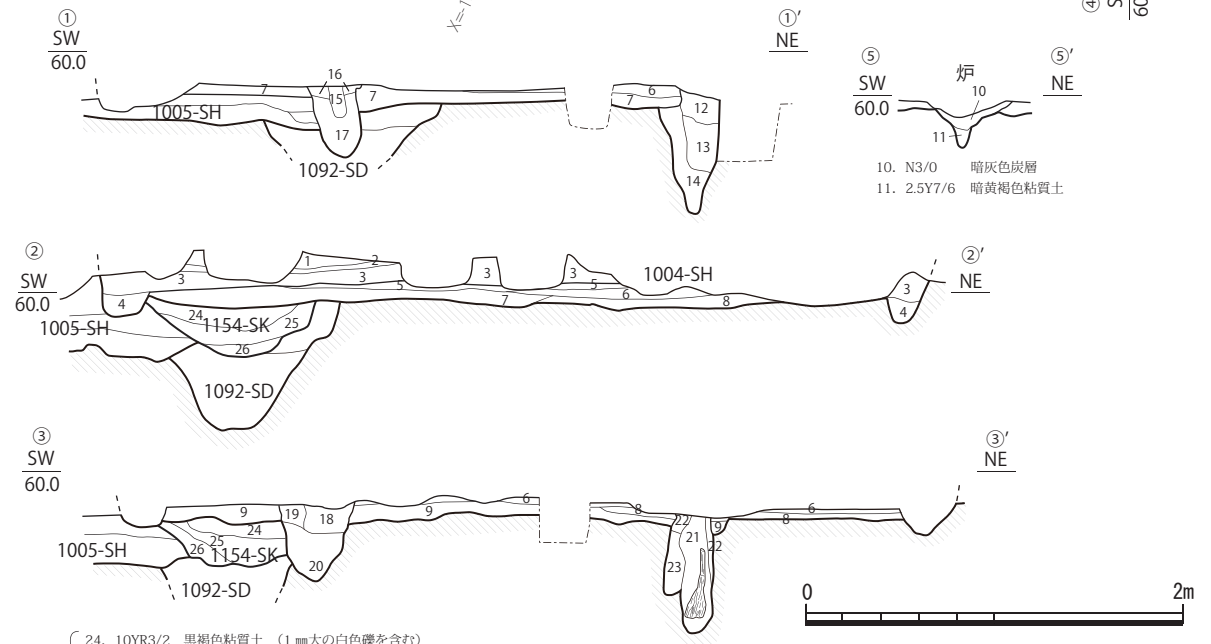
床面は少量の粘土ブロックを含む灰黄褐色砂質土によって整形されている。建物中央付近にはまばらに炭化物が含まれている。床面下には幅約 0.2 ～ 0.35 m、深さ約 0.2 mの暗渠が構築されている。図 15 には、床面上の柱穴や壁溝と一緒に暗渠の範囲を示している。暗渠は 4 本柱の内側にロの字状に巡り、そこから東と南西に派生する溝からなる。溝の内部には灰白色の細砂が堆積している。中央のロの字部分は砂のみが存在するが、東および南西に派生する溝にはそれに若干の褐色土が混じる。暗渠は床面の整地土によって完全に覆われている。

構築時の掘方は床面から約 0.1 ～ 0.3 mの深さで、北側が浅い傾向にある。断面の観察から建物の構築は、全体の掘削→盛土による大まかな床面整形→暗渠の掘削→床面整形と柱穴の掘削の順で行われたことがうかがえる。

1006 - SH

東岸南側の一群のうち、西に位置する竪穴建物である。遺構の重複関係から、建物群のなかで



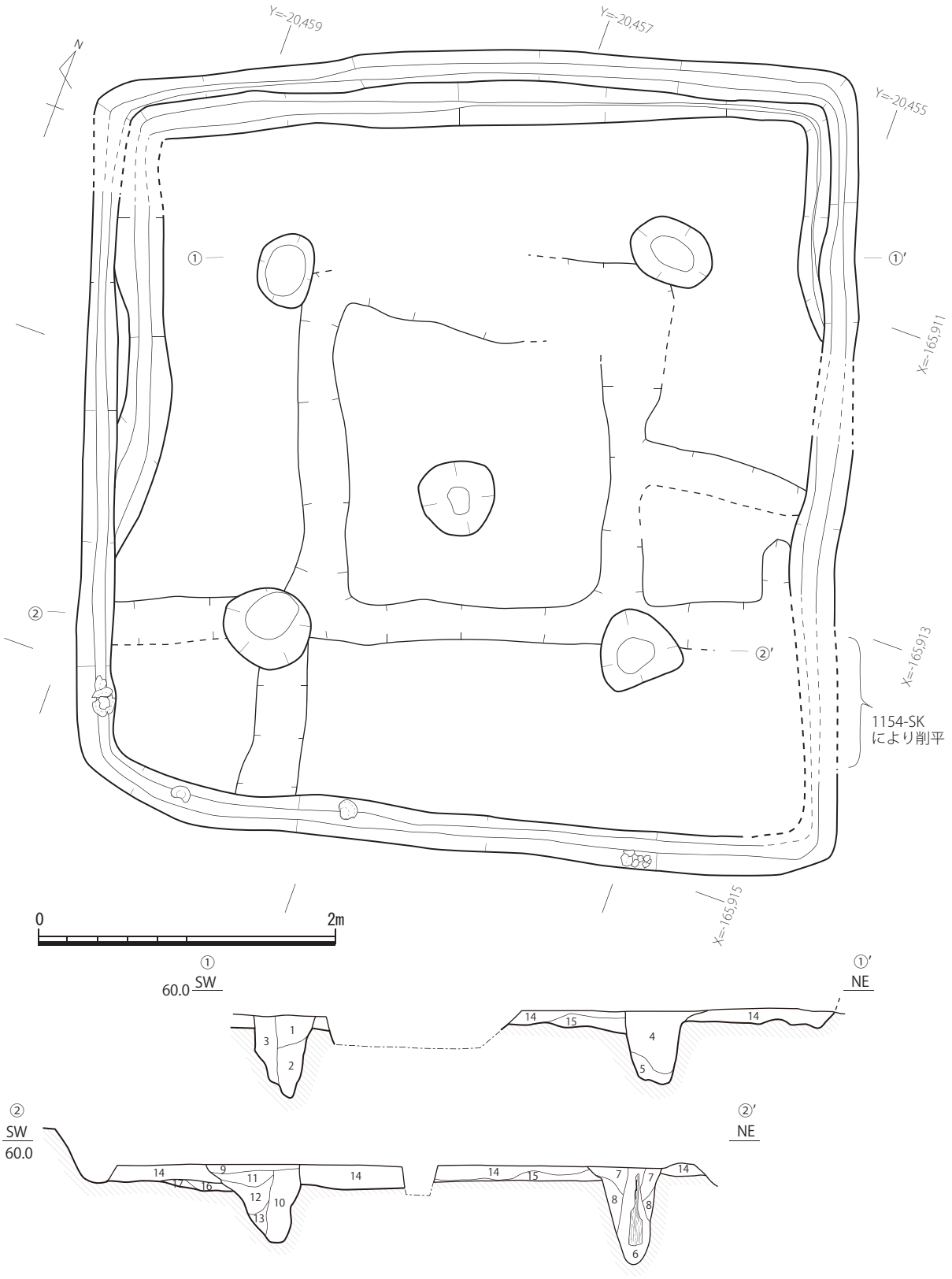


1154-SK
- 24. 10YR3/2 黒褐色粘質土 （1 ㎜大の白色礫を含む）
- 25. 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 26. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 （25 より粘性が強い）

1004-SH
- 1．10YR4/2 灰黄褐色土 （1 ㎜大の礫をまばらに含む）
- 2．10YR5/1 褐灰色土 （炭化物を含む）
- 3．7.5YR4/1 褐灰色砂質土
- 4．7.5YR5/1・5YR5/2 灰褐色微砂まじり褐灰色砂質土
- 5．2.5Y7/1 灰白色砂質土 （0.5 ～ 1 ㎜大の礫を含む）｝ 床面整地土
- 6．5Y6/3 オリーブ黄色微砂質土
- 7．2.5Y3/2 黒褐色砂質土 （炭化物、1 ～ 3 ㎜大の礫を含む）
- 8．10YR3/2 黒褐色粘質土
- 9．10YR3/2 黒褐色粘質土

1004-SH 柱穴埋土
- 12. 10YR6/1 褐灰色砂質土 （炭化物を多く含む）
- 13. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 （炭化物をまばらに含む）
- 14. 10YR5/1・3/1 褐灰色粘質土（黒褐色粘土ブロックを含む）
- 15. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
- 16. 7.5Y6/1 灰色粘土
- 17. 5Y5/1・10YR5/2 灰黄褐色粘土まじり灰色砂質土
- 18. 10YR4/1 褐灰色土 （0.5 ㎜大の礫を含む）
- 19. 7.5YR4/1 褐灰色砂質土 （0.5 ～ 1 ㎜大の礫を含む）
- 20. 10YR4/1・10YR5/2 褐灰色砂質土（灰黄褐色粘土ブロック含む）
- 21. 10YR4/2 灰黄褐色土
- 22. 2.5Y7/2・2.5Y4/1 黄灰色混じり灰黄色粘質土
- 23. N5/0 灰色粘土

図 14 1004 - SH 平面・断面図（S ＝ 1/40）



1．10YR5/1　褐灰色砂質土
2．2.5Y5/3・N4/0　　黄褐色まじり灰色粘土
3．10YR4/1・2.5Y2/1　黒色粘土まじり褐灰色粘質土
4．10YR4/1・4/4　　褐色まじり褐灰色砂質土　（0.5 ～ 1 ㎜大の礫を少量含む）
5．2.5Y4/2　暗灰黄色微砂まじり粘土
6．7.5YR4/1　褐灰色砂質土
7．10YR4/2　灰黄褐色粘質土
8．5Y5/1　　灰色粘土
9．5Y6/3　　オリーブ黄色砂質土
10．5Y6/1・7.5YR3/1　黒褐色粘土まじり灰色粘土　（1 ㎜大の礫を含む）
11．10YR4/1　褐灰色砂質土
12．10YR3/1・4/4　　褐色まじり黒褐色粘質土　（0.5 ～ 1 ㎜大の礫をまばらに含む）
13．7.5YR3/1　黒褐色砂質粘土
14．2.5Y6/3　にぶい黄色粘質土
15．10YR3/2　黒褐色砂質土
16．2.5Y7/2　灰黄色細砂
17．10YR4/1　褐灰色粘質土
1 ～ 13：柱穴埋土

図 15　1005 - SH 平面・断面図（S ＝ 1/40）

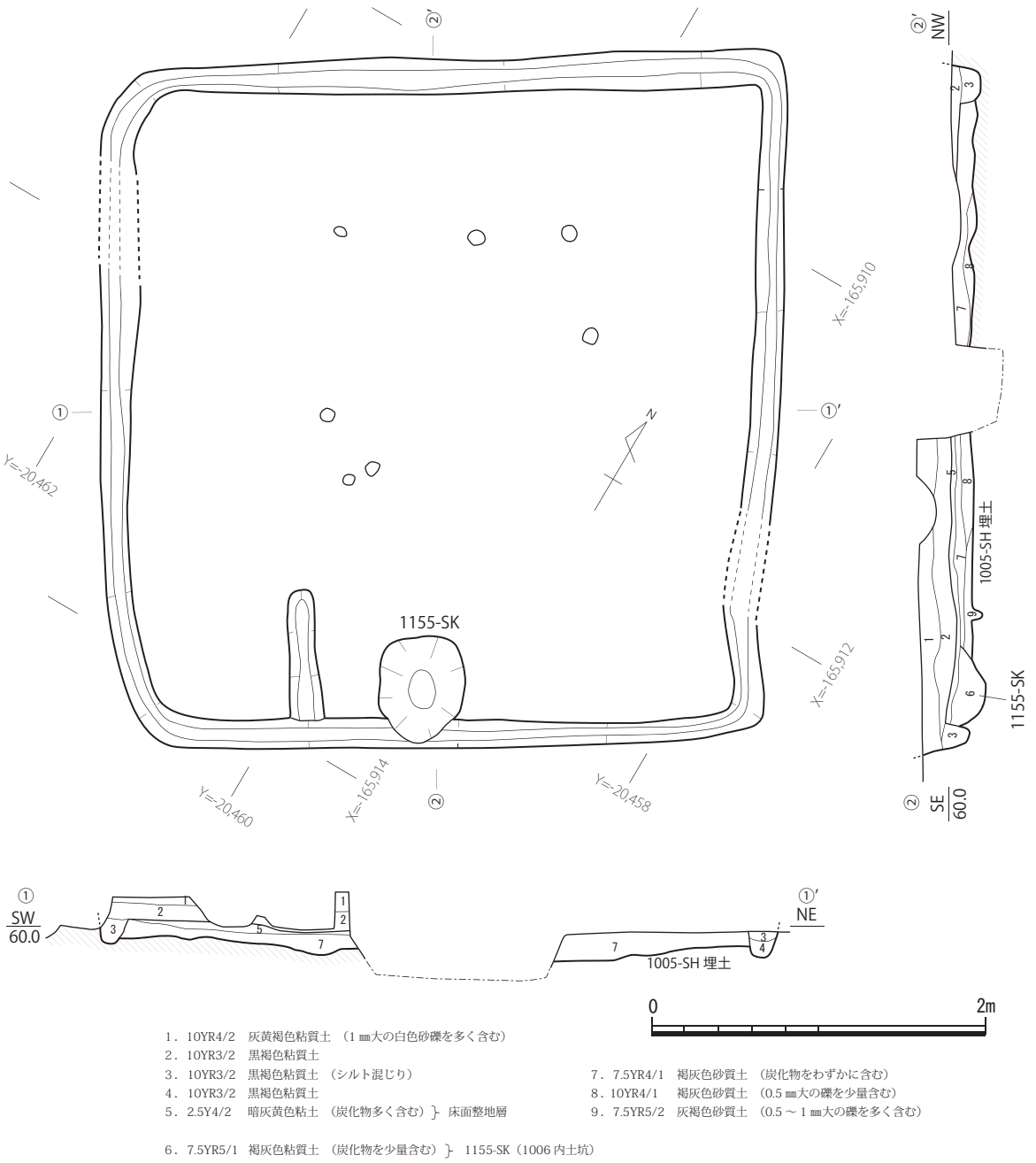
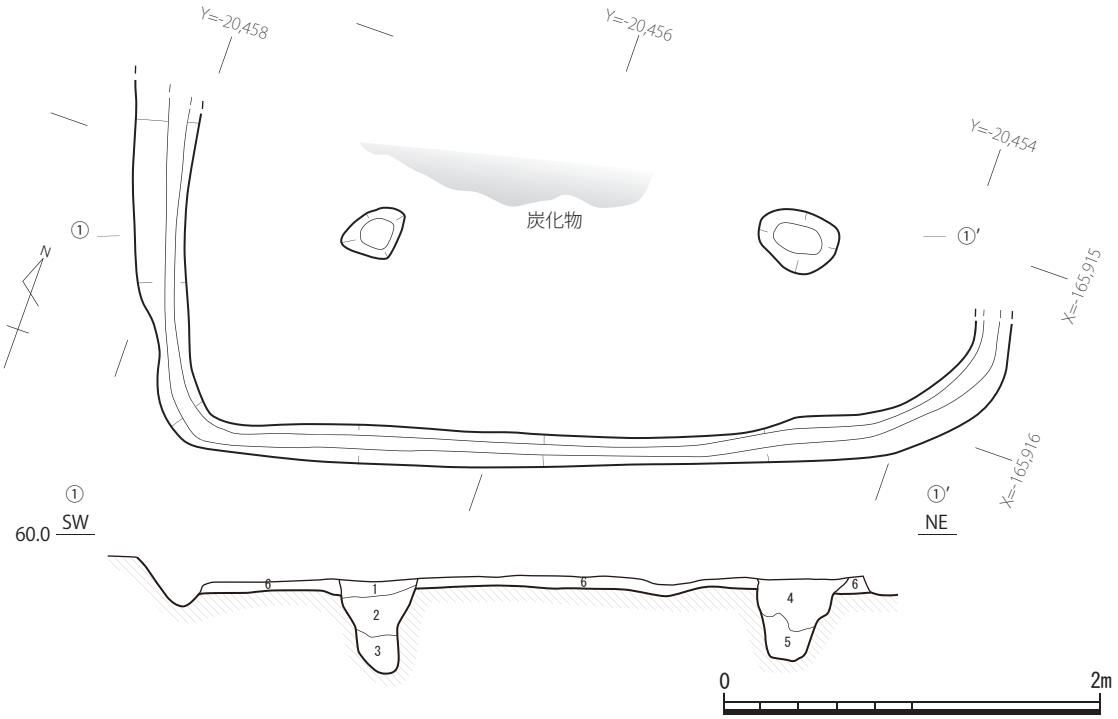


図 16　1006 - SH 平面・断面図（S ＝ 1/40）

1004 - SH と並んでもっとも新しいと判断できる。1006 - SH の西端部分は自然河道 1031 - NR の埋土上にあたっている。1006 - SH は自然河道がある程度埋没した段階（＝上層の堆積段階か）に構築された建物である。建物埋土や床面上の 1155-SK から出土した遺物から、時期は古墳時代前期（布留 1 式）であると考えられる。また、床面下からはミニチュア土器が出土している。

平面形は一辺 4.1 × 4.1 mの方形である。床面までの深さは最大で約 0.2 mである。四周の壁際には幅約 0.15 mの壁溝が巡っている。壁溝の深さは床面から約 0.15 mである。

主柱となるような柱穴は存在しない。調査当初、床面上で柱穴に相当すると考えられるピットを検出して作業を進めていたが、のちにこれは誤認であることが明らかとなった。この他、床面上では直径 0.1 m未満の小ピットを 7 基確認している。これが建物本体と結び付く構築物であるかは定かでは



1．10YR4/1・8/4　褐灰色砂質土　（浅黄色粘土ブロック、炭化物をわずかに含む）
2．10YR5/1・2/2・8/4　褐灰色土（浅黄橙色・黒褐色粘土ブロックを含む）
3．2.5Y4/2　暗灰黄色粘土
4．10YR5/1・6/2　灰黄褐色まじり褐灰色砂質土
5．5Y6/1　灰色砂質粘土
6．5YR4/1　褐灰色粘質土　（黄色粘土ブロックを少量含む）

図 17　1151 - SH 平面・断面図（S = 1/40）

ないが、他の竪穴建物とは異なる構造であった可能性が高い。

床面は黄色系粘土混じりの暗灰黄色の粘質土で整地されている。床面にはまばらに炭粒が混ざっており、とくに南辺中央付近に多い。床面上、南辺西寄りの位置に壁溝に垂直に取り付く浅い溝が掘られている。深さは 0.05 mと非常に浅い。排水を兼ねた間仕切り溝であった可能性がある。床面下の掘削は 0.1 ～ 0.15 mで、中央部がやや深い。

床面下、南の辺中央には 0.5 × 0.6 m大の円形土坑 1155 - SK が存在する。1155 - SK からは土師器の高坏、小型丸底鉢が出土している。遺構の具体的な機能は不明であるが、建物の構築過程で掘られた土坑である。

1151 - SH

東岸南側の一群のうち、南に位置する竪穴建物である。遺構の重複関係から、建物群のなかでもっとも古い建物である。遺構の時期は出土遺物から、古墳時代前期（布留 1 式）であると判断できる。方形の竪穴建物であったと考えられるが、北側は 1005 - SH によって破壊されており、南半部のみが残されていた。

遺構の規模は東西 4.6 m×南北 1.8 m以上である。建物の向きは 1005 - SH とほぼ同じである。床面までの深さは最大でも約 0.1 mで、他の建物と比較して浅い。壁際には幅約 0.2 m、床面からの深さ約 0.15 mの壁溝が巡る。西側の壁溝は上部の幅がやや広がっている。他の建物同様、四周を巡っていたと推測されるが、壁溝底よりも 1005 - SH の掘方のほうが深く、詳細は不明である。

柱は主柱と考えられる柱穴 2 基を確認している。柱掘方の深さは床面から約 0.5 mである。

床面は灰褐色砂質土で整地されている。柱と柱の間のやや北、建物の中心と想定される範囲には床

面上にごく薄く炭化物が広がっている。

構築時の掘方は床面から約 0.1 mの深さである。

1150 - SH

東岸南側の竪穴建物群のうち、やや南東に離れた拡張区の南東隅において確認した竪穴建物である。構造から竪穴建物の北西部分にあたると考えられる。他の竪穴建物との重複関係はないが、壁溝埋土から古墳時代前期の土師器・小型丸底壺が出土している。建物の軸は北西の一群とは異なり、ほぼ正方位である。北西角の屈曲はやや隅丸気味である。

遺構の検出規模は東西約 2.2 m×南北約 1.7 mである。床面までの深さは約 0.15 mである。壁際には幅約 0.2 m、床面からの深さ約 0.25 mの壁溝が巡る。

北西隅から約 1.5 m内側で直径約 0.3 m、深さ約 0.4 mの円形ピットを確認している。柱根は残っていなかったものの、配置からこのピットが主柱であると推測される。

床面は褐灰色粘質土である。他の竪穴建物では掘方を掘削し、大まかな埋め戻しによる床面の構築後、厚さ 5 ㎝未満の薄い仕上げの層を敷いているが、1150 - SH では掘方掘削後の埋め戻し土である灰褐色粘質土がそのまま床面を形成している。掘方の深さは床面から約 0.2 mである。

建物の北西隅、柱穴と壁溝の間に位置には、一辺約 0.4 mの不整形な褐色混じりの灰白色粘土塊が床面直上に据えられている。粘土塊の平面形はおおむね方形であるが、北東辺が一部丸く抉れている。粘土塊は厚さ最大約 0.05 mで中央部がやや高く、上面は全体に凹凸を有している。粘土塊は貯蔵していたものが置き去られたのか、この場所で何らかの台として用いられていたものであるのか、定かではない。なお床面形成土には、この粘土塊と同様の灰白色粘土のブロックがまばらに含まれている。

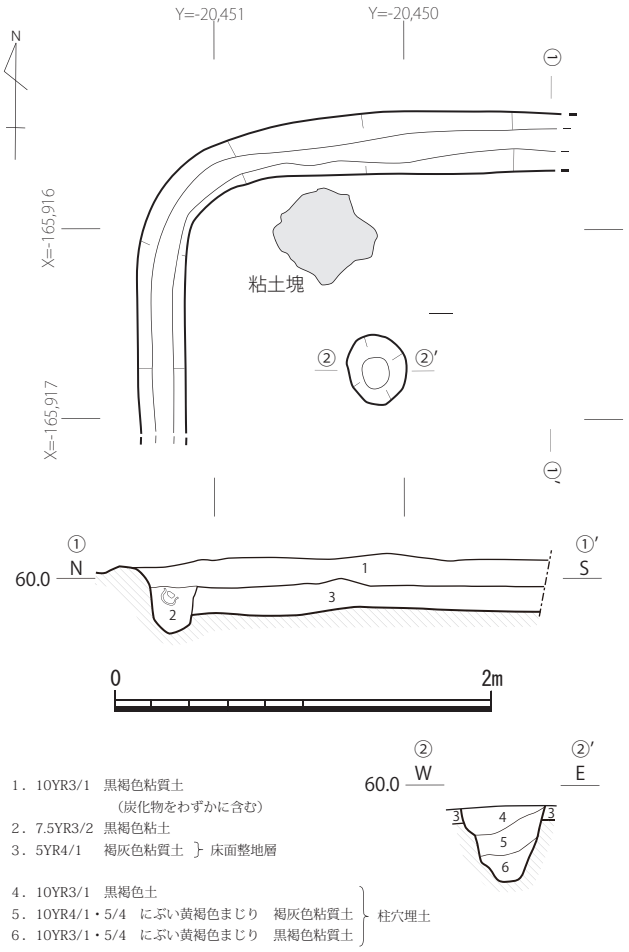


図 18　1150 - SH 平面・断面図（S = 1/40）

1036 - SH

自然河道の東岸北側に位置する竪穴建物のひとつである。床面より上の埋土からは土師器が複数出土しており、時期は古墳時代前期（布留 1 式）と考えられる。出土土器の大半は接合関係をもたない破片資料で、竪穴の埋め戻し時に投棄された可能性が高い。埋土上層からは炭化したスモモの核が 1 点出土している。建物は自然河道 1031 - NR と直交する溝 1152 - SD の埋没後に建てられ

ている。1036‐SHの大部分の範囲は、この1152‐SD埋土（微砂・シルトを主とする）上にあり、遺構の基盤となる層は他の場所より軟弱である。

平面形は一辺最大5.2 × 5.3 mの方形であるが、南西辺は中央が膨らむややいびつな形状となっている。また、南東辺より北西辺が短く、全体としてやや台形状を呈している。床面までの深さは最大約0.3 mであるが、遺構の西半は中世耕作溝の掘削が床面下まで及んでいる部分が多い。四周の壁際には幅約0.2 ～ 0.3 mの壁溝が巡っている。壁溝の深さは床面から約0.15 ～ 0.20 mである。壁溝のうち、東隅の付近は溝の形状が明瞭ではない。建物の東隅には幅約0.3 ～ 0.4 mの溝が建物に取り付くような形で存在している。この溝の深さは壁溝の深さとほぼ同一である。壁溝から建物外へとつながる溝である可能性があるが、耕作溝で寸断されており、両者の関係は明らかにできていない。

床面は上・中・下の三面が存在する。床面は厚さ約２～３㎝の粘質土層を貼り直して形成されている。いずれの面においても建物中央部、主柱より内側の範囲に方形に薄く炭が広がっている。床の貼り直しが行われても建物内の使い方に変化は少なかった可能性が考えられる。また、この範囲には炭のほかにやや粗い砂も多いことを確認している。

柱穴は主柱と考えられる４本が存在する。柱穴の位置が明確になったのは下層床面の検出時である。上層床面検出時にも柱穴の検出を行っているが、これらは誤認であることが後に明らかになった。柱穴はいずれも直径約0.2 mの円形である。土層断面から、最初に建物掘方を掘削し、床面を整形するよりも前に柱を建てたことがうかがえる。柱穴の深さは床面から約0.8 mで、他の竪穴建物よりも深い。北西の柱穴の底からは礎板と考えられる平坦な木板が出土している。

下層床面上には北東辺の壁溝に直交して取り付く溝が掘られている。溝は長さ約0.8 m、幅約0.25 m、深さ約0.05 mである。建物内の間仕切り溝である可能性が考えられる。

建物構築時の掘方は床面から約0.20 ～ 0.35 mの深さである。他の建物と比べて最初の掘削底ラインが不安定であるが、これは遺構の基盤となる層が軟弱であったことによると考えられる。

1037‐SH

調査区北端で検出した、自然河道の東岸北側に位置する竪穴建物である。床面より上の埋土から土師器が出土しており、時期は古墳時代前期と考えられる。方形の竪穴建物の南半部分であると考えられる。

遺構の規模は東西約5.0 m×南北約2.3 m以上である。床面までの深さは約0.15 mである。壁際には幅約0.2 m、床面からの深さ約0.2 mの壁溝が巡る。

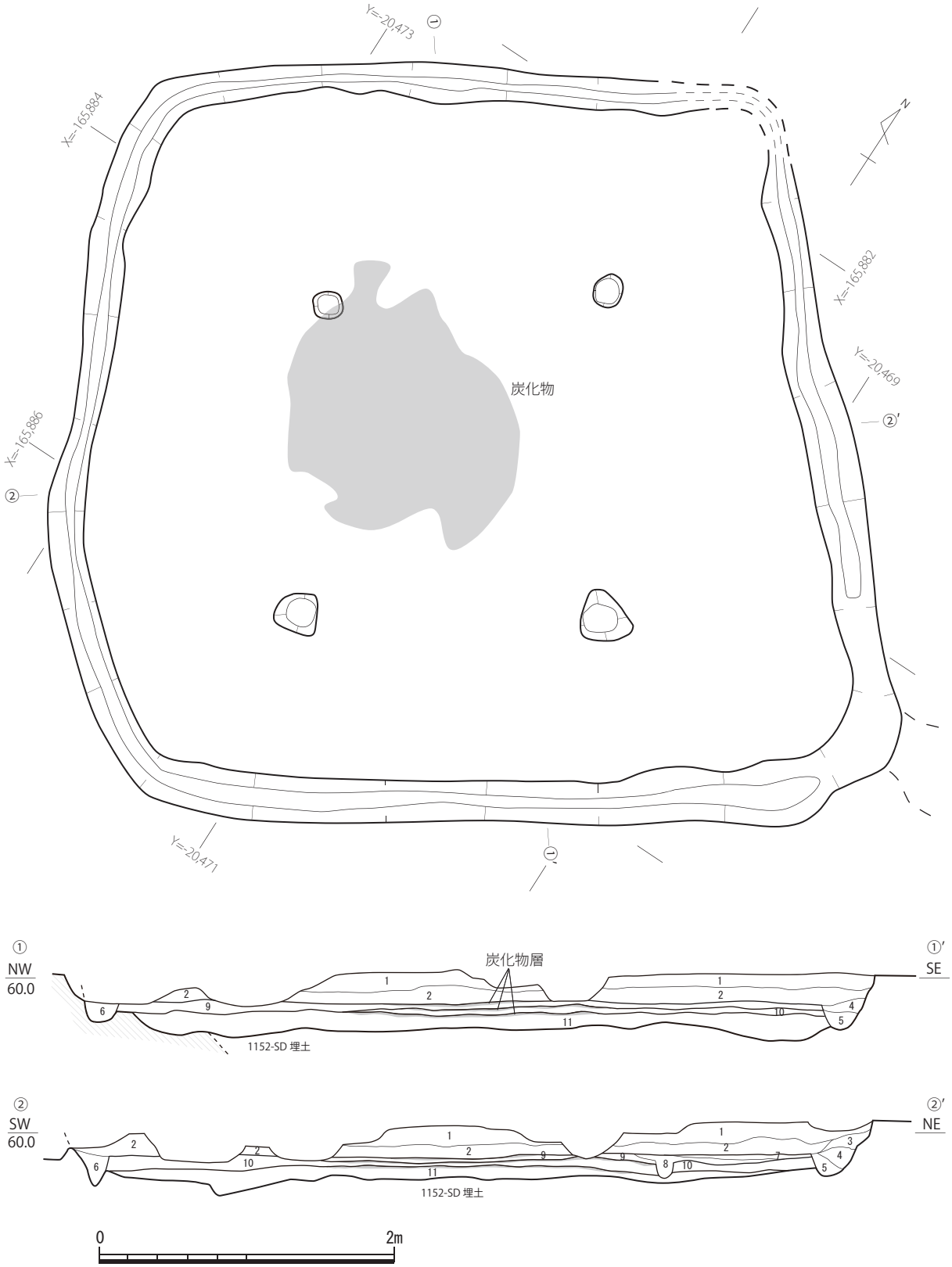
柱穴は確認されていない。調査区外に存在する、あるいは調査区排水溝掘削時に消失してしまった可能性もある。

床面は黄・灰色粘土ブロックまじりの褐灰色砂質土で整地されている。また、全体に炭化物をまばらに含み、建物南西隅には他より多く見られる。

建物構築時の掘方は床面から約0.2 ～ 0.3 mの深さで、東側がやや深い傾向にある。

1041‐SH

自然河道の西岸に位置する竪穴建物である。西岸で存在が明確な竪穴建物はこの1041‐SHのみである。東岸の1036・1037‐SHのちょうど対岸に位置するが、建物の軸は違っており、ほぼ正方



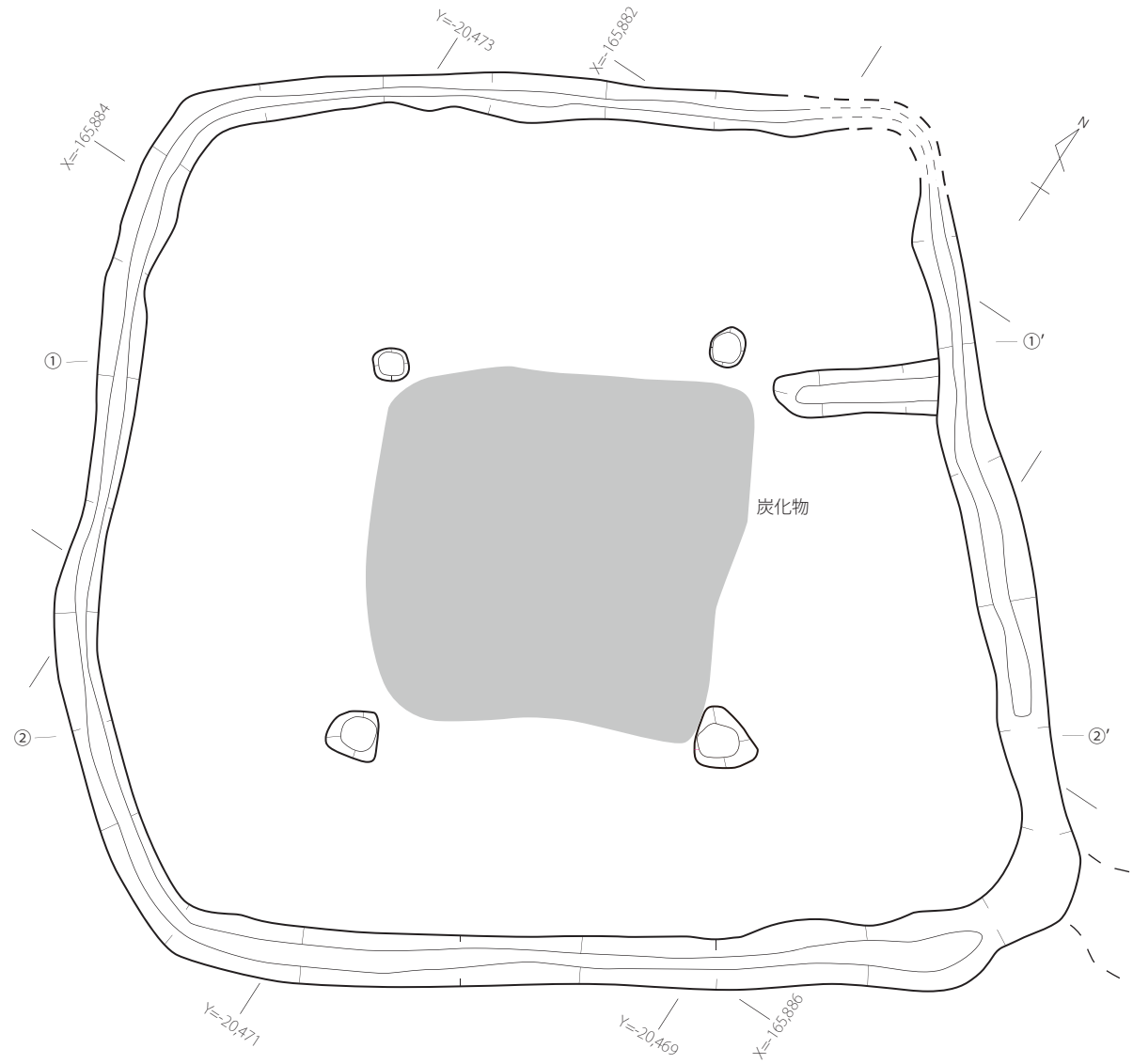
1．7.5YR7/1　明褐灰色微砂質土　（細砂をまばらに含む）
2．10YR6/2　褐色粘土混じり灰黄褐色砂質土
3．7.5.YR6/1　褐灰色粘質土　（炭化物をまばらに含む）
4．10YR5/1　灰白色微砂混じり褐灰色粘砂土
5．7.5YR5/1　褐灰色砂質土
6．5YR7/2　明褐灰色粘質土

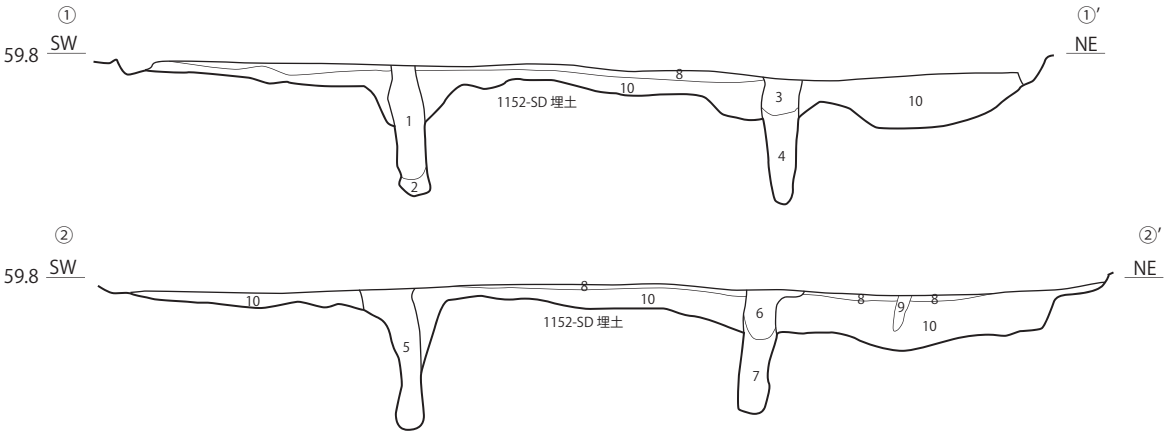
上層床面
7．10YR7/2　にぶい黄橙色粘質土
8．2.5Y8/1　灰白色砂～細砂
9．10YR6/2・10YR6/1　褐灰色まじり灰黄褐色粘質土（しまりがやや強い）

中層床面
10．2.5Y6/2・2.5Y8/3　淡黄色まじり灰黄色砂質土

下層床面
11．2.5Y7/2・10YR6/1　褐灰色まじり灰黄色微砂質土

図 19　1036 - SH（上層床面）平面・断面図（S ＝ 1/40）



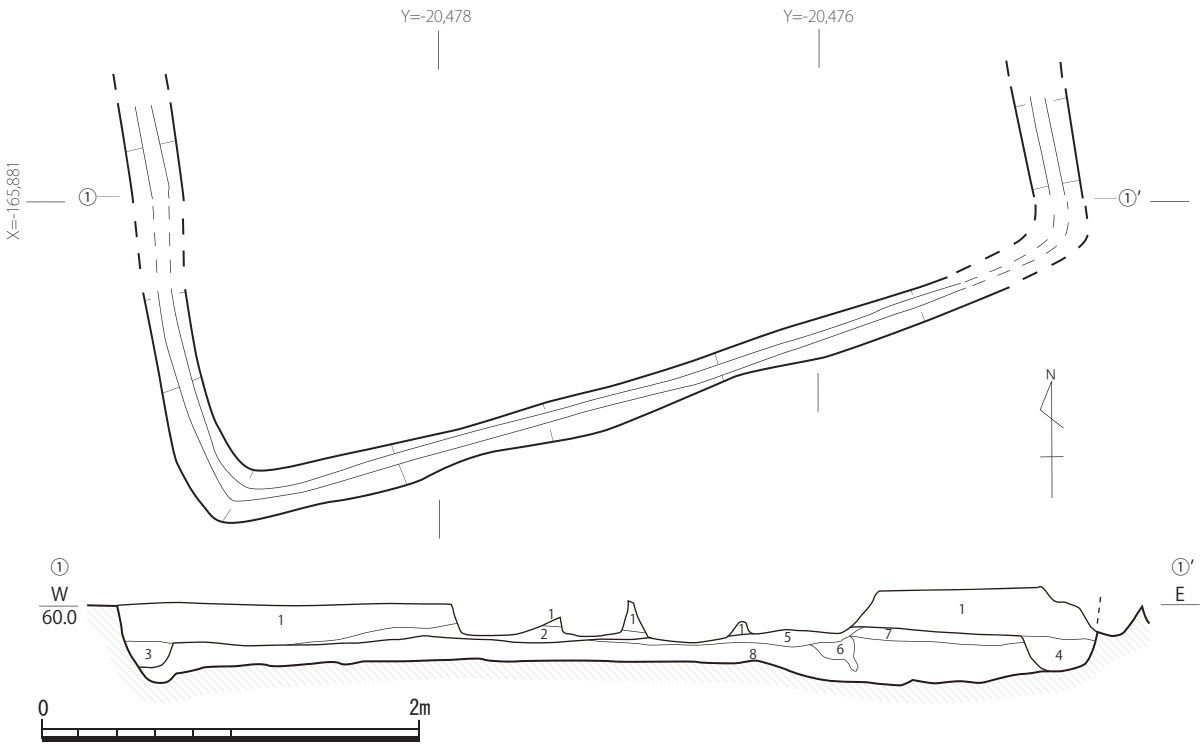


0　2m

柱穴埋土
1．N6/0・2.5Y6/1　黄色混じり灰色砂質土
2．2.5Y5/2　暗黄灰色微砂
3．10BG4/1　暗青灰シルト
4．2.5Y6/1　黄灰色粘質土
5．5Y5/1・7.5YR4/1　褐灰色混じり灰色砂質土
6．2.5Y7/1　灰白色砂～微砂
7．N5/0　灰色微砂～シルト　（下部ほどシルト質）

下層床面
8．2.5Y7/2・10YR6/1　褐灰色混じり灰黄色微砂質土　（しまり強い）
9．2.5Y6/1　黄灰色粘質土
10．2.5Y7/2　灰黄色微砂質土

図 20　1036 - SH（下層床面）平面・断面図（S ＝ 1/40）



1．7.5YR6/1　褐灰色砂質土
2．7.5YR4/1　褐灰色微砂質土
3．10YR6/2　灰黄褐色砂質土
4．2.5Y6/1　黄灰色砂質土　（黄色粘土ブロックをまばらに含む）
5．10YR5/1　灰色混じり褐灰色粘質土　（黄色粘土ブロック、炭化物を多く含む）　床面整地層
6．2.5Y7/1　灰白砂
7．10YR5/1　褐灰色粘質土
8．10YR4/1　褐灰色砂質～粘質土　（褐色粘土ブロックを含む。炭化物を微かに含む）

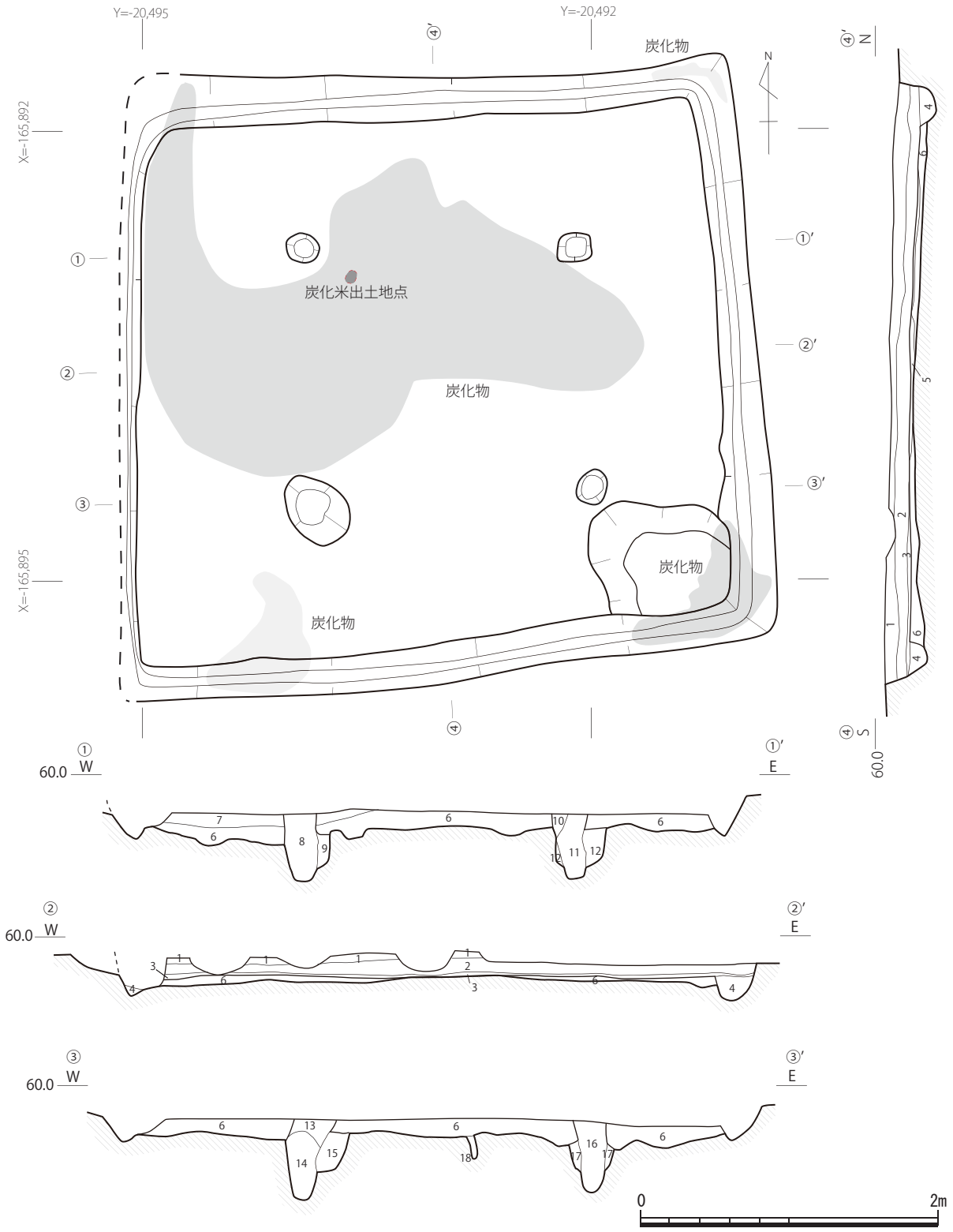
図 21　1037 - SH 平面・断面図（S = 1/40）

位を向いている。出土遺物には土師器があり、古墳時代前期の遺構であると考えられる。

平面形は一辺約 4.4 × 4.2 mの方形である。床面までの深さは約 0.15 mで、建物の西端は中世耕作溝によって削平されており、東西長は推定値である。建物の四周には壁溝が巡る。壁溝は幅約 0.25 ～ 0.3 m、深さ約 0.2 mである。建物の南東隅の直径約 0.6 mの範囲は床面から土坑状に 5 cmほどくぼんでいる。

柱穴は 4 本あり、平面形は直径約 0.25 ～ 0.4 mの不整円形である。柱間の距離は約 1.6 ～ 1.8 mを測る。柱掘方の深さは床面から約 0.5 mである。1036 - SH と同様、建物掘方掘削後、床面を仕上げる前に柱を据えていることを土層断面で確認している。

1041 - SH では床面よりも上層で、炭化物を密に含む層（図 22 - 3 層）の面的な広がりを検出している。厚さは 1 ㎝未満である。３層は建物北半部を中心に薄く広がっており、建物西辺中央付近は炭化物の量が特に多い。３層は壁溝の埋土上にも広がっている。床面上の炭化物層からは炭化米が 6 粒出土している。このほか、建物の南東隅および北東隅においても炭化物塊を検出している。南東の塊は厚さ 2cm 前後とやや厚みがあり、床面から壁沿いに L 字に折れ曲がっており、何らかの部材であった可能性もあるが詳細は不明である。炭化物は多数検出しているが、それと接する床面や壁面に焼土は見られない。また、建物埋土の上層には炭化物はほとんど含まれていない。炭化物は建物の使用が終わったごく早い段階に投棄されたものである可能性が考えられる。



1．10YR5/2　灰黄褐色粘質土
2．10YR5/1　褐灰色土
（1 ㎜大の礫をまばらに含む。炭化物を少量含む）
3．7.5YR3/2　黒褐色粘質土　（炭化物を多量に含む）
4．7.5YR5/2　灰褐色砂質土
床面整地層
5．10YR8/1　灰白色砂
6．10YR4/2　灰黄褐色粘質土
7．10YR5/2　灰黄褐色粘質土
（炭化物をまばらに含む）
18．10Y5/1　灰色粘質土

柱穴埋土
8．7.5YR3/1　黒褐色粘質土　（2.5Y7/3 浅黄色粘土ブロック、炭化物をまばらに含む）
9．2.5Y4/1　黄灰色砂質土　（2.5Y7/3 浅黄色粘土ブロックをまばらに含む）
10．10YR5/1　褐灰色粘土　（炭化物をまばらに含む）
11．2.5Y5/1・6/2　黄灰色混じり灰黄色微砂質土
12．2.5Y4/1　黄灰色砂質土
13．5Y4/1　灰色粘質土
14．10YR4/1　褐灰色粘質土　（0.5 ㎜大の礫をまばらに含む）
15．2.5Y4/1　黄灰色砂質土
16．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　（2.5Y7/3 浅黄色粘土ブロック、炭化物をまばらに含む）
17．10YR5/1　褐灰色微砂質土

図 22　1041 - SH 平面・断面図（S ＝ 1/40）

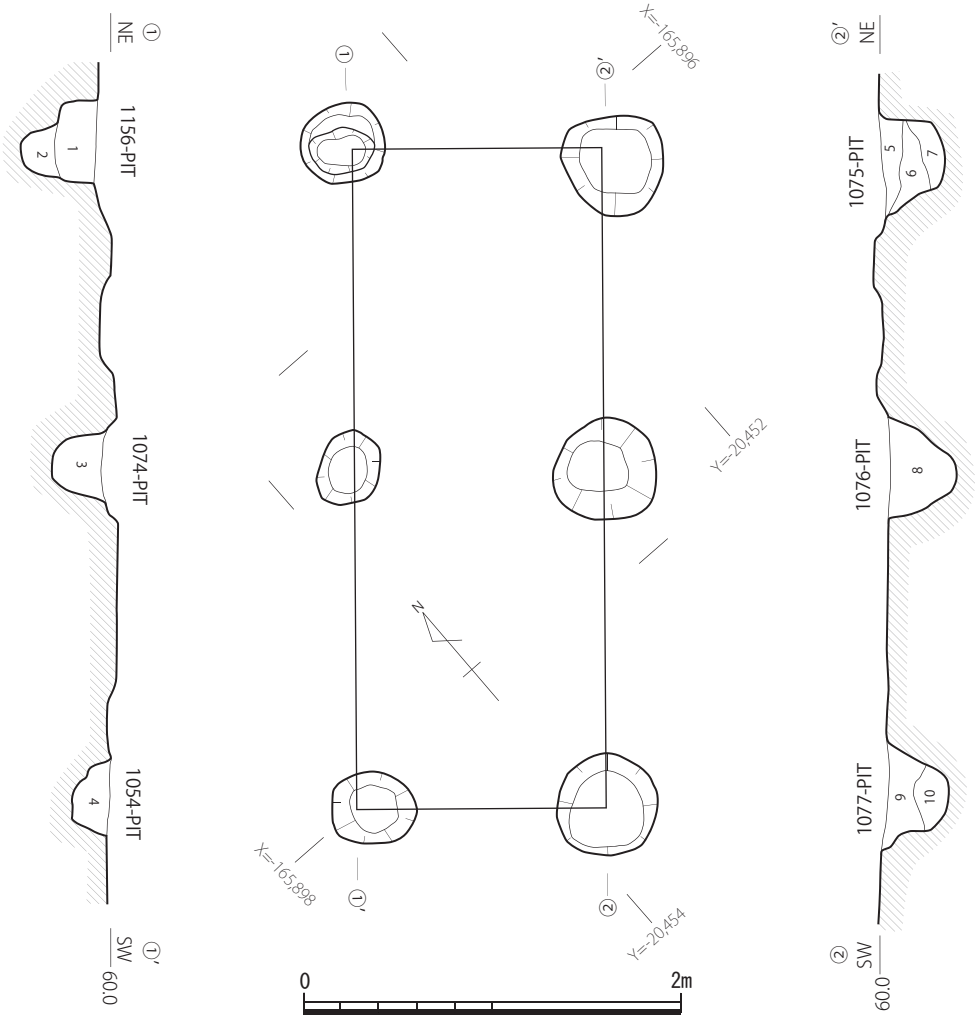


図 23　1157 - SB 平面・断面図（S = 1/40）

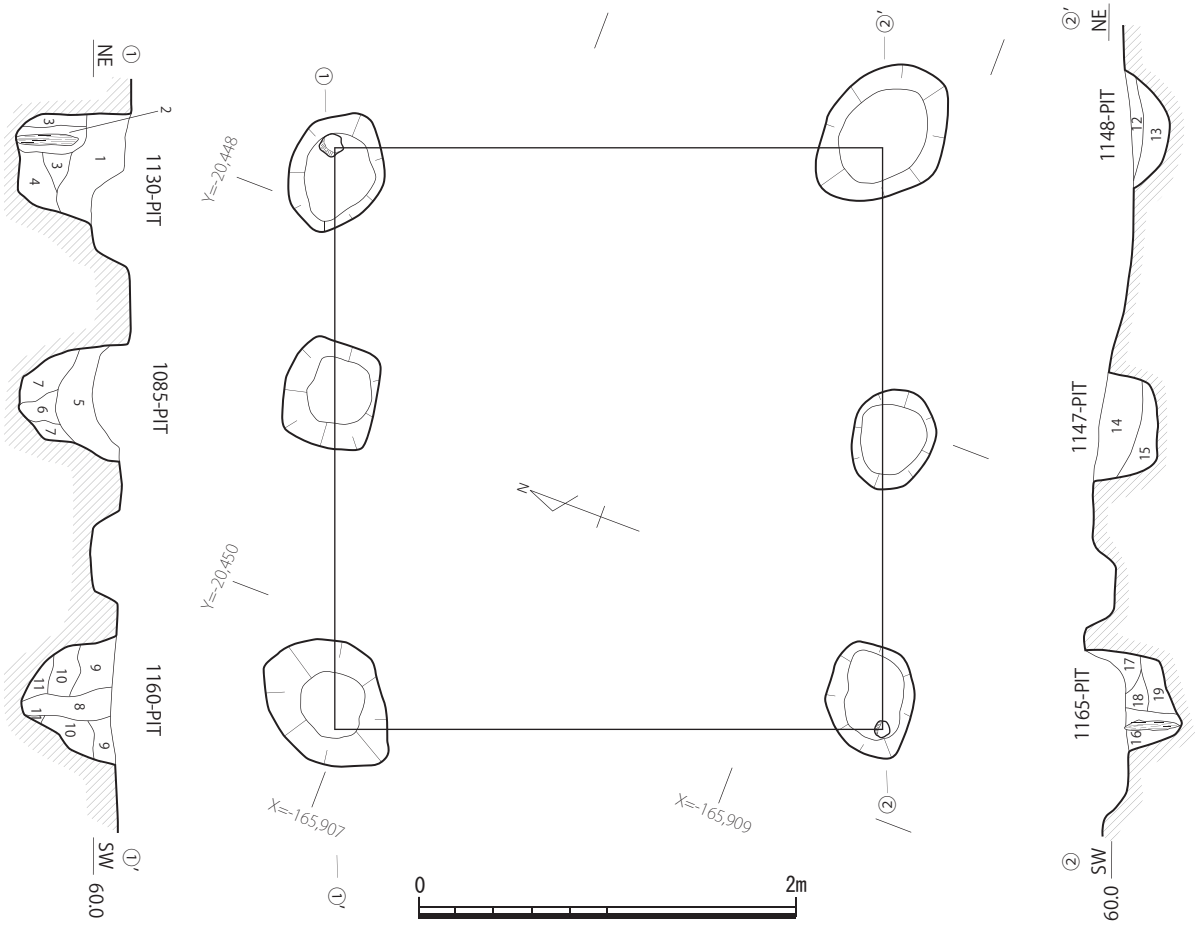
掘立柱建物（1157・1158 - SB）

調査区中央のやや東、自然河道 1031 - NR の東岸には柱穴を含む多数のピットが存在する。ピットの分布域は河岸から東に約 15 mまでの範囲にほぼ収まっており、それより東には畠が広がっている。このピット群の中には 2 棟の掘立柱建物が含まれる。

1157 - SB

ピット群の中央やや東、畠との境界付近に位置する柱間 2 × 1 間の掘立柱建物である。建物の規模は桁行 1.70 m×梁間 0.65 mである。柱穴は直径約 0.3 ～ 0.5 mの円形、深さは検出面から約 0.25 ～ 0.40 mを測る。

遺構の時期は 1090 - SD よりも新しい。北西隅の柱穴 1054 - PIT からは土師器の小片が出土している。



1．10YR4/1　褐灰色粘質土
2．N6/0　灰色粘土
3．2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
4．10YR4/1・4/2　褐灰色混じり灰黄褐色粘質土
5．10YR5/1　褐灰色砂質土（0.5 ㎜大の礫をわずかに含む）
6．7.5YR4/1　褐灰色粘土
7．10YR4/1・4/4　褐色混じり褐灰色粘質土
8．5Y4/1　灰色微砂質粘土
9．10YR4/1　褐灰色粘質土
10．10YR5/2・5/3　灰色混じりにぶい黄褐色土
11．2.5Y5/3　黄褐色粘質土
12．2.5Y4/1　黄灰色砂質土
13．10YR4/1　褐灰色砂質土
14．7.5YR3/2　黒褐色砂質土（2～3 ㎜大の礫を含む）
15．7.5YR4/1　褐灰色粘質土（黄色粘土ブロックを含む）
16．10YR5/1・N6/0　褐灰色混じり灰色粘土
17．10YR4/2　灰黄褐色砂質土
18．10YR5/3　にぶい黄褐色土
19．7.5YR6/1　褐灰色粘質土

図 24　1158 - SB 平面・断面図（S = 1/40）

1158 - SB

ピット群の南東隅、南の竪穴建物群に近接する位置にある柱間 2 × 1 間の掘立柱建物である。建物の規模は桁行 3.0 m×梁間 2.8 mである。柱穴は直径約 0.40 ～ 0.65 mの円形、深さは検出面から約 0.4 ～ 0.6 mを測る。北側の 3 基および南側東端の柱穴には柱根が遺存していた。

建物の軸は近接する竪穴建物群とほぼ同一である。

遺構の時期は 1003 - SD よりも新しい。柱穴 1085・1130・1147・1150 - PIT からは土師器の小片が出土している。

井戸（1103・1122・1133・1164 - SE）

井戸であると考えられる遺構は 4 基検出している。いずれも調査区の東部、畠溝群の西端付近に

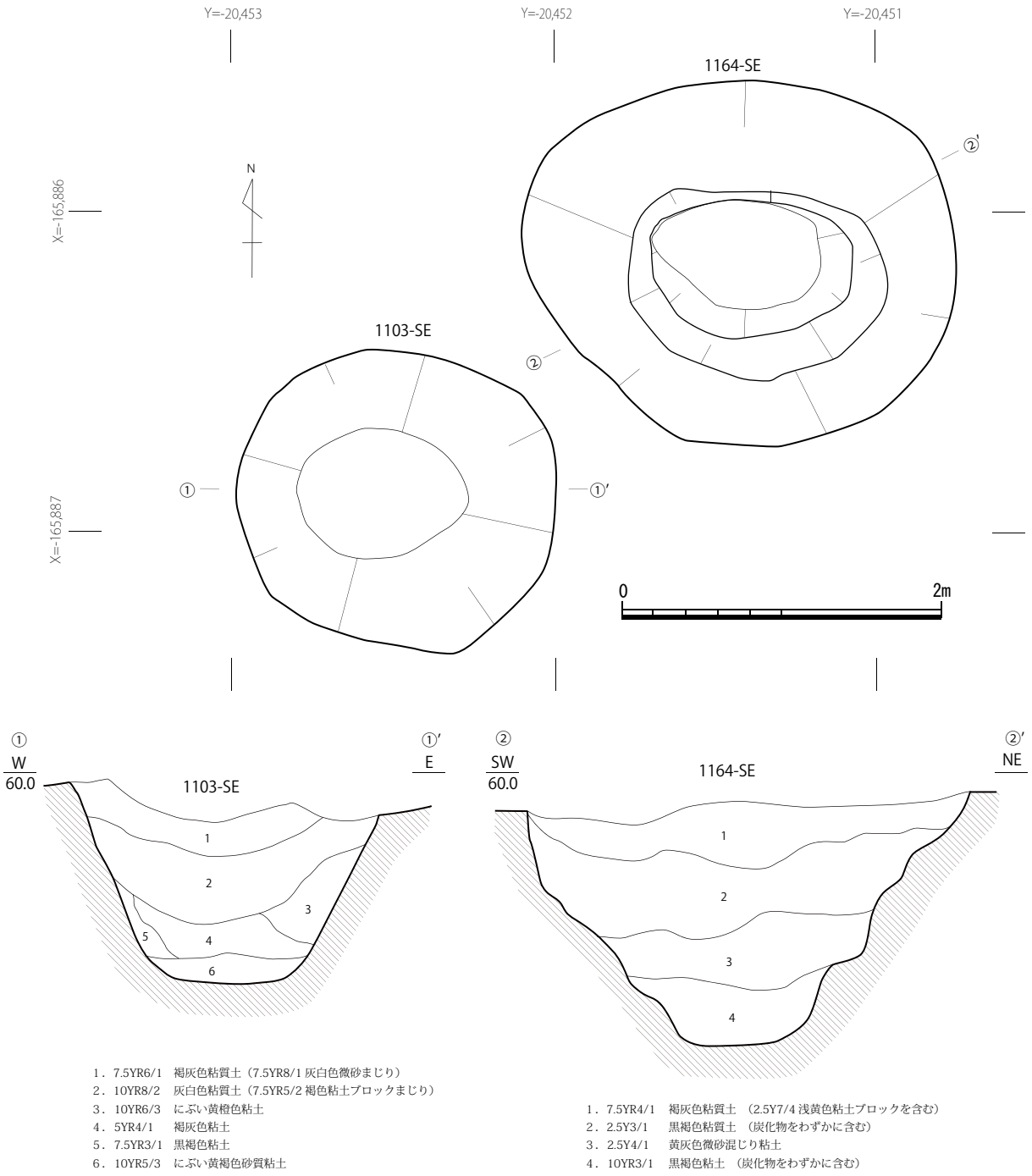


図 25　1103・1164 - SE 平面・断面図（S = 1/40）

位置している。いずれも素掘りの井戸で、井戸枠等の構築物は残されていなかった。

1103 - SE

調査区の北東部、A 13 区で検出した素掘りの井戸である。平面形は直径約 1.0 mの円形を呈し、深さは約 0.7 mを測る。断面の形状は、底部が幅約 0.4 mの平らな面をもつ台形を呈する。遺構の埋土には粘土ブロックが多く含まれており、最後は人為的に埋められた可能性が高い。

1103 - SE の周囲には、調査区東部一帯に広がる畠溝群とは異なる向きに掘られた小溝群（これらも耕作痕である可能性がある。詳しくは後述。）が存在している。1103 - SE は重複関係から、これ

らの小溝群よりも新しい時期の遺構であると判断できる。

少量の土師器の細片が出土しているが、器種などは不明である。

1164‐SE

1103‐SE のすぐ北東隣に位置する素掘りの井戸である。平面形は直径約 1.4 m、やや東西に長い楕円形を呈する。断面の形状は幅約 0.3 mの平らな底部から左右に小さな段をもって外方へ立ち上る形状をしている。深さは約 0.8 mを測る。遺構の埋土は周辺の古墳時代耕作土と似ており、粘土ブロックや少量の炭化物が混ざっていることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

1164-SE は周辺に存在する斜行溝群のうち、1118‐SD（併行畠溝群より古い）よりも新しく、1108‐SD（併行畠溝群よりも新しい）よりも古い遺構である。周辺で畠作が行われていた期間のある時期に用いられていた井戸であると考えられる。

出土遺物には土師器の壺と小型丸底鉢がある。時期は布留 1 式前後である。

1122‐SE

調査区東半の中央で検出した素掘りの井戸である。畠溝（1121‐SD）よりも古い遺構である。畠溝および古墳時代畠土（Ⅲ層）はこの付近で途切れており、その西側には柱穴群が広がっている。1122‐SE は畠と柱穴群のちょうど境界地点に位置している。

平面形は直径約 1.3 mのやや南東‐北西方向に長い楕円形を呈する。断面の形状は下半部が細くすぼまる漏斗状を呈する。深さは約 1.5 mを測る。

遺構埋土の下半（図 26‐4・5 層）からは土師器の甕、小型丸底鉢が出土している。5 層からは木片も出土しているが、小片のため用途などは不明である。また、桃核が 5 点出土している。

1133‐SE

調査区南東部で検出した素掘りの井戸である。畠溝（1132‐SD）よりも新しい遺構である。1122‐SE と比して、やや畠側に入り込んだ位置に掘られている。

平面形は直径約 1.1 mの円形である。断面は底面が幅 0.2 m程度のＶ字状を呈しており、深さは約 1.3 mを測る。

埋土からは土師器が出土している。3 層（図 26）から大型の高坏 2 点、4 層からは甕 1 点が出土している。甕は完形品で、煤が多く付着した底部を上に向けた状況で出土している。そのほか、甕と小型丸底鉢の小片も出土している。1133‐SE から出土した土師器は、今回の調査で出土した古墳時代前期の土師器の中でも新しい様相を示すものである。

土坑

（1001・1007・1042・1045・1046・1047・1060・1070・1141・1142・1146・1154‐SK）

1001‐SK

調査区東端の中央、畠が広がる一帯に位置する。この一帯は検出段階で古墳時代畠土（Ⅲ層）を削

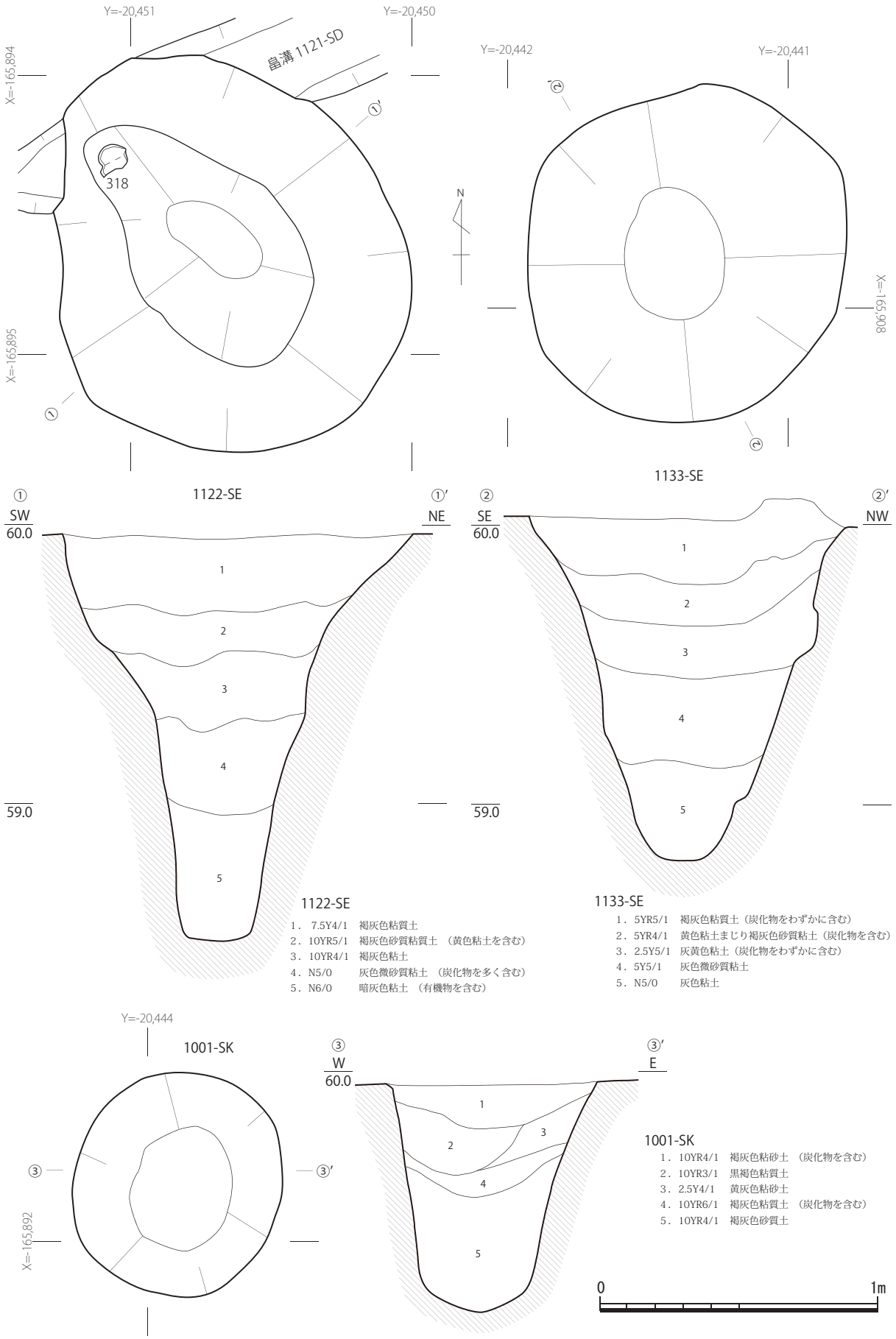


図 26　1122・1133 - SE　1001 - SK　平面・断面図（S ＝ 1/20）

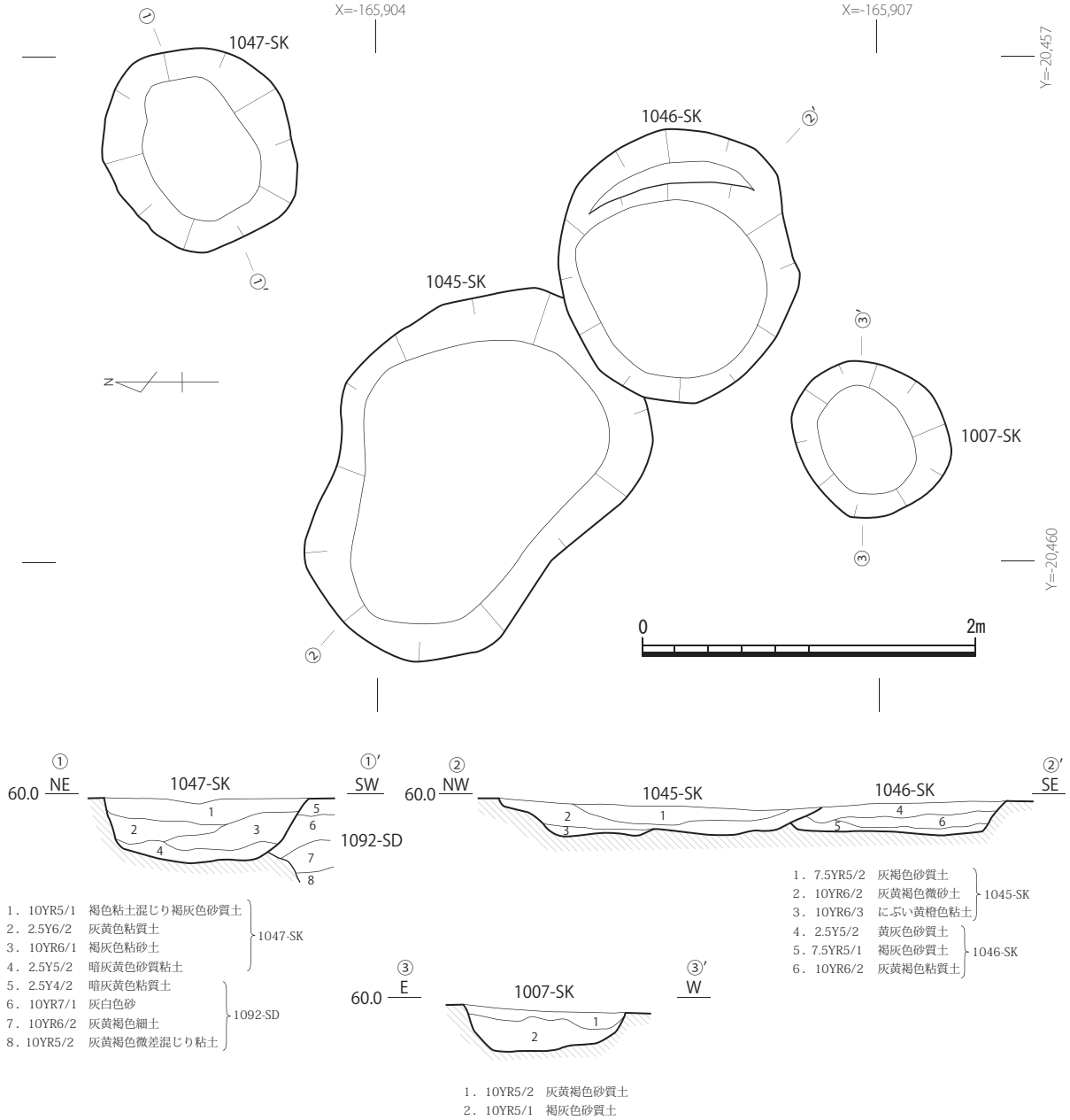


図 27　1007・1045・1046・1047 - SK 平面・断面図（S = 1/40）

ってしまっており、重複関係も存在しないため、畠をはじめ他の遺構との前後関係は不明である。井戸である可能性も考えられる。

遺構の平面形は直径約 0.7 mの円形である。断面の形状はU字形を呈し、深さは約 0.8 mを測る。遺構の埋土には炭化物がやや多く含まれている。

出土遺物には土師器がある。

1007 - SK

自然河道の東岸南側の竪穴建物群から北に約２mの地点で検出した土坑である。この周辺には他に３基の土坑（1045・1046・1047 - SK）がまとまって存在している。いずれの土坑も詳細な用途は不明だが、その位置関係から建物群と関連する遺構である可能性も考えられる。

直径約 1.0 mの円形土坑で、深さは約 0.25 mを測る。

出土遺物には土師器の小片がある。

1045 - SK

長径約 1.9 m×短径約 1.4 mの不整楕円形土坑である。深さは約 0.25 mで、北西側が他よりもやや深くなっている。

重複関係から、1046 - SK より新しい遺構であると判断できる。

出土遺物には小型丸底土器を含む土師器片がある。

1046 - SK

直径約 1.6 mの円形土坑で、深さは約 0.25 mを測る。東側に段を有する。

1045 - SK よりも古く、1092 - SD よりも新しい遺構である。

出土遺物には土師器の小片がある。

1047 - SK

直径約 1.3 mの円形土坑である。断面は台形状を呈し、深さは約 0.5 mを測る。

1092 - SD よりも新しい遺構である。埋土には 5 ㎝前後大の粘土ブロックが多く含まれており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物には土師器の小片がある。うち 1 点は布留甕の口縁である。

1042 - SK

1042 - SK は自然河道 1031 - NR の西岸、竪穴建物 1041 - SH のすぐ東に位置する土坑である。平面形は長径約 1.7 m×短径約 1.1 mの楕円形を呈する。中央部がもっとも深く、深さ約 0.4 mを測る。

土坑の東端部の上には自然河道 1031-NR の最上層が堆積しており、自然河道の最終堆積よりも古い遺構であると言える。

出土遺物には土師器の甕、高坏、小型器台、小型丸底土器がある。時

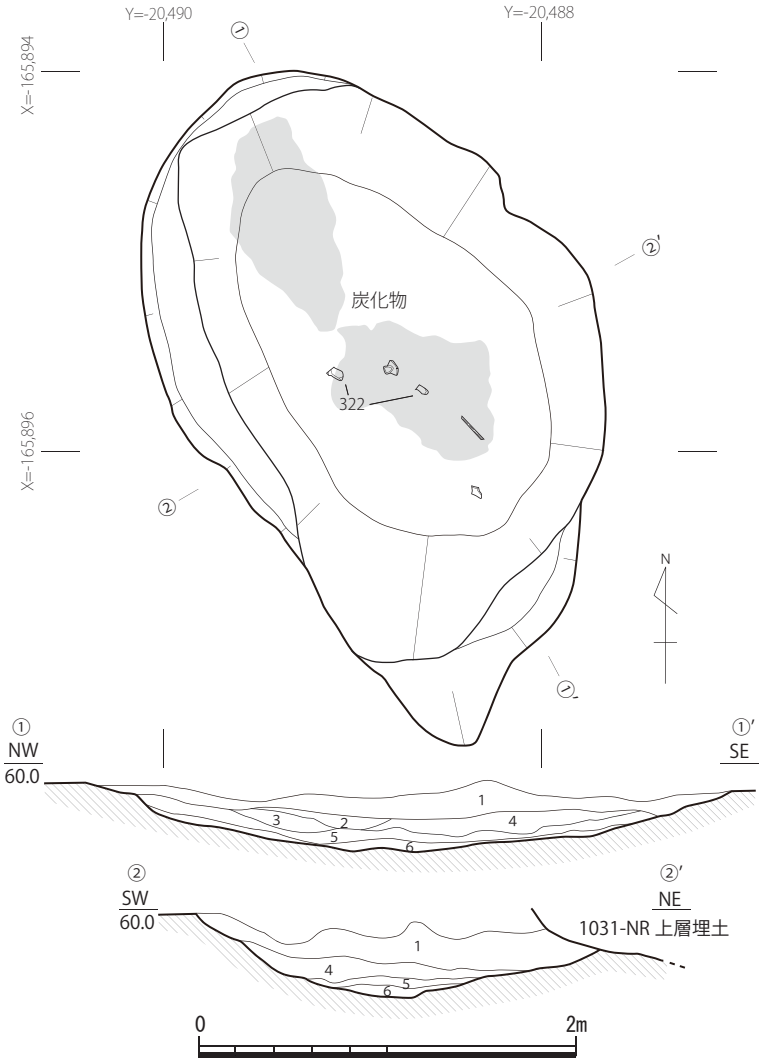


図 28　1042 - SK 平面・断面図（S = 1/40）

期は布留１式前後である。

土坑の底面と中層（図 28 - ３層）には炭化物が多く含まれており、特に底面の中央および北西部には面的に広がっている。位置関係と出土遺物から、竪穴建物 1041 - SH に付属する施設であった可能性が考えられる。

1060 - SK

河道東岸に広がるピット群の中央部、掘立柱建物 1157 - SB の南隣に位置する土坑である。平面形は長辺約 0.65 m、短辺約 0.4 mの隅丸方形で、深さは約 0.25 mを測る。溝 1090 - SD よりも新しい遺構である。

土師器の小片が出土している。

1070 - SK

河道東岸に広がるピット群の中央部、調査区のＣ 12 区で検出した土坑である。平面形は直径約 1.3 mの円形で、深さは約 0.25 mを測る。

土坑の底面からは高さ約 30 ㎝の短頸直口壺（図 29・62 － 326）が出土している。壺は破砕された状態で出土している。体部のうち約四分の一は失われている。他の遺物は出土しておらず、この壺を埋納あるいは破棄するために掘られた土坑であると考えられる。この種の土器埋納土坑は今回の調査では他に見られない。

時期は出土遺物から古墳時代前期（布留０～１式頃）であると考えられる。

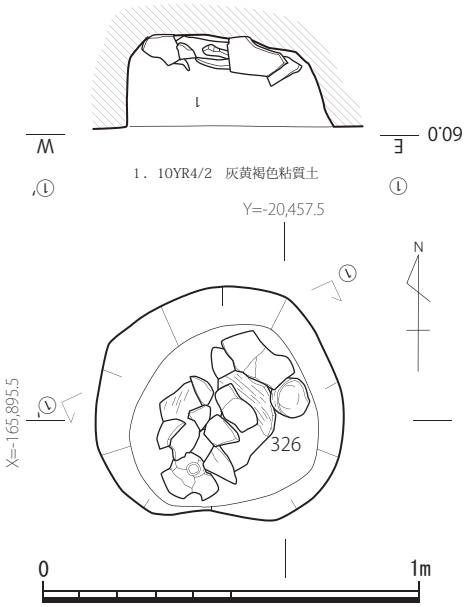


図 29　1070 - SK 土器出土状況（Ｓ＝ 1/20）

1141 - SK

調査区中央のやや北、自然河道 1031 - NR と竪穴建物 1036 - SH の間に位置する土坑である。1140 - SK とも近接した位置にある。

平面形は長径約 1.5 m×短径約 1.3 mのやや南北に長い楕円形を呈する。深さは約 0.3 mを測る。

遺構の重複関係から、1145 - SD よりも新しい遺構であると判断できる。

出土遺物には完形の凹石と土師器の小片がある。凹石は西側の壁面に貼り付く形で出土している。

1142 - SK

調査区中央の北、竪穴建物 1036 - SH のすぐ南隣に位置する土坑である。平面形は直径約 1.5 m の円形である。断面の形状はＵ字状を呈し、深さは約 0.4 mを測る。埋土中にはわずかながら炭化物が含まれる。

出土遺物には土師器片があり、器種は小型器台と小型丸底鉢がある。時期は古墳時代前期であると考えられる。

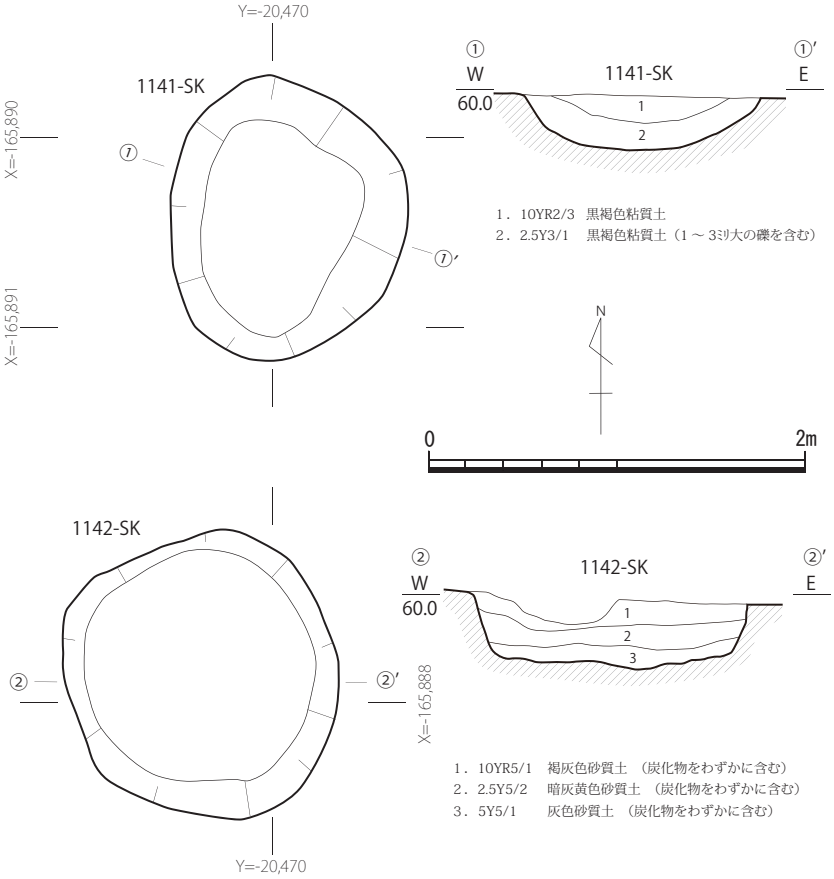


図 30　1141・1142 - SK 平面・断面図（S = 1/40）

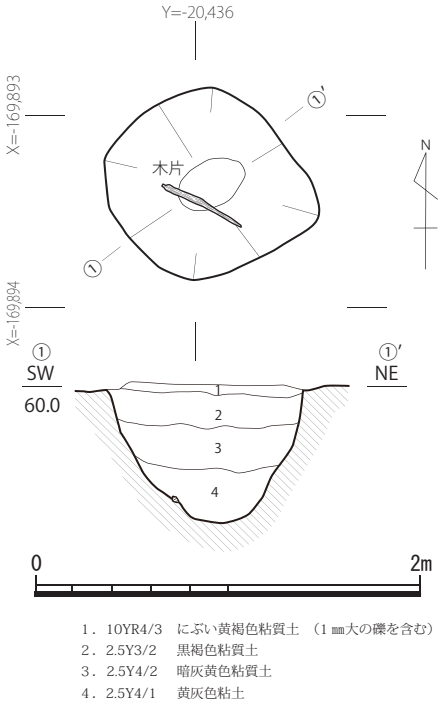


図 31　1146 - SK 平面・断面図（S = 1/40）

1146 - SK

調査区東端部中央で検出した土坑である。平面形は一辺約 0.9 mの隅丸方形である。断面の形状はU字状を呈し、深さは約 0.7 mを測る。古墳時代耕土（Ⅲ層）上から掘り込まれている。

底面から長さ約 0.3 mの棒状の木片が出土している。他に出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、他の遺構との埋土の共通性から古墳時代の遺構としている。

1154 - SK

竪穴建物 1004 - SH 下で検出した土坑である。1005 - SH のより新しい遺構である。南北約 1.6 m、東西約約 0.9 mを測る平面楕円形の土坑である。深さ約 0.3 mを測る。（図 14）

出土遺物には土師器の小型壺、小型丸底土器があるが、いずれも小片である。

不明遺構（1043 - SX）

調査区北西隅で検出した用途不明の遺構である。他の古墳時代の遺構埋土とよく似た黒褐色粘質土が、直径約３m程度の不整形な範囲に薄く広がっている。土層の堆積は深い場所でも 0.07 m程度である。

埋土には炭化物、土師器の細片、灰白色砂がそれぞれ少量含まれている。

検出位置や埋土の状況から、竪穴建物の残滓である可能性を考え掘り下げを行ったが、柱穴や壁溝に相当する遺構は存在しなかった。何らかの作業場や簡素な建物の跡である可能性も考えられるが、詳細は不明である。

布留甕の口縁を含む土師器片が少数出土している。

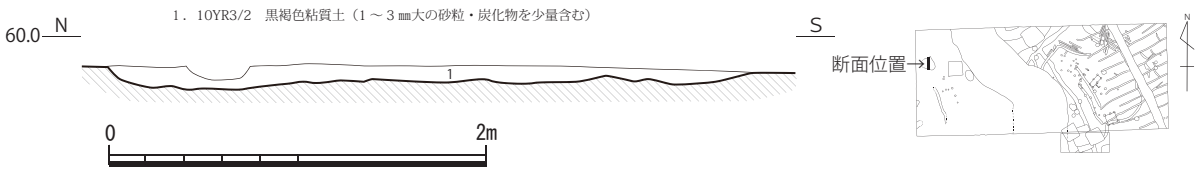


図 32　1043 - SX 断面図（S = 1/40）

溝（1002・1003・1033・1034・1040・1090 ～ 1100・1104 ～ 1118・1136・1144・1145・1152・1163 - SD）

溝のうち、古墳時代前期の畠に関わると考えられる溝については、畠溝として別にまとめて後述することとする。ここで述べる溝には竪穴建物よりも先行する古い段階のものも含まれている。

1002 - SD

調査区東部で検出した溝で、調査区南東隅から北北西方向に直線にのびている。古墳時代畠耕土（Ⅲ層）の上面から掘り込まれている。溝の幅は約 2.0 ～ 2.6 m、深さは約 0.8 m、長さは 34 m以上である。溝の断面形は半円形を呈するが、水流によって壁面がやや抉れている部分も存在する。

溝の埋土はシルト～砂によって大部分が占められている。溝の東肩部分には、これらとは質の異なる粘質土が最上層に堆積している（図 33 - 1 層）。溝がほぼ埋没した段階に浅く掘り直しが行われた可能性が考えられる。

布留 2 ～ 3 式の土師器が出土しており（図 63）、今回確認した古墳時代前期の遺構の中でもっとも新しい遺構であると言える。

溝の南部では幅約 12 ㎝、高さ約 50cm、厚さ約 1.5 ㎝の矢板が一枚、溝の底面に刺さって立った状態で出土している。その他、長さ約 50 ～ 100 ㎝、直径 3 ㎝前後の比較的真っすぐな自然木（枝）も複数出土している。矢板一枚を除き、溝の中に構造物は残されていなかったが、これらの出土木材の存在を踏まえると、周辺に堰などの構造物があった可能性は十分にある。

後述する畠溝群と直交する位置にあるが、時期や畠の構造をふまえると直接の関係は見出し難い。

1003 - SD

調査区東部に位置する蛇行溝である。拡張区南端中央から北東にのび、調査区北半で北西方向に向きを変える。調査区中央付近で 1002 - SD によって分断されているが、埋土や構造の共通性から同一の溝としている。

溝の幅は約 0.5 ～ 1.5 m、深さは約 0.2 mである。

出土遺物は無く正確な時期は不明であるが、重複関係から竪穴建物群や畠溝よりも古い遺構であると判断できる。

1033 - SD

調査区西部に位置する溝である。南南東から北北西方向にのびる溝で、幅約 0.3 m、深さ約 0.08 m、長さ約 10.5 mを測る。遺物は出土していない。

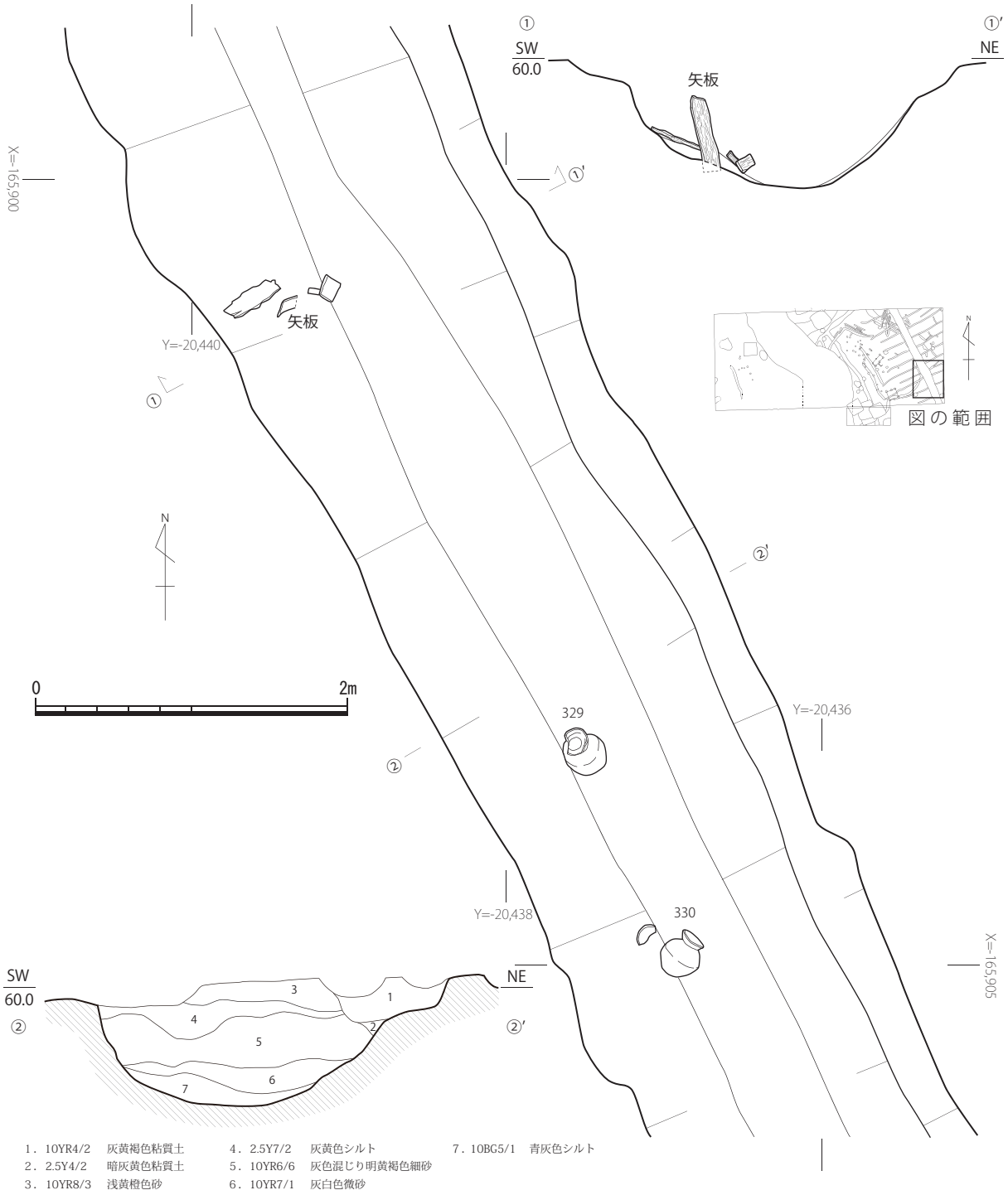


図 33　1002 - SD 南半部　平面・断面図（S ＝ 1/40）

1034 - SD

調査区西端に位置する溝である。溝は調査区外までのびており、幅約 0.6 m、深さ約 0.15 mを測る。遺物は出土していない。

1040 - SD

調査区南西隅に位置する溝である。幅約 0.7 m、深さ約 0.15 mを測る。遺構の東端は中世耕作溝

によって削平されている。遺物は出土していない。

1090 - SD

調査区の東半中央、柱穴群の下層で検出した溝である。幅約0.6 m、深さ約0.15 m、長さ約13.8 mを測る。断面形は中央付近では台形状を呈するが、溝の南・北端付近では半円形に近付く。

掘立柱建物1157 - SBを含む柱穴群よりも古い遺構であるが、出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

1091 - SD

調査区の東半中央、柱穴群の下層で検出した溝である。幅約0.7 m、深さ約0.15 m、長さ約13.6 mを測る。1090 - SDから南西に約1.2 m離れて並行した位置に掘られている。1090 - SDと1091 - SDは非常に近い構造をしている。遺物は出土していない。

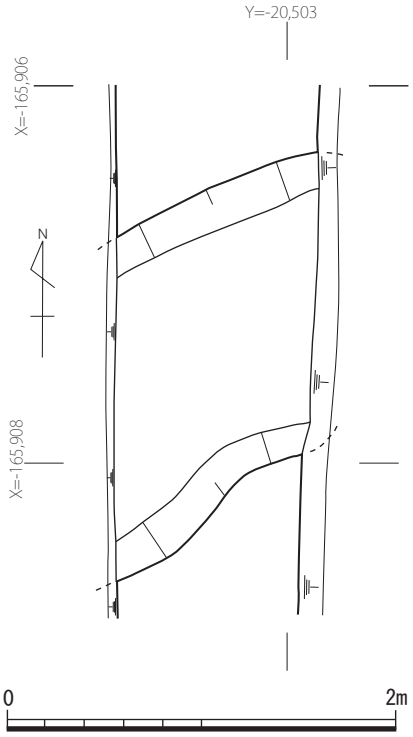


図34　1040 - SD平面図（S = 1/40）

1092 - SD

調査区の中央、自然河道1031 - NR東岸すぐ側に位置する溝である。調査区拡張区中央から北北西方向に直線的にのび、北で1163 - SDに接続している。1090 - SDおよび1091 - SDと並行する位置関係にあり、これらの溝とセットである可能性も考えられる。幅約1.1 ～ 1.3 m、深さ約0.6 ～ 0.75 m、長さ約33 m以上を測る。溝の底面は北側ほど低くなっている。断面の形状はV字状を呈するが、下半部が細くなる漏斗状に近い部分も存在する。

埋土の下半部は砂層、上半部は粘質土層からなる。

重複関係から竪穴建物群や土坑群、溝1093 - SDよりも古く、今回確認した中でももっとも古い遺構のひとつであると考えられる。遺物は土器の小片が数点のみ出土している。詳細な時期は不明だが、外面にタタキ調整を施した甕と推定される土器片が含まれており、弥生時代まで遡る可能性がある。

1144・1145・1163 - SD

調査区中央北側に位置し、1091 - SDと接続する溝である。検出時点で地点ごとに三つの番号を与えたが、一連の溝であることを土層断面で確認している。南西で二股に分かれ自然河道1031 - NRにぶつかっている。溝の規模は幅約0.6 ～ 1.3 m、深さ約0.75 mを測る。

土器の破片が少数出土しているが、詳細な時期は明らかではない。

1093・1095 - SD

自然河道の東岸、柱穴群と竪穴建物1036 - SHの境界に位置する溝である。畠溝の西端付近から河の東岸までのびており、その中ほどで‘く’の字に折れ曲がっている。屈曲点より西側を1093 - SD、東側を1095 - SDとしているが、本来は同一の溝である。溝の規模は幅約0.4 ～ 0.7 m、深さ

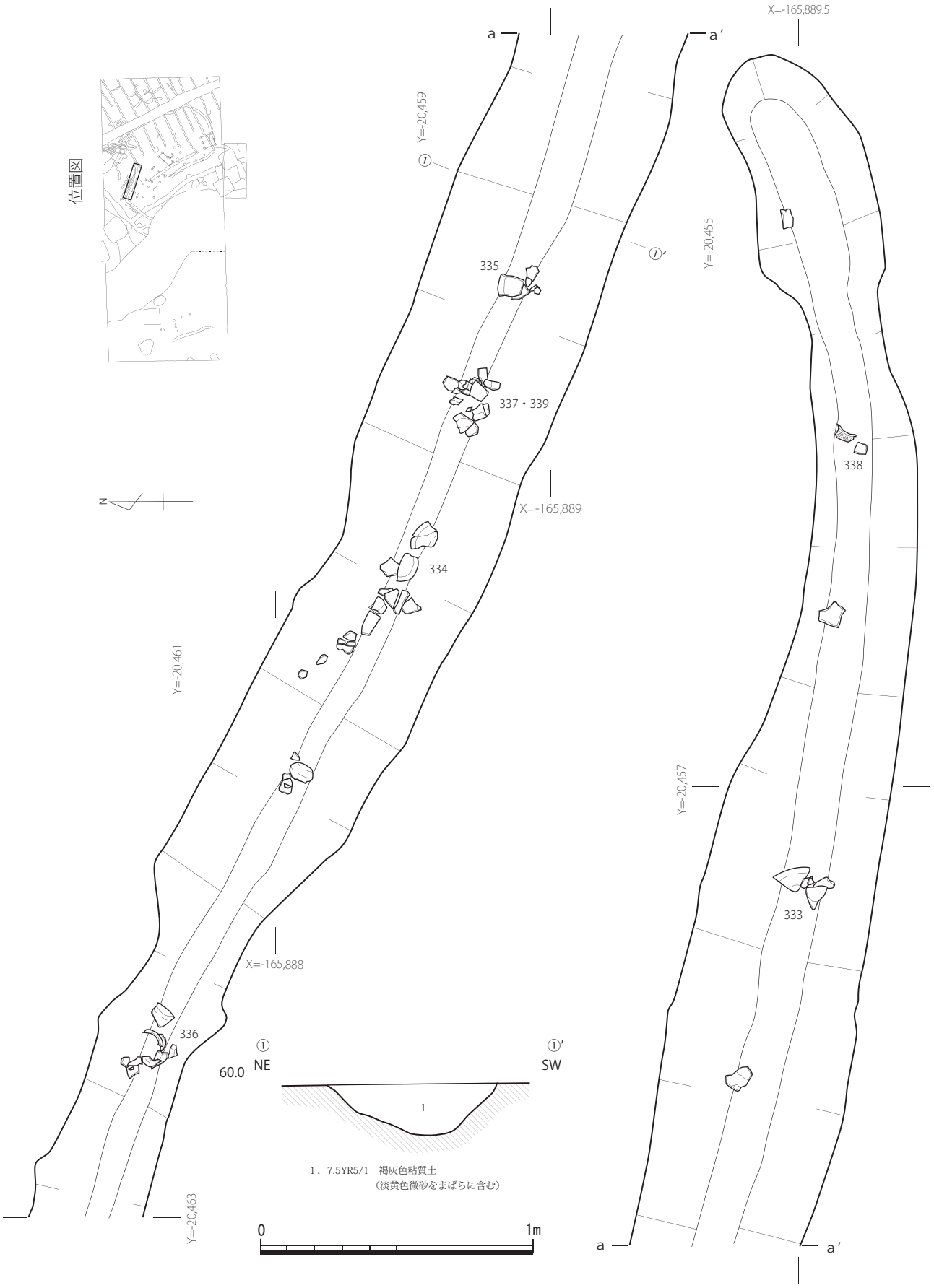


図 35　1095 - SD 土器出土状況図（S ＝ 1/20）

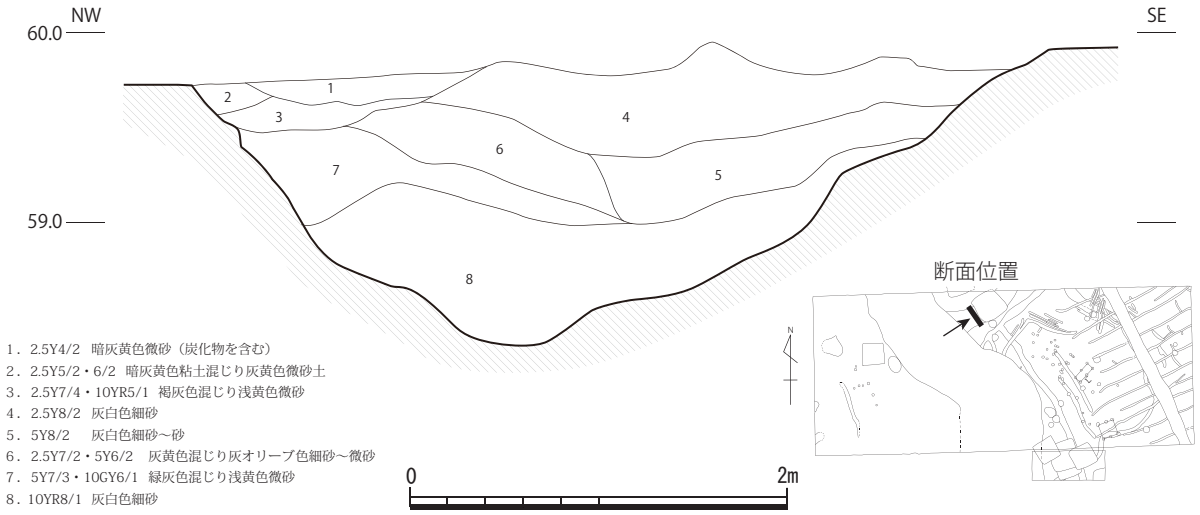


図 36　1152 - SD 断面図（S ＝ 1/40）

約 0.2 m、長さ約 18.3 mを測る。

溝からは多数の土師器が出土している（図版 18）。土師器は溝全体に散らばって出土しており、とくに屈曲点より東側（1095 - SD）に多い。いずれも溝の底面付近から破砕状態で出土しており、完形品は見られなかった。図 64 では図面上で完形まで復元可能な個体を中心に報告を行っている。出土した土師器の器種は、ほとんどが小型丸底鉢・小型丸底壺である。その他に甕（S 字甕を含む）、壺、高坏、小型器台も出土しているが、いずれも小片である。時期は布留 1 式前後であると考えられる。

エリアの境界に位置し、遺物の出土状況も特徴的な溝である。何らかの祭祀を行っていた可能性も考えられる。

1152 - SD

調査区北側中央、自然河道 1031 - NR の東岸から北東方向に枝分かれする溝である。河の本流と直交しており、人工的に掘られた溝であると考えられる。溝の規模は幅約 3.6 ～ 4.6 m、深さ約 1.6 mを測る。断面形はU字状を呈する。

遺構の埋土は 1031 - NR と同様の微砂、細砂層からなる。1031 - NR の中層が堆積する段階には埋没しているようである。ほぼ埋没した段階に北側で浅く掘り直しが行われた可能性がある。その埋没後、竪穴建物 1036 - SH が建てられている。

出土遺物には土師器の甕、壺、高坏、小型丸底土器の小片がある。甕には山陰系と考えられる破片が 1 点含まれる。出土遺物から遺構の時期は布留 0 ～ 1 式頃であると考えられる。

1094・1096 ～ 1100・1136 - SD

これらは 1093・1095 - SD の西側および北側に接する位置に存在する溝である。方位もほぼ並行している。いずれも幅約 0.15 ～ 0.2 m、深さ約 0.1 m前後の小規模な溝である。

溝の埋土はほぼ共通しており、褐灰色粘質土が堆積している。それぞれ遺構の重複はなく、時期の前後関係は不明である。

1098 - SD からは土師器の壺、小型丸底鉢の小片が出土している。他の溝からの出土遺物はない。

これらの溝の具体的な用途は不明である。1096 ～ 1100 - SD の東端から北東に約 10 mの地点周

辺には、同様に近接して併行する溝群（1104 ～ 1118 - SD。詳細は次に述べる）が存在している。これらの溝とはちょうど直交する位置関係にあり、関連する遺構である可能性がある。

1104 ～ 1118 - SD

調査区東部北端、1002 - SD の西側に位置する溝の連なりである。いずれも幅約 0.3 m、深さ約 0.1 m前後の溝であるが、Ⅲ層（古墳時代耕土）上面で検出した溝とⅣ層上面で検出した溝とが存在する。埋土がⅢ層とよく似ており、層序について誤認を含んでいる可能性がある。

遺物は布留甕を含む土師器の破片が少量出土している。

調査区東部に広く畠が作られる前後の時期（同時期を含む）に掘られた小規模な溝である。これらも畝間の溝など、耕作活動の痕跡である可能性がある。

畠溝（1102・1119 ～ 1121・1123 ～ 1129・1131・1132・1134 - SD）および畠耕土（Ⅲ層）

調査区東端の東西約 20 m、南北約 30 mの範囲に広がる、西南西 - 東北東方向に並行して掘られている溝群である。これらの溝は畠の耕作活動の痕跡であると考えられる。溝は調査区のさらに北・南・西にも広がっていると考えられる。併行する溝間の距離は約 1.8 ～ 3.8 mと若干のばらつきがあるものの、2.5 m前後が多い。それぞれの溝の規模は幅約 0.25 ～ 0.35 m、深さは最大で約 0.35 mを測る。溝の幅と深さは同一の溝内でも地点によってかなりの差があり、一定ではない。溝の長さは長いもので約 21 m以上を測る。溝の西端のラインはおおむね揃っているが、奇麗な直線は描かず、南側はやや西に張り出している。一連の行為によって掘られた溝であると考えられる。

これらの溝の上面はⅢ層によって覆われている。基本層序の項で述べたとおり、中世の素掘り耕作溝埋土を除去した段階で部分的ながらⅢ層よりも下の状況を確認できたため、調査の比較的早い段階で並行溝群の存在を認識することができた。細い帯状遺構が 2 ～ 3 m間隔で並行に広がっていることから（加えて、北部にはこれらと直交する溝も見られたことから）、当初は水田の畦である可能性を検討したが、調査区の土層断面の精査により、これらが溝状の遺構であることが判明した。また、平面および断面の検討から、これらの溝がⅢ層上面からではなく、その下のⅣ層上面から掘り込まれていることも明らかになった。時系列的には溝の方が先行するものの、溝の埋土とⅢ層の質は近く、両者はかなり近い時期に攪拌されたものだと推測される。Ⅲ層を詳細に観察すると、直下のⅣ層最上層と性質が近い粘土ブロックがまばらに混ざっている。また、粘土ブロックはⅢ層中でも下層は大きく上層では小さい傾向にある。これらは土壌の攪拌を繰り返し行う畠の耕作層によく見られる特徴である。

並行溝群はⅢ層との層位関係や遺構の形状から、畠の上面に掘られる畝間溝ではなく、地力の回復をさせるためのいわゆる天地返しなどによって形成される耕作痕であると推測される。この類の溝については他に根菜類用の畝床痕などである可能性も指摘されているが、今回の調査ではそれを具体的に支持しうる要素は見当たらなかった。

Ⅲ層と並行溝群からの出土遺物は土師器の細片が中心で量も少ないが、畠溝（1124 - SD）からは布留甕の口縁が出土している。その他の破片についても周辺の遺構から出土している土師器と明確な差は見出しがたい。Ⅲ層および並行溝群の時期については、出土遺物から古墳時代前期（布留 1 式前

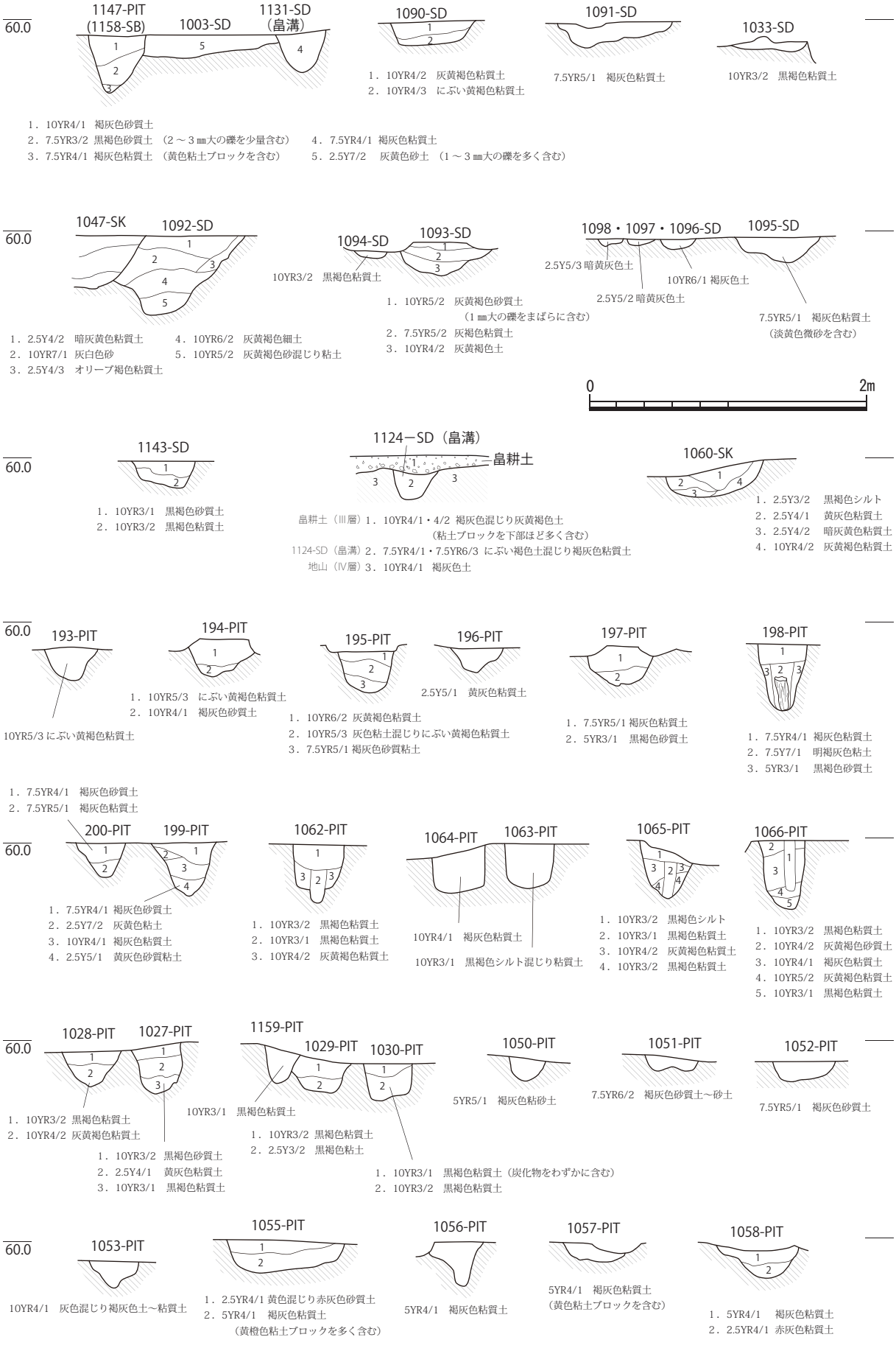


図 37　SK・SD・PIT 断面図（S ＝ 1/40）

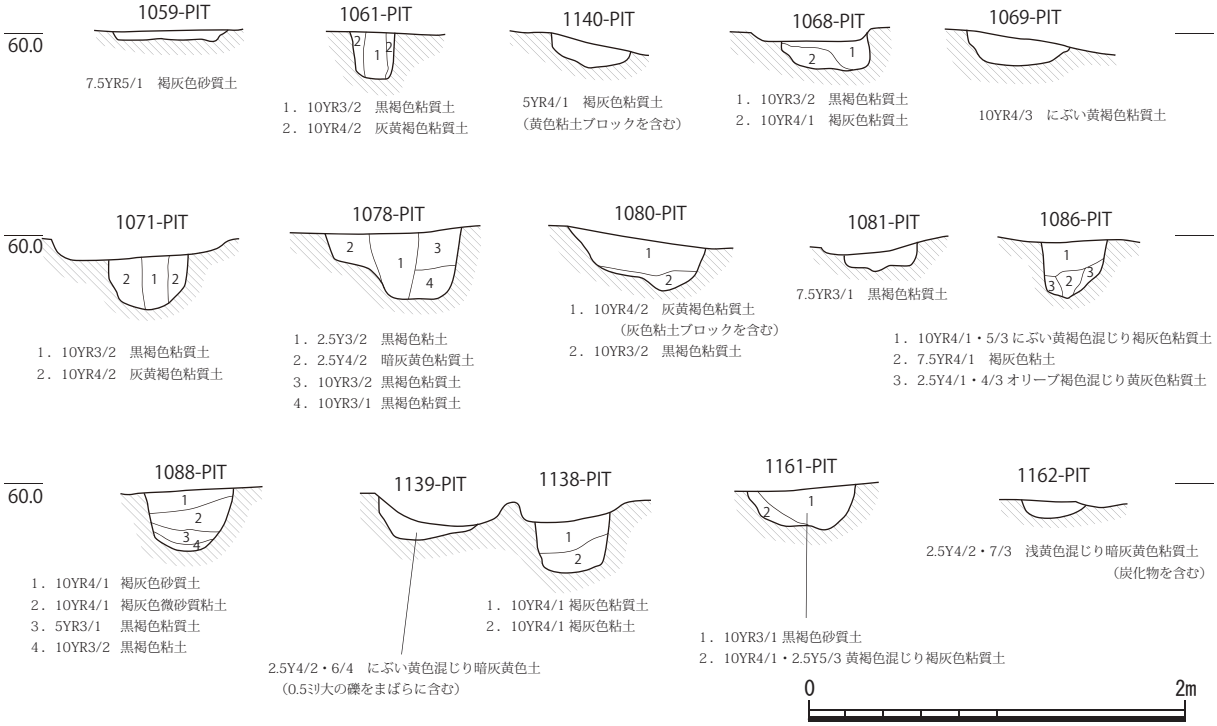


図 38　PIT 断面図（S ＝ 1/40）

後）であると考えられる。畠よりも古い井戸である 1122 - SE・1164 - SE（図 60）と畠上面から掘られている井戸 1133 - SE（図 61）からの出土遺物もこれと矛盾しないと考えられる。

調査区北東部一帯には並行溝群とは異なる方向の浅い溝がいくつか存在する。出土遺物がなく正確にはわからないが、これらの溝も畝立てを含む畠の耕作痕である可能性がある。

ピット

調査区の西側、竪穴建物 1041 - SH の南にピット 8 基が存在する（193 ～ 200 - PIT）。いずれも中世耕作土下の遺構である。調査の早い段階で検出したため上層遺構と同じ 3 桁の遺構番号を付しているが、埋土の状況や出土遺物から、古墳時代の遺構である可能性がもっとも高いため、ここで述べることとする。193 ～ 198 - PIT は L 字状に並び、一連の柵のような構造物である可能性がある。ただし北辺の柱間間隔は不均等である。195 - PIT からは土師器の小型丸底鉢の破片が、200 - PIT からは器種不明の土師器片が出土している。

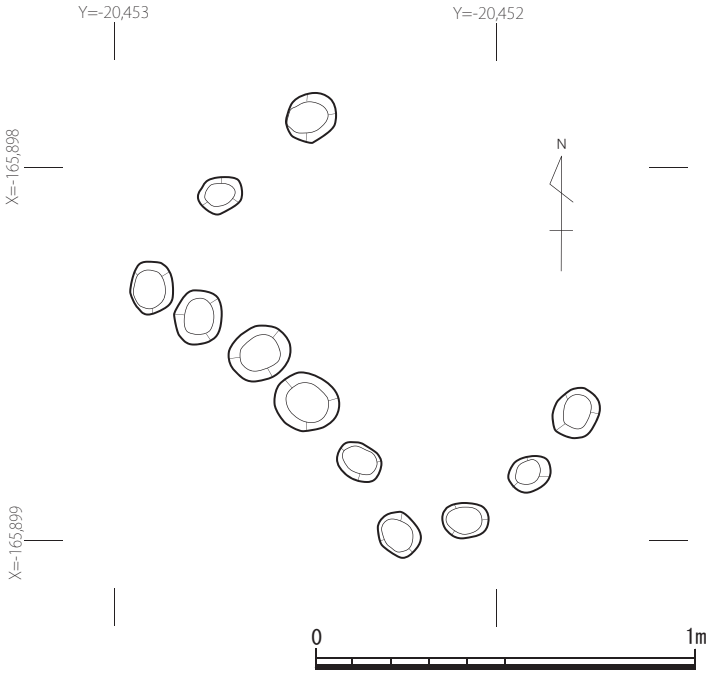


図 39　1079 - PIT 群 平面図（S ＝ 1/20）

この他のピットはすべて自然河道より

も東に位置している。このうち掘立柱建物の柱穴となるものについては先に述べている。その他に土層断面の観察から柱穴である可能性が高いのは 1061・1062・1065・1066・1071・1078・1086 - PIT が挙げられる。1050・1051・1052・1062・1066・1068・1069・1087・1088・1139 - PIT からは土師器の小片が出土している。1066 - PIT から出土した布留甕の口縁を除くと、器種などの詳細がわかる破片はない。

1157 - SD の南隣には 1079 - PIT 群（図 39）がある。1079 - PIT 群は直径 0.10 ～ 0.15m 大の小ピット 11 基からなり、これらが狭い間隔でコの字形に並ぶ。ピットの深さはいずれも 0.1m 程度である。小規模な構造物であったと考えられる。

第４節　遺物

出土遺物の概要

出土した遺物には、土器（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、ミニチュア土器）、土製品、石器、木製品、植物遺存体がある。出土遺物の量はコンテナ約 180 箱分で、その大半を古墳時代前期の土師器が占める。

遺構別では自然河道 1031 - NR からの出土がもっとも多く、出土遺物全体の約９割を占める。土師器の大半と縄文土器、弥生土器、木製品は 1031 - NR からの出土である。1031 - NR から出土した土器は破片にして約 25,000 点を数える。1031 - NR 出土の土器については量が膨大であるため、残存状況が良い資料および特徴的な資料を中心に抽出を行って報告している。他の遺構・遺物については可能な限り多くの出土遺物を報告している。

以下、土器、土製品、石器、木製品の順に、その内容を述べる。植物遺存体については第Ⅲ章第３節内の竪穴建物の項および第Ⅳ章 自然科学分析で述べている。なお、土師器については遺構別に記述を行い、他の遺物については必要に応じてその都度、出土遺構に触れることとする。

報告遺物には全体で通し番号を付与している。

縄文土器（図 40 - 1、図版 20）

縄文土器は自然河道 1031-NR 中層から１点が出土している。1031 - NR からは縄文土器である可能性をもつ小破片が他にも数点出土しているが、確実な個体は１点のみである。

１は深鉢の口縁部であると考えられ、頸部には突帯を貼り付け、刻み目を施す。時期は縄文時代後期中葉と考えられる。表面は流水に晒され磨滅しており、遠方から流されてきた可能性が考えられる。

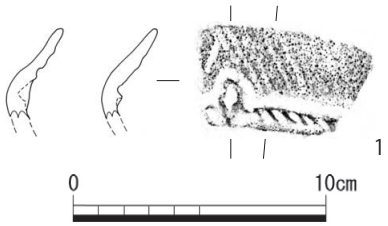


図 40　縄文土器（S ＝ 1/4）

弥生土器（図 41 - 2 ～ 22、図版 20・21）

弥生土器は自然河道 1031 - NR の中層および下層から出土している。他の遺構出土の土器細片の中に弥生土器が含まれている可能性はあるが、明確に弥生土器であると判断できるものは見られない。弥生土器は前期から後期までの各時期の資料が存在する。

弥生土器は 1031 - NR の中層および下層から散乱して出土している。弥生土器はいずれも土師器と比較して表面の磨滅の度合いが強く、土師器よりもかなり長く流水に晒されていた可能性が高い。1031 - NR 出土土器全体における弥生土器の割合は破片数にして約５％である。上層からも弥生土器と考えられる破片が数点出土しているが図化できるものはなく、比率的にも中・下層と比べて少ない。

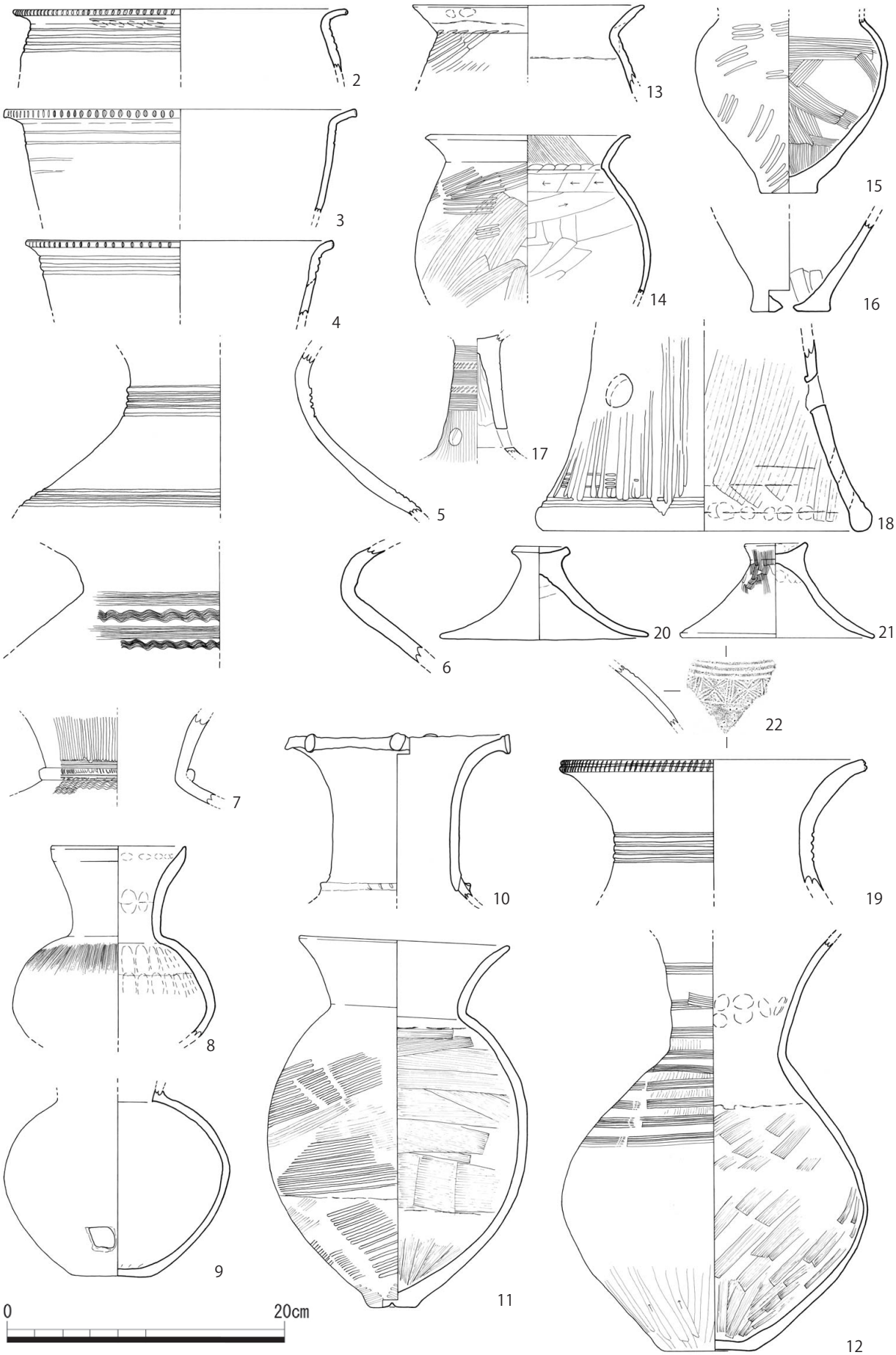


図 41　1031 - NR 出土　弥生土器（S ＝ 1/4）

2 ～ 4 は前期の甕である。口縁～体部上半の破片で、口縁端部には刻み目を施す。4 は口縁端部の面取りが弱く、丸みを帯びる。体部上半には三ないし四条のヘラ描き沈線が巡る。2 は体部中ほどに張りをもつ形態であるが、3・4 には張りがない。

5・19 は前期の広口壺である。5 は肩部の破片で、上・下二ヶ所にそれぞれ四条の沈線が巡る。上の沈線帯と頸部との境界には小さな段が付く。19 は頸部中ほどに四条の深い沈線が巡る。口縁端部は斜めの刻み目を施した後、横方向の沈線を一条巡らせる。

22 は木葉文が描かれた破片で、前期の壺であると考えられる。木葉文は一枚の葉を三本の沈線で描き、葉を×字状に四枚ずつ配している。それぞれの葉の間は縦方向の三本線で画している。文様の下端は一本の、上端は三本の横線でそれぞれ画している。

6 は広口壺の頸部～肩部にかけての破片である。櫛描きの直線文と波状文が交互に施されており、時期は中期であると考えられる。内面には全体に煤が付着している。

7・8・9 は壺である。7 は頸部～肩部の破片で、外面の頸部と肩部の境界には粘土帯を貼り付け、細かい刻み目を施す。肩部外面には櫛描き波状文を施す。頸部は縦方向のミガキ調整を施す。8 は細頸壺で、底部を欠く。正確な時期は不明であるが、胎土や調整などが弥生土器と共通することから、ここで報告することとする。肩部にはハケ調整を施す。内面には指押圧痕が明瞭に残る。9 は平底の壺の体部である。断面の状況から、頸部はやや外に広がると推測される。底部やや上に 2 ㎝大の孔が穿たれている。外面はミガキ調整が施されるようだが、表面の摩耗のため詳細は不明である。

12 は中期の長頸壺である。頸部から肩部にかけての範囲に横方向の櫛描き直線文が巡る。外面の上半部は弱いミガキ、下半部はケズリによって調整されている。体部内面の下半にはハケ調整が明瞭に残る。10 は後期の長頸壺である。口縁端部には直径 1.2 ㎝前後の円形の粘土板が 9 枚（うち 1 枚は落剥している）貼り付けられている。粘土板のうち 3 つが近接して貼り付けられているほかは、ほぼ均等に配置されている。また、粘土板のうち 1 つには中央に直径 0.5 ㎝の円形の押印がなされている。

11 は後期後半の壺である。外面は口縁～肩部をナデ、体部を右肩上がりのタタキで仕上げる。内面はハケ調整である。体部下半には接合痕が明瞭に残る。

13 ～ 16 は甕である。13 ～ 15 は形状や調整から後期の甕であると考えられる。16 は甕の底部で、中央には直径約 0.7 ㎝の孔が穿たれている。

17 は高坏の脚部である。脚部全体を縦方向のミガキで調整した後に、横方向の並行沈線および列点文を施す。スカシ孔は三方向である。

18 は器台の脚部である。外面の裾には横方向に並行する沈線を巡らせた後に、縦方向のミガキ調整を施す。内面はハケ調整である。

20・21 は蓋である。20 は全体にナデ調整を施すが、内面上部にはケズリの痕跡が残る。21 の外面上部は縦方向の弱いハケ調整、下部は横方向のナデ調整を施す。内面上部には指頭圧痕が残る。

土師器（図 42 ～ 56 - №23 ～ 340、巻頭図版 1、図版 22 ～ 41）

コンテナ約 160 箱分の土師器が出土している。うち約 150 箱分が自然河道 1031 - NR からの出土である。出土した土師器は古墳時代前期の資料が中心である。中世の土師器は別に項を設けて述べることとする。

自然河道 1031 - NR

1031 - NR の土師器は出土量が膨大であり、整理・報告作業に充てることができる期間も限られるため、完形品およびそれに類する資料を中心に報告資料を選定している。そのため、器種別の比率等の情報は遺構全体の様相を正確に反映しているわけではない。出土した土師器全体では甕および小型丸底土器の比率が高いのが特徴である。

先述のとおり 1031 - NR の中層および下層からは弥生時代前期から後期までの土器も出土している。時期的位置付けが不明瞭な資料もあり、ここで土師器として報告している土器の中にも本来は弥生土器に含まれるべき資料が存在する可能性がある。

遺構の項で述べたとおり遺構の掘削段階での中層・下層の判別が難しく、遺物の取り上げ段階で両者が部分的に混ざり合っている可能性が高い。そのため、ここでは層位の差が明瞭な上層と中・下層とで分けて報告することとする。土師器の出土量は上層がもっとも少なく、その量は 1031 - NR 出土土師器全体の 1 割未満である。

1031 - NR 上層（図 42・43 - 23 ～ 38、図版 22・36・38）

上層の出土土器はコンテナ 8 箱分である。中・下層と比較して出土量は少ないが、甕・壺を中心に完形品およびそれに準ずる資料が一定量存在する。

土師器は上層全体から出土しているが、とくに東岸に近い位置からの出土が多い（図版 8）。

器種別では小形を含む壺と甕が多い。中・下層に多く見られる小型丸底鉢と小型器台は破片が数点出土しているのみである。高坏は半球状の椀形の坏部をもつ資料は見られず、長脚で大型の坏をもつものが出土する。

23 は二重口縁壺の口縁部～肩部である。口縁はほぼ直線的にのびる。二重口縁の接合部分は内面に明瞭な段はなく、わずかに接合線が確認できる程度である。外面は丸くやや垂下させることで段を作り出している。口縁部内面および外面はナデ調整を施しており、装飾はない。体部内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。24 は広口壺である。表面の磨滅が激しいため、細かな調整は不明であるが、体部外面と口縁部内面に粗いハケ調整の痕跡が認められる。口縁部外面はその後にナデ調整を施しているようである。上半部は滑らかに整形されているが、下半部は器壁にわずかな凹凸が残る。

25・26 は小形の壺である。25 は球形の体部に短い直線的な口縁部が付き、口縁部と体部の境界は内外面とも稜は不明瞭である。他に出土している小型丸底壺と比較して断面は厚手である。外面、特に底部付近はハケで強く削り取っている。外面は部分的に破片が薄く落剥している。26 は球形の体部に内湾する口縁が付く。外面は体部中段に弱いハケ調整、上半部はヨコ方向にナデを施す。体部内面はケズリを施す。

27 ～ 31 は甕である。27 は口縁部～肩部の破片である。口縁は内湾し、口縁端部を丸く肥厚させる。外面は横方向のハケ調整をナデ消す。体部内面はケズリを施すが、口縁部との境界部分は未調整のま

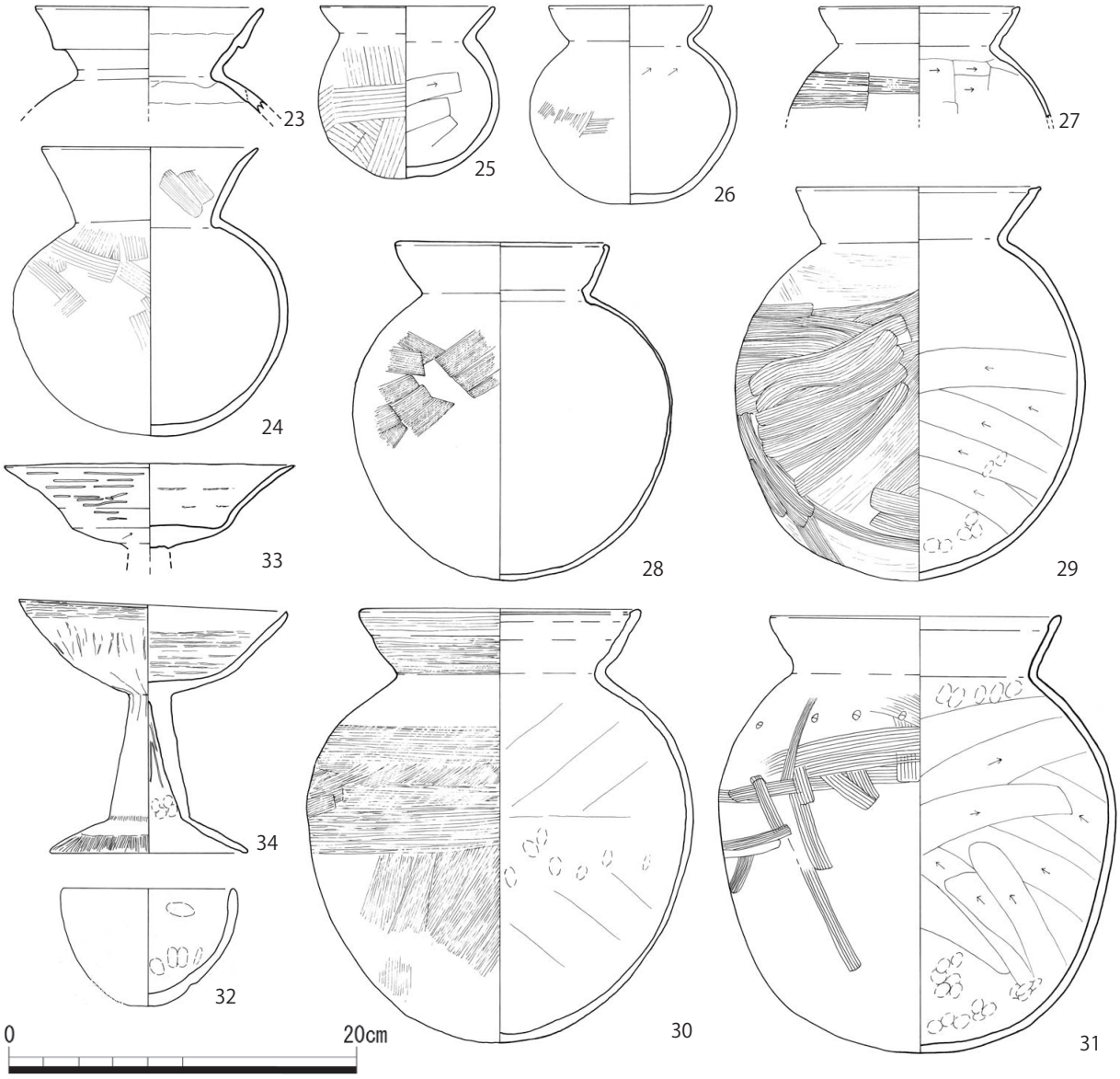


図 42　1031 - NR 上層出土　土師器 ①（S = 1/4）

ま残る。27 は球形の体部をもつ。体部中ほどは器壁が非常に薄く、厚さ 1 ㎜前後である。口縁部は内湾の度合いが強い。外面はハケ調整、上半部はさらにナデ調整を施す。29 はわずかに内湾する口縁部をもつ。口縁端部は内面に肥厚させ、外面端部はシャープにおさめる。幅約 1.2 ㎝の単位のハケ調整を体部外面全体に施す。口縁部～肩部は横方向のナデを施すが肩部にはハケの痕跡が残る。30 は口縁の内外面に小さな段をもつが、これは口縁部に強く横方向のナデを施した結果である。口縁端部は内傾させ厚く肥厚する。外面には細かなハケを施す。下半部には煤が付着する。31 は長胴気味の甕である。口縁部と体部の境界は内外面ともに不明瞭である。口縁端部は肥厚し幅約 1 ㎝のにぶい端面を内側に作り出す。肩部には米粒大の刺突痕が横に 3.5 ㎝間隔で 5 つ並んでいる。器壁はやや厚く、体部で約 5 ㎜を測る。

32 は粗製の鉢である。丸底であるが、底部はわずかに平底気味になっている。内外面ともに強めのナデで仕上げており、部分的に指頭圧痕が残る。

33・34 は高坏である。33 は坏部である。体部と口縁部の境は比較的明瞭で、口縁は下半部に屈曲点をもちながら強く外反する。口縁部外面は横方向のミガキを施す。内面は体部と口縁部の境が強

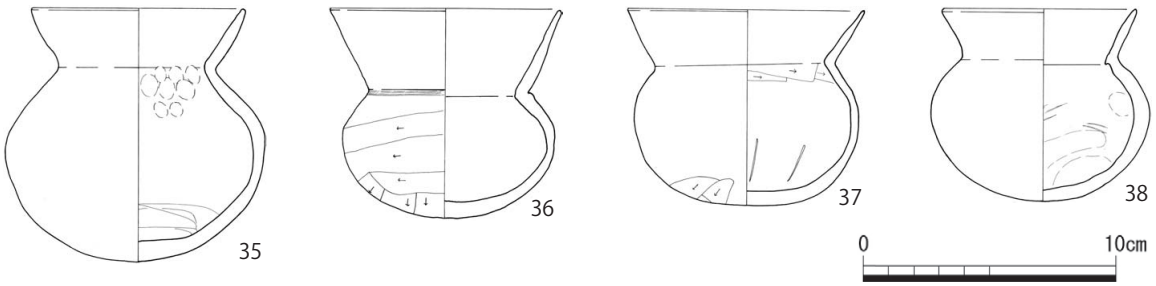


図 43　1031 - NR 上層出土　土師器 ②（S ＝ 1/3）

くナデ付けられている。口縁部内面には粘土の接合痕が残る。34 は直線的にのびる細長い柱状部に屈折してひらく裾部をもつ。坏部の稜は内外面とも不明瞭である。口縁部にはミガキ、体部にはケズリを施す。裾部には放射状の細かいハケを施した後、上半部はそれを横にナデ消している。脚部内面には絞りの痕跡が明瞭に残る。

35 ～ 38 は小型丸底壺である。35 は上半部がやや直線的な球形の体部をもつ。口縁部下の稜は内外面とも不明瞭である。外面には全体にナデを施す。底部内面には粗いケズリを施す。36 は内面及び口縁部外面にナデ、体部外面にはケズリを施す。口縁部と体部の境界の稜は明瞭で、とくに外面は強くナデつけて稜を作り出している。37 は直線的な口縁をもつ。全体にナデ調整を施すが、部分的にケズリの痕跡が弱く残る。38 は短くやや外反する口縁をもつ。外面にはやや強いナデ、内面にはケズリを施す。内面の口縁部と体部の境界には、上からナデつけた際に余った粘土が部分的に垂れ下がっている。

上層出土の土師器は中・下層のものと比較して形態や器種などにそれぞれ新しい様相が見られ、布留 2 式に相当すると考えられる。

1031 - NR 中層・下層（図 44 ～ 56 － 39 ～ 307、図版 23 ～ 38）

中層・下層の出土土器はコンテナ 142 箱分である。図を掲載していない資料の状況については必要に応じて記述することとする。

39 ～ 44・53 は短頸壺である。41 ～ 44 は器高 30 ㎝を超える大型品で、破片資料である 39・40 も同様の大型品であると推測される。39 は外反する口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめるが、外面の口縁端部直下を横にナデつけるため、やや角張って見える。内外面とも口縁部と体部の境界を横に強くナデつけており、境界の稜は不明瞭である。外面は斜め方向に、内面は横方向に強いハケ調整を施す。

40 は強く外反する口縁部をもち、口縁端部は内側にやや肥厚させて上面に平坦面を作る。器高は不明であるが、他の短頸壺よりもやや口縁が高い壺であると推測される。外面及び口縁内面にはやや強い横方向のナデを施す。体部内面は、口縁部との境界からやや下がった位置からケズリを施す。41 は器高 37.2 ㎝の大型品で、口縁部高は 6.4 ㎝と器高に比して低い。底部は平底である。口縁部はわずかに外反する。外面は全体にやや粗いミガキを施す。体部内面は全体に丁寧にケズリを施し表面は平滑に仕上げる。42 はやや波打ちながら外反する口縁をもつ丸底の壺である。調査区南壁 1031 - NR 下層からの出土である。口縁端部はわずかにつまみ上げる。上半部は縦・斜め方向にハケ調整を施した後、横方向のハケを施すが、肩部付近はそれが弱くナデ消したような状態になっている。肩

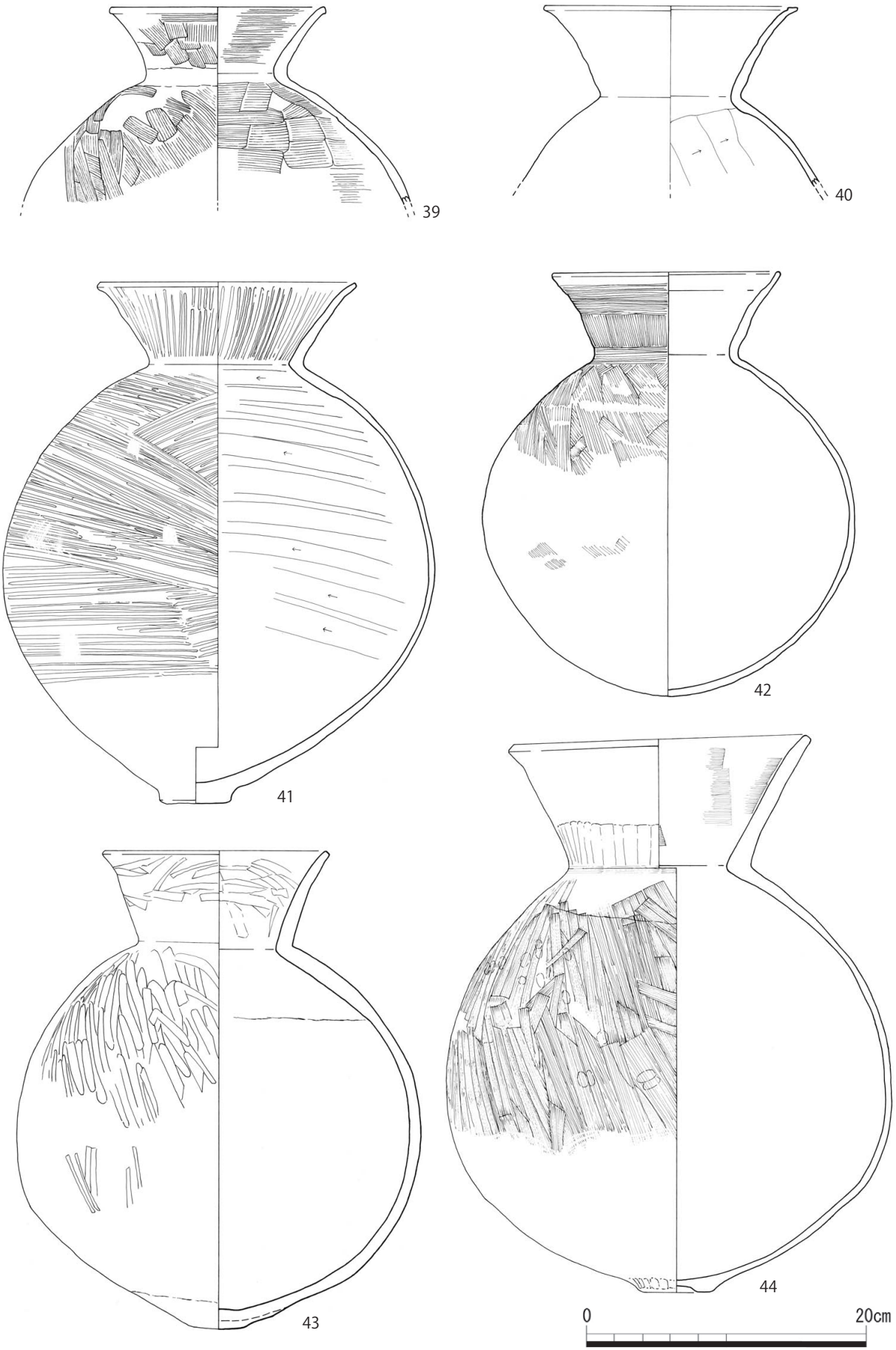


図 44　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ①（S = 1/4）

部より下は全体に煤が付着する。53 は直線的に外傾する口縁をもつ。最大径は体部の中ほどにくる。外面には全体にハケ調整を施し、その後、口縁部には横方向のナデを施す。口縁部と体部の境界の稜はナデによってやや不明瞭となっている。体部内面は丁寧なケズリにより平滑に仕上げられており、その後に付いた指頭圧痕が多数確認できる。

43・44 は下層の土器集中地点から並んで出土している（巻頭図版 1 右下の手前）。43 はやや外反する口縁をもつ。体部下半に最大径がくる下膨れの形状である。口縁部と体部の境界の稜は内外面ともに明瞭である。底部は平底だが突出の度合いは低く、やや安定感に欠ける。まず丸底状に整形した後に底部に粘土を足して平底を作り出しており、粘土の接合痕がわずかに外面に残る。外面と口縁部内面はハケ状の工具で全体に強くナデつけている。体部内面は全体に強くナデ調整を施し平滑に仕上げる。44 は器高 39.9 ㎝を測る大型品である。短頸直口壺に含まれる資料である。口縁部高は 9.5 ㎝で、器高との比率においても短頸壺の中では口縁部が高い個体である。直線的に外傾するしっかりとした口縁部をもち、くびれ部の稜は明瞭である。底部は平底で、中心には直径約 2.5 ㎝のくぼみが存在する。体部上半には単位が細かなハケ調整をやや強く施す。体部外面下半と口縁部にはナデ調整を施す。口縁部外面の下半は面が残るよう強めにナデつける。体部内面は丁寧にナデ調整を施し平滑に仕上げられている。体部の器壁は薄く、もっとも薄い中ほどで約 5 ㎜である。

45 は下膨れの体部をもつ平底の壺である。底部の直径は 6.5 ㎝を測り、安定感が高い。通有の二重口縁壺とは異なるが、口縁部の中ほどの内外に稜が付き二重口縁状を呈する。口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部にはナデ調整、肩部にはハケ調整、肩部より下には丁寧なケズリを施す。

49 ～ 50 は口縁部と体部の境界の稜が不明瞭な短頸壺である。49 はわずかに外反する短い口縁部をもつ。口縁端部はごくわずかに外側に折り返して端面を形成している。口縁部および体部外面は細かなハケ調整を密に施す。体部内面はケズリ調整を施しており、そのため内面の稜は明瞭である。50 は内外面ともに稜が不明瞭である。口縁部、とくに上部は強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面は全体にやや太めのミガキを施す。体部内面はハケ状の工具によるケズリを施す。体部内面の上端付近はケズリが弱く、体部と口縁部の接合時の折り返しや指頭圧痕が残る。

51 は広口壺である。強く外反して広がる口縁で、口縁端部には端面をもつ。口縁部上半にはナデ調整の上にミガキ状の浅い沈線が巡る。底部は丸底状であるが、わずかに平坦部をもつ。体部には細いハケ調整を施す。

52 は大型の直口壺である。やや縦に縮んだ扁球状の体部にわずかに外反する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめる。体部と口縁部は別作りで、両者が剥離した状態で出土した。口縁部外面の下半と体部外面の上半にはミガキを施す。下半は表面の磨滅のため調整は不明である。内面は全体にケズリを丁寧に施し平滑に仕上げている。

46 ～ 48・55 ～ 60 は直口壺である。46 は直線的に外傾する口縁部をもつ。くびれ部の直径は口径の約半分と非常に締まる。口縁部には横方向のミガキの後、放射状に縦方向のミガキを精緻に施す。体部には横方向のミガキをやや乱雑に施す。外面の口縁部と体部の境界には、直径 2 ㎜前後の棒状の工具を用いて刺突の連続を施して溝を巡らす。口縁内面の下半には爪状の刺突痕が見られる。体部内面は強いハケ調整を施す。内面は口縁部と体部の境界部分はケズリによる面取りを行う。47 は直口壺の口縁であると考えられる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともに横方向のミガキの後に放射状に縦方向のミガキを施す。体部は内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。内面は口縁部と体

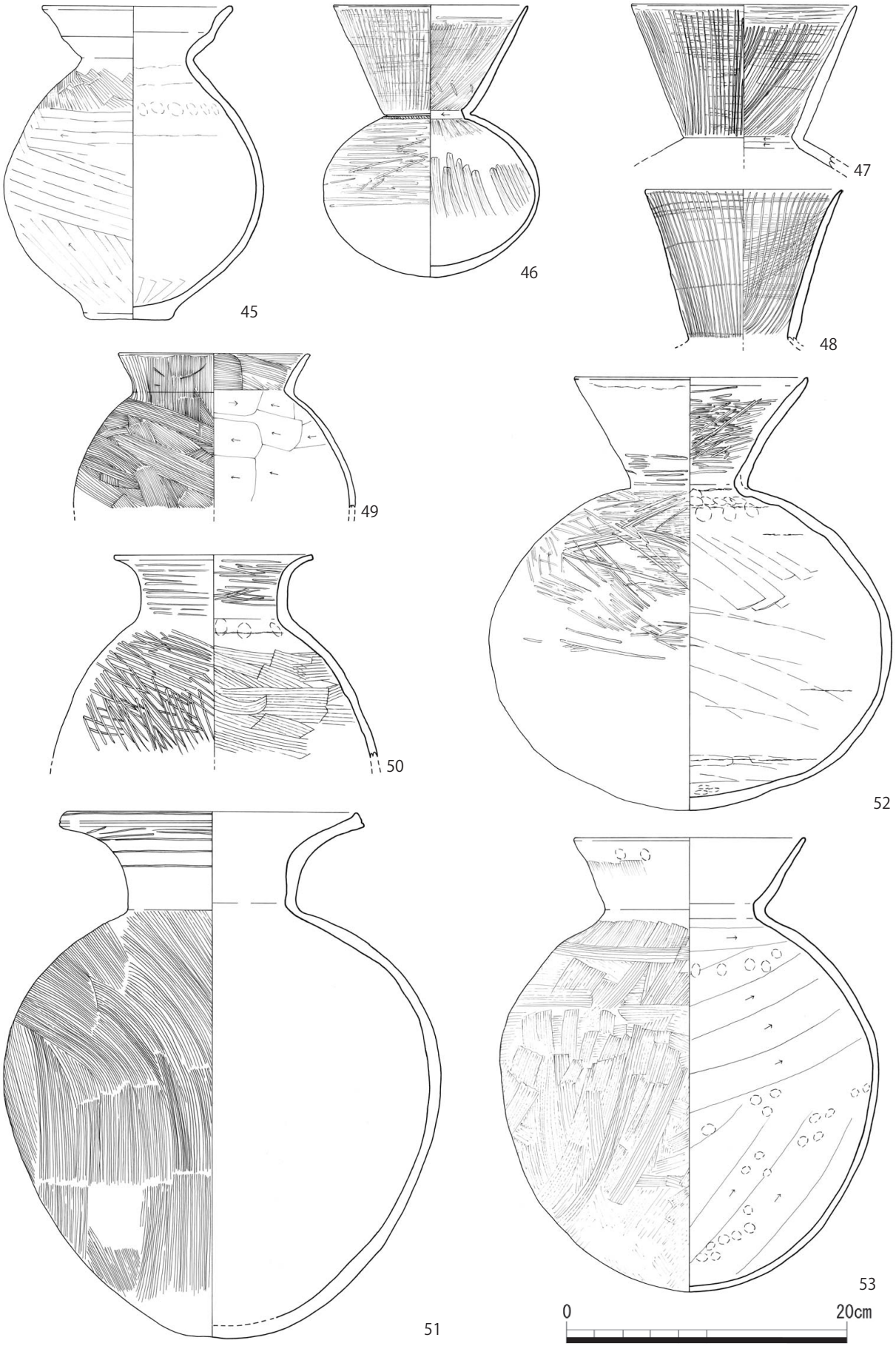


図 45　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ②（S = 1/4）

部の境界部分はケズリによる面取りを行う。48 は直口壺の口縁であると考えられる。口縁端部は丸く尖らせる。口縁部の外傾の度合いは 47 よりも弱い。47 と同様に口縁部は内外面ともに横方向のミガキの後に放射状に縦方向のミガキを施す。ただし内面の横方向のミガキは真横ではなく右肩上がりの部分が見受けられる。

55 は器高 9.8 ㎝の小型の直口壺である。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面には横方向のミガキの後、縦方向のミガキを施す。ミガキの間隔は疎である。体部下半にはケズリを施す。体部中ほどには粗いミガキを施す。それよりも上部はナデ調整である。56 はわずかに内湾する口縁部をもつ。口縁端部は尖らせる。口縁部には縦方向のミガキ、体部には横方向のミガキを施すが、いずれもやや乱雑である。体部下半はケズリを施す。口縁部と体部の境界には、口縁部のミガキの下端がハケ状の痕跡として残る。肩部には粘土の接合痕が見える。57 は尖り底気味の底部をもつ。表面は磨滅が激しく細かな調整は不明だが、肩部にはハケ調整の痕跡が残る。58 はやや縦に縮んだ球状の体部に、ごくわずかに外反する口縁が付く。口縁端部は丸くおさめる。全体にケズリ気味のハケ調整を施し、上半部にはその後、横方向のナデ調整を施す。

59 は精製の直口壺である。体部は中ほどが横に強く飛び出す扁球状である。口縁部は直線的にのび、端部はやや尖らせる。外面全体および口縁部内面に細かくミガキ調整を施す。体部内面は丁寧にナデ調整を施す。60 はやや頸の太い直口壺である。口縁部および肩部には細いミガキを施すが、口縁部はナデ調整との判別が難しい。体部下半はケズリを施す。内面には下半に粘土の接合痕が残るほかは丁寧にナデ調整を施す。

61 は平底の壺である。口縁部の高さは不明である。表面の磨滅が激しいため調整については底部やや上の縦方向の細かなケズリのみが判別可能である。口縁部と体部の境界の稜はやや不明瞭である。胎土や色調は他の土師器と共通する。

62 は縦長の体部に二重口縁風の内湾する口縁部が付く。成形・整形ともに粗雑な作りである。口縁端部が最大径となる。口縁部は筒状の粘土から引き出して作られている。

63 は平底の壺の体部であると考えられる。最大径が下半にある下膨れの体部である。底部には直径約 7 ㎜の孔が焼成後に穿たれている。体部上半にはハケおよびナデ調整を施す。体部下半には乾燥時のひび割れが多く見られる。

64 は精製の壺である。二重口縁壺の頸部である可能性が考えられる。内外面に放射状の縦方向のミガキを施す。体部には縦方向の細かなハケを施す。頸部と体部の境界には直径 1 ㎜未満の棒状工具による溝が巡る。

65 は壺の体部である。体部は扁球形を呈し、口縁部はやや外傾すると想定される。ケズリ調整を施す。体部下半には直径 4 ㎝大の円形の孔が穿たれている。

66 は大型の二重口縁壺である。山陰系の土器である可能性がある。口縁端部は外側に小さく肥厚させる。頸部から肩部には幅 1 ㎝前後の単位のハケ調整を強めに施す。口縁部および頸部には横方向の強いナデ調整を施すが、頸部にはハケの痕跡が残る。体部内面はハケによって削られている。受部内面には部分的に黒漆が付着している。

67 ～ 73 は二重口縁壺の口頸部である。67 は直線的に大きくひらく口縁部をもつ。内外面ともナデ調整を施す。内面の頸部下半以下は調整がやや粗雑で体部との接合痕が確認できる。68 は口縁部の上半を欠く。頸部の外面には横方向のミガキ、内面にはケズリを施す。受部内面には放射状のミガ

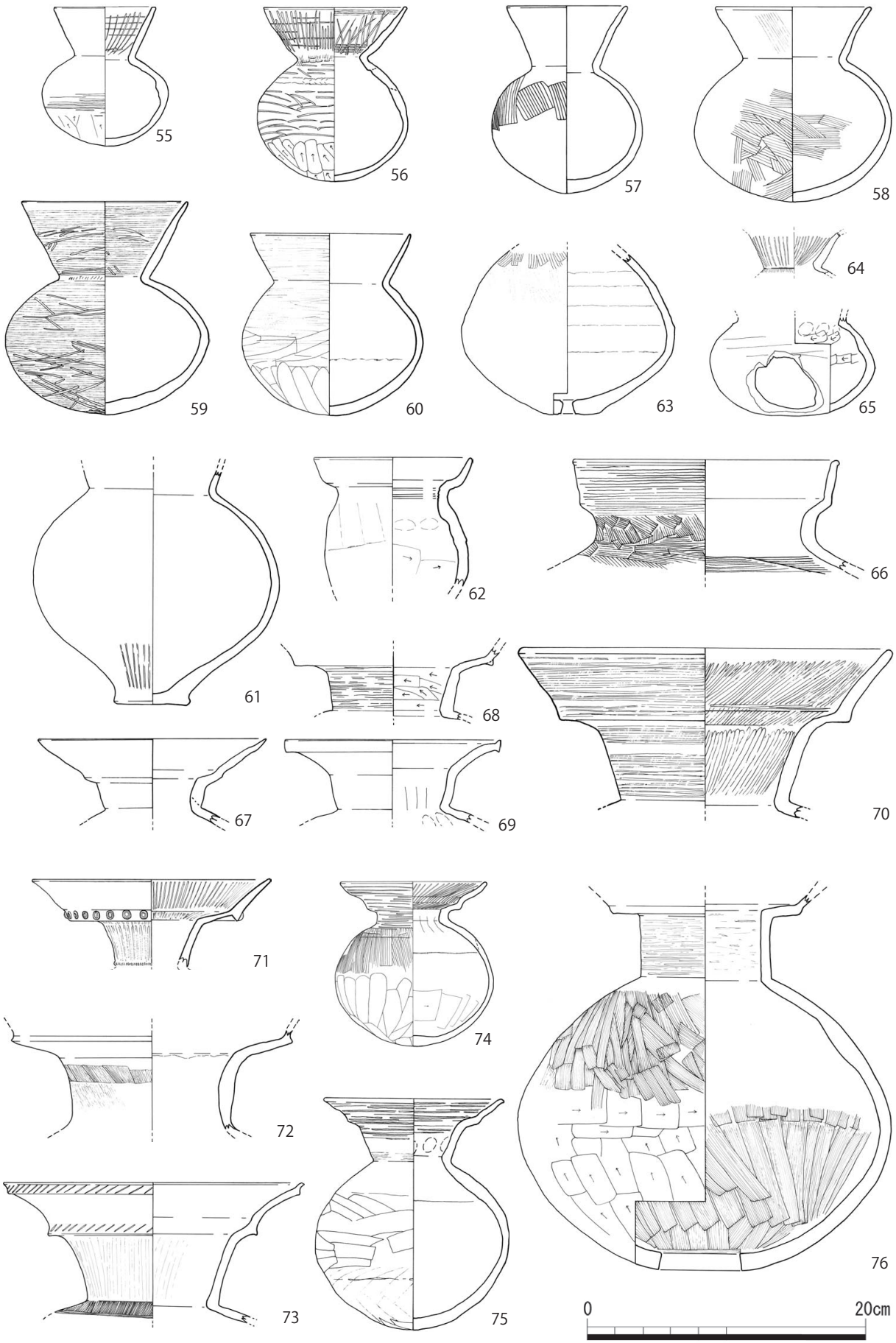


図 46　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ③（S = 1/4）

キを施す。外面の口縁部と受部の境界には若干垂下させる形で粘土を付加し、稜を明瞭にしている。69 は内湾気味の頸部に外反する広口の口縁がつき、口縁端部は外側に向かって面をもたせる。内外面ともにナデ調整を施すが、内面には指頭圧痕や一次調整時の静止痕が残る。70 は大型の二重口縁壺である。直線的に外傾する頸部にやや外反する口縁部がつく。外面は横方向のミガキを施す。内面は頸部・受部・口縁部それぞれに独立した放射状のミガキを施す。ミガキの単位は 1.5 ㎜前後と全体に粗い。内面の口縁部と受部の境には横方向のミガキを施し、境界を明瞭にしている。71 は外傾する細い頸部に広口の口縁部がつく精製の二重口縁壺である。口縁部と受部の境には粘土を付加し稜を明瞭にした上で、円形の粘土板を全周に等間隔で貼り付けている。粘土板の直径は約 6 ㎜で、それぞれ 4 ㎜大の竹管文を施す。頸部と体部の境には刻み目を施す。内外面ともミガキを施す。内面の口縁部と受部のミガキは横方向のナデによって分断されているが、もとは一連のミガキである。72 はわずかに外傾する太い頸部に広めの受部をもつ。全体を横方向のナデ調整で仕上げているが、頸部外面の上半には規則的に施された斜めのハケ調整の痕跡が残る。内面には黒漆が塗られている（図版 26）。頸部下半の漆は受部よりも薄くなっており、地の色が透けて見える。73 は直線的にやや外傾する頸部に強く外反する口縁部をもつ大型の二重口縁壺である。各部の稜は内外面ともに明瞭に整形されている。口縁部外面の上端と下端には等間隔で斜めの刻み目を施す。口縁部にはナデ調整、頸部には縦方向のミガキ、体部には細かなハケを施す。

74・75 は中型の二重口縁壺である。74 は球形の体部、直立する非常に短い頸部、上部が緩やかに内湾する口縁部をもつ。口縁部外面には横方向のミガキ、内面には受部と口縁部で一連の放射状のミガキを施す。体部外面の上半には斜め方向のハケを施す。ハケの上から横方向のミガキを部分的かつ弱めに施している。体部下半はケズリのみであるが、全体に平滑に仕上げられている。75 は球形の体部、直線的に外傾する頸部と口縁部をもつ。口縁部と受部の境の稜は明瞭である。口縁部は横方向のミガキを施すが、頸部以下はケズリの痕跡が明瞭に残るなど仕上げはやや粗雑である。

76 は底部穿孔を施した大型の二重口縁壺である。口縁部の大半は失われている。中ほどがやや横に張り出した体部、垂直に立ち上がる頸部、平坦な受部からなる。体部と頸部の境は内外面ともに稜が明瞭である。外面の体部上半と内面の体部下半は細かなハケ調整を施す。ハケの単位は内面がやや大きい。外面の体部下半はケズリを施す。穿孔の直径は 6.0 ㎝で、焼成前に行われている。

77 ～ 79 は短頸壺である。77 は直線的に外傾する口縁をもち、口縁端部は内面にやや肥厚させて面を形成する。器壁はやや厚い。外面はハケ調整ののち横方向のナデ調整を施す。体部内面には 2 ～ 3 ㎜大の礫が目立つ。口縁内面の下部には 4 ㎜大の爪痕が等間隔に並ぶ。78 は緩やかに内湾する口縁をもつ。79 は外反する口縁をもつ。外面には全体に煤が付着する。外面上半は横方向の強いナデ調整で仕上げている。下半部の調整は付着した煤の影響で不明であるが、全体に平滑に仕上げられている。内面はケズリが施されており、上半部ほど粗い傾向にある。

80 ～ 90 は中型の壺である。個体によっては小型丸底壺あるいは甕との差が不明瞭である。80 はわずかに内湾しつつ外傾する口縁をもつ。全体を単位が細かいハケで調整する。内面の頸部下には粘土紐を接合した際の指頭圧痕が明瞭に残る。器壁は薄く全体に 1.5 ㎜前後を保つ。81 は中ほどに緩やかな段を有する内湾気味の口縁をもつ。上半部はナデ調整、体部下半はケズリを施し、表面は比較的平滑に仕上げられている。最大径となる体部中ほどの内面には粘土紐の接合痕が明瞭に確認できる。82 は 81 と同様の口縁部をもつ。体部は最大径が中ほどよりやや下に位置する下膨れの形状を呈する。

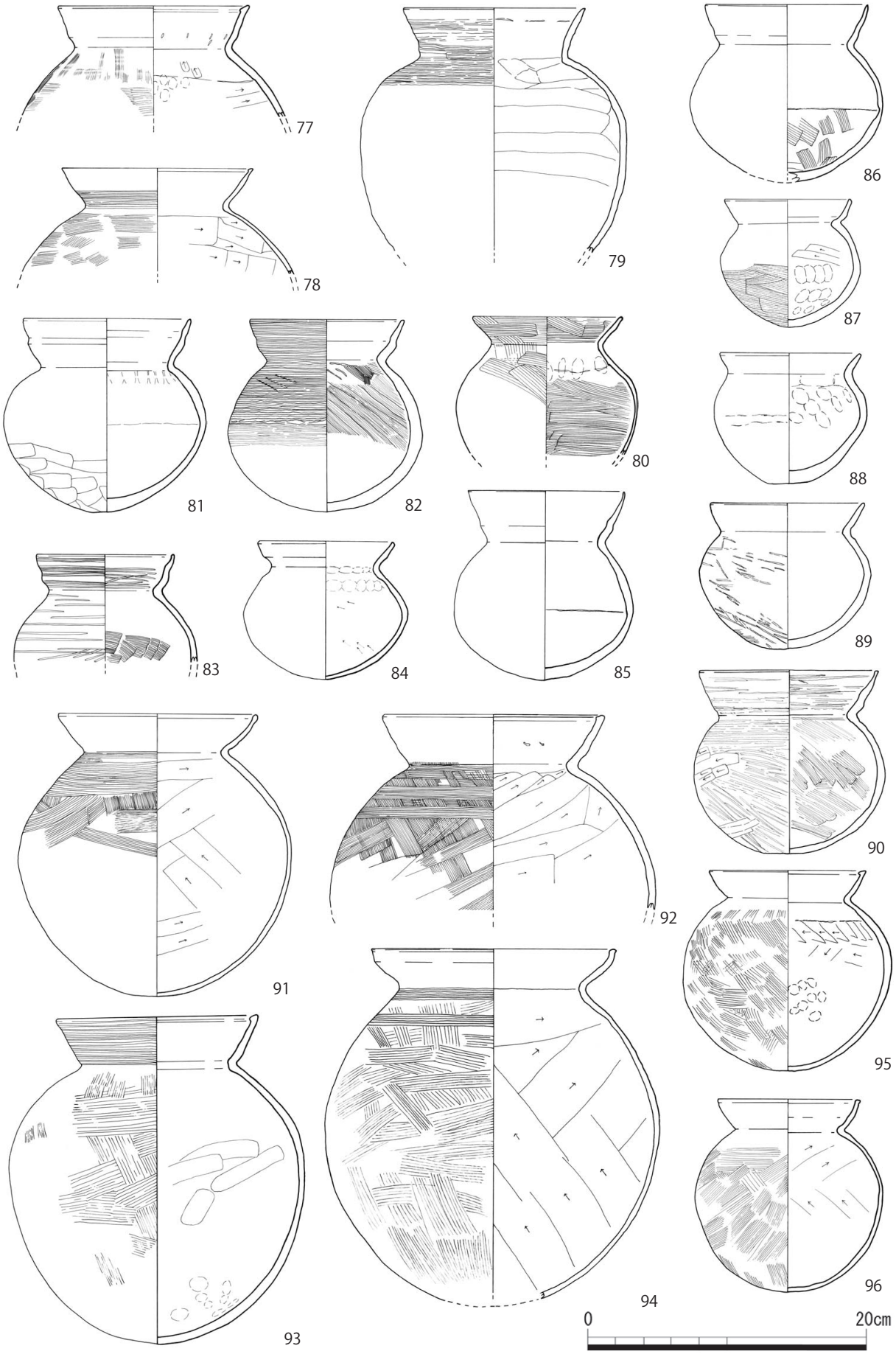


図 47　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ④（S = 1/4）

外面は横方向の細かなミガキを施す。体部内面は左上がりの細かなハケで掻き取るように整形している。83 は 81・82 と同様に口縁部の中ほどに段をもつ。口縁端部は小さく垂直につまみ上げ丸くおさめる。外面は横方向のミガキで仕上げているが、部分的にケズリの痕跡が残る。84 は頸部への強いナデつけによって生じた緩い稜が口縁部の中ほどに存在する。口縁端部には小さな面をもたせる。外面は全体に丁寧なナデ調整を施すが、内面にはケズリの痕跡や指頭圧痕が明瞭に残る。85 はやや長めの口縁部をもち、口縁の下半に緩い段がつく。各部の稜はナデによって整形されており、全体にやや鈍い。体部下半が最大径となる。表面の磨滅のため細かな調整は不明であるが、全体に平滑に仕上げられている。86 も口縁部下半に緩い段をもつ個体である。外面は全体にナデ調整を施し、底部にわずかにケズリの痕跡がある。体部内面中ほどにある粘土紐の接合痕より下にはハケの痕跡が明瞭に残る。

87 は内湾気味の口縁、幅の狭い平坦な受部をもつ。底部は尖底である。外面はハケ調整の後、上半部をナデ調整で仕上げる。体部内面には指頭圧痕や粗いケズリの痕跡が残る。88 は平底の体部に、外反気味の口縁をもつ。全体の調整は粗雑で外面にも細かな凹凸が残る。器壁も体部で 5 ㎜前後と厚い。89 は直線的に外傾する口縁をもつ。体部外面にはやや乱雑なミガキを施し、口縁部にはナデ調整を施す。内面の口縁部と体部の境は稜が明瞭である。90 は口縁部の内外面にナデによる緩やかな段をもつ。底部はわずかに平底状である。外面には全体にやや乱雑なミガキを施すが、部分的に前段階のケズリの痕跡が残る。体部内面は細かなハケで丁寧に整形されているが、体部中ほどはやや粗い。

91 ～ 124 は甕である。1031 - NR からは多量の甕が出土している。そのほとんどがいわゆる布留甕である。

91 は内湾する口縁部をもち端部は内側にやや肥厚させ丸くおさめる。体部下半には煤が付着する。92 は緩やかに内湾する口縁部をもち、端部は内側に強く内傾、肥厚させる。器壁は全体にやや厚手である。体部のハケ調整は直線的に強く施される。口縁部内外面のナデ調整も強めに施しており、横方向の線が見て取られる。肩部以下には煤が付着する。93 は下層土器集中部からの出土である。口縁は直線的に立ち上がり、角度は垂直に近い部類である。口縁端部はやや強く肥厚させる。外面には全体に単位が大きい弱めのハケ調整が施される。外面には全体に煤が付着する。94 は口縁上半部を上方につまみあげる。外面の端部下には弱い沈線を巡らせる。体部の外面は弱めのハケ調整、内面にはケズリを施す。底部の形状は不明である。95 は球形の体部に内湾する口縁をもつ。口縁端部は内側に肥厚させややシャープにおさめる。口縁部と体部の境は細い工具でナデつけられている。体部外面は斜め方向のハケ調整が施され、下半部には全体に煤が付着する。96 は 95 とほぼ同様の形状であるが、体部の張りはやや弱い。口縁端部は内外面にわずかに肥厚させ小さな平坦面をもたせる。口縁部と体部の境には 95 よりもさらに明瞭な稜が存在する。

97 は球形の体部に直線的に外傾する口縁をもつ。端部は内側に肥厚させ丸くおさめる。外面のハケ調整は単位が明瞭である。底部よりやや上の器壁が薄く作られている。98 は球形の体部にわずかに内湾する口縁部をもつ。頸部は比較的狭まる。全体のプロポーションはやや歪である。口縁端部は内外にやや肥厚させ上部に小さな平坦面をもたせる。99 は内湾する口縁部をもつ。端部は内外にわずかに肥厚させ上部に平坦面をもたせる。外面全体に煤が付着しているため細かな調整が観察できない部分も多いが、全体にやや強めのハケ調整を施す。肩部には米粒大の刺突が 4 つ並ぶ。

100 は中層から出土している。わずかに外反する口縁をもち、端部は上方へ小さくつまみ上げる。

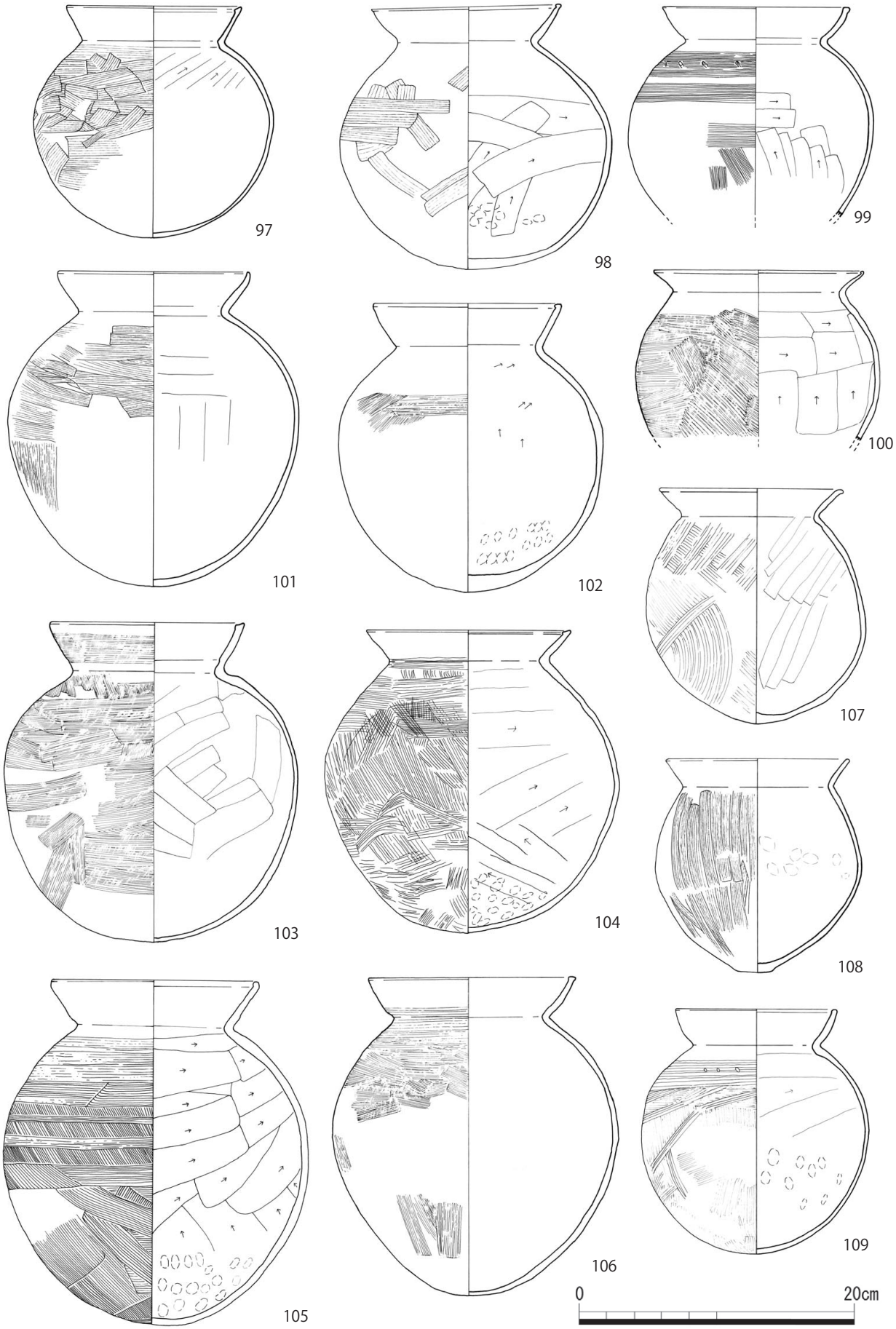


図 48　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑤（S = 1/4）

体部は倒卵形を呈すと考えられる。頸部内面は丸くにぶい稜を形成して屈曲する。体部外面には左上がりのタタキを施す。体部内面にはケズリを施す。ケズリは砂粒の動きからその単位を見て取ることができるものの、全体に平滑に仕上げられている。大和型庄内甕であると考えられる。庄内甕の破片は他に数点出土しているが、図化できる程度の破片は非常に少ない。

101 はわずかに内湾する口縁をもつ。体部は球形で中ほどのやや上が張り出す。各所の稜や端部はナデ調整によって全体に丸みを帯びるように整形されている。体部下半には煤が付着する。102 はわずかに縦に長い球形の体部、ほぼ直線的に立ち上がる口縁部をもつ。端部は内側に肥厚させて上部に平坦面を作り出す。口縁部と外面肩部には横方向のナデを施す。肩部よりやや下の位置にはハケの痕跡が残る。肩部より下には大量の煤が付着しており、外面下半部の調整は不明である。内面上半にはケズリを施すが、他の個体と比較してケズリの度合いが弱く、器壁はやや厚い。内面の下半部にはケズリが施されておらず、指頭圧痕が多く残る。底部はとくに器壁が厚い。

103 はわずかに内湾する口縁部をもち、端部は内側に肥厚させて上部に平坦面を作り出す。最大径は体部の上半に位置する。体部と比較して口縁部の器壁は厚手である。口縁部下端をナデつけて小さな受部を作り出す。体部外面は全体に横方向のハケ調整で仕上げ、部分的にタテ方向のハケが残る。肩部以下には煤が付着する。104 は中ほどが外に強く張り出す体部、直線的に外傾する短い口縁部をもつ。体部は単位の細かいハケ調整を施す。105 は直線的に外傾する口縁をもち、端部は内側に肥厚させて丸くおさめる。体部外面は全体に細かいハケ調整で仕上げており、最終の横方向のハケ調整の範囲が体部中ほどまで及んでいる。106 は尖底気味の体部に内湾する口縁部をもつ。口縁端部は内外にわずかに肥厚させて上部に平坦面を作り出す。体部は全体にハケ調整を施し、口縁部下半にもハケの痕跡が残る。肩部より下には煤が付着する。

107 はやや下膨れの体部に、わずかに外反する口縁をもつ。底部は尖底気味である。体部は斜め方向のハケ調整を施す。緩やかな弧を描くようなハケ調整が多い。下層の土器集中部からの出土である。108 は狭い平底の体部、直線的に外傾する口縁部をもつ。口縁端部は面取りを行い外方に小さな面を作り出す。体部外面は縦方向に長い弱めのハケ調整を施す。形状や調整から庄内傾向の甕であると考えられる。中層からの出土である。109 は球形の体部、内湾する口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚させて丸くおさめる。口縁部の器壁はやや厚い。肩部には横方向のハケ調整の後、米粒大の刺突を 3 点並べて施す。

110 はわずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。体部外面には右上がりの細かなタタキを施す。体部内面にはやや粗いケズリを施す。111 は内湾する口縁部をもつ。口縁端部は上部に平坦面を作り出す。体部外面にはハケ調整、内面にはケズリを施す。ケズリは比較的丁寧で平滑に仕上げている。肩部には煤が付着する。112 は底部を欠くが、縦に短い扁球形の体部であると考えられる。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はわずかに立ち上がらせて丸くおさめる。体部外面は肩部より下にはやや粗いハケ調整を施し、肩部には細かなハケを施した後にナデ調整を施す。内面は口縁部・体部ともに丁寧なナデ調整を施すが、体部には粘土紐の接合痕が残る。器壁は 6 ㎜前後と他の甕よりも厚手である。肩部以下には煤が付着する。

113 はわずかに内湾する口縁部をもち、端部は内側に肥厚させて上部に小さな平坦面を作り出す。体部外面はハケ調整、内面はケズリを施す。肩部より下には煤が付着する。114 はわずかに内湾する口縁をもつ。口縁端部は内外に肥厚させ上部にやや丸みを帯びた平坦面を作り出す。口縁部は内外

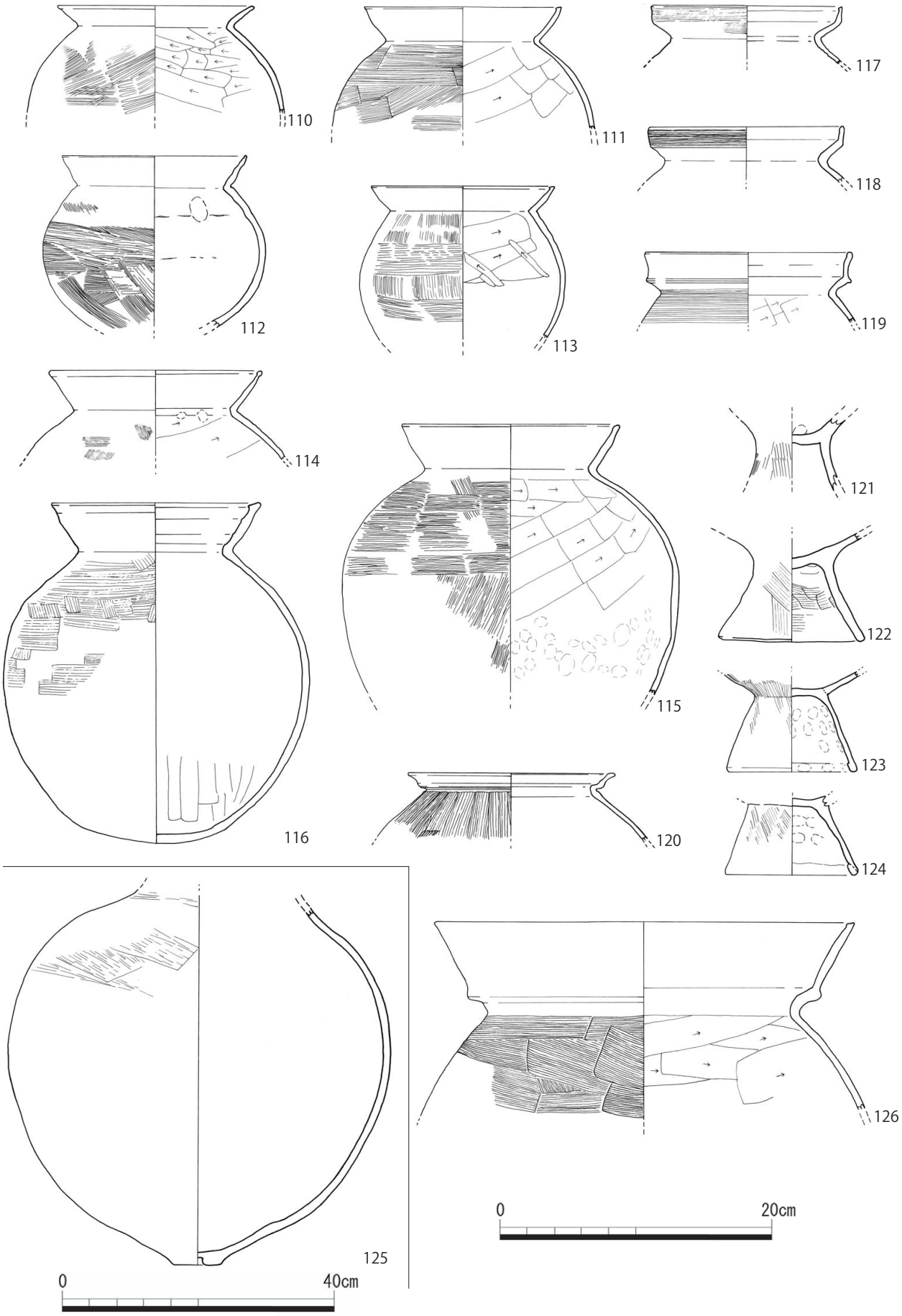


図 49　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑥（S = 1/4。125 のみ S = 1/8）

とも強めのナデ調整を施し、部分的に緩やかな溝状にくぼむ。115 は直線的に立ち上がる口縁部をもち、端部は内側に肥厚させて丸くおさめる。体部は下半を欠くが、上部に最大径がくる倒卵形であると考えられる。体部内面の上半にはケズリを施す。体部内面の下半には指頭圧痕が多量に残る。肩部より下には多量の煤が付着する。116 は直線的に外傾する口縁部をもち、端部は内側に肥厚させて内傾する平坦面を上部に作り出す。口縁部は内外面とも強くナデ調整を施しており、緩い段がつく。体部外面上半にはやや粗めのハケ調整を施す。器壁はやや厚手である。

117 は強く屈曲する頸部からわずかに内傾して直線的に立ち上がる有段の口頸部をもつ。口縁端部はやや鋭くおさめる。口縁部外面には横方向の細い沈線を巡らせる。吉備系の甕であると考えられる。118 も 117 と同様の甕である。117 よりも口縁部の沈線が深く明瞭で、頸部が厚い。

119 は大きく外反してひらく頸部から、口縁部がわずかに外反してのびる二重口縁状の甕である。頸部と口縁部の接続部にはナデによって明瞭な稜が作り出される。体部外面には横方向のハケ調整、内面にはケズリを施す。山陰系の甕であると考えられる。

120 は強くくびれて屈曲する頸部から短く外反する口縁部をもつ。体部外面には縦方向の粗いハケ調整を施す。内面はナデ調整によって仕上げられている。外面の頸部下には幅２㎜程度の深い沈線が巡る。東海系のＳ字状口縁台付甕（Ｃ類）であると考えられる。

121 ～ 124 は台部分の破片である。121 は台部と体部の境界が不明瞭でなだらかにつながる個体である。台部外面は縦方向の粗いハケを施す。胎土には１～２㎜大の砂礫が多く含まれる。胎土や形状などから、土師器では無い可能性も考えられる。122 は裾部がラッパ状にひらく台部をもつ。121 と同様に台部と体部はなだらかにつながる。台部は内外面ともハケ調整を施す。123 は直線的に広がる台部をもつ。台部裾は内側に折り返して端部を丸くおさめる。台部と体部との境界の稜は明瞭である。外面の台部上半から体部にかけては粗いハケ調整を施す。台部下半はナデ調整を施す。台部内面及び上面には指頭圧痕が多く残る。124 も 123 と同様の台部である。台部裾の端部は 123 よりもさらに丸みを帯びる。123・124 は東海系の台付甕である可能性が考えられる。

125 は下層から出土した大形の甕である。口縁部を欠くが残存高 57 ㎝、体部直径 57 ㎝を測り、今回出土した土器の中でもっとも大きい個体である。体部の形状はほぼ球形で、直径 7.6 ㎝の小さな台状の平底をもつ。底部の中心にはくぼみが存在する。口縁部の形状は不明であるが、体部上半から口縁部につながると考えられる緩やかな上がりが見られる。全体にナデ調整を施しており、体部上半には単位の大きいハケ調整の痕跡がわずかに残る。

126 は大きく外反してひらく頸部から、口縁部が直線的にのびる二重口縁状の甕である。口径が 30 ㎝を超える大型品である。口縁端部はわずかに肥厚させて上部に内傾する平坦面を作り出す。口縁部には内外面ともナデ調整を施す。体部外面には横方向のハケ調整、内面にはケズリを施す。山陰系の甕であると考えられる。

127 ～ 130 は大型の鉢である。127 は扁球状の体部に外傾する口縁部をもつ。口縁部は中ほどで屈曲して垂直気味に立ち上がる。各部の稜は全体に不明瞭である。内外面ともにナデ調整を施すが、体部外面の下半にはケズリの痕跡が残る。128 は扁球状の体部に大きく外反してひらく頸部から、口縁部がやや外反して直立する鉢である。口縁端部は内外に肥厚して上部に平坦面を作り出す。口縁と頸部の境の稜は明瞭である。口縁部と頸部には、線が明瞭に残るほど非常に強い横方向のナデ調整を施す。体部はケズリで整形し、その後外面にはナデ調整を施す。129 は 128 と同様の形状で、口縁

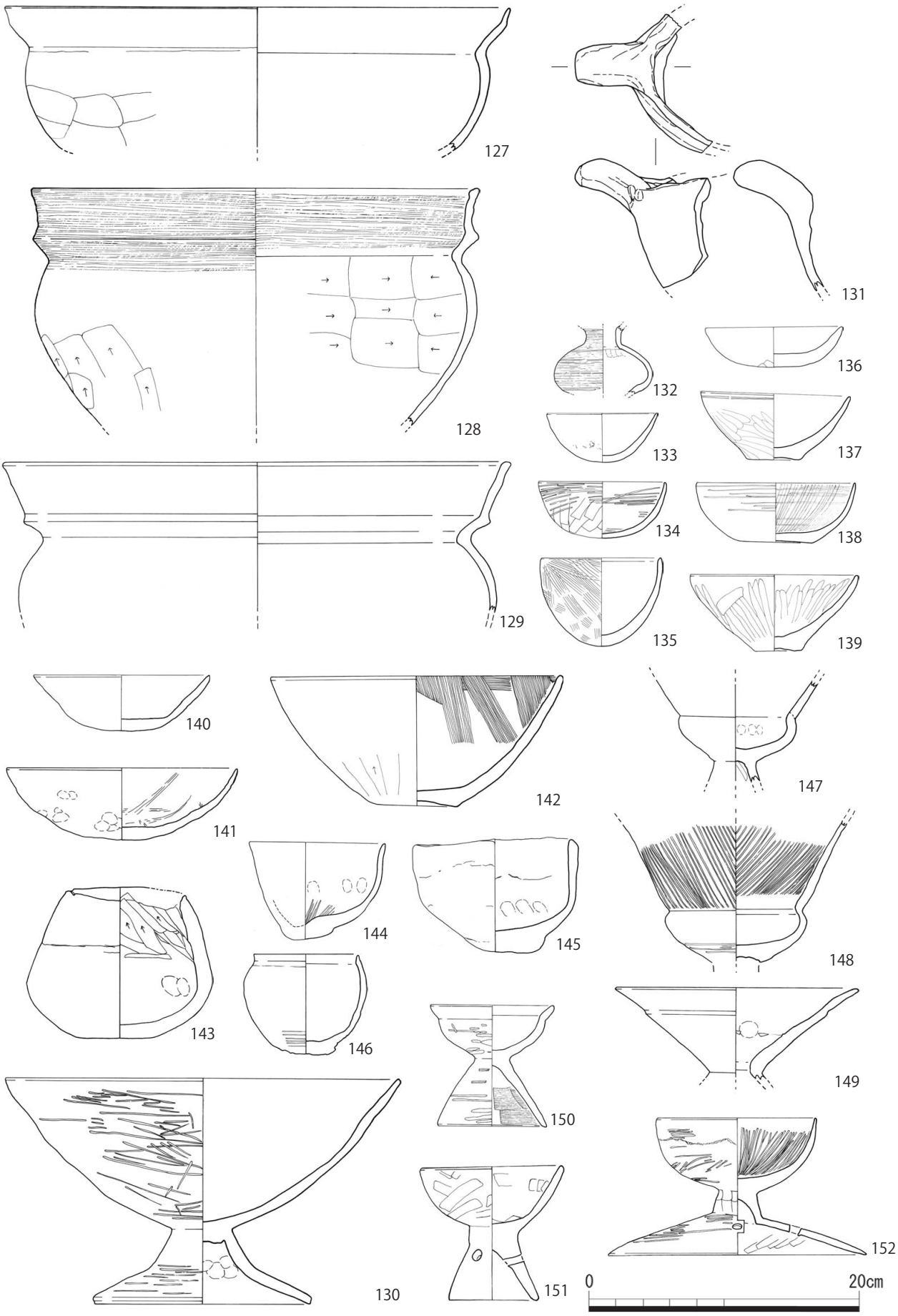


図 50　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑦（S = 1/4）

部が 128 よりも外側にひらく。体部の大半が失われているため、甕である可能性もある。128・129 は口縁の形状から山陰系の土器である可能性が考えられる。

130 は大型の脚付鉢である。坏部の形状は緩やかに内湾して立ち上がる深い椀形を呈し、端部は丸くおさめる。脚部は坏部の深さと比して短めで、直線的に広がり裾部でなだらかに屈曲してさらに広がる。外面は全体にミガキを施す。坏部内面の調整は磨滅のため不明で、内部には部分的に煤が付着する。脚部内面には指頭圧痕が明瞭に残る。

131 は把手である。平面楕円形の椀状の体部に長さ約 5.5 ㎝、直径約 3.3 ㎝の断面楕円形の把手が付く。下層からの出土である。

132 は壺であると考えられる。下膨れの扁球状の体部に、非常に細く短い頸部をもつ。外に大きくひらく口縁部をもつと推測される。体部の底には 4.5 ㎝大の円形の孔が開いており、その周囲には粘土の剥離痕が残る（図版 33）。貼り付けていた円形の底部が剥離したのか、あるいは台のようなものが存在していたのかは不明である。外面はミガキによって丁寧に仕上げられている。

133 ～ 146 は鉢である。個体によっては坏として分類しうるものも含む。

133 は浅い椀形を呈する丸底の鉢である。ナデ調整を施すが、外面にはひび割れが残る。134 は丸底の鉢で口縁は垂直気味に立ち上がる。口縁端部は鋭くまとめる。ケズリの後、ミガキを全面に施す。135 は砲弾型の形状を呈する深い丸底鉢である。外面には粗いハケ調整を乱雑に施す。内面にはナデ調整を施す。136 は浅い鉢である。底部は明確な面はもたないが平底である。全体をナデ調整で仕上げているが底部にはケズリの痕跡が残る。器壁の厚さは 5 ㎜近く、大きさに比してかなり厚い。

137 は平底の鉢である。底部外面中央は浅くくぼむ。表面の磨滅のため詳細な調整は不明だが、外面にはケズリによると考えられる細かな面が残る。138 は垂直気味に立ち上がる口縁をもつ平底の鉢である。底部外面は中央が浅くくぼむ。全体にナデ調整を施す。外面には部分的ながら焼成後に赤色の化粧土が塗られている。139 は 137 と同様の平底の鉢である。内外面ともに底部から放射状に広がる弱いケズリを施す。

140 は丸底の鉢である。内面の底部は平坦で口縁部が直線的に外傾する。全面にナデ調整を施し、底部外面にはケズリの痕跡が残る。形状的には高坏の坏部に近い。141 は内湾する口縁をもつ丸底の鉢である。大きさに比して深さは浅い。やや粗いナデを全体に施すが、指頭圧痕が多く残る。142 はボウル状の大型の鉢である。底部は平底で外面がややくぼむ。器壁は全体に厚い。内面上半には細かいハケ調整を施す。

143 は口縁部の上半が内傾する平底の鉢である。全体に粗雑なつくりで口縁上端の高さは揃えられていない。外面には粘土紐の接合痕が残る。器壁は非常に厚い。下半部には煤が付着する。144 は平底を意識して作られた鉢であるが、全体のバランスが悪く平底として自立することができない部分的にハケ調整を施すが基本的に手づくねで作られている。145 は垂直に立ち上がる口縁をもつ平底の鉢である。口縁端部は整えられておらず波打っている。全体の調整も弱いナデ調整を施すだけであり、器壁に凹凸が多く残る。146 は球状の体部に薄く短くつまみ上げられた口縁部をもつ平底の鉢である。底部の平底は台状を呈すが焼成前に半ば潰れている。外面底部付近にタタキの痕跡が残るほかは弱いナデ調整で仕上げられている。

147・148 は高坏であると考えられる。147 は椀状の坏部に直線的に外反する口縁部をもつ。器壁は全体に厚い。調整は表面の磨滅のため不明である。148 は 147 とほぼ同じ形状の大型品で、全体

の作りは精巧である。直線的に外傾する口縁部には内外面ともにミガキを施す。坏部にはナデ調整を施す。脚部の形状は不明である。

149 は器台であると考えられる。漏斗形の受部をもち、口縁よりやや下の位置には小さな段が巡る。受部から脚部には貫通孔を設ける。全体に丁寧なナデ調整を施すが、内面には粘土紐の接合痕が一部に残る。

150 ～ 179 は高坏である。

150 は直線的に広がる円錐状の脚部に埦形の坏部をもつ。口縁端部は屈曲して外傾する。全体形はやや粗雑なつくりであるが、外面にはミガキを施す。脚部内面にはハケ調整を施す。151 はゆるやかに広がる円錐状の脚部に埦形の坏部をもつ。脚部には三方向のスカシ孔をもつ。やや粗いナデ調整を施すが、部分的にケズリの痕跡が残る。

152 は半球状の埦形の坏部に、裾部が大きくひらく脚部をもつ。柱状部は細く短い。裾部に四方向のスカシ孔をもつ。坏部内面には放射状のミガキを施す。外面には横方向を主とするミガキを施すが、柱状部にはケズリの痕跡が残る。坏部に比して裾部の器壁は薄い。

153 は小型の高坏である。埦状の坏部に直線的に広がる円錐状の脚部をもつ。口縁端部は鋭くまとめる。表面は全体にミガキを施す。

154 ～ 157 は坏部の破片である。154 は埦状の坏部で口縁はわずかに外傾する。外面の端部のすぐ下には浅い沈線が巡る。坏部内面は横方向のミガキの後、放射状にミガキを施す。155 は埦状の坏部で口縁は垂直に立ち上がり、端部は鋭くまとまる。調整は 154 と同様である。156 は埦状の坏部で、坏部内面は横方向のミガキの後、放射状にミガキを施す。157 は口縁部が直線的に外傾する大型の高坏である。外面の口縁部と受部の境界の稜はやや不明瞭である。坏部内面には放射状のミガキを施す。

158 ～ 163 は高坏の脚部の破片である。158 は太く短い柱状部に大きく広がる裾部をもつ。内面には指頭圧痕やシボリ目が残る。159 はやや内湾気味の細く長い柱状部をもつ。柱状部上半には縦方向のケズリの痕跡が残る。160 は太く短い柱状部に大きく広がる裾部をもつ。柱状部は中ほどがやや膨らむ。外面にはナデ調整、裾部内面にはハケ調整を施す。柱状部内面は横方向のケズリを施す。161 は太く短い柱状部に大きく広がる裾部をもつ。四方向のスカシ孔をもつが、その配置は十字形からややずれる。外面にはナデ調整、裾部内面にはハケ調整を施す。坏部との接合面部分には放射状の溝を刻んでいる。162 は直線的にやや広がる細く長い柱状部をもつ。裾部にはゆるやかにつながる。内面にシボリ目が残るほかは全体に丁寧にナデ調整で仕上げている。163 は太く短い柱状部に大きく広がる裾部をもつ。裾部の高さがやや高い。

164 は埦状の坏部をもつ。口縁端部はわずかに内側に折り曲げて丸くおさめる。外面には横方向のミガキを施し、全体に光沢を放つ。165 は埦状の坏部に円錐状の脚部をもつ。外面には全体に横方向のミガキを施す。脚部上半には縦方向のケズリの痕跡が残る。166 は口縁部が直線的に外傾する坏部をもつ。脚部は裾部がひらくと考えられる。稜は不明瞭だが外面の口縁部と受部の境界には段が付く。外面はミガキを施す。167 は埦状の坏部に円錐状の脚部をもつ。全体にやや乱雑なミガキを施す。脚部内面にはシボリ目と指頭圧痕が残る。168 は埦状の坏部、太く短い柱状部をもつ。裾部は大きく広がると考えられる。口縁端部は内側に小さくつまみ上げる。柱状部にはシボリ目が残る。スカシ孔は四方向であると考えられる。169 は埦状の坏部に円錐状の脚部をもつ。165 や 167 など

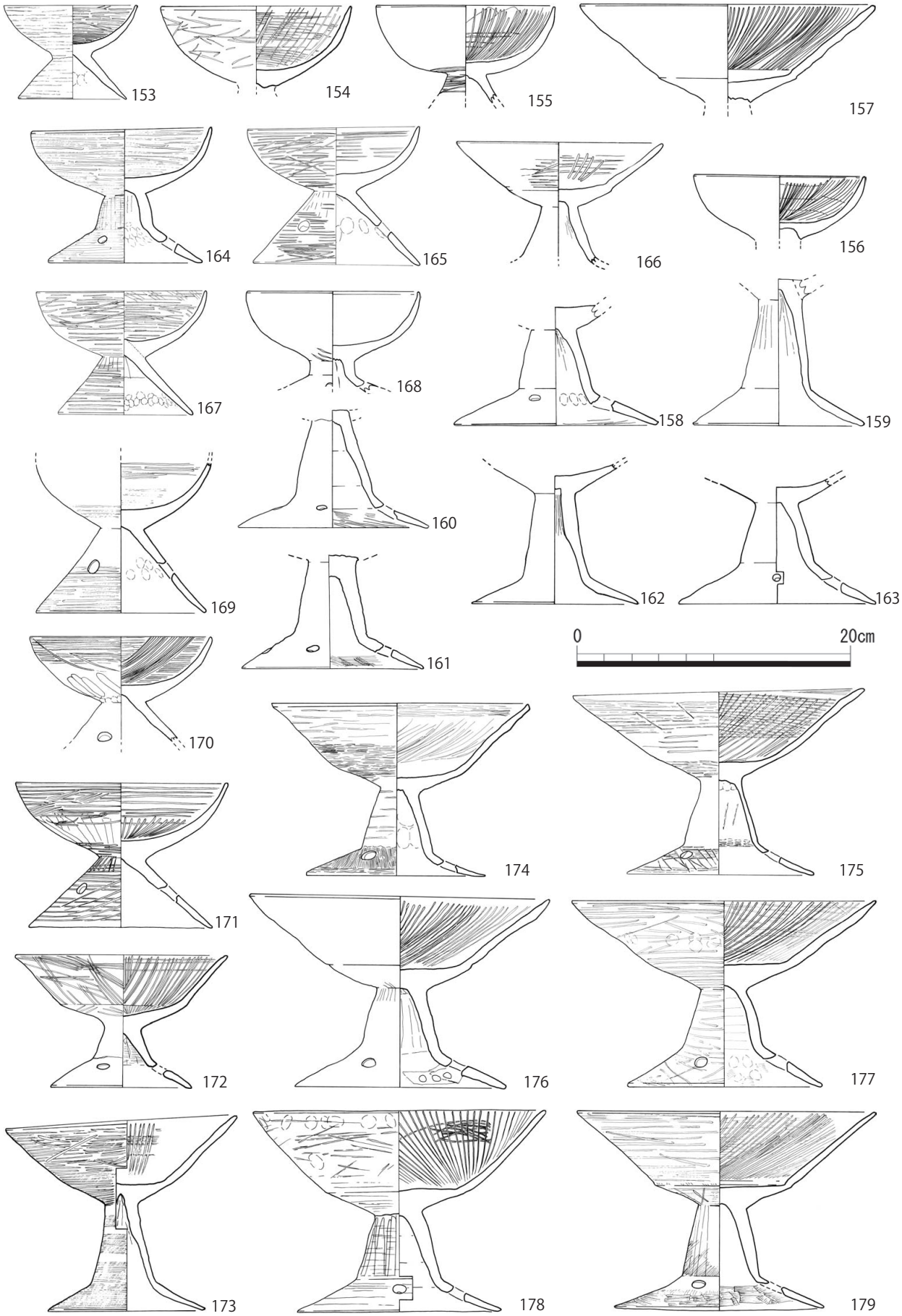


図 51　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑧（S = 1/4）

同様の形態の土器と比較してやや背が高い。170は直線的に広がる円錐状の脚部に埦形の坏部をもつ。坏部外面にはミガキとケズリを施す。坏部内面は非常に強いナデ調整によって仕上げられており、若干の光沢を放つ。171はやや外方に開き気味の埦状の坏部に円錐状の脚部をもつ。全体に細かなミガキを施すが、坏部外面下半には縦方向のケズリの痕跡が残る。

172は口縁部が外反してひらく坏部、柱状部が太く短い脚部をもつ。174～179と比較して小型である。外面の口縁部と受部の境界は稜が比較的明瞭である。坏部には強いミガキを施す。受部内面は中央に向かってくぼむ。173は口縁部が直線的に外傾する坏部、柱状部が細く長い脚部をもつ。外面の口縁部と受部の境界はなだらかで不明瞭である。坏部上端ラインはやや傾斜している。外面には横方向のミガキ、内面の口縁部と受部にはそれぞれ放射状のミガキを施す。

174～179は口縁部が大きく外傾する坏部、柱状部が太く短い脚部をもつ高坏である。174は裾部に三方向のスカシ孔をもつ。表面はやや磨滅しているが、強いミガキが内外面に残る。口縁部内面の下半と脚裾部のミガキは放射状に施される。脚部の裾は薄く尖り気味である。175の坏部は口縁部の上半がわずかに外反してひらく。脚部の形状は174とほぼ同様である。坏部外面は受部と口縁部の境が不明瞭でなだらかに立ち上がる。全体にミガキを施す。坏部内面は横方向のミガキの後に放射状のミガキを施す。脚部内面はナデ調整で仕上げているが、一部にシボリ目や細かな指頭圧痕が残る。176は外面の口縁部と受部の境に浅く細い沈線が巡る。坏部内面には放射状のミガキを施す。177は外面の口縁部と受部の境が不明瞭で脚部上端から口縁部端までなだらかにつながる。外面には全体にミガキを施す。脚部内面にはハケ調整、指頭圧痕、ケズリの痕跡が残る。178はわずかに内湾する口縁部をもつ。口縁部高が高い個体である。外面には乱雑なミガキを施すが、指頭圧痕やケズリの痕跡が残る。坏部内面は最終的に放射状のミガキを施すが、その前段階には部分的に乱雑なミガキを施している。179は他の個体と比較して外面の口縁部と受部の境の稜が明瞭である。稜は受部に強いケズリを施すことで作り出されている。ケズリによる面は柱状部外面にも残る。

180～193は小型器台である。

180～188は浅い受部、円錐状の脚部をもち、受部から脚部に貫通孔がない小型器台である。180はわずかに外傾する口縁部をもつ。外面には横方向のミガキ、受部内面には横方向ののち放射状のミガキを施す。脚部内面下半には横方向のハケを施す。181は外傾する口縁部をもつ。外面の口縁部と頸部の境は不明瞭である。受部の底は平坦である。調整は180と同様である。182は垂直に立ち上がる細い口縁部をもち、端部は鋭くおさめる。受部内面のミガキは頸部でおさまり口縁部には及ばない。脚部端は他の個体よりも丸みを帯びる。183は浅い埦状の受部をもつ。小形の高坏である可能性もある。脚部の裾は外側に小さく折り返す。全体にナデ調整を施すが、受部下半から脚部上半にかけての範囲にはケズリの痕跡が残る。184はやや内傾する小さい口縁部をもつ。脚部は他の個体よりもやや横長である。185は小型器台の脚部で、全面にナデ調整を施す。受部との接合面には放射状に溝が刻まれる。

186は埦状に近い受部とわずかに外反する円錐状の脚部をもつ。外面の口縁部から頸部へのラインはなだらかであるが、口縁部下の沈線によって視覚的に画されている。外面にはナデ調整を施す。受部下部から脚部上部にかけての範囲にはケズリの痕跡が残る。187はわずかに外反して立ち上がる細い口縁部をもち、端部は鋭くおさめる。全面にミガキを施す。その後に口縁部は内外ともナデ調整を施す。188は浅い埦状の受部と円錐状の脚部をもつ。外面の口縁部から頸部へのラインはなだ

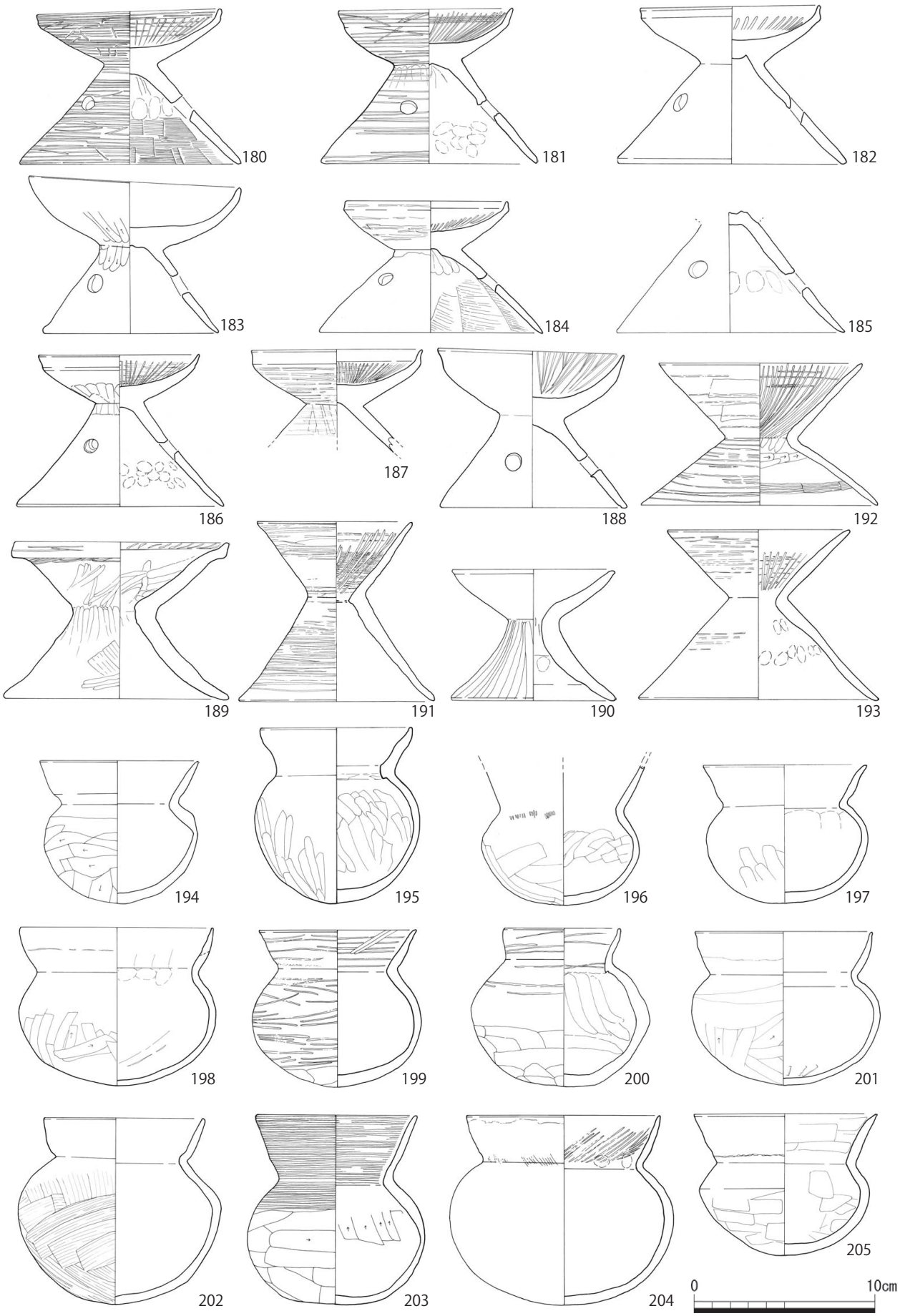


図 52　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑨（S = 1/3）

らかである。口縁部端は鋭くおさめる。

189 は外反する受部と脚部をもち、受部から脚部に貫通孔が通る器台である。口縁端部は外面に幅約８㎜の平坦面を作り出し、その上端をわずかにつまみ上げる。受部下半から脚部上半にかけての範囲には縦方向のケズリの痕跡が残る。受部上半にはミガキを施す。器壁は他の小型器台よりも厚い。190 は浅い椀状の受部と外反する円錐状の脚部をもつ。受部から脚部には貫通孔が通る。口縁端部と脚端部はともに丸くおさめる。脚部外面には縦方向のケズリを施す。脚部内面には裾に近い位置に小さな段がつく。

191 ～ 193 は受部と脚部がそれぞれ直線的に開き、形態がＸ字状になる小型器台である。いずれも貫通孔が通る。191 は脚部が受部よりも大きい。外面には横方向のミガキ、受部内面には横方向ののち放射状のミガキを施す。内面の受部と脚部の境は稜が明瞭である。192 は受部の高さが脚部よりも高い。外面と受部内面にはミガキを施す。脚部内面下半にはハケ調整を施す。内面の稜は不明瞭である。193 は受部がわずかに外反する。外面と受部内面にミガキを施す。

194 ～ 307 は小型丸底壺・小型丸底鉢である。口径が体部高よりも小さい、もしくは口径が体部最大径よりも小さいものを小型丸底壺として判別することが多い。この場合、194 ～ 211・236 が小型丸底壺、他が小型丸底鉢となる。

器面の調整は、外面および口縁部内面にミガキを施すもの、口縁部内外面および体部外面の上半にミガキを施し体部下半にケズリを施すもの、口縁部内外面および体部外面の上半にナデ調整を施し体部外面の下半にケズリを施すもの、などが見られる。これは小型丸底壺と小型丸底鉢を通じてのものである。

194 ～ 197・199・203・205・207・209 は口縁部が直線的に外傾する。198・200 ～ 202・204・210・211 は内湾する口縁をもつ。208 はわずかに外湾する口縁である。口縁端部は鋭くまとめるものが多い。一部には口縁端部を内側ないし外側に小さくつまみ上げるものもある。体部は中ほどに最大径がくる扁球状が多い。

195 は球形の体部にやや厚手の口縁部をもつ。体部は内外面とも縦方向のケズリを施す。内面には口縁部と体部の境に接合時の粘土が残される部分がある。196 は外面の口縁部下に体部との接合痕と縦方向のハケ調整がナデ消されずに部分的に残る。198 は全体の仕上げが甘く、粘土紐の接合痕や指頭圧痕、道具に静止痕などが多く残る。200 は球形の体部に垂直気味に立ち上がる短い口縁部をもつ。外面に比して体部内面の仕上げが粗い。202 は球形の体部をもつ。体部上半は部分的に歪みをもつ。体部は弱いハケ調整を施す。203 は背の高い口縁部をもつ。上半部は横方向の細かいミガキを施す。204 は外面全体にナデ調整を施すが、口縁部に細かなハケ調整や粘土の接合痕が残る。口縁部内面には放射状の弱いミガキを施す。205 は体部上半にケズリによって作り出された稜が見られる。209 は外面の口縁部と体部の境に細い沈線状のナデ調整を施す。体部上半には細かな縦方向のハケ調整を施す。体部下半にはケズリの痕跡が残るが、全体に平滑に仕上げられている。236 は肩部が張り出す扁球状の体部に直立気味の口縁部をもつ。

212 ～ 255 は口縁部と体部の境のくびれが比較的明瞭な小型丸底鉢の一群である。扁球形の体部、直線的あるいはわずかに内湾してひらく口縁部をもつものが多い。口縁端部は鋭くまとめるもの、丸くおさめるものが多い。口縁部高と体部高は同程度のものが多い。

213 は球形の体部に二重口縁気味の口縁部をもつ。いわゆるミニチュア土器に含むべき個体であ

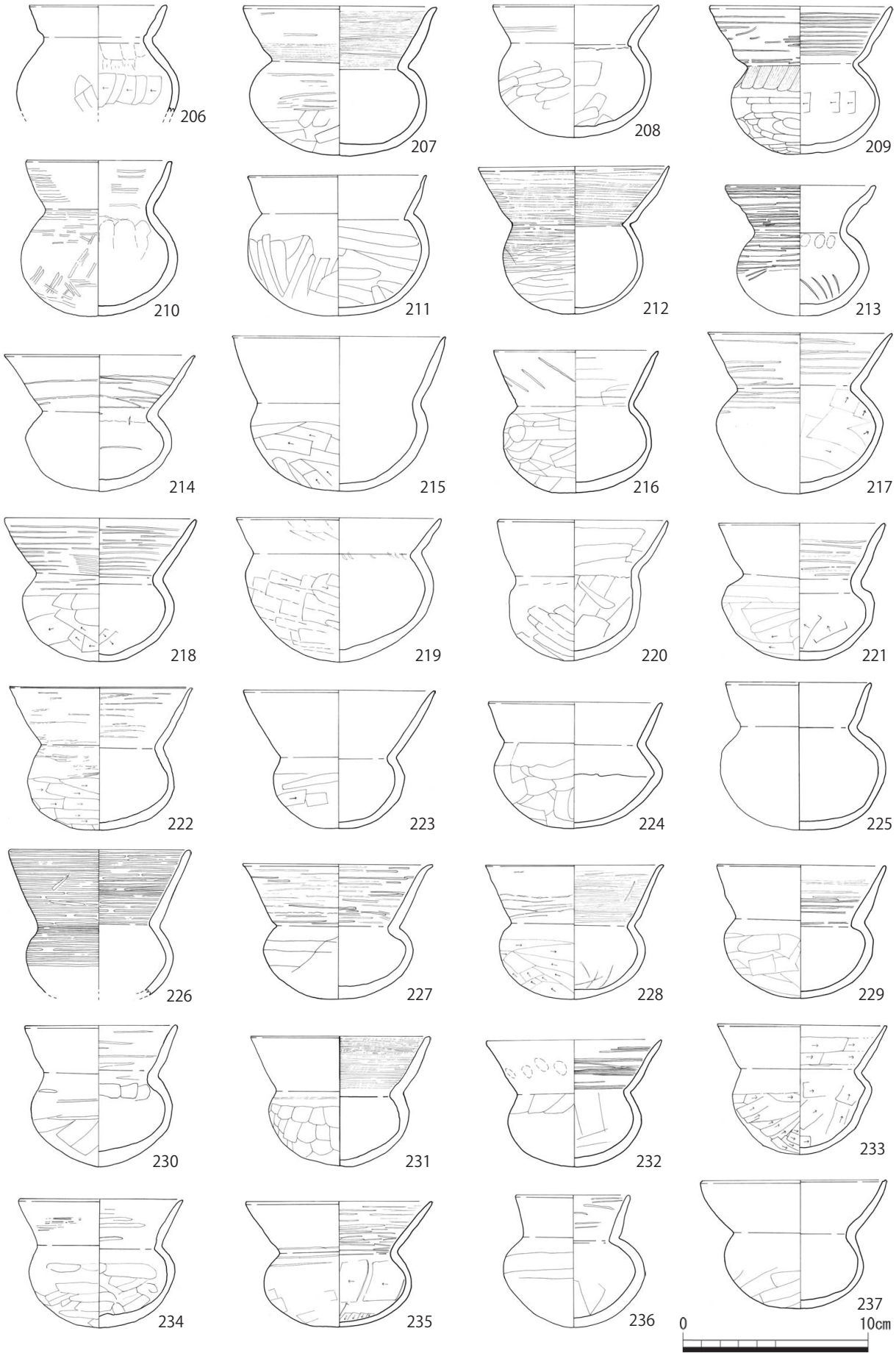


図 53　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑩（S = 1/3）

る可能性もある。外面には横方向の強いミガキを密に施す。内面はナデ調整で仕上げを行っているが、底部付近にヘラ状工具で放射状に掻き取ったような痕跡が残る。216 は体部外面全体に細かなケズリの痕跡が目立つ。220 は全体にケズリの痕跡が目立ち、形状も歪みが大きい。226 は全体に横方向のミガキを密に施す。体部内面も丁寧なナデ調整を施しており、全体に平滑に仕上げている。229 は口縁部下半の器壁が厚い。230 は全体に作りが粗雑で器壁も厚い。外面はケズリの痕跡が残る。237 は口縁部の内湾の度合いが強い。口縁部端のラインは歪みをもつ。

239 は扁球状の背の低い体部、内湾する背の高い口縁部をもつ。外面は口縁部に横方向のミガキ、体部にケズリを施す。ケズリは丁寧に施しており、器面は平滑に仕上げる。口縁部内面にはミガキを横方向の後、放射状に施す。放射状のミガキは口縁端部よりもやや下で止まる。240 は球状の体部、内湾して端部を上方につまみ上げる口縁部をもつ。外面にはミガキを施すが、器面の処理は全体に粗い。242 はやや厚手の器壁をもつ。内外面ともに全体に横方向のミガキを施す。243 は扁球状の体部、ごくわずかに外反する背の高い口縁部をもつ。内外面の稜は明瞭である。

245・246 は小型の個体である。いずれも内面に比して、外面の口縁部と体部の境はややなだらかである。器壁の厚さは他の個体と差はない。

247 は体部下半に直径 2 ㎜大の穿孔をもつ。249 は短い砲弾型の体部、わずかに内湾する口縁部をもつ。口縁外面には横方向のミガキを、内面には横方向の後、放射状のミガキを施す。体部内面にはハケの静止痕が残る。稜は内面が明瞭であるのに対し、外面はなだらかで不明瞭である。251 は砲弾型の体部、内湾してひらく短い口縁部をもつ。体部は非常に粗いケズリを全面に施す。252 は横幅の広い個体である。作りは全体に粗い。253 は内面の口縁部と体部の境が内側に大きく突出する。内外面にわずかに粘土紐の接合痕が認められる。254 はやや小型の個体で、口縁端部を小さく外側に折り返し鋭くまとめる。

256 ～ 278 は浅い埦状の体部から外方にひらく口縁部へなだらかにつながる小型丸底鉢である。

257 は全体に細かな横方向のミガキを施すが、体部外面の器面には凹凸が多く残る。259 は外面の口縁部と体部の境にナデを施した後にミガキを施し、非常になだらかに仕上げる。260 は口縁端部を小さく外側に折り返す。ミガキは横方向を基本とするが、部分的に乱れも見られる。262 は小型の個体である。粗めのミガキとケズリで全体を整形する。いわゆるミニチュア土器の範疇に含まれる可能性もある。263 はナデ調整によって体部上半から口縁部の内外面に小さな段が作り出される。口縁端部は鋭くまとめる。

264 はわずかに内湾する有段の口縁部をもつ。口縁部内面の下半にはハケの静止痕がわずかに残る。268 は全体をケズリで調整する。外面は縦方向、内面は横方向のケズリを基本とする。外面の口縁部と体部の境には細い沈線を巡らせる。269 は口縁部内面に斜め方向の細かなハケ調整を施す。体部内面には弱いミガキを施す。271 は小型の個体である。内面には工具の静止痕や指頭圧痕が残る。外面は体部に縦方向のケズリの痕跡が残るが、器面は全体に平滑に仕上げられている。

273・274 は小型の個体である。273 は背の低い体部と口縁部をもつ。内面には体部から口縁部にかけてのケズリの痕跡がわずかに残る。274 は口縁部端のラインがやや歪であるが、全体はミガキを施し丁寧に仕上げている。275 はケズリや工具の静止痕が明瞭に残る。276 は全面に横方向のミガキを施す。278 は外面に乱雑なミガキ、口縁部内面に横方向のミガキを施す。体部には 5 ㎜大の穿孔をもつ。

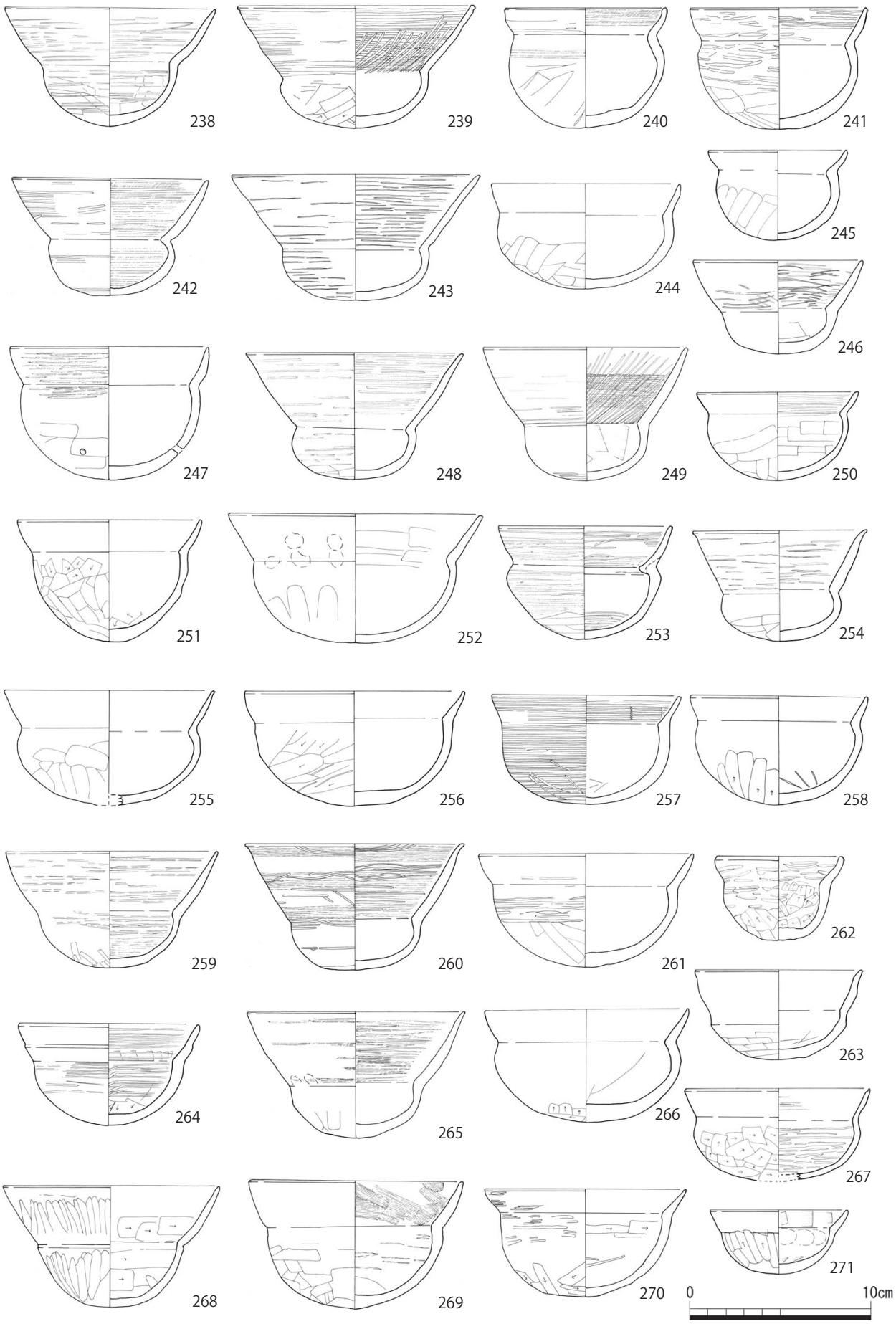


図 54　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑪（S = 1/3）

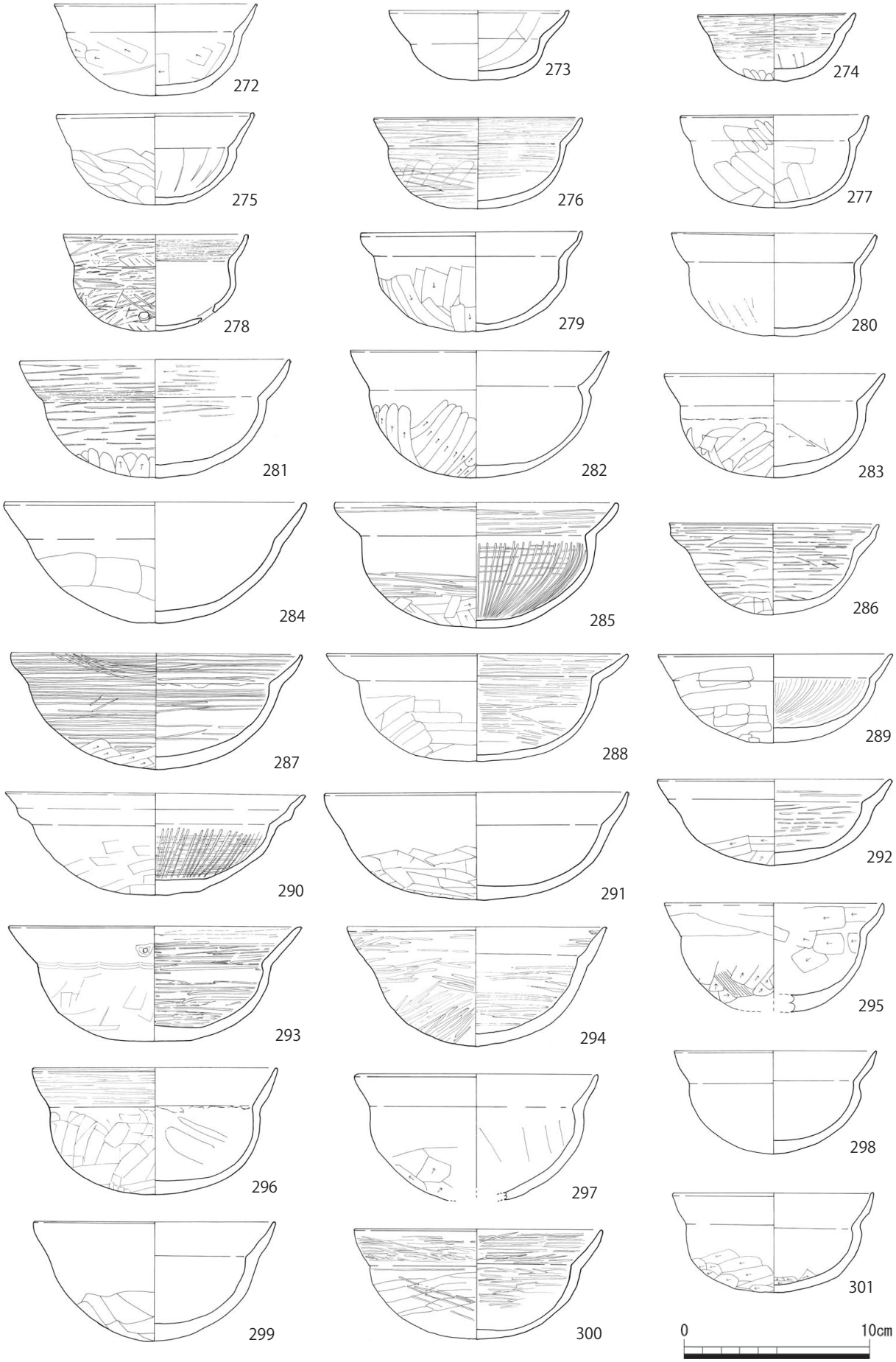


図 55　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑫（S = 1/3）

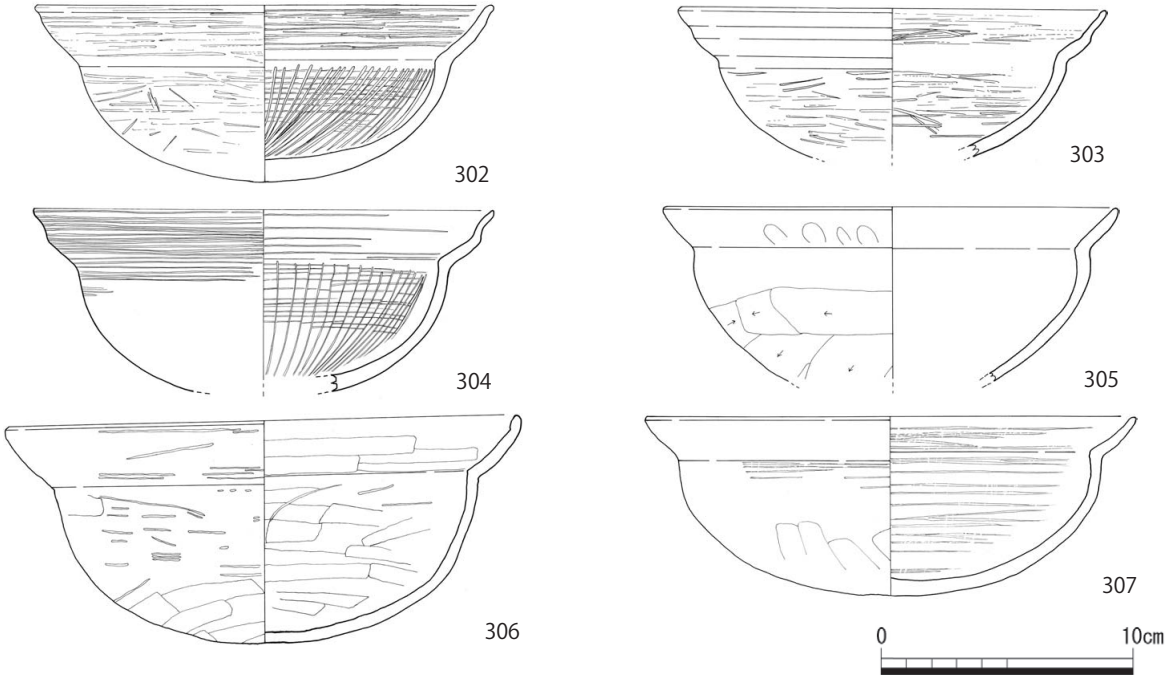


図 56　1031 - NR 中・下層出土　土師器 ⑬（S = 1/3）

279 ～ 307 は横長の埦状の体部、内湾気味の短い口縁部をもつ小型丸底鉢である。口縁部高は体部高の半分程度のものが多い。外面の口縁部と体部の境はなだらかなものが多い。

279 は口縁端部を垂直方向に立ち上げる。体部上半も垂直に立ち上がる。282 は扁球状の体部に内湾する口縁をもつ。内外の稜は明瞭である。284 は口縁部と体部が内外面ともになだらかにつながる。285 はやや内湾して立ち上がる体部をもつ。外面および口縁部内面に横方向のミガキを施す。体部内面には横方向のミガキの後、縦方向のミガキを密に施す。286 は口縁端部を上方につまみ上げ内外に小さな面をもたせる。

287 は全体に横方向のミガキを施すが、内面の口縁部下に余剰粘土がわずかに残る。288 はわずかに内湾して外方に大きくひらく口縁部をもつ。289 は体部内面に放射状のミガキを施す。290 は有段の口縁をもつ。体部内面には横方向のミガキの後、放射状のミガキを施す。291 は外面の口縁部と体部の境が非常になだらかな作りで、外形は埦に近い。

293 は外面の口縁部と体部の境に波状のハケが巡る。口縁部は直線的に外傾する。口縁部には直径 3 ㎜大の外面からの穿孔がある。294 は全面に粗めのミガキを施す。体部外面の下半は斜め方向のミガキである。器壁はやや厚い。300 は口縁部および体部内面に横方向のミガキを施す。体部外面には部分的に斜め方向のミガキを施すが、ケズリの痕跡が多く残る。

302 ～ 307 は大型の個体である。302 は口縁部および体部外面に横方向のミガキ、体部内面には横方向の後、放射状のミガキを丁寧に施す。口縁端部は外方に小さく折り返し丸くおさめる。303・304 は有段口縁をもつ。303 は口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。304 は 302 と同様のミガキを施すが、体部内面のミガキの間隔はやや広い。306 は背の高い体部をもち、口縁部は端部を上方に折り返す。

1005‐SH

(図 57‐308 ～ 311、図版 39)

小型丸底鉢が 4 点出土している。他に甕の破片が数点出土しているが図化できるものはない。308・309・311 は壁溝内埋土（図 13 － 3 層）、310 は床面より上層の埋土(図 13 － 2 層）からの出土である。

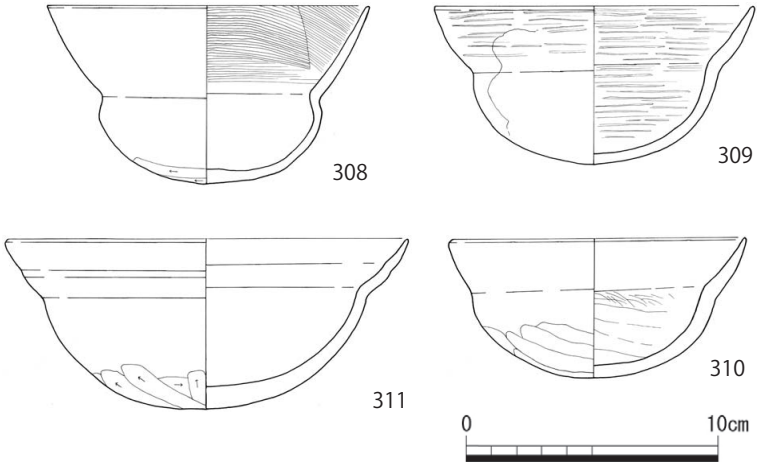


図 57　1005‐SH 出土　土師器（S ＝ 1/3）

308 はわずかに内湾して大きくひらく背の高い口縁をもつ。口縁端部は細く尖る。稜は内外面とも比較的明瞭である。底部にケズリの痕跡が残る。口縁部の内面は細かなハケ調整で仕上げる。309 はわずかに内湾する口縁部をもつ。口縁部内外面と体部内面には横方向のミガキを細かく施す。内外面とも稜は不明瞭である。外面には粘土をナデつけ合わせた痕跡が残る。310 は 309 とほぼ同様の形状である。器壁はやや厚い。底部外面にケズリを施す。他の部分には粗めのナデ調整を施しており、とくに体部内面にはナデの単位や掻き取ったような跡が残る。311 は短く外方へひらく有段口縁をもつ。体部は浅い椀形である。各部の稜はなだらかである。表面の磨滅により細かな調整は不明だが、底部にはケズリの痕跡が残る。

1006‐SH・1155‐SK（図 58‐312 ～ 314、図版 39）

312 は 1006‐SH 床面より上層の埋土（図 16‐ 2 層）、313・314 は床面上土坑 1155‐SK（図 16‐ 6 層）からの出土である。

312 は直線的に外傾する口縁部をもつ甕である。口縁端部は内外に肥厚させて上面に内傾する平坦面をもつ。体部外面には横方向のハケ調整、内面にはケズリを施す。内面にはケズリ残された場所が部分的にある。313・314 は高坏である。同一の土坑からの出土だが別個体である。313 は椀形の坏部、柱状部が細く長い脚部をもつ。口縁端部はわずかに外傾させて丸くおさめる。坏部外面はなだらかで境は不明瞭である。坏部にはミガキを施す。314 は高坏の脚部裾である。三方向にスカシ孔をもつ。柱状部はかなり細い個体であると考えられる。

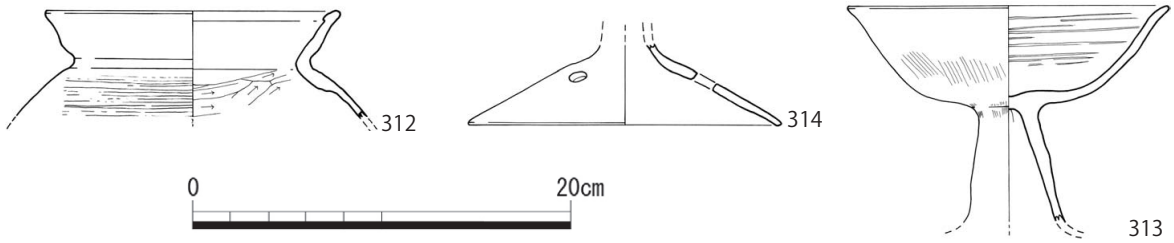


図 58　1006‐SH・1155‐SK 出土　土師器（S ＝ 1/4）

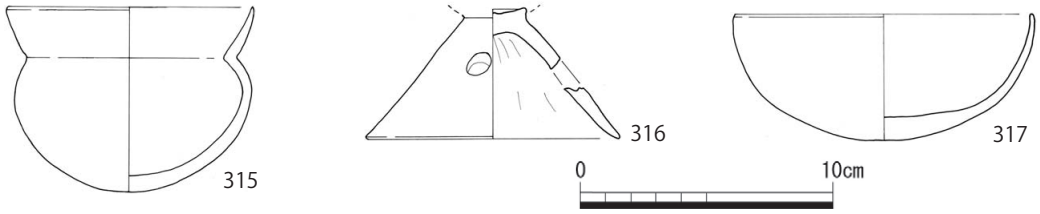


図 59　1150 - SH・1036 - SH 出土　土師器（S ＝ 1/3）

1150 - SH（図 59 - 315、図版 39）

315 は壁溝埋土（図 18 - ２層）から出土した小型丸底壺である。口縁部は内湾して立ちあがり、端部は細く尖る。体部は上部に張りをもつ扁球形である。稜は内外面とも明瞭である。

1036 - SH（図 59 - 316・317、図版 39）

316 は床面より上層の埋土（図 19 - ２層）から出土した小型器台の脚部である。円錐状の脚部で端部は鋭くまとめる。三方向のスカシ孔をもつ。受部との接合面には溝を刻む。内面にはシボリ目とハケの静止痕が残る。

317 は壁溝埋土（図 19 - ４層）から出土した椀である。底部に直径 1 ㎝程度の平坦面をもつがほぼ丸底である。口縁端部はわずかに内湾し、小さく丸くおさまる。内外面ともに丁寧なナデ調整で仕上げている。

この他、床面よりも上層の埋土から甕や小型丸底土器の細片が出土しているが、図化可能なものはない。

1122 - SE（図 60 - 318・319、図版 41）

318 は図 26 - ４層から出土した小型丸底鉢である。椀状の体部、内湾して大きく外方にひらく発達した口縁部をもつ。外面口縁部と体部の境は非常になだらかである。全体に横方向のミガキを施す。

319 は図 26 - ５層から出土した小型丸底鉢である。短く外方へひらく有段口縁をもつ。体部は浅い椀形である。外面上半にはミガキ、底部にはケズリを施す。内面は体部にミガキ、口縁部に非常に強いナデ調整を施す。

1164 - SE（図 60 - 320・321、図版 41）

320・321 は埋土上層（図 25 - １・２層）からの出土である。320 は扁球状の体部、直線的にややひらく口縁部をもつ小型丸底鉢である。各部の稜は全体に不明瞭である。底部にはケズリを施す。321 は直口壺の破片である。口縁部は外方にひらく形状であると考えられる。外面にはミガキを施す。体部内面には指頭圧痕や粘土紐の接合痕が残る。

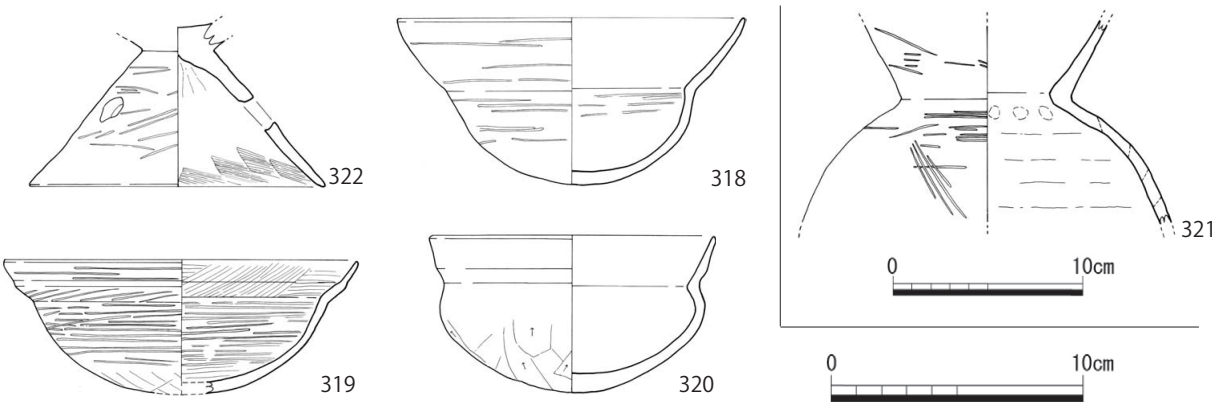


図 60　1042 - SK・1122 - SE・1164 - SE 出土　土師器（S = 1/3。321 のみ S = 1/4）

1042 - SK（図 60 - 322）

322 は 1042 - SK の底面から出土した小型器台の脚部である。脚部端はやや鋭くまとまる。三方向のスカシ孔をもつ。外面にはやや乱雑な横方向のミガキ、内面下半には横方向のハケ調整を施す。内面上部にはシボリの痕跡が明瞭に残る。他に甕、高坏などの細片が出土している。

1133 - SE

（図 61 - 323 ～ 325、図版 39）

323 は図 26 - 4 層から出土した甕である。球形の体部、直線的に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚させた後に丸く整形する。口縁と体部の境は内外ともナデつけられ丸くなっている。肩部より下には全体に煤が付着する。肩部には板状工具の角を押し付けたような痕跡が 5 ヶ所に見られる。これらは約 8 ㎝間隔で横に並び、肩部を巡る。体部内面の下半には指頭圧痕が多く残り、壁面は凹凸が多い。

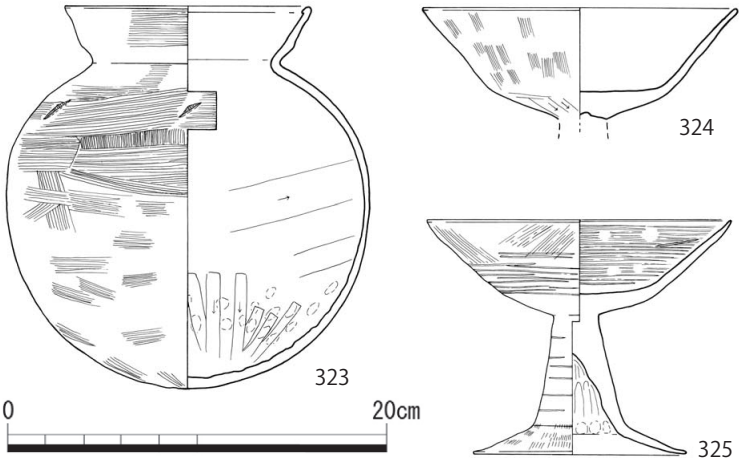


図 61　1133 - SE 出土　土師器（S = 1/4）

324・325 は図 26 - 3 層から出土した高坏である。324 は深めの椀状の坏部である。外面の口縁部と受部の境界はなだらかである。外面は口縁部に縦方向のハケ調整、受部にケズリを施す。これらは坏部底を中心にして放射状に施される。325 は口縁部が直線的大きくひらく坏部をもつ。口縁端部は小さくつまみ上げる。全体にミガキを施す。坏部外面の口縁部と受部の境界はなだらかである。裾部は器壁が薄く、先端は鋭くまとめる。

1070 - SK（図 62 - 326、図版 41）

326 は 1070 - SK の底面から出土した短頸直口壺である。体部過半の約３割は失われている。外反気味に立ち上がる口縁部、下膨れの体部をもつ。底部はわずかに台状に突出する平底である。全体をケズリによって整形したのちに粗いナデ調整を施すが、ケズリの痕跡が多く残る。

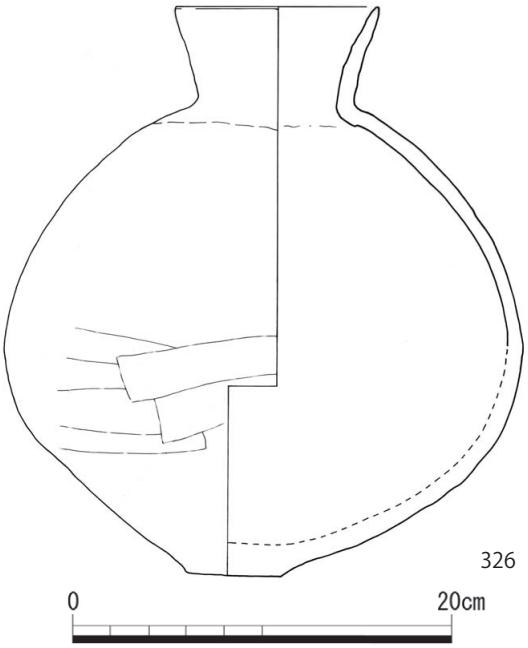


図 62　1070 - SK 出土　土師器（S ＝ 1/4）

1002 - SD（図 63 - 327 ～ 332、図版 40）

327 ～ 332 は埋土中層の細砂・微砂層（図 33- 5・6 層）からの出土である。

327 は大きく外方へひらく口縁部をもつ甕である。口縁端部は内側に肥厚させ丸くおさめる。口

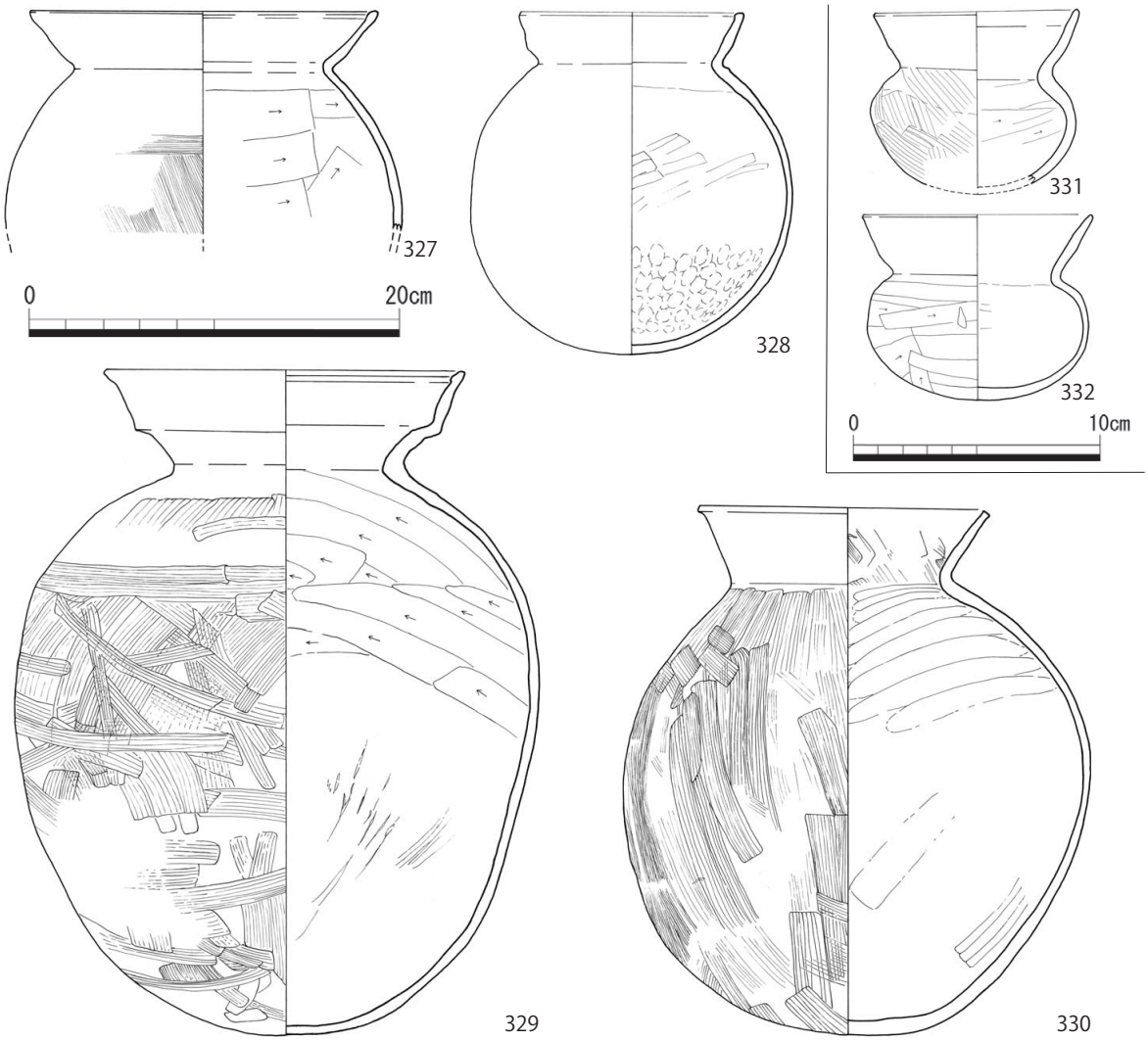


図 63　1002 - SD 出土　土師器（327 ～ 330：S ＝ 1/4、331・332：S ＝ 1/3）

縁部および肩部には横方向のナデ調整を施す。外面の肩部より下には細かいハケ調整を施す。328は球形の体部、わずかに内湾して立ち上がる口縁をもつ。口縁部の形状は全体に歪みをもつ。口縁端部は内側に肥厚させ上面に小さな平坦面を作る。外面はナデ調整で丁寧に仕上げる。内面の底部付近には指頭圧痕が多数残る。

329は大型の二重口縁壺である。倒卵形の体部、屈曲して大きく外反する頸部、わずかに外反して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内外に肥厚させて内側に面をもたせる。外面の稜は比較的明瞭である。外面は全体にハケ調整を施した後、頸部と口縁部にナデ調整を施す。330は短頸直口壺である。やや縦長の球形の体部に、直線的に外傾する口縁部をもつ。口縁端部は外側に小さく折り返し、外側に面を作る。外面には縦方向のハケ調整を施し、その後、口縁部にはナデ調整を施す。

331・332は小型丸底壺である。331は扁球状の体部、内湾する口縁部をもつ。内外の稜は不明瞭である。体部外面には粗いハケ調整を施す。332は扁球状の体部、わずかに外反する口縁部をもつ。口縁部はナデ調整を施して仕上げる。体部は全面にケズリの痕跡が残る。

1095‐SD（図64‐333～339、図版40）

333～337は小型丸底鉢である。333は浅い椀状の体部、内湾して外方にひらく口縁部をもつ全体に幅広の個体である。内外の稜は比較的明瞭である。334は扁球状の体部、直線的に外傾する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに外に折り返す。器壁は全体にやや厚い。外面上半部はナデ調整を施す。下半部にはケズリの痕跡や部分的にハケ調整の痕跡が残る。335は内湾気味に立ち上がる口縁部をももつ。体部にはケズリを施す。336は浅い椀状の体部､内湾して立ち上がる短い口縁部をもつ。体部外面の上端に強い横方向のナデを施しており、側面に平坦面を作り出す。337は砲弾型の体部、直線的に外傾する口縁部をもつ。表面の磨滅のため細かな調整は不明であるが、表面は全体に平滑に仕上げられている。

338は東海系のS字状口縁甕である。強くくびれて屈曲する頸部から短く外反する口縁部をもつ。体部には左下がりの粗いハケを施す。339は甕などの底部であると考えられる。直径3.0㎝の円形の

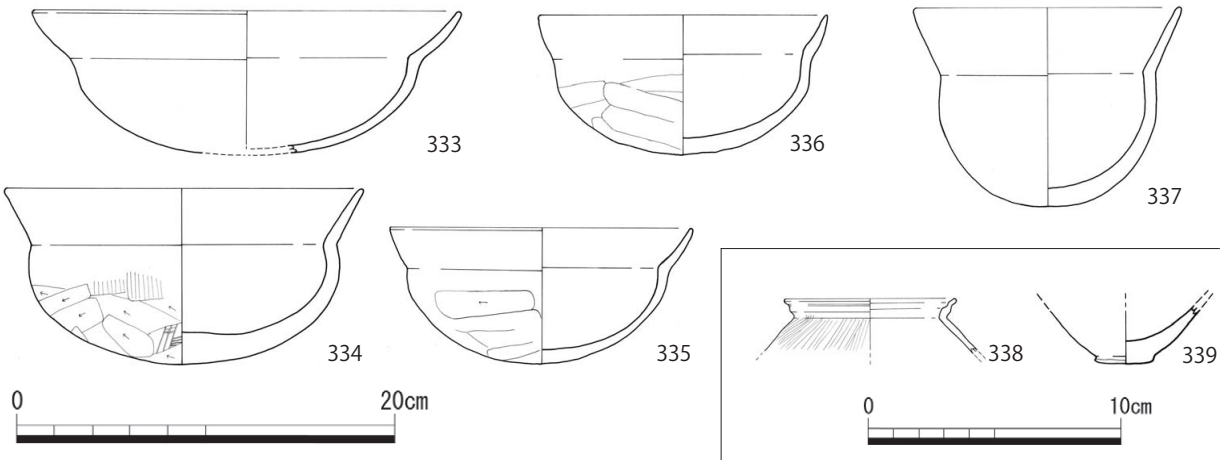


図64　1095‐SD出土　土師器（333～337：S＝1/3、338・339：S＝1/4）

台がつく平底である。台の縁は一部が歪んでいる。

1152 - SD（図 65 - 340、図版 40）

340 は強くくびれて屈曲する頸部から直線的に立ち上がる口縁部をもつ二重口縁状の甕である。口縁下端には突出する稜を作り出す。口縁部はナデ調整を施す。

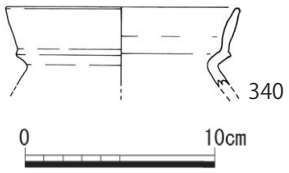


図 65　1152 - SD 出土 土師器（S = 1/4）

ミニチュア土器（図 66 - 341 ～ 354、図版 42・43）

いわゆるミニチュア土器に分類される小形の土器は 14 点出土している。

うち 3 点は竪穴建物からの出土で、343 が 1005 - SH の床面下から、345 が 1006 - SH の床面下から、354 が 1036 - SH の床面より上層の埋土からの出土である。他の 11 点は自然河道 1031 - NR からの出土で、351 が上層、341・342・344・346・348・349・350・353 が中層、347・352 が下層の土器集中部からの出土である。

341 は壺形である。本来は体部に粘土を継ぎ足した口縁部が存在していたようであるが、失われている。342 は壺ないし甕形である。体部外面はケズリ、口縁部内外面はナデ調整を施す。343 は壺形である。土師器の精製土器に近い明赤褐色を呈する。底部にケズリの痕跡が残るほかは、横方向に丁寧にナデ調整を施す。344 は平底の壺形である。底部中央はわずかに丸くくぼむ。安定して自立するが、器形は全体に歪んでいる。側面には黒斑がある。外面には粘土の接合痕が見られる。

345 は高坏形である。調整は粗雑で内外面に粘土の接合痕やひび割れが見られる。脚部裾は一部がやや上に捲れ上がっている。脚部および坏部の半分が欠けた状態で 1006 - SH の床面下から出土している。346 は高坏形である。にぶい黄橙色を呈し、全体に丁寧に整形されている。ミガキとナデ調整で仕上げられているが、坏部と脚部の接合部分には粘土接合時の段が残る。347 は高坏形、もしくは器台形であると考えられる。器形は全体に歪みが大きい。ナデ調整を施すが、内外面に爪の痕が見られる。

348 は平底の坏形である。壁面はわずかに内湾する。内面はナデ調整が施され滑らかであるが、外面には下半部を中心にひび割れが多く見られる。下半部に 2 ㎝大の黒斑がある。349 は坏ないし

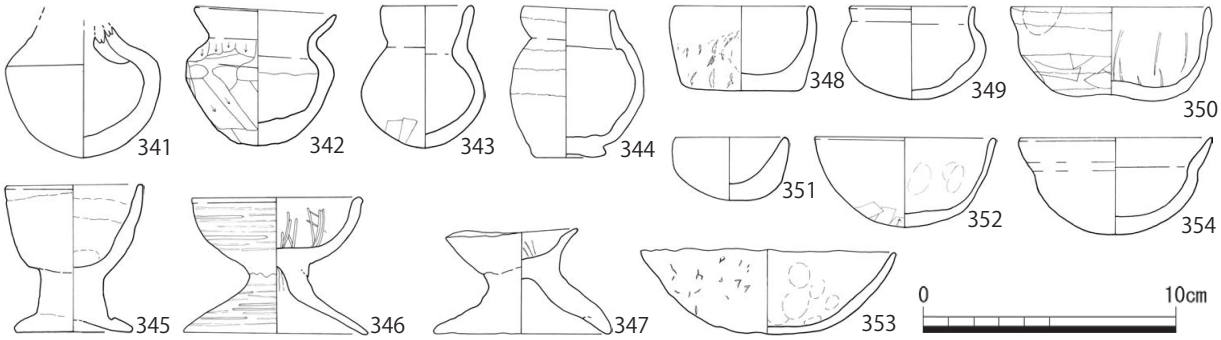


図 66　ミニチュア土器（S = 1/3）

壺形である。表面の磨滅のため調整は不明である。外面は滑らかだが、内面には整形時の段が残る。350 は坏形である。外面の下半部は細かいケズリ、上半部は強めのナデ調整を施す。内面はナデで調整されており、使用した工具の静止痕と考えられる長さ 0.5 ～ 1.8 ㎝の線が多数残る。351 は坏形で、今回出土したミニチュア土器の中でもっとも小さい。外面は明橙色、内面は黒色と内・外面での色調の差が明確である。内外面とも丁寧にナデ調整を施す。352 はやや深めの坏形である。底部にケズリが残るほかは全体にナデを施す。内面には指頭圧痕が残る。353 はやや開き気味の坏形である。外面にはひび割れ、内面には指頭圧痕が見られる。円盤状の粘土を坏状に成形した結果と考えられる。口縁端部は波打っている。354 は小型丸底鉢形である。他の小型丸底鉢よりも小さく、調整も異なるためミニチュア土器に含めている。

須恵器（図 67 - 355）

355 は須恵器の坏身である。口径 12.3 ㎝、器高 4.6 ㎝を測る。田辺編年 MT15 期に属すと考えられる。Ⅱ層の重機掘削時に出土している。

Ⅱ層および中世の耕作溝からは他にも須恵器片が出土しているが、時期が明確な資料は 355 のみである。

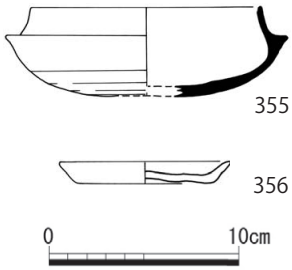


図 67　中世耕作溝 出土土器（S ＝ 1/4）

中世土師器（図 67 - 356）

356 は中世の土師皿である。中世の耕作溝 187 - SD からの出土である。法量は直径約 9.0 ㎝、高さ約 1.1 ㎝を測る。口縁部外面および内面にはナデ調整を施す。底部外面には指頭圧痕が残る。

中世の耕作溝からは当該時期の土師器や瓦器が出土しているが、細片ばかりであるため、図化しえた資料は 356 のみである。中世に属すと考えられる遺物は全体に少なく、中世耕作溝から出土する遺物も下層の古墳時代遺物のほうが多い。

土製品（図 68 - 357 ～ 361、図版 42・43）

土製品は 5 点出土している。357 ～ 361 はいずれも土錘である可能性が考えられる。
357 ～ 359 は自然河道 1031 - NR の下層の土器集中部に混じって出土している（巻頭図版 1 右下、図版 8 最下段）。360・361 は 1031 - NR の中層からの出土である。

357 は全体の約半分が失われているが、358・359 と同様の上部に孔をもつ土錘であると考えられる。長さ 7.9 ㎝、高さ 5.8 ㎝以上、直径約 7 ㎝（直径は推定値）の円筒形で、重量は 161.9 g である。今回出土した土錘の中でもっとも小型である。孔の直径は 1.3 ㎝である。表面上部は熱を受けて赤褐色に変色しており、下部には黒斑がつく。

358 は円筒形の粘土塊に孔を穿った土錘である。孔は両側から指を突き刺して穿たれたようで、

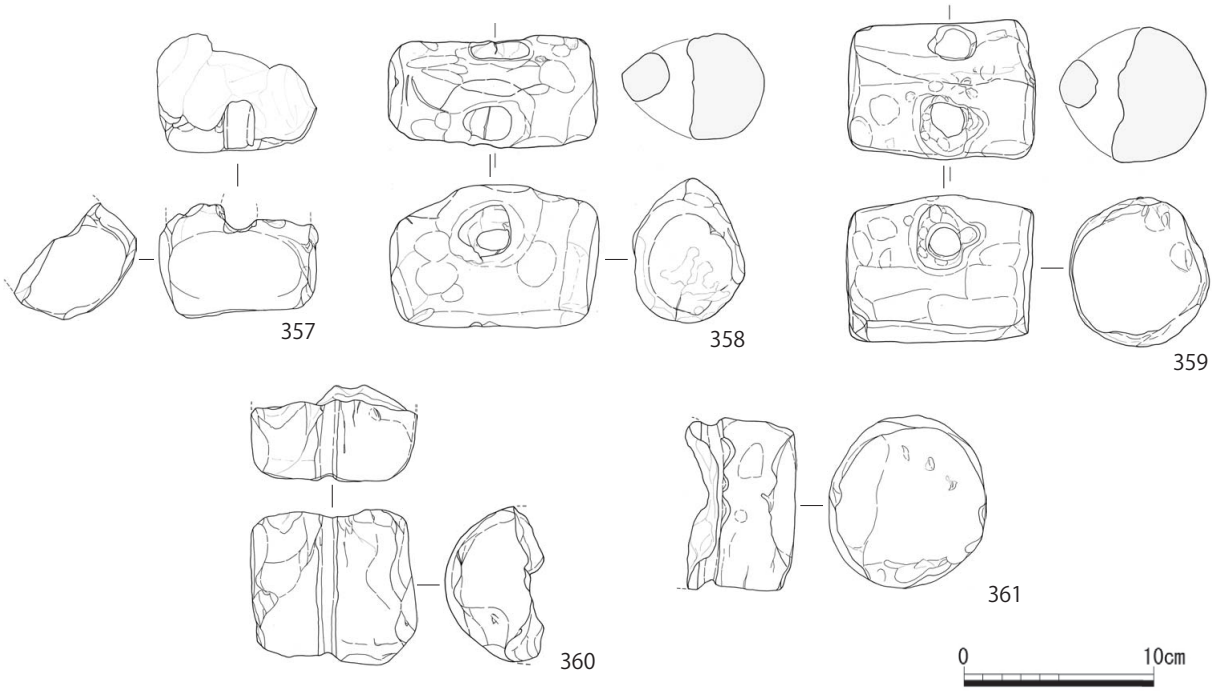


図 68　1031 - NR 出土　土製品（S = 1/4）

その際に押し出された粘土が盛り上がり、全体の形状は凸字に近くなっている。表面全体に整形時の指頭圧痕が残される。他の土錘と比較して表面にひび割れが目立つ。法量は長さ 10.6 ㎝、高さ 7.4 ㎝、直径約 6.4 ㎝（縦に長い楕円形の長軸）、重量 437.0 g である。下半部は赤褐色に変色しているが、上部は粘土本来の暗黄灰色を呈する。

359 は円筒形の粘土塊に孔を穿った土錘である。358 と同様、孔を穿つ際に上部がやや盛り上がっているがその度合いは小さく、ほぼきれいな円筒形を保っている。表面上半部は丁寧にナデつけられている。下半部には粘土を削り取ったような跡が残る。法量は長さ 9.3 ㎝、高さ 7.3 ㎝、直径 6.5 ㎝。重量は 590.7 g で、今回出土した土錘でもっとも重い。表面は全体に暗黄灰色で、片側上面に黒斑がつく。

360 は全体の半分程度が遺存している。円筒の中ほどに沿って浅い溝が一周する形状の土錘であると考えられる。表面は比較的丁寧にナデつけられているが、整形時の指や爪の跡も若干見られる。法量は長さ 8.4 ㎝、高さ 8.1 ㎝、直径 8.1 ㎝、重量 282.5 g である。断面の形状は正円形に近いと考えられる。溝は幅 0.6 ～ 0.8 ㎝、深さ 0.5 ㎝である。指でナデつけて溝を整形している。表面は全体に暗黄灰色を呈する。

361 は 360 と同様の円筒の中ほどに溝を巡らせた土錘であると考えられる。溝より片側が欠失している。表面には一部に整形時の皺が残るが、全体にナデつけている。法量は長さ 5.2 ㎝以上、高さ 8.6 ㎝、直径 8.6 ㎝、重量 393.2 g である。溝は幅 0.6 ～ 1.0 ㎝、深さ 0.5 ～ 0.8 ㎝で、360 よりも全体にしっかりと溝が作られている。表面は暗黄灰色を基調にして一部が赤褐色に変色している。

土錘は出土遺構の性質上、詳細な時期の特定は困難であるが、古墳時代前期の遺物である可能性がもっとも高い。土錘の具体的な用途についても確定はできないが、類似した形状の木錘が各地で出土している点は興味深い（渡辺誠 1981）。これらは弥生時代以降に見られ、とくに 357 ～ 359 と似た形状の資料は古墳時代に現れるようである。木錘は出土状況や民俗資料との比較から、もじり編みな

どに用いられた可能性が指摘されている。材質が異なるため一概に木錘と同一視することはできないが、形態の類似性は注目すべき点であろう。

石器

（図 69・70 - 362 ～ 375、図版 41、表 1）

凹石 1 点、石鏃 12 点、石錐 1 点がある。

362 は 1141 - SK から出土した凹石である。全体に丸みを帯びた直方体を呈する。6 面のうち 4 面の中央には明確な凹みが存在し、残る 2 面にも溝状の凹みが見られる。ここでは明瞭な凹みが複数見られることから凹石としているが、磨り痕も見られ、磨石や敲石としても用いていた可能性は高い。重量は 1767.3 g である。

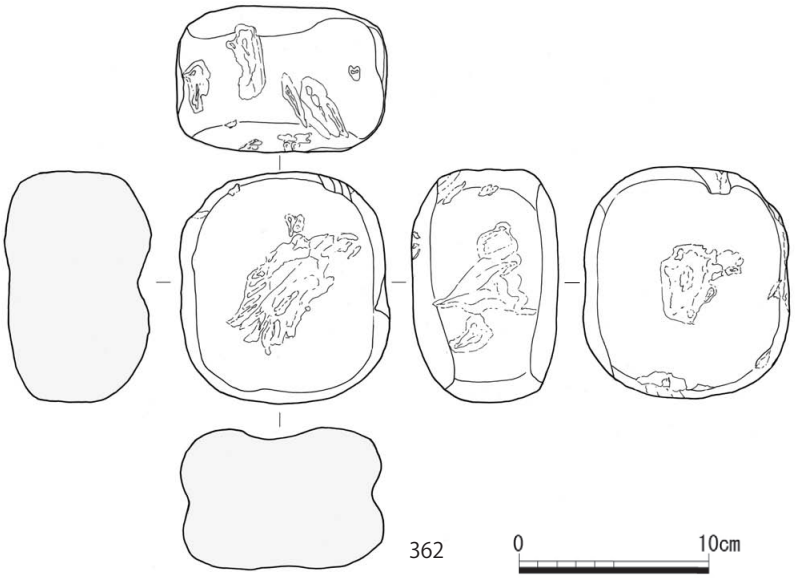


図 69　1141 - SK 出土　凹石（S ＝ 1/4）

363 ～ 374 は石鏃である。材質はいずれもサヌカイトである。石鏃はそのほとんどが中世耕作溝および遺構面直上から出土したものである。366 は古墳時代畠土（Ⅲ層）、371 は自然河道 1031 - NR からの出土であるが、これらも利用時よりも後の時代の遺構に混入したと考えられる。

表 1　石器一覧表

遺物番号	遺物種	出土地点	法量（長さ×幅×厚さ）	重量（g）
362	凹石	1141 - SK	11.61 × 10.70 × 6.64 ㎝	1767.30 g
363	石鏃	遺構面上（C2 区）	2.27 × 1.20 × 0.22 ㎝	0.43 g
364	石鏃	遺構面上（E11 区）	2.83 × 1.22 × 0.31 ㎝	0.92 g
365	石鏃	中世耕作溝（162 - SD）	3.12 × 1.70 × 0.43 ㎝	1.50 g
366	石鏃	古墳時代畠土（Ⅲ層 B14 区）	2.38 × 1.59 × 0.26 ㎝	0.88 g
367	石鏃	遺構面上（A11 区）	3.69 × 1.92 × 0.45 ㎝	1.56 g
368	石鏃	遺構面上（D15 区）	3.36 × 1.81 × 0.28 ㎝	1.29 g
369	石鏃	遺構面上（拡張区）	2.67 × 1.49 × 0.49 ㎝	1.51 g
370	石鏃	遺構面上（拡張区）	2.78 × 1.59 × 0.39 ㎝	2.62 g
371	石鏃	1031 - NR 中層	2.94 × 1.97 × 0.40 ㎝	2.04 g
372	石鏃	中世耕作溝（098 - SD）	2.64 × 1.73 × 0.50 ㎝	1.37 g
373	石鏃	中世耕作溝（番号不明）	5.19 × 1.66 × 0,62 ㎝	2.91 g
374	石鏃	遺構面上（拡張区）	4.13 × 1.15 × 0.45 ㎝	2.11 g
375	石錐	排水溝掘削時	3.51 × 1.54 × 0.43 ㎝	2.46 g

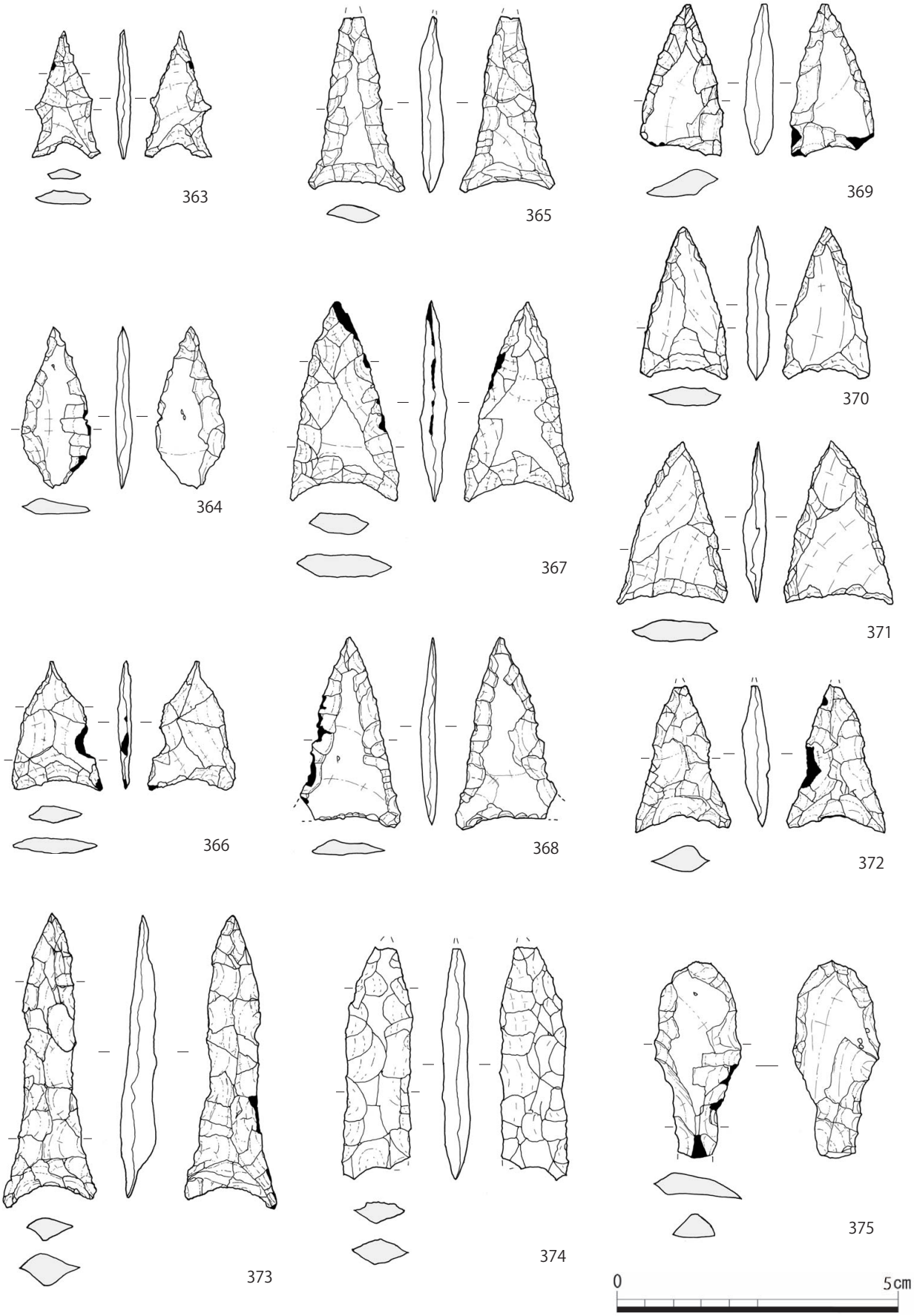


図 70　石鏃・石錐（S ＝ 1/1）

375 は先端部が失われているが石錐であると考えられる。材質はサヌカイトである。調査区の排水溝を掘削中に出土したもので、正確な出土層位は不明である。

木製品（図 71 ～ 74 - 376 ～ 384、図版 44・45）

木製品には槽 3 点（376 ～ 378）、泥除 2 点（379・380）、鍬 1 点（381）、容器 1 点（382）、樋 1 点（384）、不明平材 1 点（383）がある。いずれも自然河道 1031-NR からの出土である。容器（382）のみが下層からの出土で、あとはいずれも中層からの出土である。規模の大きい河道からの出土であるため個々の時期を明確にすることは難しいが、出土土器や周辺の遺構の存在を踏まえると、古墳時代前期の遺物である可能性がもっとも高い。

1031 - NR からは中層を中心に木片が多数出土したが、明確に加工が行われているものはここに報告する資料のみである。他に長さ 1 m前後、直径 3 ㎝前後の比較的真っすぐな枝なども出土しており、最低限の加工のみで堰などの構築物に用いていた可能性も残るが、今回は報告対象外とする。

今回報告する木製品については高級アルコール法による保存処理を施している。図版 44・45 は保存処理前に撮影した写真である。

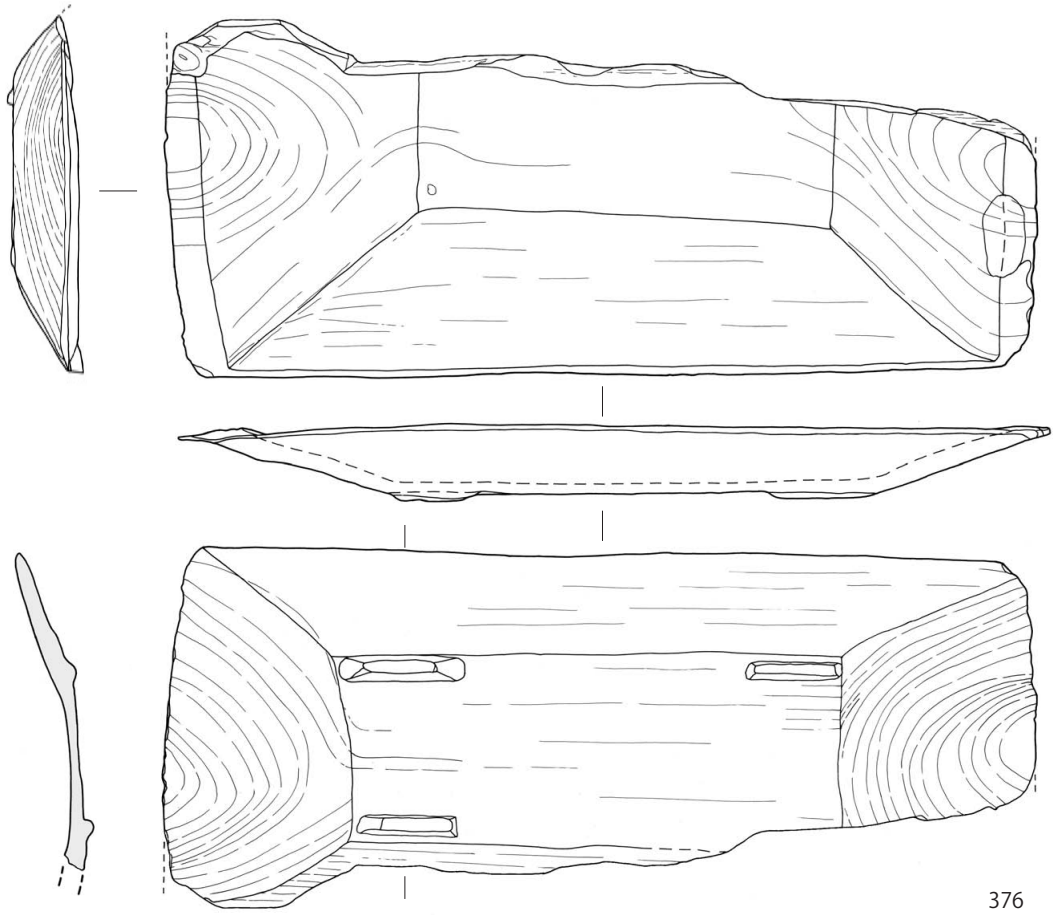
376 ～ 378 は槽である。376・377 は底部に 4 つの脚をもつと考えられる。今回出土した槽は弥生～古墳時代の例としては比較的大型の部類である。

376 は全体の約 7 割が遺存しているが、土圧・水圧によって当初の形状からは若干歪んでいる可能性がある。法量は長辺 91.2 ㎝・短辺 37.8 ㎝以上、高さ 7.3 ㎝（脚を含む）。器壁の厚さは 1.4 ～ 2.2 ㎝で底部がやや薄くなっているがほぼ均一である。一木の削り出しで作られている。表面の磨滅の影響もあり、削り痕は明確ではない。脚は底部平坦面の四隅に配されており、その高さは 1 ㎝未満である。

377 は全体の約 5 割が遺存している。法量は長辺 73.6 ㎝、短辺 27.6 ㎝以上、高さ 13.2 ㎝（脚を含む）。器壁の厚さは 1.5 ～ 1.9 ㎝で各部位ほぼ同じである。一木の削り出しで作られている。削り痕は確認できない。脚は底部平坦面に二脚残っており、当初は四脚であったと考えられる。脚は長辺沿いでやや中央に寄った位置に配されている。脚の高さは約 2.5 センチで、断面形は三角に近い台形を呈する。平面形は 376 より小さく、高さはやや高いが、全体の形状は 376・377 でよく似通っている。

378 は他より小さい破片であるが、槽の側辺部分であると考えられる。法量は長辺 76.0 ㎝、短辺 13.6 ㎝以上、高さ 8.0 ㎝以上である。側辺と底面の境界付近で割れていると想定される。器壁の厚さは長辺側で約 1.0 ㎝、短辺側で約 2.5 ㎝と差が見られる。脚の有無は不明である。残存部分からの判断であるが、376・377 よりも全体に各部の稜がシャープに整形されている。

379・380 は鍬に装着して用いる泥除である。379・380 はほぼ同じ形状をしていたと考えられる。同様の形状の泥除は弥生時代後期～古墳時代中期頃に見られる（奈良国立文化財研究所 1993）。
379 は泥除の上半部である。法量は横 27.0 ㎝以上、縦 12.1 ㎝以上、厚さ 0.7 ㎝（平坦部の値）。片面の上端には長さ 12.8 ㎝、幅 2.1 ㎝、厚さ 0.5 ㎝の台状の突帯が付く。この突帯が鍬との接合部分にあたると考えられる。中央には 4.2 × 5.2 ㎝以上の楕円形の孔がある。この孔は突帯側の面からくり抜かれている。



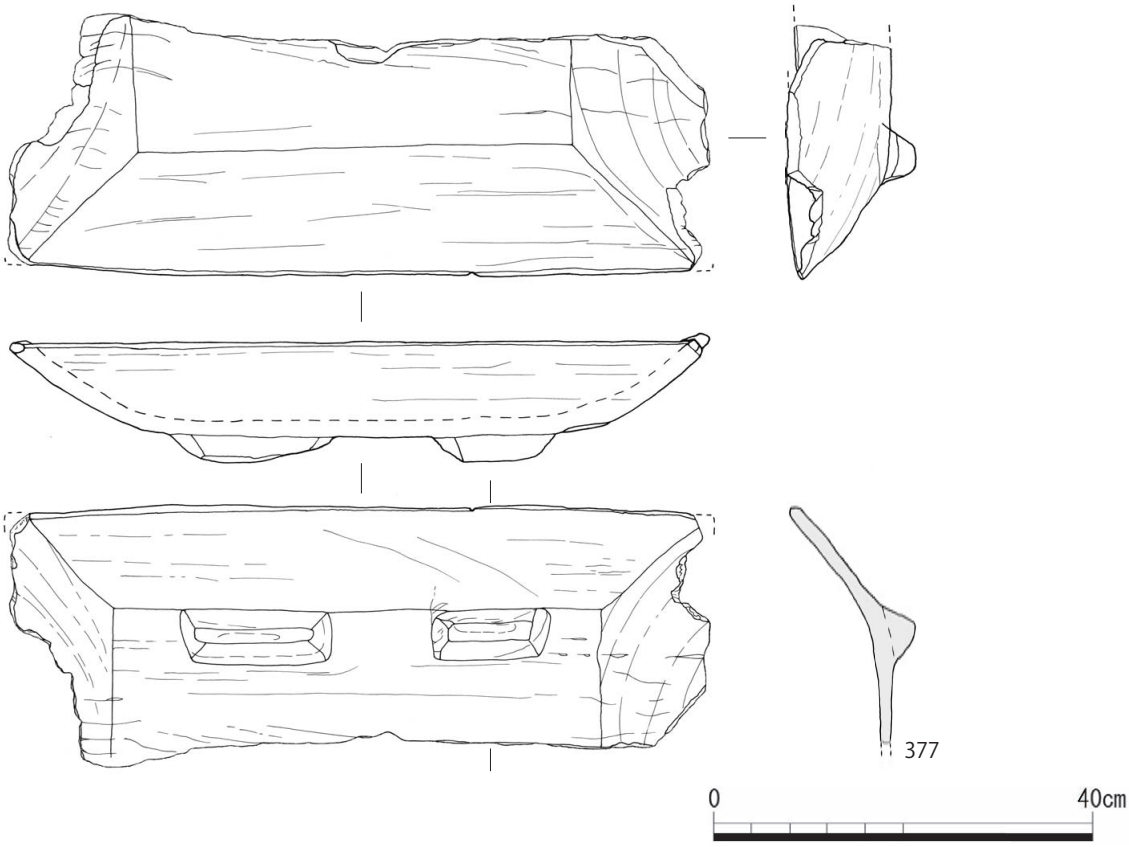


図 71　1031 - NR 出土　木器①（S = 1/8）

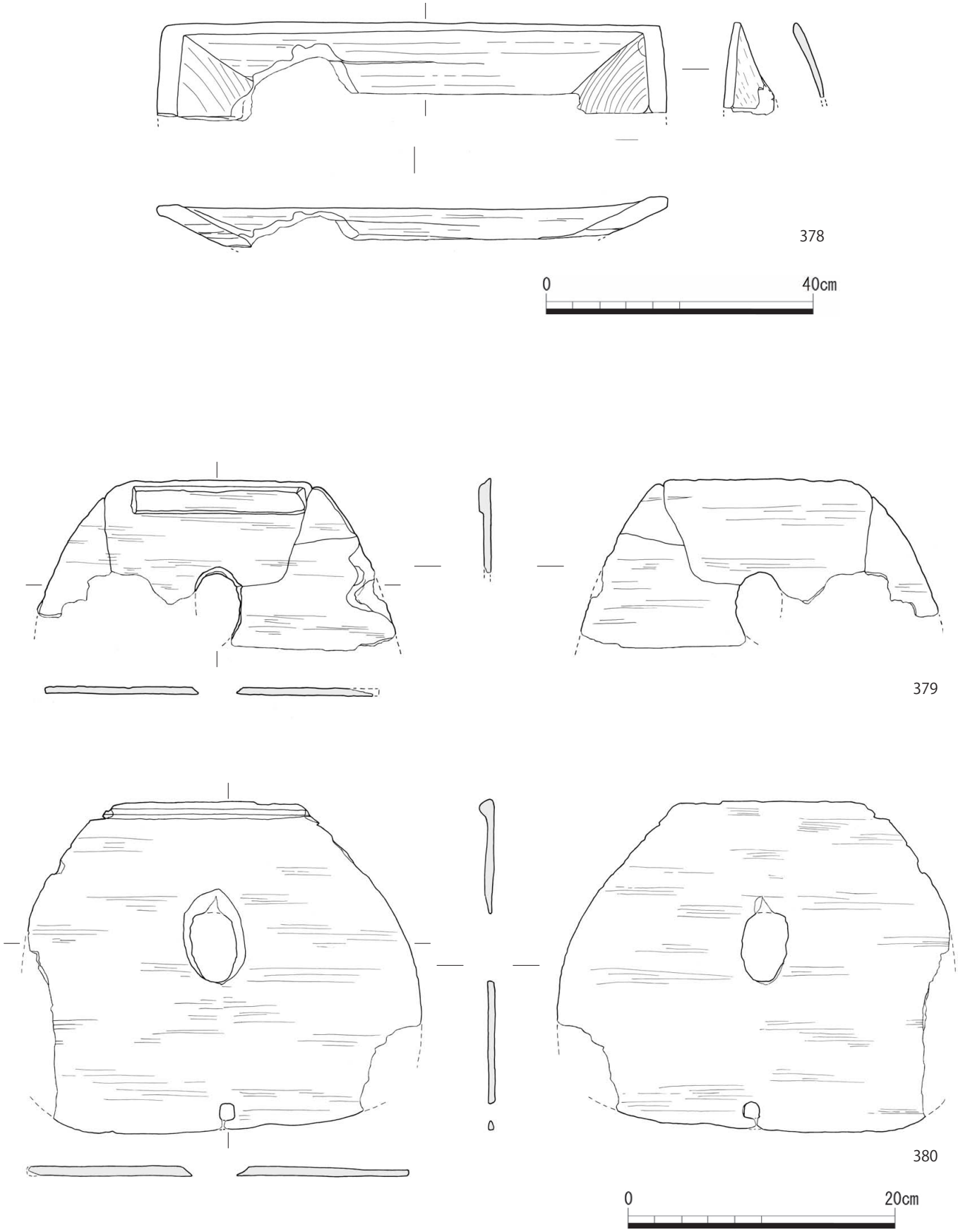


図 72　1031 - NR 出土　木器②（378：S ＝ 1/8、379・380：S=1/4）

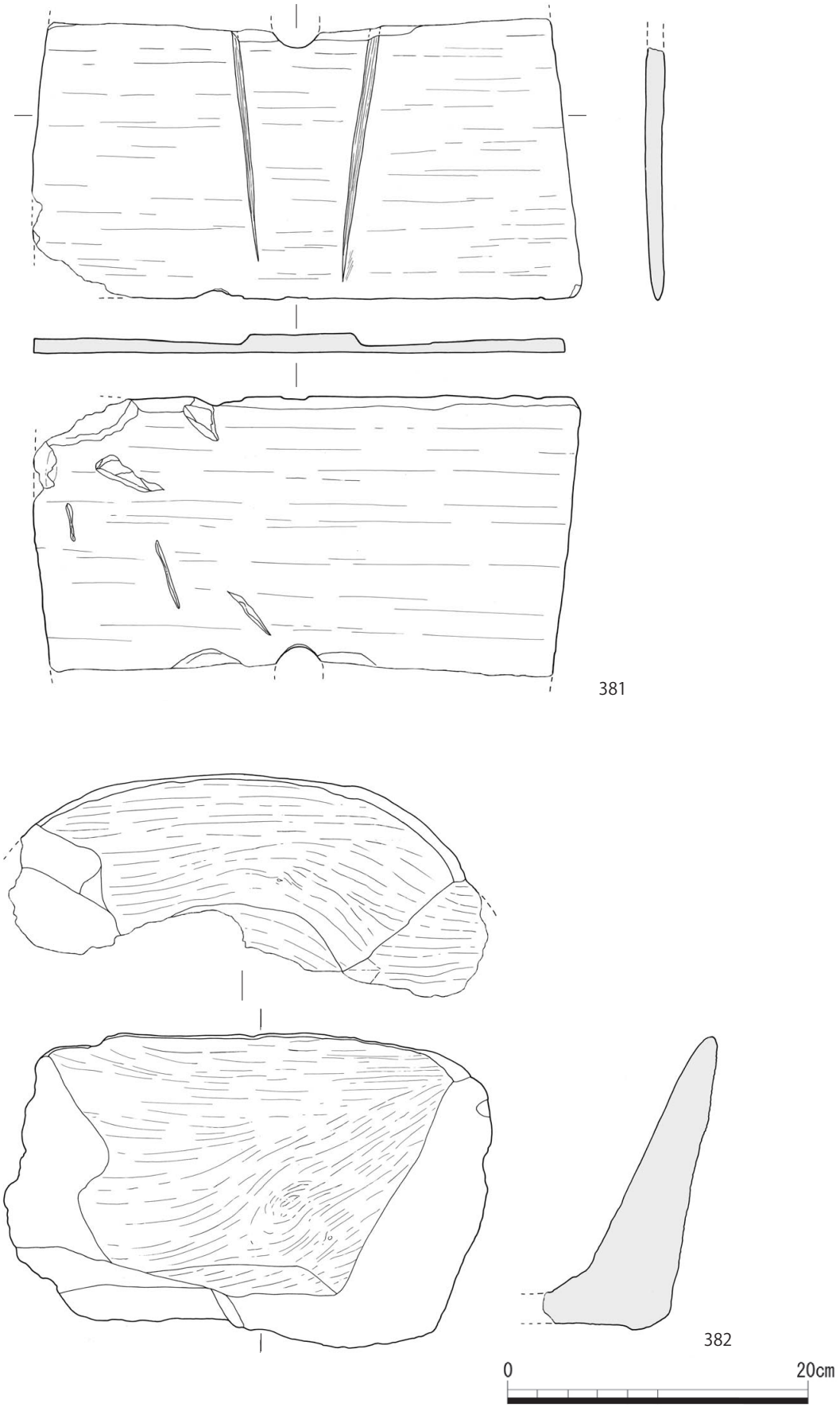


図 73　1031 - NR 出土　木器③（S = 1/4）

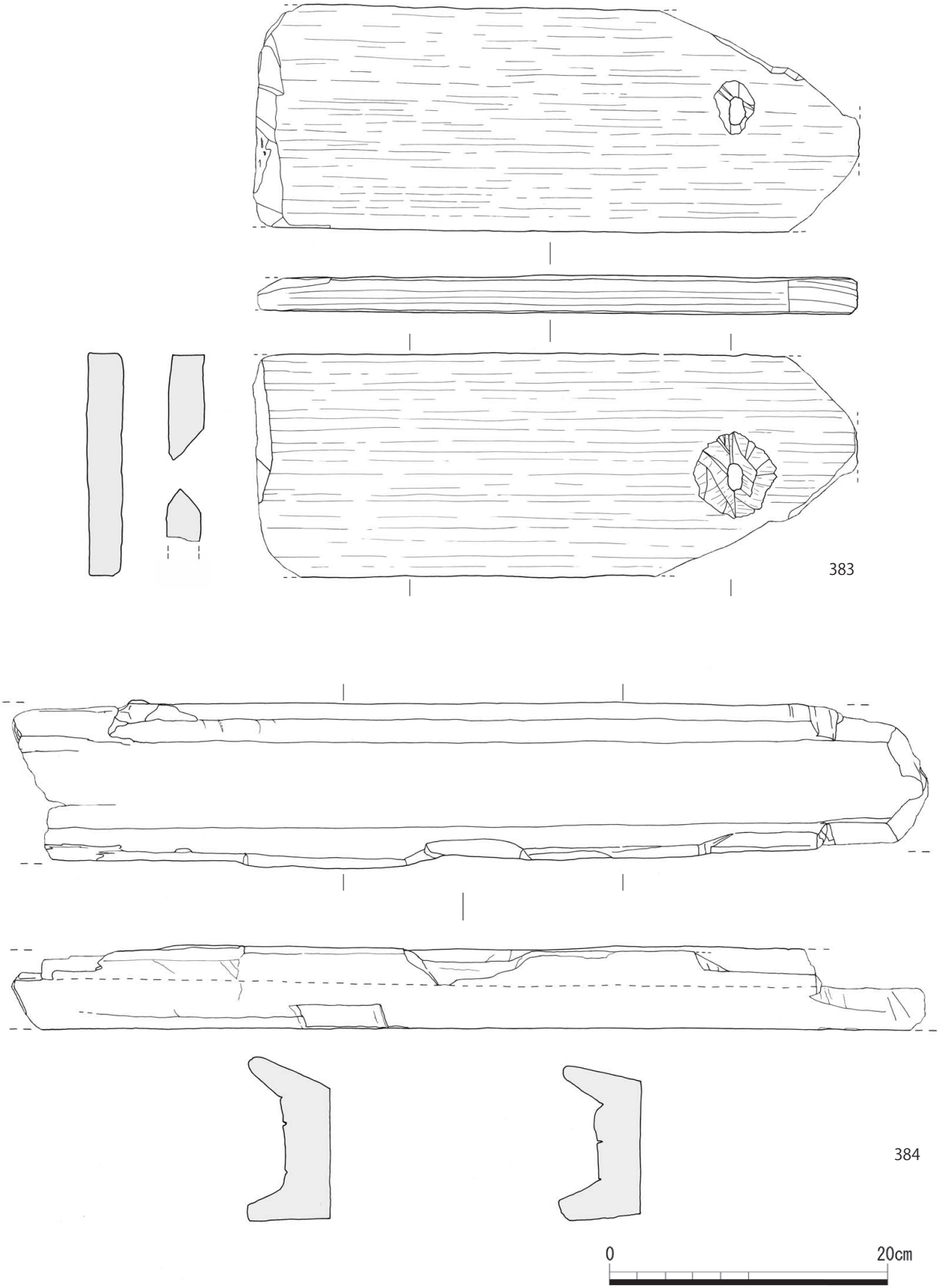


図 74　1031 - NR 出土　木器④（S = 1/4）

380 は下端両隅が欠損している。法量は横 29.2 ㎝以上、縦 24.6 ㎝以上、厚さ 0.8 ㎝（平坦部の値）。片面の上端には長さ 15.2 ㎝、幅 1.3 ㎝、厚さ 0.6 ㎝の断面三角形状の突帯が付く。中央には 3.2 × 5.2 ㎝以上の楕円形の孔がある。この孔は突帯側の面からくり抜かれている。下端部中央には一辺 1.1 ㎝四方の方形の孔がある。

381 は鍬である。いわゆる直柄横鍬であると考えられる。下端の一部と上端部全体が欠損している。現存する上端部中央の孔が柄の装着孔であると推測される。法量は横 36.6 ㎝、縦 18.0 ㎝以上、厚さ 0.9 ㎝（平坦部の値）。片面の中軸部分は下から上に向かって最大で高さ 0.8 ㎝台上に削り残されている。

382 は容器であると考えられる。本来は一木の中央部を刳り抜いた鉢状であったと考えられる。全体像が不明であるため、臼のようなものである可能性も残されている。法量は長さ 31.0 ㎝以上、高さ 21.2 ㎝以上、厚さ最大 6.0 ㎝。内面は若干ながら炭化している。

384 は樋である。両端が欠失しているため、本来の長さは不明である。法量は長さ 65.5 ㎝以上、上幅 11.0 ㎝、下幅 9.6 ㎝。断面の形状は上方がやや開いた凵字状である。側面と下面は平滑に仕上げられている。角材状に切り出した後に、流水部分を削り出したものと考えられる。

383 は穿孔のある平材である。使用用途は不明であるが、明確な加工材であるためここで報告する。長さ 40.4 ㎝以上、幅 16.0 ㎝、厚さ 2.6 ㎝の長方体である。材の端よりの位置に両側から孔が穿たれている。部分的に加工痕が見られるが、加工の細かな単位は不明である。

【参考文献】

石野博信・関川尚功 編 1976『纒向』橿原考古学研究所・桜井市教育委員会

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

渡辺誠 1981「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』66‐4

寺沢薫 編 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第 49 冊

奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊

山田昌久 編 2003『考古資料大観 8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館

第Ⅳ章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
田中義文・松元美由紀・辻　康男

はじめに

本報告では、古墳時代前期の畠跡を構成する古耕作土と、その基盤および溝埋土の花粉分析による古植生や栽培環境、同時期に近接して存在する竪穴建物跡で回収された炭化種実の同定結果から、当該期の植物利用を検討する。

1. 試料

分析内容は花粉分析 4 点と単体種実同定 1 式である。花粉分析は、古墳時代の畠跡を構成する耕作土（サンプル 1：Ⅲ層＜ 10 層＞）、畠耕作土直下で検出された天地返しの痕跡と考えられる併行溝群の埋土（サンプル 2:畠溝 1125-SD ＜ 17 層＞・サンプル 3:畠溝 1124-SD）、畠耕作土の基盤層（サンプル 4：Ⅳ層＜ 11 層＞）で実施する。サンプル 1・2・4 は、調査区東壁で採取された。サンプル 3 は、調査区東部の C-6 区で採取された。分析層準の堆積状況および試料採取位置を図 1 に示す。

炭化種実は、竪穴建物跡の 1004 - SH の南側側溝埋土（No.689）、1036 - SH の遺構検出面（No.691）、1041 - SH の床面直上炭内（No.693）より検出された 3 点 8 粒を同定する。

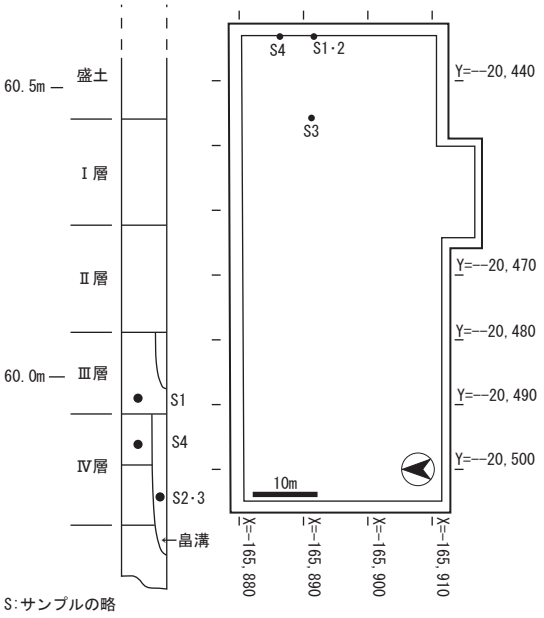


図 75　花粉分析試料採取層準の模式柱状図と試料採取位置

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩による篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、個数を数えて一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後は、種実遺体を容器に入れて返却する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表2に示す。いずれも試料も花粉化石の保存が悪く、産出数が少ない。木本花粉では、モミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、モチノキ属が産出するが、針葉樹花粉が多い傾向にある。草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、デシコ科、ワタ属近似種、ヨモギ属タンポポ亜科が検出され、イネ科の割合がやや多い。ワタ属近似種は、表面構造はワタ属花粉に似るが、典型的なワタの花粉と比べて小型で、発芽孔の数も少ない。シダ類では、ヒカゲノカズラ属、イノモトソウ属、ミズワラビ属などがみられる。花粉化石に比べて数が多く、保存状態も良い。

表2　花粉分析結果

種類	試料名			
	S1	S2	S3	S4
木本花粉				
モミ属	1	2	－	7
ツガ属	－	1	1	4
マツ属	2	4	－	14
コウヤマキ属	－	－	－	1
スギ属	－	－	－	3
コナラ属アカガシ亜属	1	－	1	1
ニレ属－ケヤキ属	1	1	－	－
モチノキ属	－	－	1	－
草本花粉				
イネ科	16	2	2	9
カヤツリグサ科	1	－	－	1
ナデシコ科	2	1	2	1
ワタ属近似種	－	－	－	1
ヨモギ属	1	1	－	1
タンポポ亜科	1	1	－	－
不明花粉				
不明花粉	1	－	－	1
シダ類胞子				
ヒカゲノカズラ属	2	2	2	6
イノモトソウ属	30	10	10	29
ミズワラビ属	5	－	2	5
他のシダ類胞子	92	25	19	86
合　計				
木本花粉	5	8	3	30
草本花粉	21	5	4	13
不明花粉	1	0	0	1
シダ類胞子	129	37	33	126
合計(不明を除く)	155	50	40	169

Sはサンプルを示す。

(2) 種実同定

結果を表3に示す。被子植物3分類群（木本のコナラ属－シイ属、スモモ、草本のイネ）が同定され、栽培種のスモモの炭化した核が1個（1036-SH)、イネの炭化した胚乳が6個(1041-SH)確認された。栽培種以外では、常緑または落葉高木のコナラ属－常緑高木のシイ属の炭化した子葉の破片が1個（1004-SH）確認された。

各分類群の写真を図版2に示し、形態的特徴等を以下に記す。種実遺体の大きさは、デジタルノギスを用いて長さ、幅、厚さを計測し、結果を表2に示す。完全な計測値を得られない場合は、残

表3　種実同定結果

試料情報		同定結果					計測値(mm)			備考
番号	遺構/層位	分類群	部位	状態		個数	長さ	幅	厚さ	
689	1004-SH　南区壁溝内	コナラ属－シイ属	子葉	半分	炭化	1	8.74	6.20	3.43 +	頂部に径0.7mmの孔
691	1036-SH 検出面清掃時	スモモ	内果皮	破片	炭化	1	8.77 +	9.61	4.15 +	半分,基部欠損
			種子	完形	炭化	1	6.77 +	6.43	－	内果皮内に残存,基部欠損
693	1041-SH 床面上	イネ	胚乳	完形	炭化	5	4.15	2.76	1.77	
							4.43	2.79	1.95	
							4.43	2.48	1.93	
							3.92	3.09	2.05	
							3.17 +	2.67	2.10	頂部欠損
				破片	炭化	1	－	－	－	

存値にプラス（＋）で表示し、欠損等で計測不可な場合はハイフォン（ - ）で表示する。

・コナラ属（Quercus）－シイ属（Castanopsis）　ブナ科

子葉は炭化しており黒色。完形ならば卵体。破片は 2 枚からなる子葉の合わせ目に沿って半割した 1 片で、長さは 8.7mm、幅は 6.2mm、残存厚は 3.4mm である。頂部はやや尖り、子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線は僅かに窪み、頂部に径 0.7mm の小さな孔（主根）がある。

出土子葉は、小型でツブラジイ（C. cuspidata（Thunb. ex Murray）Schottky）の大きさに近いが、ツブラジイを含むシイ属の成熟個体は頂部が尖ることから、コナラ属（クヌギやアベマキ、ナラガシワ以外）の未熟個体の可能性も考えられるため、両属をハイフォンで結んでいる。

・スモモ（Prunus salicina Lindley）　バラ科サクラ属

内果皮（核）、種子は炭化しており黒色。内果皮は、完形ならばレンズ状楕円体。出土内果皮は、1 本の縫合線に沿って半割した 1 片で基部を欠損し、残存長 8.8mm、幅 9.6mm、残存厚 4.2mm である。背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。内部には 1 個の種子が残存する。種子は、残存長 6.8mm、幅 6.4mm の偏平な広卵体で、表面は発泡している。

・イネ（Oryza sativa L.）　イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ 3.9 ～ 4.4mm、幅 2.5 ～ 3.1mm、厚さ 1.8 ～ 2.1mm のやや偏平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2 ～ 3 本の縦隆条が配列する。

４．考察

(1) 花粉分析

花粉分析試料では、いずれも化石の保存状態が悪かった。産出した花粉化石についてみてみると、組成はシダ類胞子や針葉樹花粉に偏っている。通常、畑地耕作土は、好気的（酸化的）土壌環境が維持される。堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村 1967）。これらのことから、今回の花粉分析層準では、堆積後作用により、花粉化石の大部分が消失したと考えられる。産出した花粉化石では、シダ類胞子や針葉樹花粉が相対的に多い。これらは、風化に対する耐性が強い（徳永・山内 1971）。したがって、表 2 で示される花粉化石群集は、選択的に残存した化石で多く構成されており、周辺植生を反映していないと考えられる。

なおシダ類胞子では、水生植物のミズワラビ属が産出する。調査区の立地をふまえると、ミズワラビ属の産出からは、分析層準が洪水堆積物もしくは湿地堆積物を母材とする可能性が示唆される。また、サンプル 4 からは、ワタ属近似種が確認される。1 個体のみが産出することや、形態的に典型的なワタ属でないことから、近縁の別種もしくは、後代からの落ち込みの可能性もある。

以上の花粉分析結果から、古墳時代前期の畠遺構とその基盤は、地表環境が乾燥しており、好気的

土壌環境が維持される傾向にある氾濫原に存在していたと考えられる。一般的な地形の理解としては、このような氾濫原は、自然堤防もしくは離水ないし干出した後背湿地が想定される。より詳細な地表環境の復原にあたっては、調査区堆積層断面の層相や周辺の微地形をふまえ、さらに検討を進めていくことが課題である。

（２）炭化種実

各遺構より出土した種実遺体には、炭化した栽培種のスモモ（1036-SH）とイネ（1041-SH）が確認された。スモモ、イネは、古くから栽培のために渡来した植物で（南木 1991）、スモモは観賞用の他、果実が食用に、穀類のイネは胚乳が植物質食糧として利用される。これらは、当時の五井遺跡周辺域で利用された植物質食料と示唆され、居住域内での利用と何らかの理由により火を受け炭化残存したことが推定される。

栽培種以外では、炭化した常緑または落葉高木のコナラ属－常緑高木のシイ属（1004-SH）が確認された。コナラ属やシイ属などの堅果は、一部アク抜きを要するが、子葉が食用・長期保存可能で収量も多い有用植物であることから、当時の五井遺跡付近の森林から採取・利用されていた可能性がある。これらの栽培植物を含む有用植物が、各遺構から炭化した状態で出土したことから、当時の居住域内における利用と、火を受け残存したことが推定される。

【参考文献】

Erdtman G 1952『Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms（An introduction to palynology I）』Almqvist&Wiksells 539p

Erdtman G 1957『Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology II）』Almqvist&Wiksells 147p

Feagri K and Iversen Johs 1989『Textbook of Pollen Analysis』The Blackburn Press 328p

藤木利之・小澤智生 2007『琉球列島産植物花粉図鑑』. アクアコーラル企画 155p

石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p

南木睦彦 1991「栽培植物」『古墳時代の研究 4 生産と流通Ｉ』石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 雄山閣 165-174p

中村 純 1967『花粉分析』古今書院 232p

中村 純 1980『日本産花粉の標徴ＩＩ（図版）大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 12・13 集』 91p

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 642p

島倉巳三郎 1973『日本植物の花粉形態 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第 5 集』60p

徳永重元・山内輝子 1971『花粉・胞子 化石の研究法』共立出版株式会社 50-73p

第Ⅴ章　総　括

今回の調査における最大の成果は古墳時代前期の集落跡を確認したことである。以下に、古墳時代前期の集落を中心にして調査の成果をまとめる。

集落の構成

古墳時代前期の集落に関わる主な検出遺構は、竪穴建物８棟、掘立柱建物２棟を含む柱穴群、井戸４基を含む土坑、溝、畠跡である。これらの遺構は、調査区中央を南東から北西に向かって流れる自然河道 1031 - NR の河岸に位置している。遺構は河道の両岸に存在するが、中心となるのは東岸側である。河道からはコンテナ約 150 箱分にも及ぶ多量の土師器が出土している。土師器の状態や出土した状況から、今回確認した集落で用いられていたものであると考えられる。

集落を構成する要素の配置を見ると、河道のすぐそばに竪穴建物が建てられ、東岸側では竪穴建物群の間に掘立柱建物や土坑が存在し、そのさらに外側（東側）に畠が広がるという形をとる。井戸は畠の縁辺部付近に存在する。竪穴建物とピット群の間に位置する溝 1095 - SD からは土器が並んで出土しており、区画溝あるいは何らかの祭祀の場として用いられていた可能性が考えられることも興味深い点である。竪穴建物の重複状況や出土した土器の時期をふまえると、この地への居住が数世代程度続いていたことが推測され、時期的な積み重ねを考慮する必要はあるが、古墳時代前期における集落の構成を検討する上での良好な資料と言えるだろう。

集落の性格と位置付け

集落の構成要素としては、日常の生活空間として竪穴建物、それに付随する井戸や土坑、生産域として畠が存在している。検出した建物の規模や構造は、古墳時代としては一般的なものである。また、出土遺物は容器や農工具といった日常的な生活用具や、ミニチュア土器などの簡単な祭祀用具が中心である。金属器や玉類の生産などに関わる特徴的な遺構・遺物は見られない。詳細は後述するとおり、外来系の土器の数も非常に少ない。これらのことから、五井遺跡の集落はいわゆる農村的な性格が強い場所であったと考えられる。集落は調査区外へも広がっており、今回の調査で五井遺跡の集落全体の構成を把握できたわけではない。今回の調査範囲外に他の要素が存在する可能性はあるものの、少なくとも調査地点の一帯は、居住地周辺における農業を中心として生計を立てていた可能性が高いと言えよう。

橿原市内の古墳時代の集落遺跡では、玉類生産の大規模拠点である曽我遺跡や鍛冶関連遺物が出土した東坊城遺跡の存在などが知られている。また、四条遺跡や新堂遺跡をはじめ市内各所から渡来系遺物が出土している。これらの特徴的な遺跡は、主に古墳時代中期以降にその存在が目立ち始める。その時期には橿原市内における造墓活動も活発化し始める。五井遺跡の集落はその前段階における重要な資料となる。

出土土器の様相

土師器の大半は自然河道 1031 - NR からの出土である。他では竪穴建物や井戸、溝からも出土している。これらの時期はいずれも古墳時代前期であると考えられる。より具体的には布留 1 式期を中心とし、その前後の時期を若干含むと考えられる。自然河道 1031 - NR 中・下層の壺類や小型丸底土器には、布留 0 式期の様相を示す個体も一定量存在している。ただし、甕には庄内傾向の資料が非常に少ないという傾向も見られる。このような状況は、土器の入手において五井遺跡の農村的な性格や地理的要因が関わっている可能性が考えられる。出土した土師器の中では 1031 - NR 上層や、畠よりも新しい時期の遺構である 1133 - SE・1002 - SD からの出土品が新しい時期の様相を示している。この時期を最後に五井遺跡の集落は廃絶したようである。

大和の古墳時代前期の集落遺跡において注目される要素として、外来系土器の存在が挙げられる。今回の調査においても、外来系土器であると考えられる資料として数点の土師器を報告している。地域別では山陰系、東海系、吉備系の土器があり、山陰系がもっとも多い。ただし、外来系土器の量は非常に少なく、今回報告した十数点のほかは図化の困難な小片が若干存在するのみである。五井遺跡の土器全体における外来系土器の割合は 1％未満であると考えられる。大和における他の集落遺跡での調査では、外来系土器の占める割合が全体の 1 ～ 3 割程度である例も知られており、それらと比較すると非常に少ないと言える。

畠跡

詳細は第Ⅲ章第 3 節で述べたとおり、調査区の東部一帯で古墳時代前期の畠跡を検出した。近畿地方では畠の検出例は少なく、古墳時代以前に遡る例となるとさらに希少である。古墳時代以前の検出例は大阪府が多く、奈良県内では発志院遺跡（大和郡山市）で古墳時代の畠あるいは水田と考えられる溝が検出された例がわずかに知られる程度である。畠の検出例が少ない原因として、畠には微高地を選地する傾向があるという立地的な影響や、水田と比して地表の表層部分での耕作に終わる場合が多い点などが挙げられる。今回の調査において畠である可能性を指摘できたのは、畠耕土（基本層序Ⅲ層）下に深い溝が残されていたためである。この溝は天地返しなどによって形成された耕作痕である可能性があり、同様の遺構が東日本の畠の検出例においてしばしば確認されている。

近畿地方における例を見ると、久宝寺遺跡竜華地区（大阪府八尾市）では弥生時代末～古墳時代初頭の畠跡が東西約 200 m以上、南北約 100 m以上の広範囲にわたる畠跡が検出されている。また、水垂遺跡（京都府京都市）では河道の東岸に居住域、西岸に畠跡、そのさらに西側に広大な水田が広がるという古墳時代前期～中期の集落の姿が明らかになっている。ここでは河川の自然堤防上に総延長約 300 m、幅約 50 m前後という広い範囲で畠を営んでいる。これらの例は集落全体で経営されるような大規模な畠である。五井遺跡の畠は調査区外にも広がっており、これらの例と同様な大規模なものであった可能性もある。

五井遺跡の歴史

今回の調査成果をふまえ、調査地の歴史をまとめる。縄文時代から弥生時代にかけての遺構は見つかっていないが、自然河道や後世の耕作土中からは縄文時代後期以降の土器や石器が出土している。とくに自然河道からは弥生時代前期から後期にかけての各時期の土器が出土している。調査地に近い畝傍山周辺や曽我川上流域には縄文時代から弥生時代の遺跡が存在しており、五井遺跡周辺もその活動領域であったと考えられる。

古墳時代前期に入るとこの地に集落が営まれるようになる。現在のところ、農村的な集落であった可能性が高いと考えられる。古墳時代前期後半には自然河道が埋没し、集落も廃絶したと考えられる。その後、中世までの時期はごく少量の遺物が出土するのみで、明確な活動の痕跡は見られなくなる。古代には橿原市の東部一帯に藤原京が造営される。調査地は藤原京の西京極推定線よりわずかに西側に位置しており、藤原京関連の遺構確認も今回の調査におけるひとつの課題であったが、当該時期の遺構・遺物は見られなかった。

正確な時期は不明であるが、中世には耕作地としての利用が始まっていたようである。出土遺物は少なく、調査地一帯は耕作地としての利用が主であったと想定される。15 ～ 16 世紀頃には後に環濠集落を形成する村落の母体が調査地の周辺に生まれる。その後、現代に至るまで耕作地としてそれらの集落の管理下に置かれていたと考えられる。

【参考文献】

奈良県立橿原考古学研究所 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物報告第 49 冊

大和郡山市教育委員会 1989『発志院遺跡（経田地区）発掘調査の概要』

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 17 冊

日本考古学協会 2000『はたけの考古学』

奈良県立橿原考古学研究所 2002『伴堂東遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告書第 80 冊

奈良県立橿原考古学研究所 2005『乙木・佐保庄遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告書第 92 冊

財団法人大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 79 集

図　版

図版 1

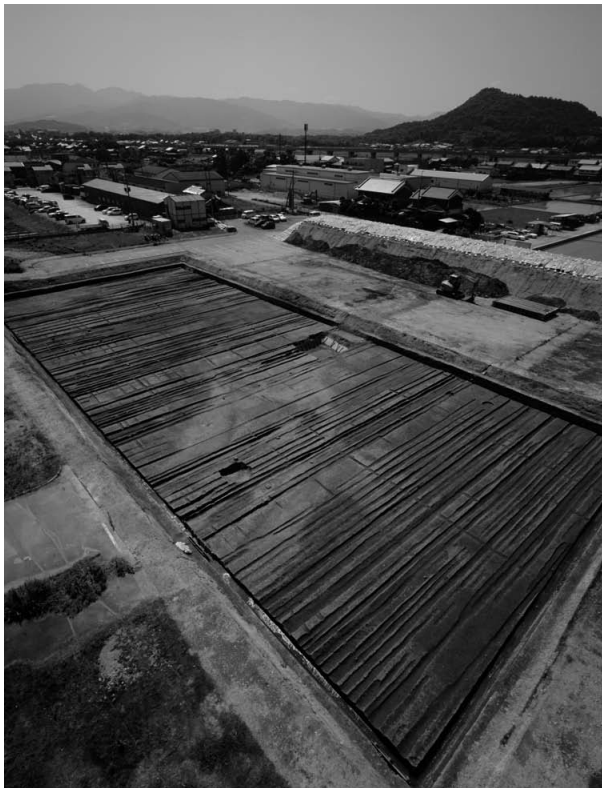
調査地遠景（東から）

調査地遠景（南西から。右奥は耳成山）

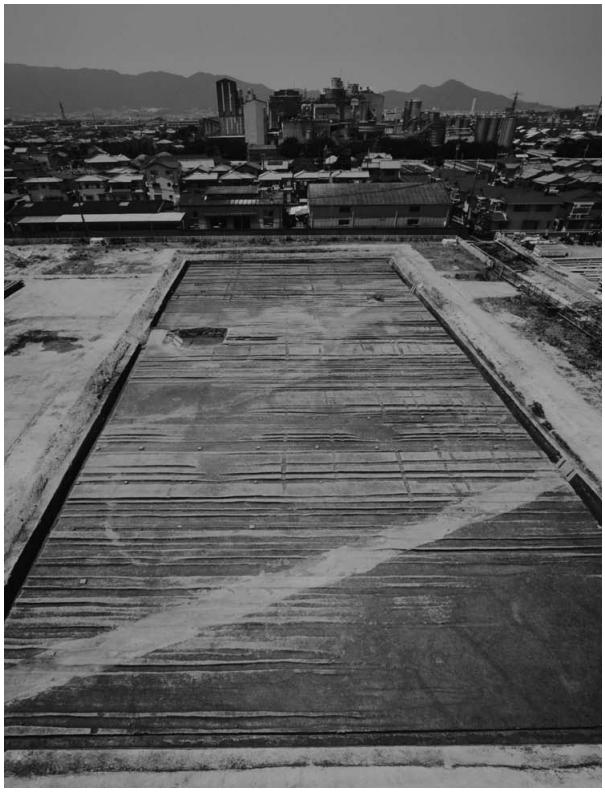
調査地全景（南から）

上層遺構（中世）検出状況（北西から）

図版 3



下層遺構（古墳時代）検出状況（北西から）



下層遺構（古墳時代）検出状況（東から）

下層遺構（古墳時代）検出状況（南東から）

下層遺構完掘状況（南東から）

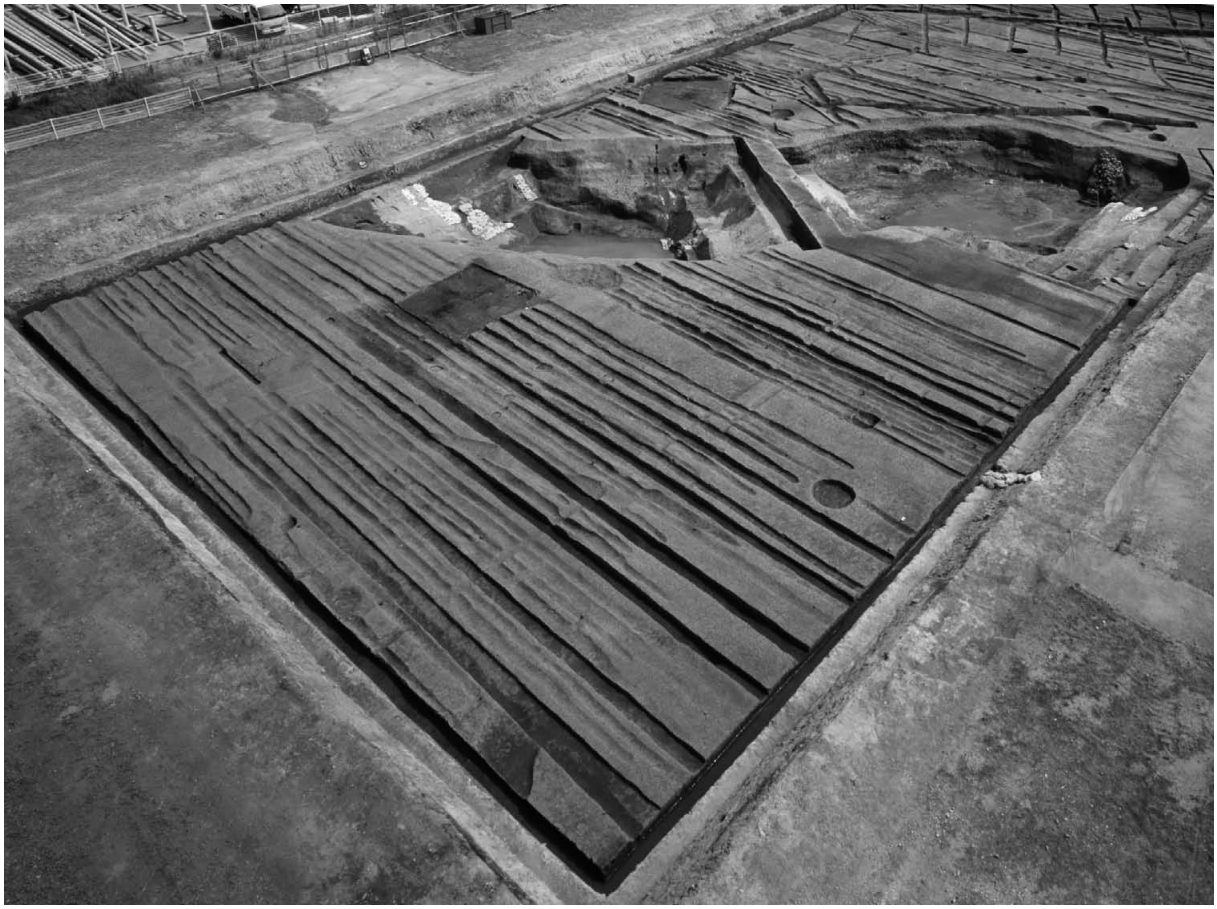
下層遺構完掘状況（東から）

図版 5

調査区東半 建物群・畠（南西から）

調査区東半 柱穴群（南から）

調査区東半 完掘状況（北西から）



調査区西半 完掘状況（南西から）

図版 7

1031-NR 完掘状況（南東から）

1031-NR 土層断面（北西から）

1031-NR 上層土器出土状況

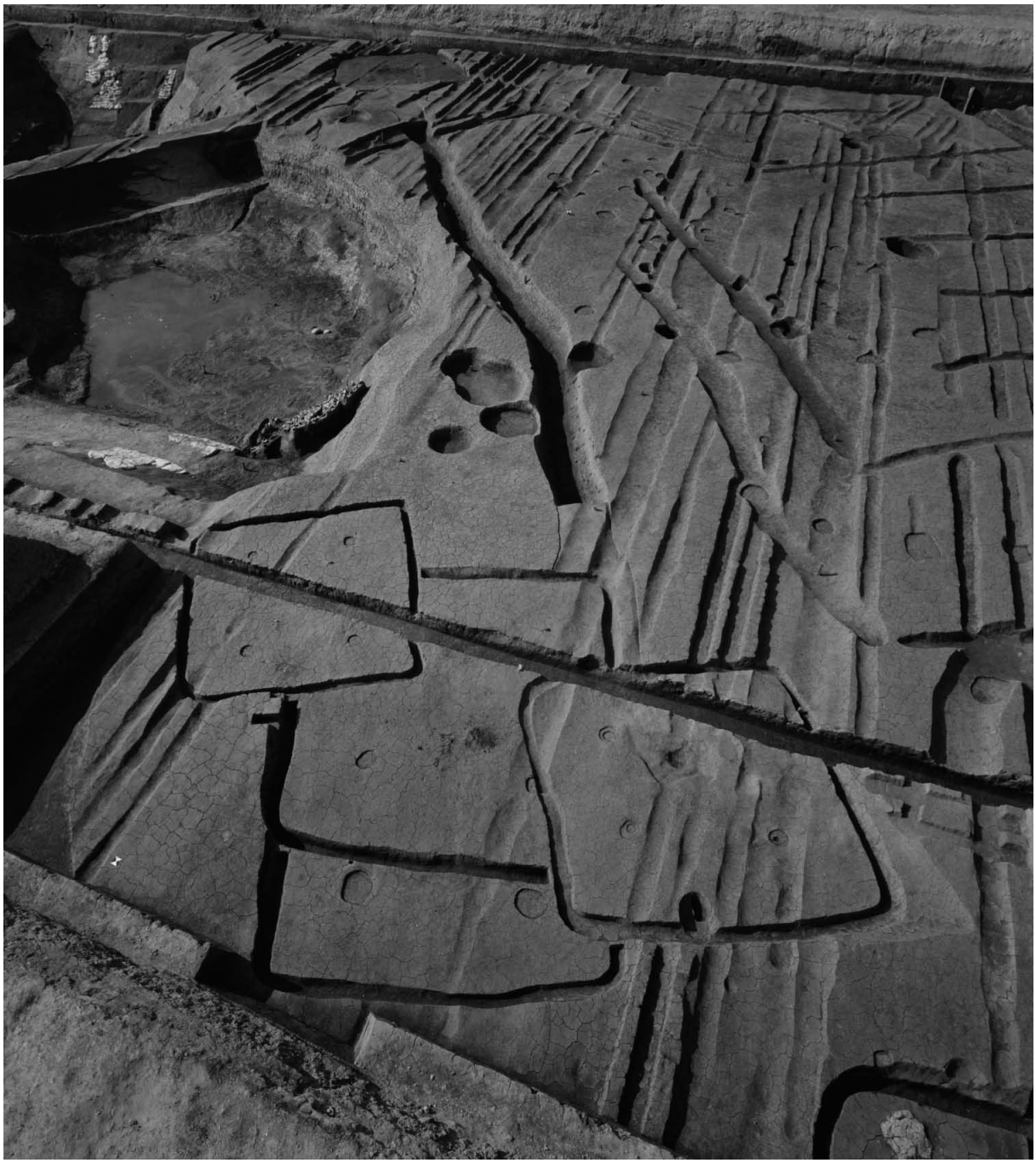
1031-NR 中層土器出土状況

1031-NR 下層土器出土状況

1031-NR 中層 槽出土状況

1031-NR 下層 土錘出土状況

図版 9

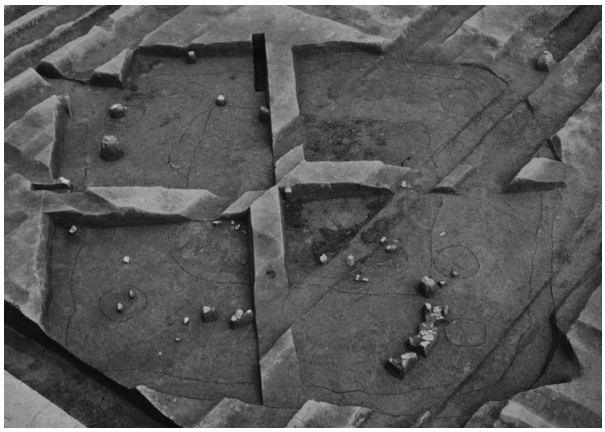


堅穴建物群（1031-NR 東岸。南東から）

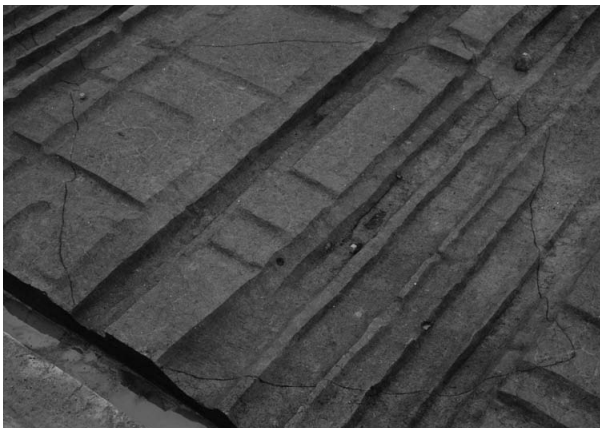
1079-PIT 群（北東から）

1092-SD・1007-SK 断面（北西から）

1036-SH 下層床面（北西から）



1036-SH 遺物出土状況（北西から）



1036-SH 検出状況（北西から）

1036-SH 中央 床面下断面（南から）

1036-SH 東柱穴断面（北西から）

図版 11

1037-SH 検出状況（北から）

1037-SH 壁溝検出状況（南西隅。南から）

1037-SH 遺物出土状況（北から）

1037-SH 完掘状況（南から）

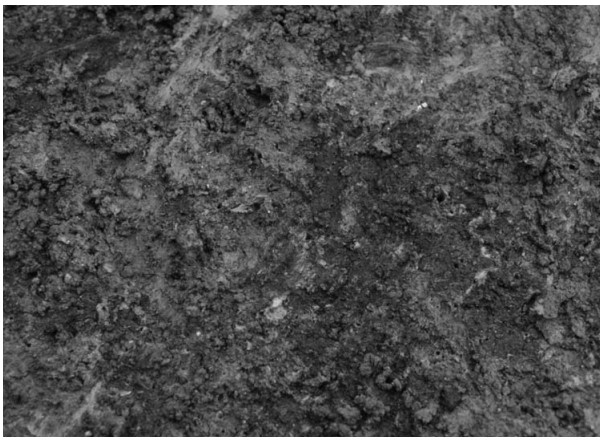
1041-SH 炭化物検出状況（北から）

1041-SH 完掘状況（北から）

1041-SH 検出状況（北から）

1041-SH 南東隅　炭化物（東から）

1041-SH 南西柱穴断面（北から）



1041-SH 炭化米出土状況（南から）

図版 13

1004-SH 床面検出状況（北西から）

1004-SH 検出状況（北西から）

1004-SH 炉跡（北から）

1004-SH 南東柱穴断面（南東から）

1154-SK（1004-SH 下の土坑。南東から）

1006-SH 床面検出状況（北東から）

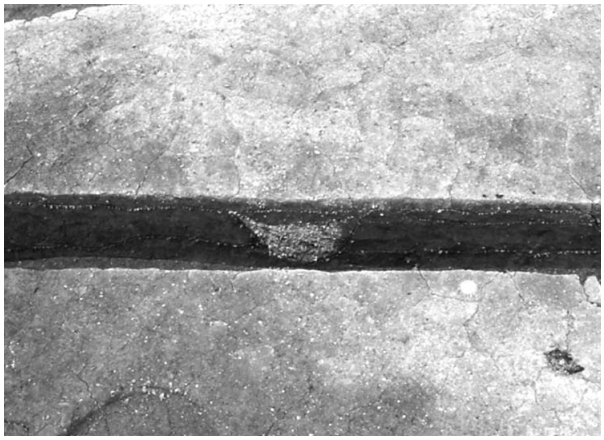
1005-SH（手前）・1151-SH（奥）（北西から）

図版 15

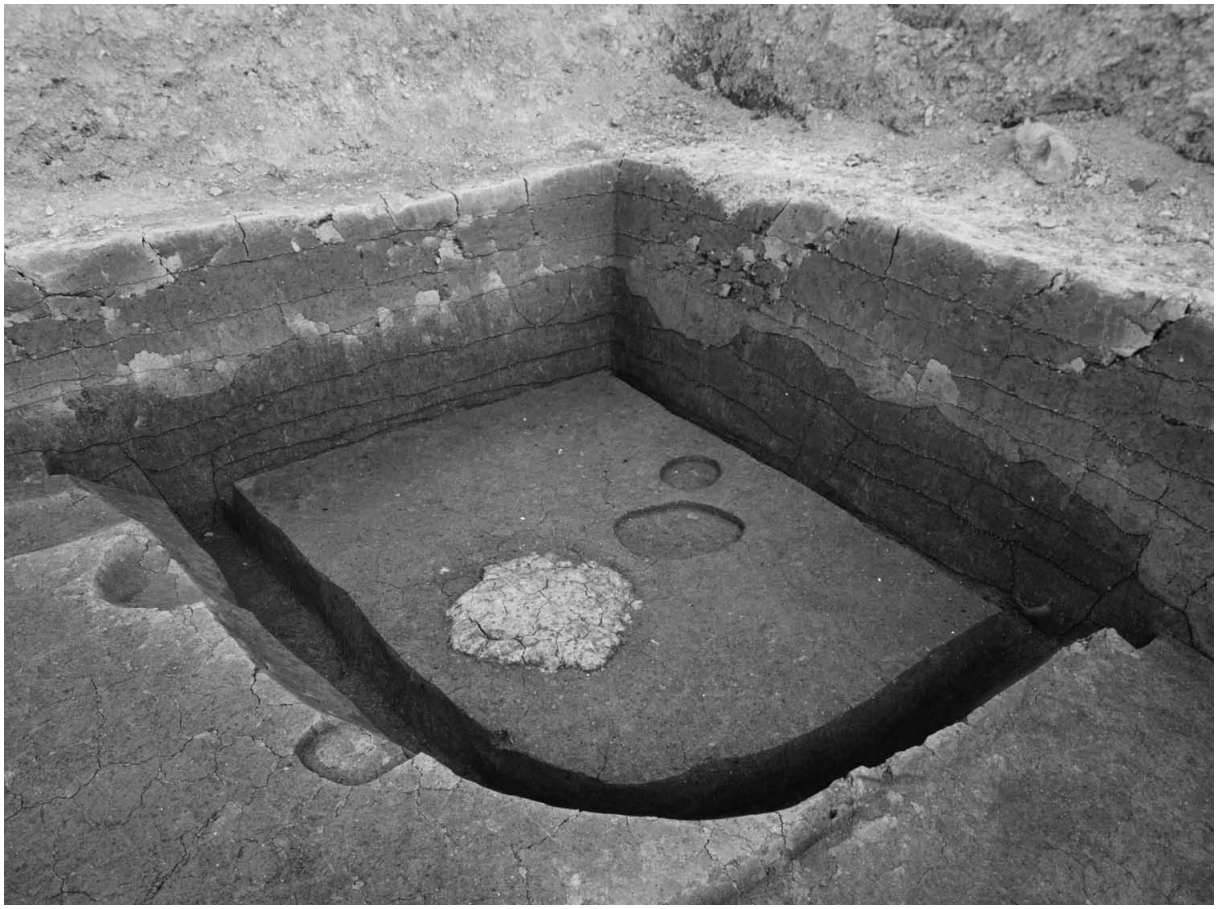
1005-SH 土器出土状況（南西から）

1005-SH 炉跡断面（北から）

1005-SH・1151-SH 検出状況（北西から）

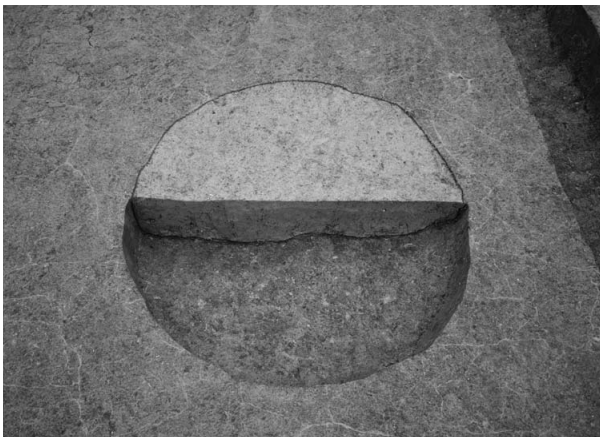


1005-SH 暗渠断面（北西から）



1150-SH 床面検出状況（北西から）

063-SK 断面（北から）



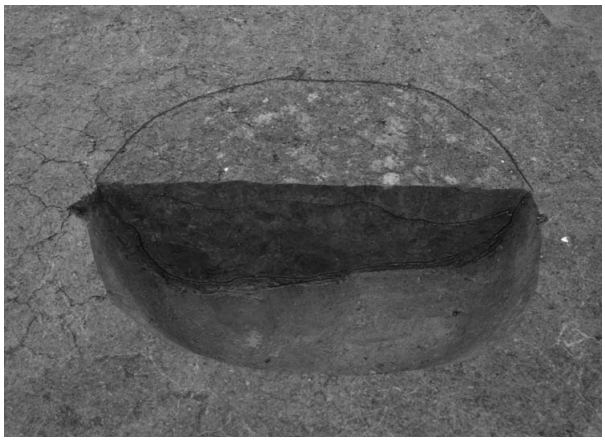
100-SK 断面（北から）

1042-SK 断面（西から）

1042-SK 土器・炭化物出土状況（南から）

1043-SX 検出状況（北から）

1045-SK（左）1046-SK（右）断面（南西から）



1007-SK 断面（北から）

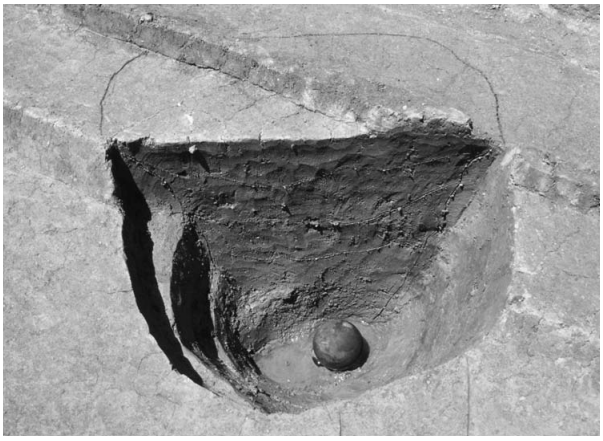
1122-SE 完掘状況（北から）

図版 17

1122-SE 断面（北から）

1164-SE 断面（北から）

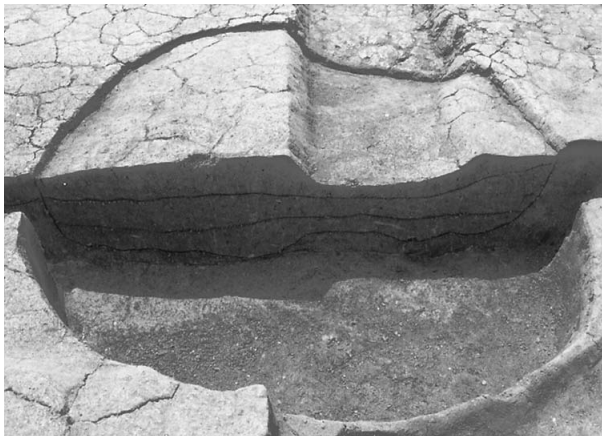
1133-SE ３層土器出土状況（北から）



1133-SE ４層土器出土状況（北から）

1070-SK 土器出土状況（北から）

1141-SK 断面（北西から）



1142-SK 断面（北から）

1146-SK 完掘状況（北から）

1002-SD 検出状況（北西から）

1002-SD 断面（南東から）

1002-SD 矢板出土状況（北西から）

1003-SD 検出状況（南西から）

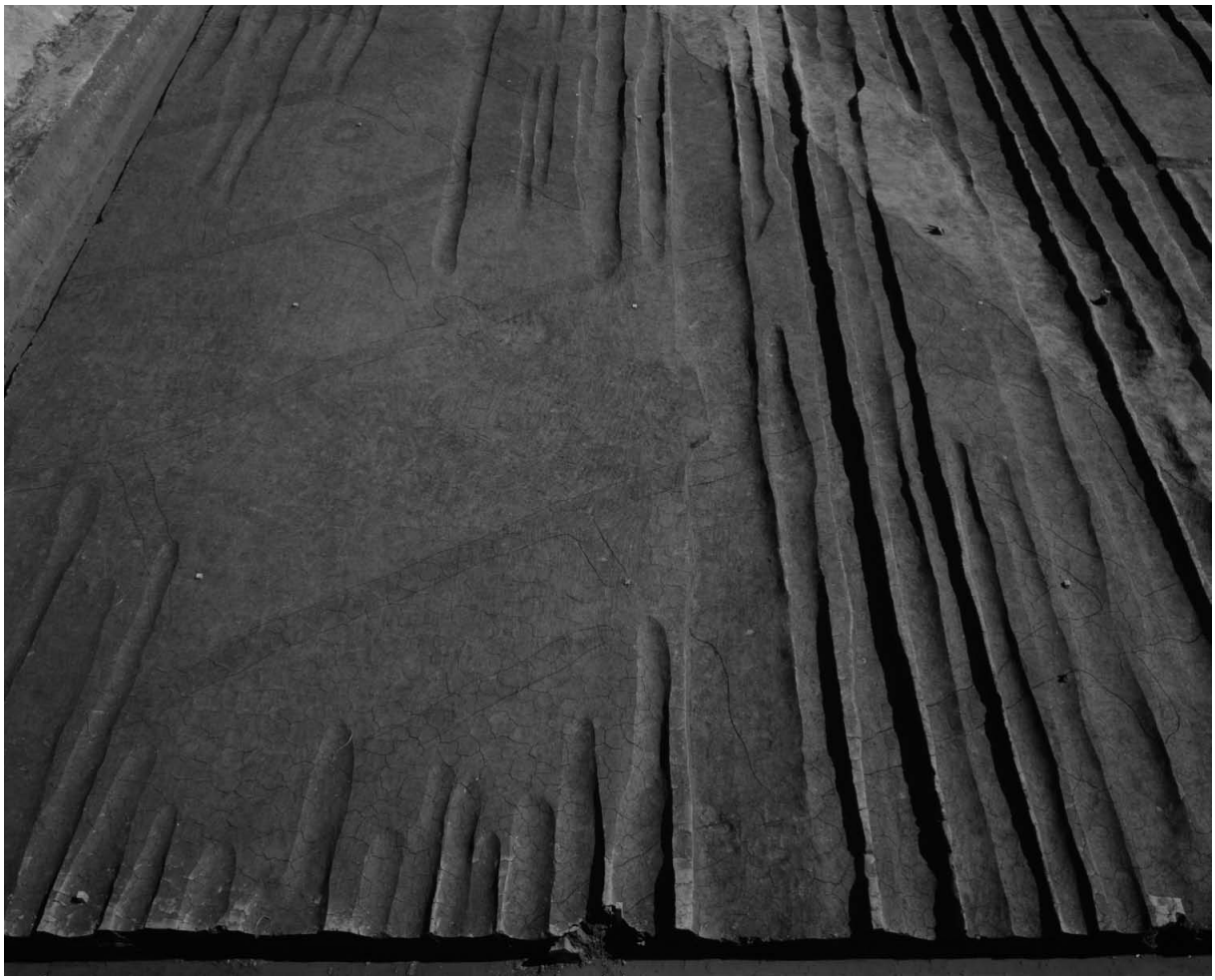
1152-SD 断面（南から）

1095-SD 遺物出土状況（西から）

1095-SD 遺物出土状況（西から）

1098・1097・1096・1095-SD 断面（西から）

図版 19



畠溝群検出状況（調査区北東隅。北から）

畠溝群検出状況（調査区東端中央。東から）

調査区東壁中央（西から）

畠溝 1124-SD 断面（南西から）

1003-SD（左）、畠溝 1131-SD（右）（北東から）

1

21

2

22

3

19

17

6

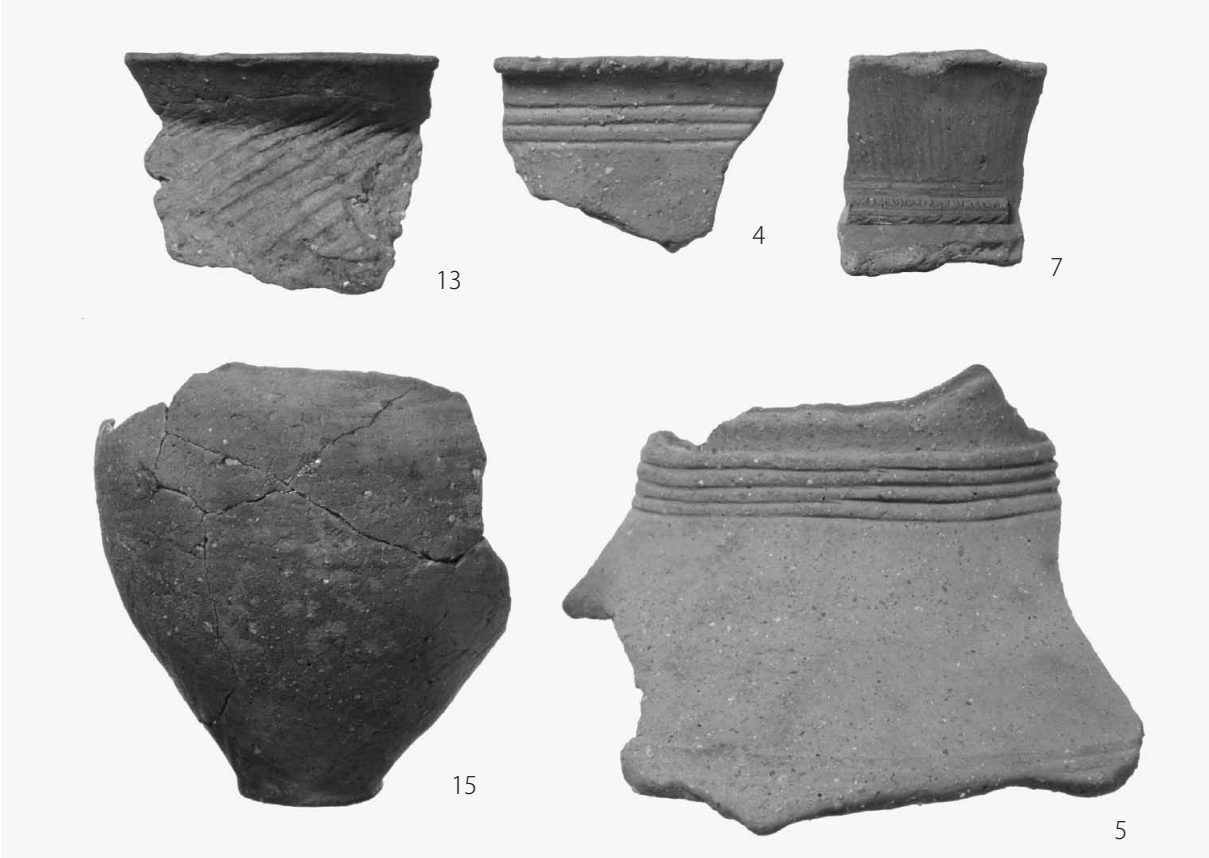
16

11

12

図版 21

1031-NR出土　弥生土器



24

25

26

28

29

30

31

図版 23

41

42

43

44

48

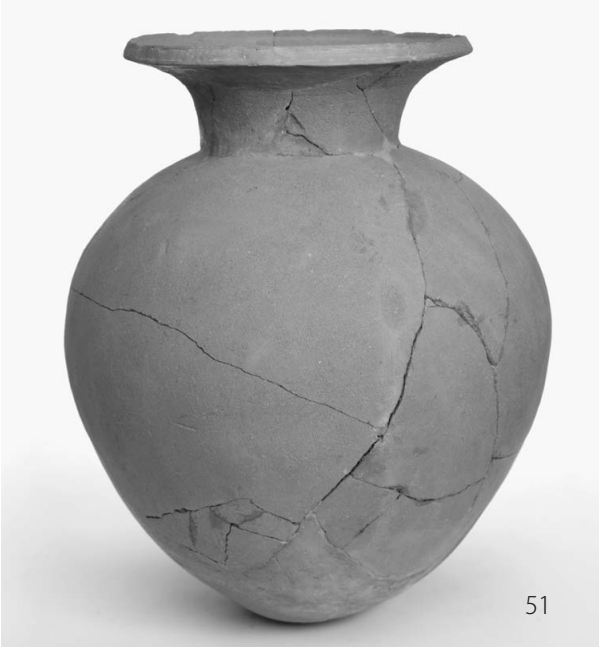
49

55

56

45

52


51

53

図版 25

1031-NR出土　土師器

59

70

73

57

61

46

76

72

71

63

58

60

74

75

図版 27

1031-NR出土　土師器

62

65

66

81

86

87

79

80

91

93

83

92

90

88

85

96

95

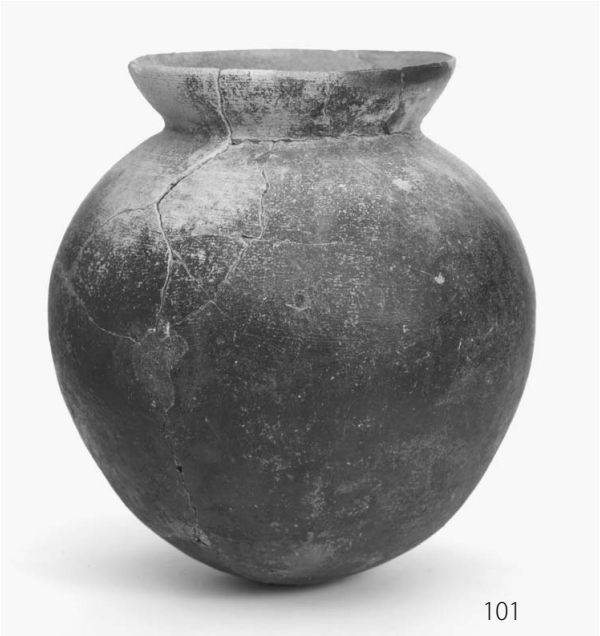
97

図版 29

1031-NR出土　土師器

98

99


101

103

102

104

105

106

107

109

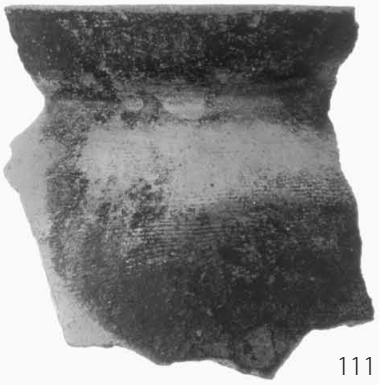
115

116

114

118

78


111

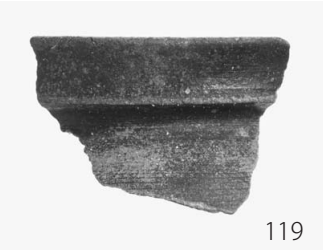
77

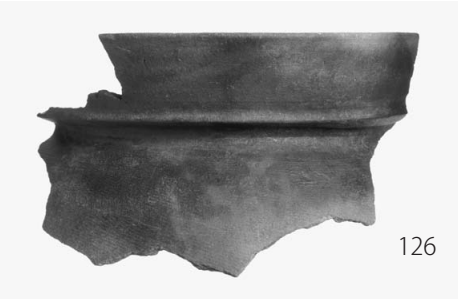
113

100

110

112


119


126

117

129

128

120

127

124

123

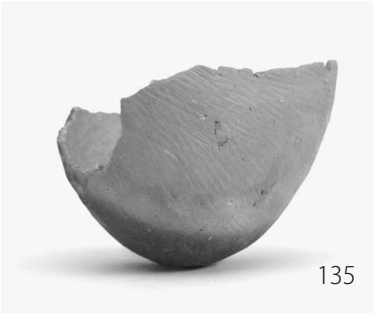
122

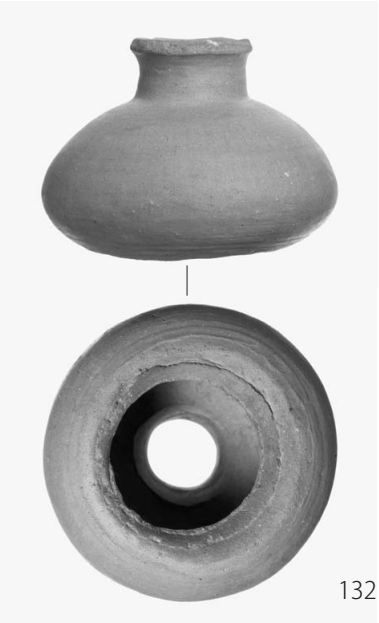
125

図版 33

1031-NR出土　土師器

131


135


132

143

147

144

151

150

145

142

146

130

152

161

163

153

162

164

165

167

169

171

172

173

174

175

176

図版 35

1031-NR出土　土師器

178

179

180

181

182

183

184

186

188

189

190

191

192

193

194

195

199

200

202

203

204

209

210

212

213

84

89

35

37

38

215

217

225

227

229

235

236

239

242

249

254

258

260

262

264

263

271

272

273

274

276

285

286

291

292

32

133

134

136

137

138

139

140

306

141

図版 39

1005・1006・1036・1150-SH　1133-SE出土　土師器

308

309

310

311

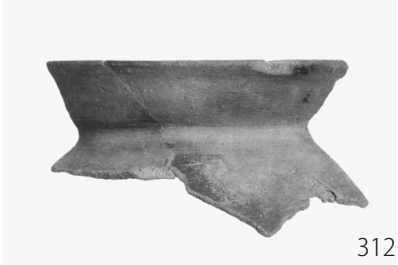
313

315

314

316

317


312

323

324

325

334

335

336

337

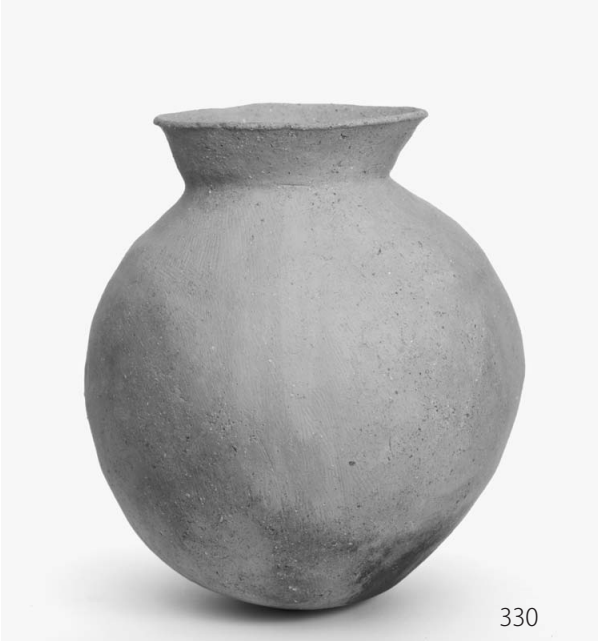
332

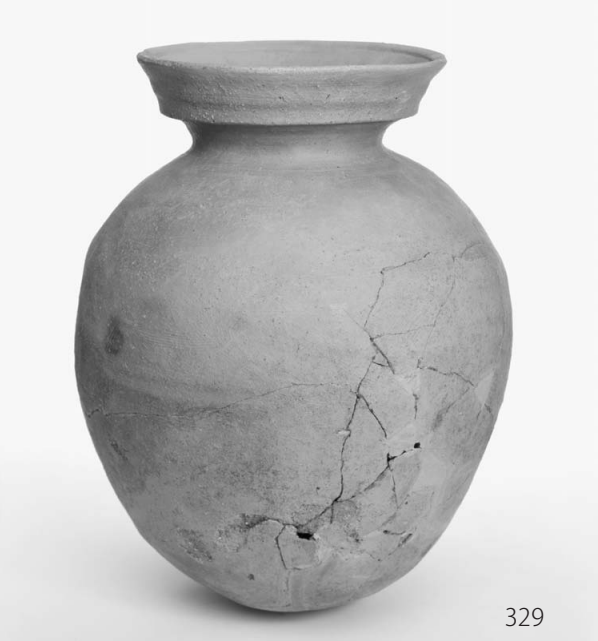
331

338

340

328


330


329

図版 41

石器　須恵器　1122・1164・SE 1070・SK出土　土師器

318

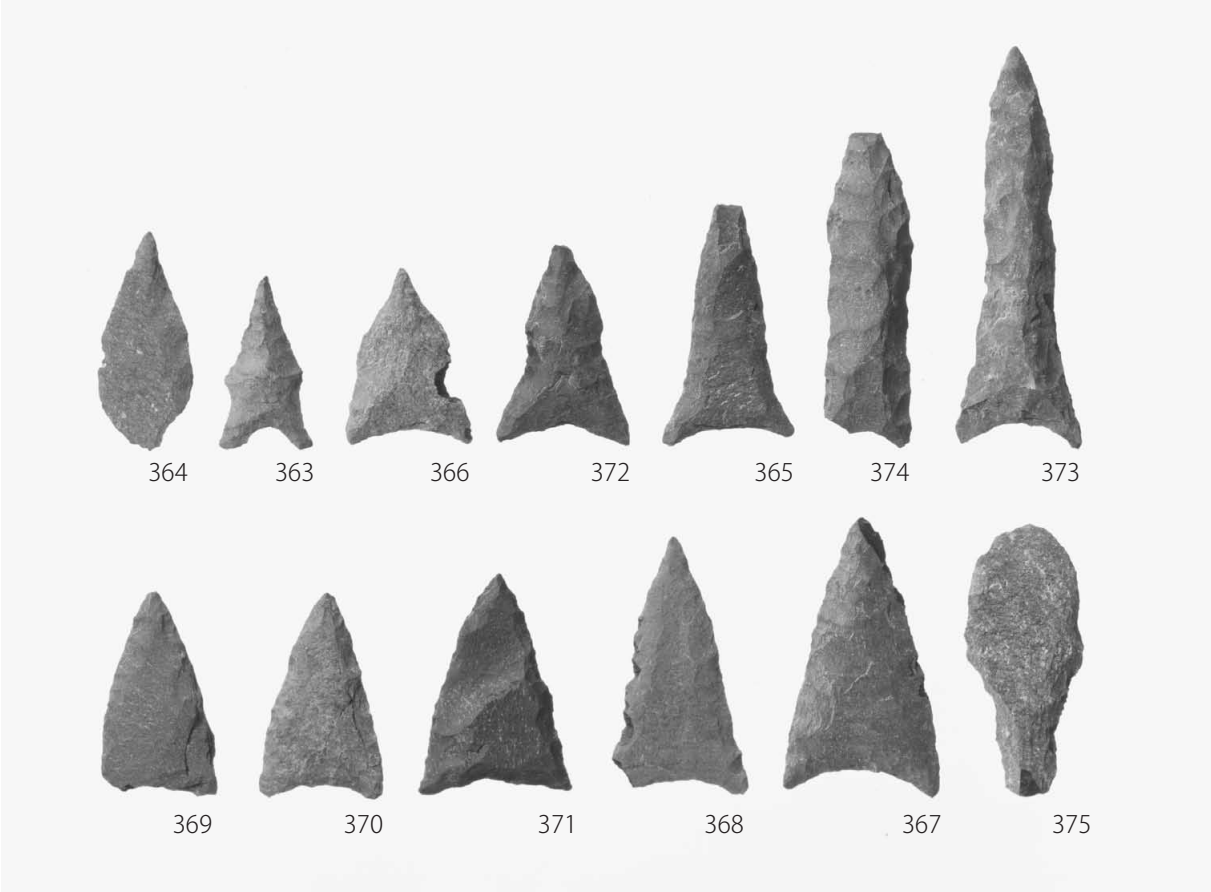
319

320

326

355

362



352

353

351

348

354

350

341

349

345

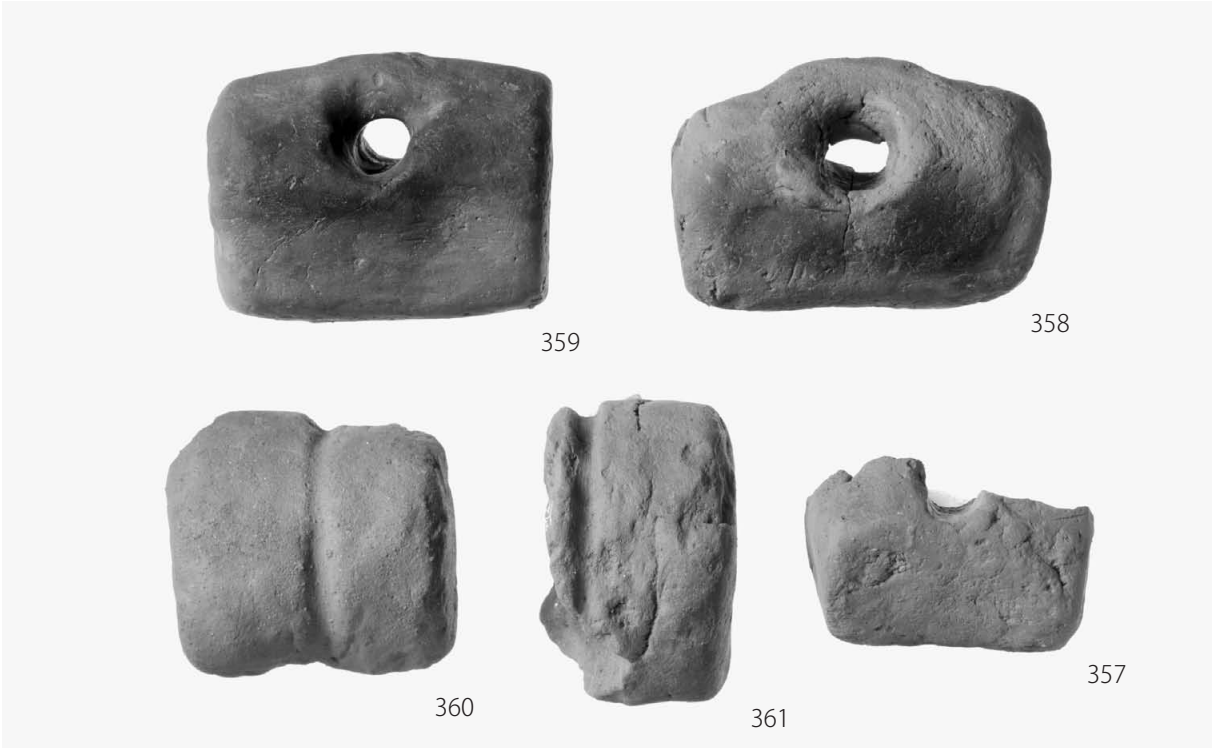
346

347

342

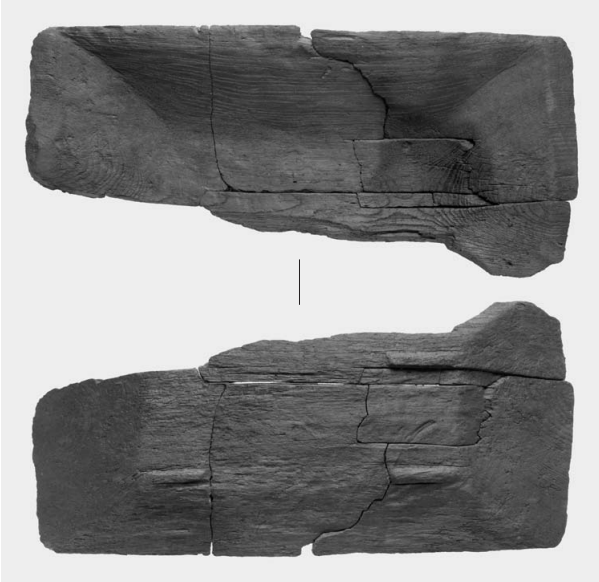
344

343

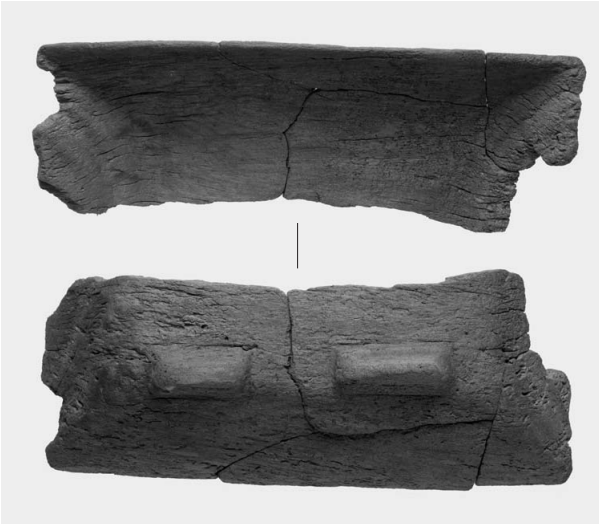


図版 43

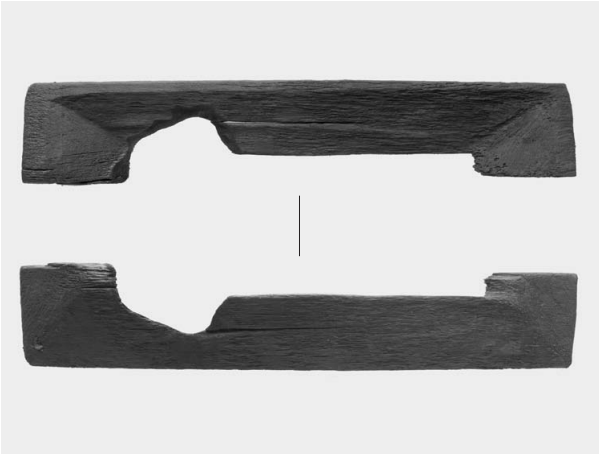
ミニチュア土器　土製品



376



377



378

図版 45

1031-NR出土　木製品

382

384

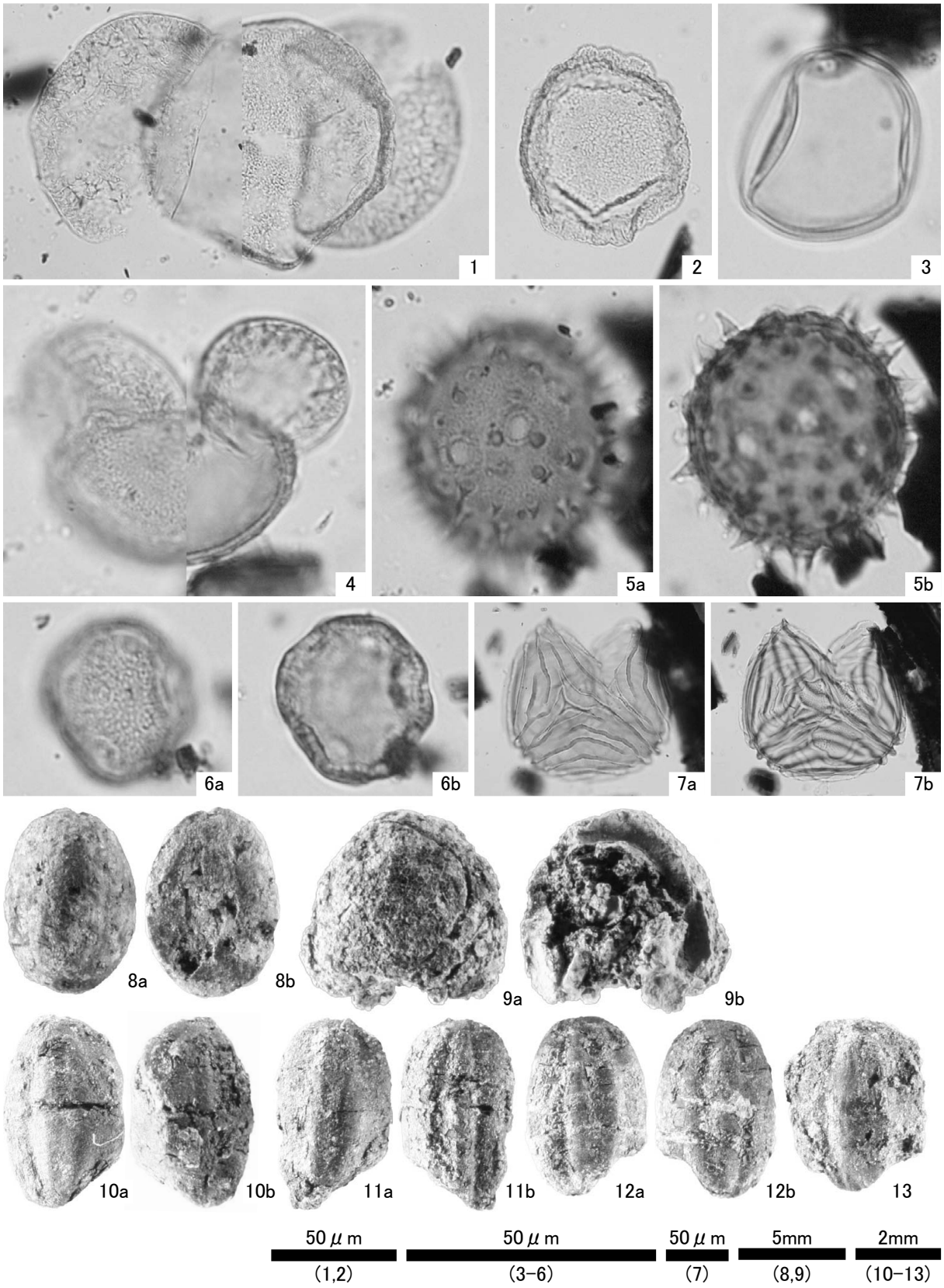
379

383

380

381

花粉化石・種実遺体



1．モミ属（サンプル4）　2．ツガ属（サンプル4）　3．イネ科（サンプル4）
4．マツ属（サンプル4）　5．ワタ属近似種（サンプル4）　6．ナデシコ科（サンプル3）
7．ミズワラビ属（サンプル4）　8．コナラ属－シイ属 子葉（689;1004-SH 南区壁溝内）
9．スモモ 内果皮・種子（691;1036-SH 検出面清掃時）　10-13．イネ 胚乳（693;1041-SH 床面上）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ごいいせき
書名	五井遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第２冊
著作者名	橿原市教育委員会　石坂泰士、パリノ・サーヴェイ㈱ 田中義文・松元美由紀・辻康男
編集機関	橿原市教育委員会事務局　文化財局　文化財課
所在地	〒643-0075　奈良県橿原市小房町 11 番 5 号　TEL 0744-22-4001　FAX 0744-24-9707
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 21 日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
五井（ごい）遺跡	奈良県 橿原市 五井（ごい）町地内	29205	14A108	34°30′16″	135°46′37″	2010/4/26 ～ 2010/9/15	2,700 ㎡	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五井遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代前期 中世	自然河道 自然河道、竪穴建物、掘立柱建物、井戸、土坑、畠、溝 耕作溝、土坑	弥生土器、石器 土師器、木製品 土師器、須恵器	

要約	古墳時代前期の集落跡を確認。自然河道の岸辺に営まれた集落で、竪穴建物 8 棟、掘立柱建物 2 棟を検出した。自然河道からは集落で使用していたと考えられる多量の土師器が出土した。集落の外側には畠の耕土および耕作痕と考えられる並行溝群が広がることを確認した。近畿地方では古墳時代前期の畠の検出例は非常に少なく、貴重な事例である。

橿原市埋蔵文化財調査報告　第２冊

五　井　遺　跡

発行年月日　平成 24（2012）年３月 21 日

編集・発行　　橿原市教育委員会
印　　刷　　関西美術印刷（株）
　　奈良市西木辻町 153 番地 1